大正五年二月廿六日第三種郵便物認可
大正五年四月二十五日印刷納本
大正五年五月一日發行（每月一回一日發行）（第壹卷 第參號）

新演藝

五月號





三越呉服店

□ 中形の季節來れり □

輕快にして清洒なる東京の氣分を遺憾なく發揮するのは、中形浴衣であります。當年流行の中形浴衣は、悉く三越に萃つて居ります。

▲中形浴衣地目錄は▼
▲御申込次第進呈▼

□ 中形浴衣地陳列會 □

は五月十五日より開會致します。本年は御所模様、演藝づくし等新意匠のものを始めとし、何れも柄模様の珍らしいのが澤山に陳列して御座います。

日とのみ競ふ



崇高なる人格は
マツダランプの
華かなる光よ
輝く

販賣都

東京出張所
東京市京橋區尾張町一丁目
電話新橋 一九二、三二三、長一〇五九

横濱出張所
橫濱市伊勢佐木町一丁目十番地
電話 一七一一

第三課
大阪市西區阿波堀通一丁目五番地
電話長西 一〇九九

神奈川縣川崎町
東京電氣株式會社
電話川崎 五〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四

明治六年創刊

信濃毎日新聞

發行所 長野市旭町二十七番地
信濃毎日新聞株式會社
電話長一二〇(編輯用) 電話長二四〇(事務用)

支局 東京市京橋區南鍋町二丁目九番地
信濃毎日新聞社東京支局
電話長新橋三〇九六番

新演藝

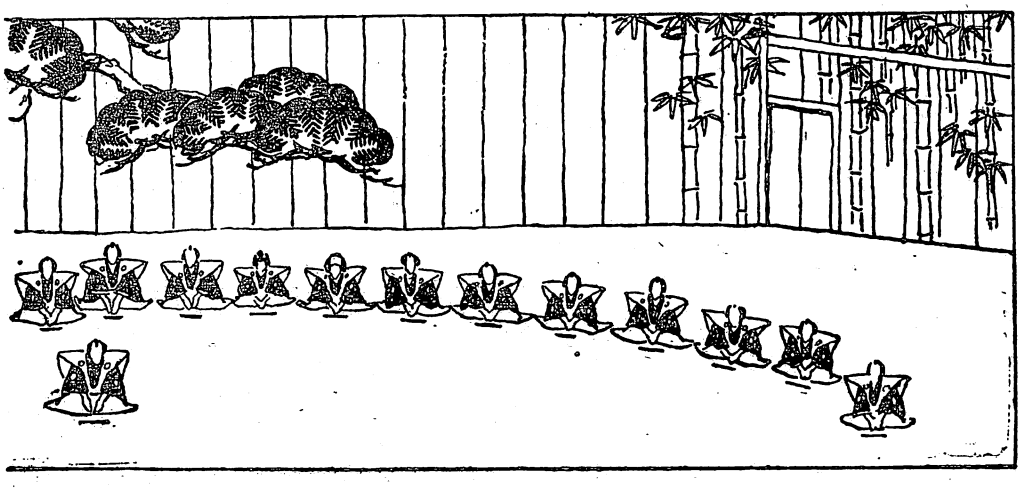
第參卷第參號　目次　（大正五年五月一日發行）

表紙

□市村羽左工門の助六……德永　柳洲

口繪

□中村福助の道成寺（コロタイプ）歌舞伎座……
□歌右衛門羽左衛門の葵の上三色版（歌舞伎座）
□幸四郎の毛剃九右衛門（二色版）帝國劇場……
□菊五郎菊次郎の美代吉殺し（二色版）市村座……
□延若芝雀の櫻みだれ（二色版）京都南座……
□澤村宗十郎の素顏……一頁
□松井須磨子の素顏……一頁
□歌舞伎座の「矢の根」……一頁
□歌舞伎座の「葵の上」……三頁
□歌舞伎座の「太平記忠臣講釋」……一頁
□歌舞伎座の「道成寺」……二頁
□歌舞伎座の「十六夜清心」……三頁
□帝國劇場の「先代萩」……二頁
□帝國劇場の「玉藻前」……二頁
□帝國劇場の「毛剃九右衛門」……二頁
□市村座の「伊賀越」……三頁
□市村座の「八重桐」……二頁
□市村座の「戻橋」……二頁
□市村座の「美代吉殺し」……二頁
□本鄕座の「勝関」……四頁
□本鄕座の「夏小袖」……一頁
□明治座の「鹽原多助」……一頁
□明治座の「車引」と「妹脊の門松」……二頁
□京都南座の「石川五右衛門」……二頁
□京都南座の「壺坂」と「櫻みだれ」……二頁
□大阪中座の「お艷ごろし」……三頁
□大阪中座の「桔梗の旗揚」……一頁
□大阪角座の「海の歌」……一頁
□藝術座の「お葉」……一頁
□中村扇雀百姿……四頁
□大阪「浪花踊」「芦邊踊」「木の花踊」……三頁
□歌舞伎座の新橋演藝會……一頁
□楳茂都扇性門下……二頁
□活動寫眞「カビリア」……二頁
□活動寫眞「マキシムダンス」「チャプリン」二頁



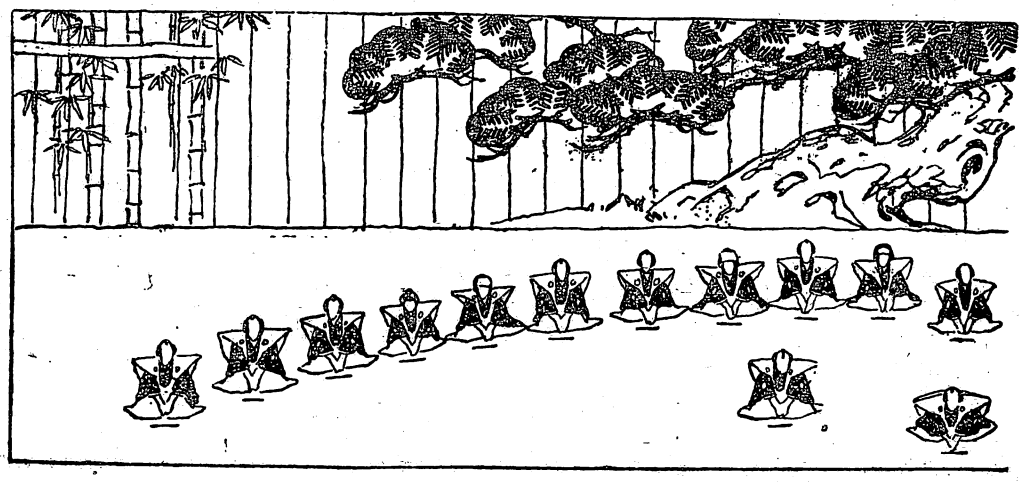
□米國活動寫眞役者の花形ノルマンド……一頁

目次

△卷頭……矢の根……德永　柳洲
△カット及び裝飾畫……德永　柳洲
△大阪中座四月狂言……水島爾保布
△大阪文樂座スケツチ……水島爾保布
△浪花三廓春の踊……名越國三郎

記事

▲舞踊劇と國立劇場……坪内　士行（二）
▲アッピイア演劇論……川路　柳虹（八）
▲須磨子に送る手紙……吉井　勇（九）
▲井上正夫に與ふ……久保田萬太郎（一二）
▲愛蘭劇の片影……大田黒元雄（一七）
▲ローシイ氏歌劇團……（一九）
▲ピアノの夕……（二二）
▲歌舞伎座今昔物語……田村　成義（二三）
▲信州の旅芝居研究……栗島　狹衣（二八）
▲帝劇市村十文字……青柳　有美（三一）
▲『葵上』と女の執念……井桁　佐平（四二）
懸賞・これは何の芝居ですか……（四八）
▲金光教祖とお艷殺し……香取染之助（五〇）
▲立見場の人々……豊島屋せん（六〇）
▲道頓堀から鱶谷へ……玉谷五十一（六四）
▲浪花三廓春の踊……和哥　乙鳥（六八）
▲東京の芝居の見物料……（七三）
▲芝居の榮番……水木銀之助（七七）
▲樂屋風呂……川尻　清潭（七九）
▲中村扇雀の事……大愚堂主人（八三）
▲大阪南地の大和屋……桃仙　醉客（八六）
▲文樂座の津太夫……香川　蓬洲（九三）
▲芝居歸り……水島爾保布（一〇〇）
▲鷺集庵棋茂都扇性……美野　一白（一〇三）
▲大阪酒場通信……（一一〇）
▲根岸治右衞門……島川　七石（一一三）
▲淺草公園總捲り……米山　蟻兒（一一八）
▲貞奴を如何に處分すべきか……（一三一）
▲最新映畫カビリア……鈴木　苦花（一三五）
▲喜劇名優デブ君……石川　生（一三八）
懸賞・活動辯士の綽名募集……（一四〇）
▲メエブル孃……森田　清波（一四二）
▲アルコール先生の改名決定……（一四四）
▲活動寫眞撮影場見物……大野　女洋（一四六）
▲海外活動寫眞小話……（一四八）
▲日本活動辯士の元祖……影斜　童子（一四九）
▲喫煙室……（一五三）





レートフード

ほんのり色白くなる

隠化粧に天下一品

レートフードが隠化粧液として今や満天下の貴婦人令嬢に非常に歓迎されますのは分子が極度に細かい故お化粧しても跡の殘らぬ程お肌に解け合ひ、ほんのりお色が白くなるからで、これをふだんお用ゐになればお肌が美しくなる許りでなく白粉の**のり**を良くし、又これで**レート**白粉を解きお化粧なさればお艶が數段と美しくなります

レート本舗　平尾賛平



…歌舞伎座の道成寺…

中村福助の白拍子花子

源氏　此上は留め申さんやうもなし、去ながら如何なればこそ某は、心に染まぬ人に添ひ、命にかけて戀慕ふ御息所に相分れ。

御息所　妾は心にも無き罪故に馴れし都を振捨てゝ、明日は此身を伊勢をのあま光君にも御機嫌よく。

源氏　君にも道中恙なく。

御息所　お名殘惜しう御座りまする。



市村羽左衛門の光源氏　中村歌右衛門の御息所　《歌舞伎座奏上》



澤村宗十郎



《帝國劇場博多小女郎浪枕》　松本幸四郎の毛剃九右衛門



松井須磨子

深川仲町尾花屋で美代吉の愛想づかしにあひ、剰さへ表へつき出された清七は無念に堪え兼ね、洲崎で拾つた短刀を持つて再び尾花屋裏の仲町川岸に來た。そして自分につらくあたつた尾花屋の女中や下男を川へ斬込み、棧橋の邊を彷徨つてゐるうち小舟に乘つた美代吉が船頭と話しながら歸つて來た。それを見た清七は無言のまゝ白刃をひらめかして美代吉を川へ切り落し自分も直ぐに咽へつき立てゝ入水した。



尾上菊五郎の清七　尾上菊次郎の美代吉　中村富之助の船頭　《市村座時鳥雨後の簑笠》



市川男寅の澤潟姫

姥山姫座村市……桐重八の藏時村中



彌七　そんなら俺がこんな形りに成果てゝもこなたは愛想を盡かさぬか

お浦　なんの愛想をつかしませうわたしや前より百層倍おまへがいとしかつたわいナア

彌七　二人りがあはれを祭してか涙の小雨が降つて來た、一所に叔父さんの所へ行かう。

實川延若の三上屋彌七　中村芝雀のお浦　《京都南座櫻みだれ》



五郎　虎と見て石に田作かき鱠、矢立の酢午房煮こゞり大根、一寸の鮒に昆布の魂、譬はゞ祇經せち汁、汁の鯨の威勢振るとも我鯱の飾り海老、赤いは親父が譲りの面、つら〳〵世上をくはんすのふた。ちろり燗酒文福茶釜、毛抜き鋏の折れ迄も、古金買にやり羽子の、一夜明けても舊冬の鎖り帷子小手脛當、すねから干鯛も串貝も取られぬ酒屋の通ひ、〆て十七貫八百六十四文横に子の日の初寅も、喰合せのない福の神、どうで貧乏するからは、自問自答の悪態を申して申さく。

市川左團次の曾我五郎時致　市川莚升の後見《歌舞伎座矢の根》



中村歌右衛門の六條御息所

片岡市藏の民部大輔・市村羽左衛門の光源氏



御息所「妾は矢張り都の中に
安近「猶此上に憂き事の大波小浪が寄せましても
御息所「身を浮舟の浪に任せて
安近「とは云へ目前此有樣
葉末「お車をば破られて
安近「牛飼舍人も散々に
御息「散り行く忽み葛の葉の
葉末「思へば悲しい
安近「恨めしい
御息「アイヤ必ず人を恨むまいぞや

市川左團次の右馬允安近・中村歌右衛門の六條御息所・坂東秀調の葉末

歌舞伎座四月狂言『葵上』

片岡仁左衛門の左大臣兼道

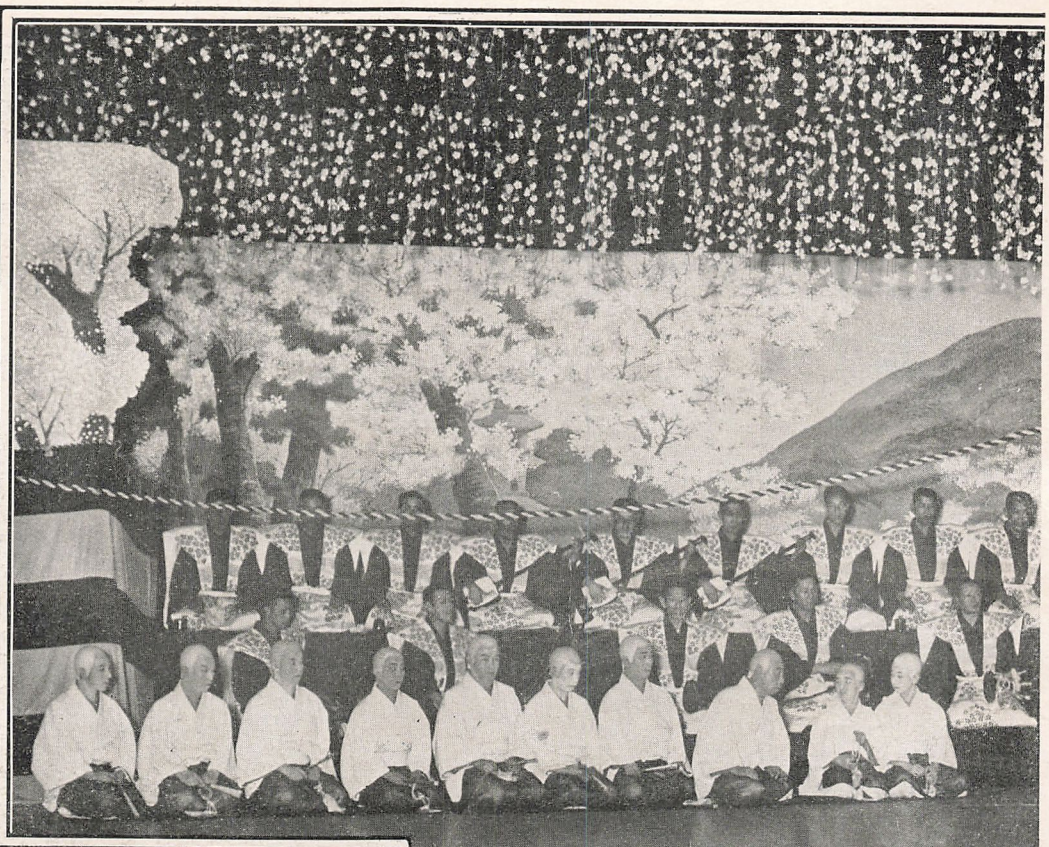


葵上『あらうたてや今宵も渡らせ給ひしか
御息所『憂き思ひ遣る方もなきやれ車
長　唄「われ世にありし古は豊上の宴春のあしたの御遊に馴れ、仙洞の紅葉の秋の夜は月に戯れ、色香に染み、花やかなりし身なれども
常磐津「せめてしばしは寝むと葵かざして北祭、糺の森の下蔭に忍び昔になく浮寝鳥、思は猶も増鏡その面影も恥かしや
長　唄「有りし恨の重なりて今は打たでは叶はじと
常磐津『枕に立寄り丁と打つ

中村歐右衛門の六條御息所の生靈・澤村源之助の葵上

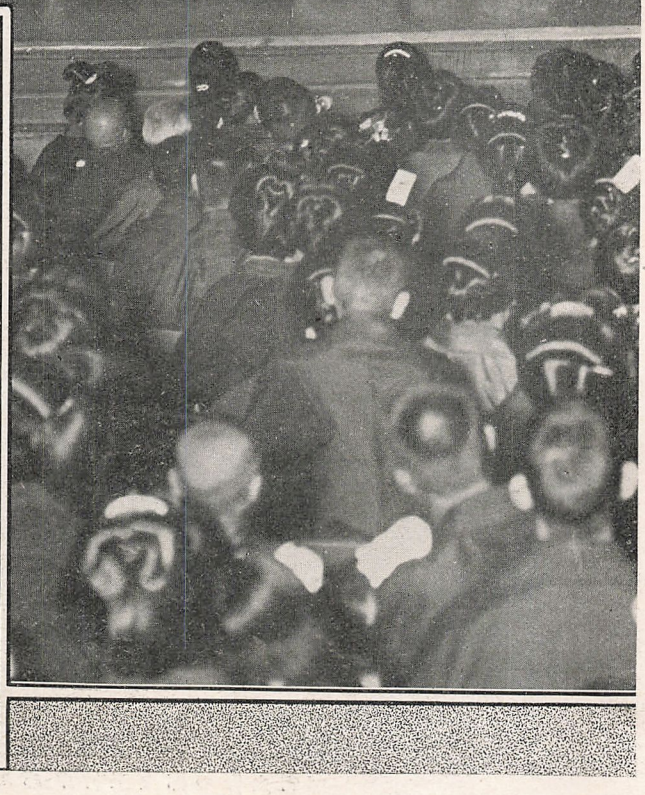


中村福助の白拍子花子



戀の手習つい見ならひて、誰れに見しよとて紅かれつけよぞ、
みんな主への心中立　ヤヽうれし　ヤヽうれし……。





アラ怪しやなア今大館五郎照貞が武將よりの命を受け來かゝるのりの花道へ現はれ出でし其姿名も成駒のばけ者にどこやら親父に似よりの花勝手違ひの荒事もけふ此役に橘の花を持たせて消へればよし悪くじたばたする時は供養の庭の花ふぶき落花みじんにならぬ内きり〳〵消えてなくなれエヽ

市村羽左衛門の大館左馬五郎照貞

歌舞伎座四月狂言「太平記忠臣講釋」



中村歌右衛門の妻おりゑ

片岡仁左衛門の矢間重太郎・中村玉太郎の竹太郎の郎市太郎



清心『これはしたりそなたを殺せば親父殿又弟が俺を恨み、女犯の上に重る罪、それを知りつゝそなたをばどう見殺しにならうぞいの。

十六夜『サゝ其後先を考へれば尚々生きてはゐられぬ身の上。

清心『そりや又何故どう言ふ譯。

十六夜『勤めする身に恥しい私しやお前の……。

清心『エゝそんならもしや……。

市村羽左衛門の清心・中村歌右衛門の十六夜

歌舞伎座四月狂言「柳巷春着薊色縫」


清心『しかし待てよ、此十六夜が身を投げだも又此若衆の金を取り殺した事を知つたのはお月樣と俺ばかり、人間僅か五十年首尾能く行けば又十年二十年も生伸びて、つづれを纏ふ身の上でも、金さへあれば出來る樂み、同じ事ならあのやうに騷いて暮すが人の德……。

市村羽左衛門の清心

市村龜藏の戀塚求女

市村羽左衛門の清心

歌舞伎座四月狂言『柳巷春着薊色縫』





片岡仁左衛門の大寺正兵衛

清吉『コーおさよ、てめえが世話になつてゐた白蓮がうちは何處だ。おさよ、大きな聲をしなさんな向ふだよ。清吉『ムヽいゝうちだなア、高張提灯の玄關構へ名目金の貸附所だつたおさよ『何だか知らないが大さう金があるよ。清吉『それが何よりこつちのつけ目だ。おさよ『ホンに縁と言ふものはオツなものだね、死んだとばかり思ひ切つて坊主にまでなつた私しが、髪を伸ばして死んだお前と一緒になると言ふのはどうしたと言ふのだらう。

市村羽左衛門の鬼薊清吉・中村歌右衛門のおさよ

帝國劇場四月狂言『伽羅先代萩』



尾上泰治郎の千松
澤村源平の鶴千代

尾上梅幸の政岡

澤村宗之助の男之助

帝國劇場四月狂言『伽羅先代萩』



澤村宗十郎の細川勝元
松本幸四郎の仁木彈正



松本幸四郎の仁木彈正・尾上松助の渡邊外記左衞門

帝國劇場四月狂言「玉藻前」



尾上菊四郎の忠通
澤村長十郎の忠實
澤村其答の弘房

陰陽師安倍泰親は關白忠實公の命を受けて清涼殿前に祭壇を設け、君の御腦平癒を祈禱するうち化生の障碍なることを知り玉藻前と問答せん事を乞ふ。忠實公の召しに應じて官女仕丁を從へし玉藻前は階段を上らんとする、泰親其袂を控へて問答となり玉藻前の身體より異樣の光を放ちし仔細を尋ぬれば、玉藻前は其身の捨子なる事、又は衣通姫、光明皇后等の例を引き巧みに言ひ遁れて遂に御殿に上る。泰親は滿身の熱誠を罩め天地神明を觀請して祈念を凝らせば、玉藻前の五體すくんで殿上より落ち、忽ち金毛九尾白面の孤となりて其正體を現はし那須野ヶ原へ飛び去る。

尾上梅幸の玉藻前實は白面の老狐

帝國劇場四月狂言「玉藻前」



尾上梅幸の老狐・澤村宗十郎の三浦之介・澤村宗之助の上總之介・松本幸四郎の安倍泰親

帝國劇場四月狂言『博多小女郎浪枕』



松本幸四郎の九右衛門
澤村宗十郎の宗七

松本幸四郎の毛剃九右衛門・澤村宗十郎の宗七・松本小治郎・助高屋高丸・松本錦吾・澤村春五郎・澤村宗三郎の子分

帝國劇場四月狂言『博多小女郎浪枕』



松本幸四郎の毛剃九右衛門・澤村宗十郎の宗七・澤村宗之助の小女郎

毛剃『コレ若い人宗七殿、此ぢうの事定めて腹は立たう、サ、腹も立たうが一ことと言ふてもモノがないそ、おつしやるなオン共が商買見られた通り何事も身が大事と思ふから此ぢうの事こらへさつしやれ、いやと言はつしやりやコトになる。今の今まで口へこそ出さぬが惚れて〳〵惚れぬいてゐた小女郎、其内證客と言ふのは宗七殿とは夢知らず、小女郎が親と思ふたはこつちのあてすい、今となつて見ればおんどもなだまして身受させ、こなたに添ひたい小女郎が心、無にさつしやるな、小女郎をこつちに受出すとこなたの言葉が反古になる。小女郎もこなた〳〵と心中をたて通し、女郎の口から金貸して下さんせと恥を捨てゝの志、無にさつしやるな、イケエじやけんと言ふものだ。

市村座四月狂言『嫗山姥』



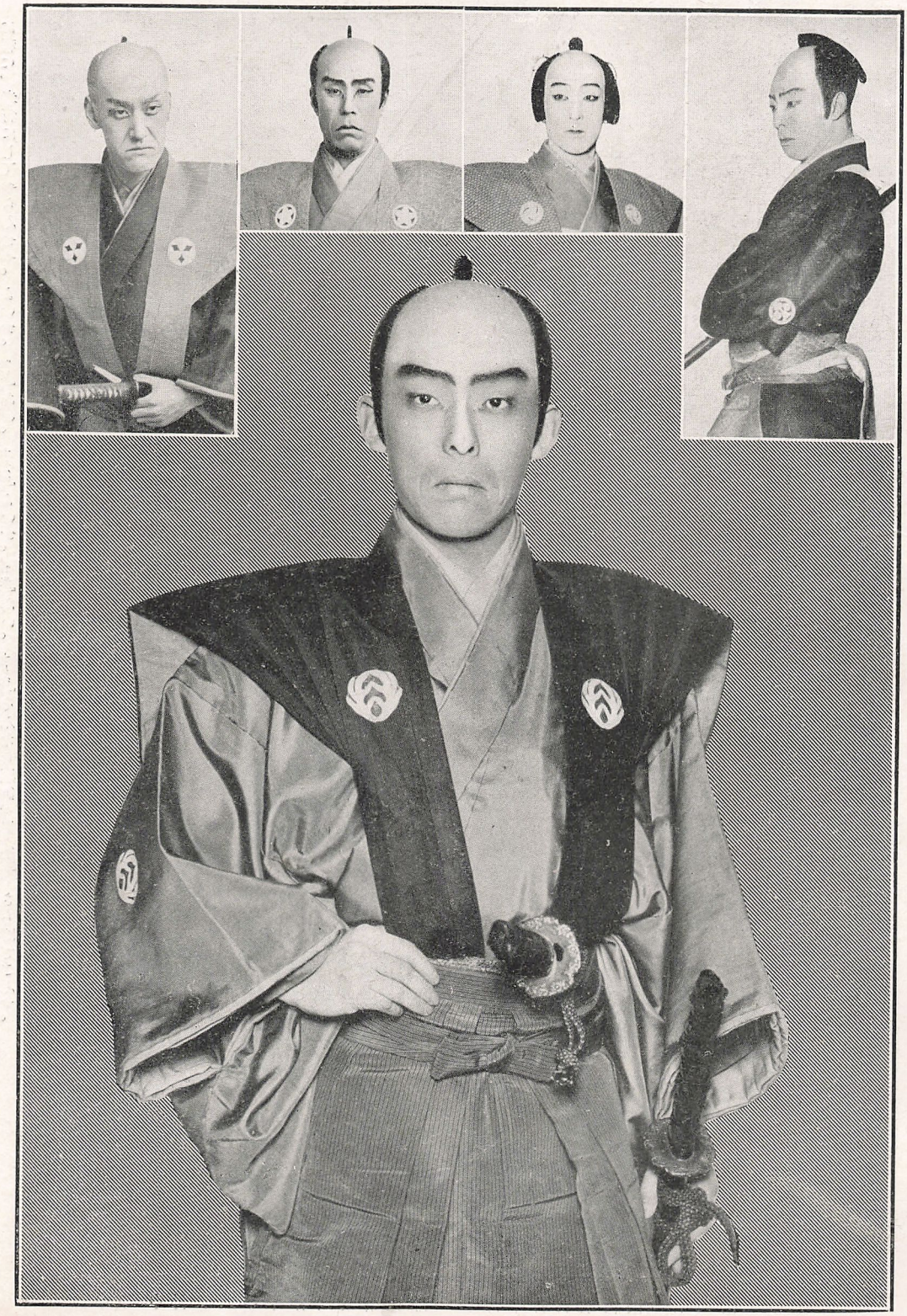
中村吉右衛門の腰元おうた

坂東三津五郎の蓑屋源七

中村時藏の八重桐・中村翫助の軍八

市村座四月狂言『伊賀越道中双六』

尾上菊五郎の大内記・市川新之助の志津摩・市川新十郎の林三郎・守田勘彌の五右衛門



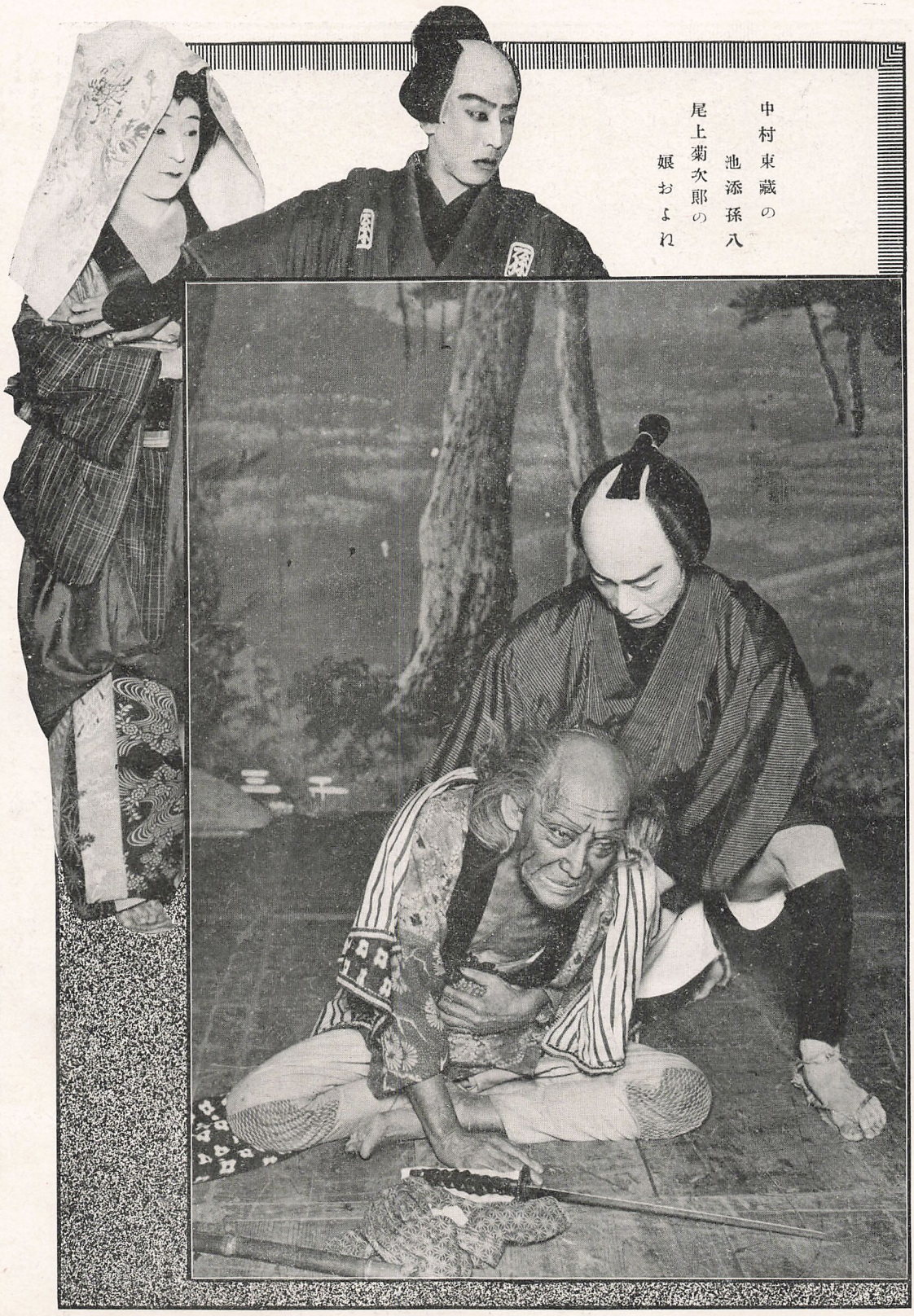
中村吉右衛門の唐木政右衛門



お米『旦那様、今宵の事はどうぞお免し下さりませ 十兵衛『そこ、事なら氣遣ひさんすな。決して人にやいひませぬぞ お米『有難うござりまする 十兵衛『娘御。ちよつとこゝへ……必ずともにくよ〳〵と心配しなさるな。年とつた親父様、隨分氣をつけてやらんせや。達者といふても年の上……人間は芭蕉葉の、露より脆い人の命、隨分氣をつけてやらんせや。こなたが孝行にしてやらんすと、鎌倉にゐる兄御が聞いたら、どんなに喜ぶか知れぬ程に、孝行にしてやらんせや。よいか。お米『あい。十兵衛『よいか。お米『あい。十兵衛『そんなら娘御、親父殿、さらばでござんす。

中村歌六の平作・尾上菊次郎のお米・中村吉右衛門の十兵衛

市村座四月狂言『伊賀越道中双六』



中村東藏の池添孫八
尾上菊次郎の娘およね

十兵衛『どこに誰が聞いてゐまいものでもないが、十兵衛が口からいふは、死んで行くこなさんへのみやげ、今はの耳に好う聞かしやれや。……これ、股五郎が落付く先は九州相良、道中筋は豫州の、吉田で逢ふたと人の噂……。どうぞこれで免して下さりませ。平作『え、忝い〳〵。あれ聞いたか、いや誰もない〳〵。聞いたはこの親仁唯一人、それで成佛しますわいの……名僧智識の引導より、我子の口から今の一言、思ひ殘す事はない。十兵衛『親仁樣。平作『兄か。十兵衛『お顏が見たうござりまする。平作『顏が見たいわいやい。あゝ苦しい〳〵。十兵衛『御臨終でござりまする。御念佛をお唱へなされませ。平作『南無阿彌陀佛〳〵。

中村吉右衞門の十兵衞　　中村歌六の平作


又むら立ちし雨雲の
蔭もる月をよすがにて
辿る大路に人影も
火影も見えず我影を
若しや人かと驚きて
かつぎに身をば忍ぶ摺
けふの細布ちらずして
女子心に胸合はず
思ひ惱みて来たりける。

尾上菊五郎の小百合

新古演劇十種の内「戻橋」



西へ廻りし月の輪に、遠く望めば愛宕山、北野は近く清瀧の、森を越え來る時鳥、初音ゆかしく振返り……。





大薩摩　杵屋己太郎
富士田音蔵

尾上菊五郎の小百合・中村吉右衛門の渡邊綱

市村座四月狂言『時鳥雨後の簑笠』

尾上菊五郎の清次

守田勘彌の丈左衛門



清次「オイとつさん今度はとんだ世話になつて氣の毒だ
藤兵衛「以前お邸に門番をしてゐた時分あなたの親御樣にはいろ〳〵お世話になつた御恩送りて御座りませう
清次「其恩はあの美代吉が浪路とエつた縣元で俺と不幸をした上句、屋敷を逃げ出す其時におめへが門を明けてくれたので首尾よく逃げて出られたのだ、さうして見れば恩は五分五分……

尾上菊五郎のお旅の清次・尾上松助の夜番人藤兵衛

市村座四月狂言『時鳥雨後の簑笠』　（尾上菊五郎の早替り）



尾上菊五郎のお旅の清次・尾上菊次郎の美代吉・尾上菊五郎の手代清七

明治座四月狂言「鹽原多助二代鑑」



野州飛駒村吉田八右衛門の許へ逃れ來た多助は炭燒男の間に伍し働いてゐるうち八右衛門娘數乃から慕はれた。其處に多助の妻お園が尋ねて來たので數乃は戀の敵と思ひ遂に發狂してしまつた。



市川壽美藏の二三郎
岩井粂三郎のお妻
市川松蔦のお園

市川松蔦のお園・市川壽美藏の數乃・中村又五郎の鹽原多助

明治座四月狂言『菅原傳授手習鑑』

市川九藏の時平公



市川小團次の松王・堀越福三郎の梅王・市川壽美藏の櫻丸

明治座四月狂言「妹脊の門松」



市川小團次の久作　　市川松蔦のお染・市川壽美藏の久松　　市川米藏のお光

本郷座四月狂言「勝鬨」



芹江閑逸の車夫・伊井蓉峰の辰浦翠汀・河合武雄の山北夫人道子



村田式部の山北花枝
石川新水の小間使お松



伊井蓉峰の辰浦梁汀
河合武雄の山北道子



後藤眞介の山北眞太郎・東辰夫の海野吾一　福島清の高松庫太・河合武雄の道子

本郷座四月狂言『勝鬨』



木村操の池内季子

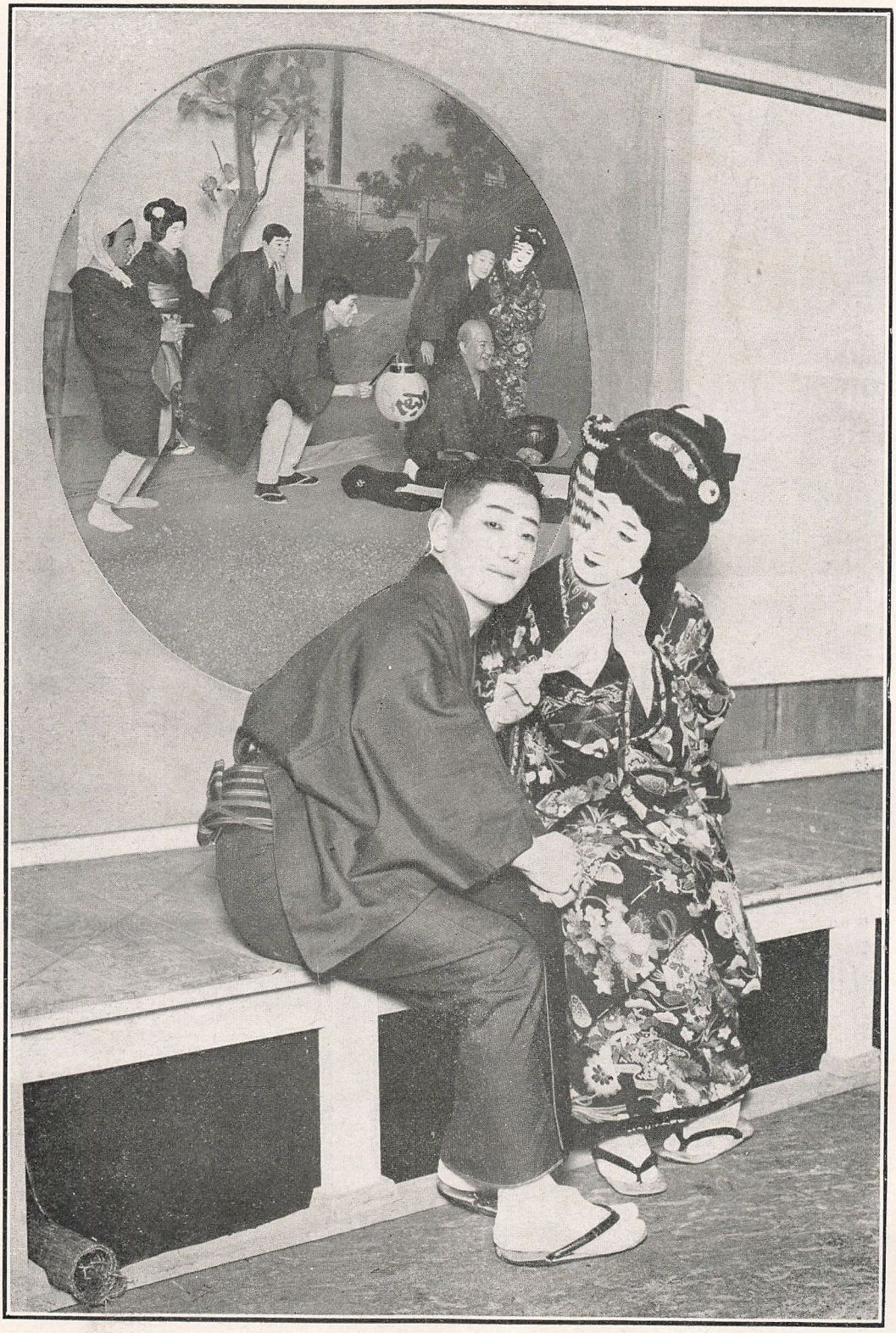
伊井蓉峰の大澤義賢・河合明石の山北慶・河合武雄の道子

本郷座四月狂言「勝関」



河合武雄の道子・福島清の高松庫太　東辰夫の海野晋一・伊井蓉峰の大澤義賢

本郷座四月狂言喜劇「夏小袖」



木村操のお染・河合武雄の和七・福島清の五郎兵衛・松本要次郎の下男
伊井蓉峰の德之助・松葉菊雄のお八重・藤井六輔の佐助

七和代手の雄武合河・染おの操村木

京都南座四月狂言「石川五右衛門」



寛川延若の五右衛門
市川市藏の眞柴久吉

京都南座四月狂言『石川五右衛門』



中村福呂の五郎市・實川延若の五右衛門

京都南座四月狂言『壺坂』



實川延寶の觀世音

お里「死んだと思ふたその時に現はれ給ふ觀音樣　澤市「前生の事をこまゝ〳〵とお里「おつげのありしその上に澤市「命助るのみならずお里「おけ下さるその嬉しさ澤市「永らくつぶれた此眼病お里「お直し下さる雌有さ

中村芝雀のお里・實川延若の澤市

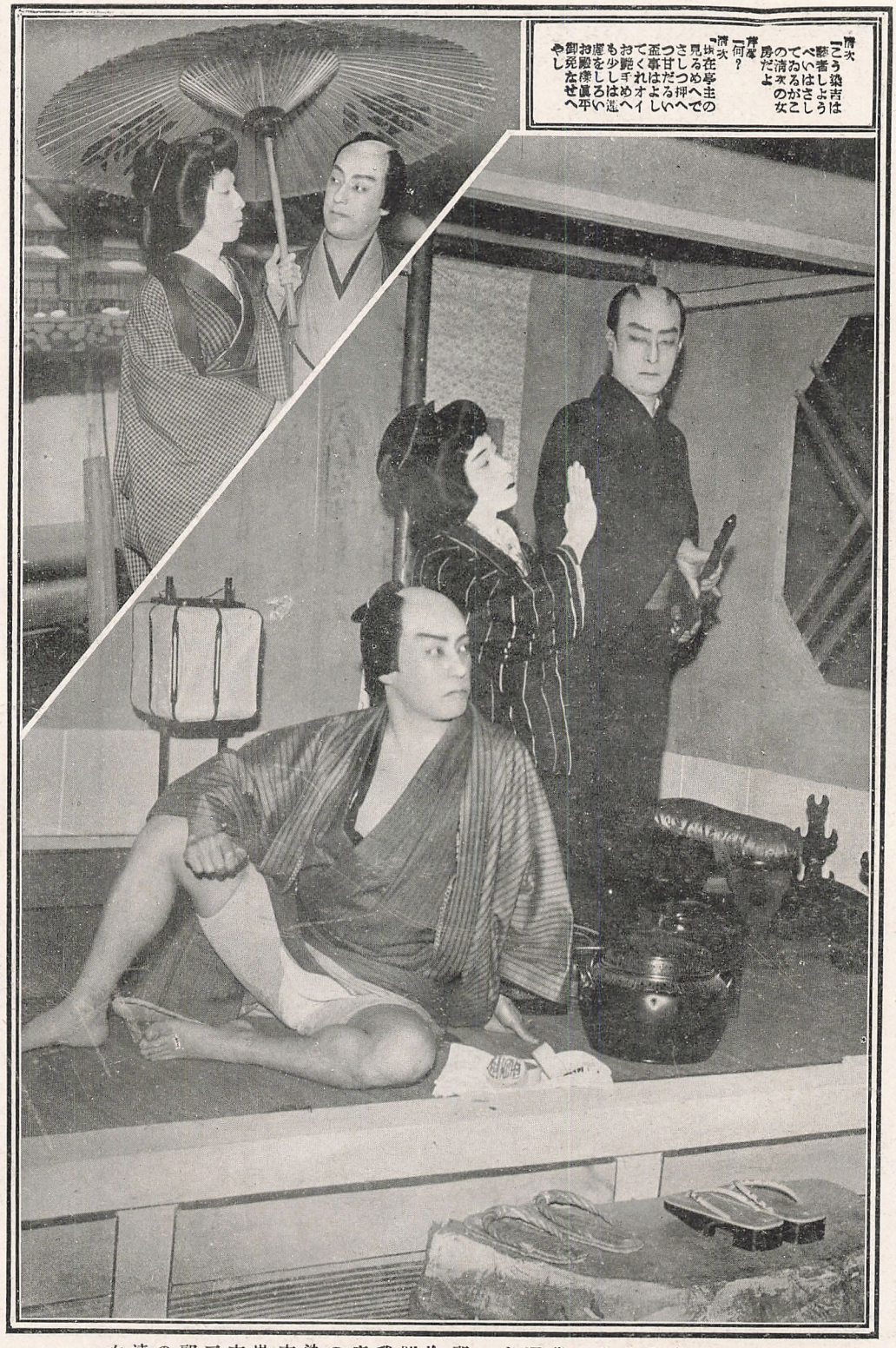
京都南座四月狂言「櫻みだれ」

中村芝雀のお浦・實川延若の彌七



尾上卯三郎の不動助兼・實川延若の彌七・中村芝雀のお浦

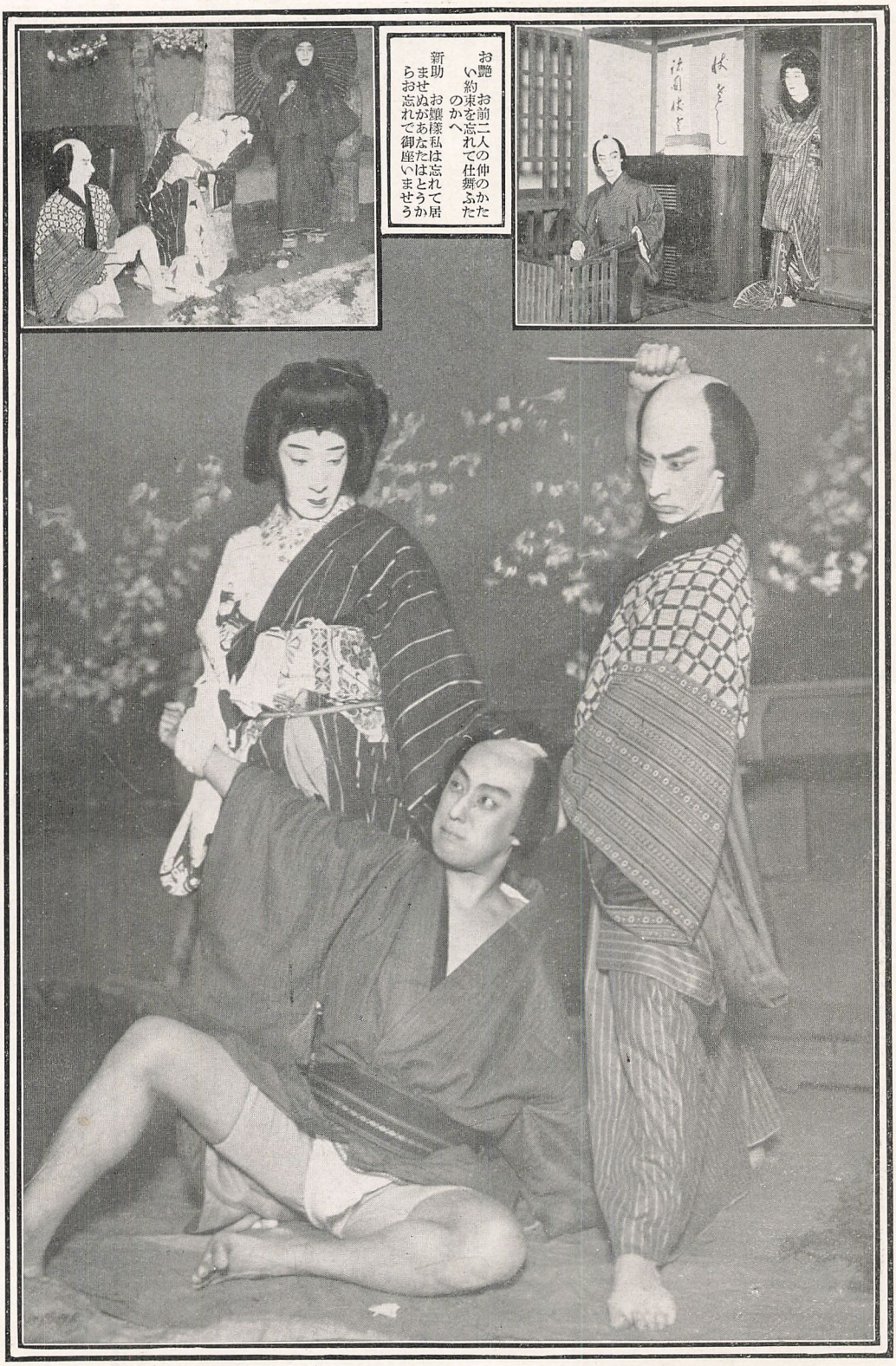
大阪中座四月狂言『お艶ころし』


清次「こう染吉は聴いておくれかえ
聴いておくれでないかえ
清次「お艶様を見つめへ
清次「お艶様を見つめへ
清次「在宅主の見るめへで
清次「在宅主の見るめへで
清次「在宅主の見るめへで



浅尾關十郎の三太　　嵐德三郎の新助

大阪中座四月狂言「お艶ごろし」



お艶　お前二人の仲のかたい約束を忘れて仕舞ふたのかへ

新助　お嬢様私は忘れて居ませぬがあなたはとうからお忘れで御座いませう

片岡我童のお艶　嵐徳三郎の新助

尾上多見之助の芹澤　片岡我童の染吉　嵐徳三郎の新助

嵐徳三郎の新助・嵐吉三郎の清次・片岡我童のおつや後に染吉

大阪中座四月狂言「桔梗旗揚」



嵐吉三郎の春永
尾上多見之助の光秀

蘭丸　スリヤこの鐵扇を以て光秀を
春永　猶豫いたさずぶつて〳〵ぶちすへい
蘭丸　光秀どの君の御諚意成るぞ此蘭丸が金こぶし不忠の五體へこたへたか



片岡我童の十次郎
嵐廣三郎の初菊



片岡我童の蘭丸・尾上多見之助の光秀

大阪角座四月狂言『海の歌』

木下錬三郎の梅村直行・山崎長之輔の金澤芳夫・山本繁の悠紀子



山崎長之輔の金澤芳夫・河原市松のお舟

帝國劇場の藝術座劇「お葉」



貞女裏彰の式日に贋胎の罪を犯し乍ら隠つて列席した未亡人お葉は醫者加藤の勸めに依て今迄の名譽をすて其情人塚田と結婚する事に成たが彼女の罪は發覺して遂に囹圄の人となる併し塚田と加藤とはお葉の眞情に同感し村人の冷嘲の中を夕日を浴びて去りゆくお葉を送り乍ら語る涙の薄暮。

林武の忠吉
松井須磨子のお葉

田中介二の塚田・澤田正二郎の加藤進・松井須磨子のお葉

中村扇雀百姿



在原系圖の繁藏



布袋和尚



所作の仕丁



鏡山の花見親爺



尾張宗春の一万



伊賀越のおのち



大黒屋長次郎子分扇大



布引瀧の太郎吉

中村扇雀百姿


だんまりの奴


梅忠道行の親爺


千本桜の六代君


渡邊華山の虎之助


阿新丸


小四郎


阿波の鳴戸


紙治の上すへ

中村扇雀百姿


寺子屋の小太郎


先代萩の千松


銭屋辰五郎の丁稚


乳母爭の小太郎


五郎正宗


舞妓


勢獅子の扇吉


菅公の阿吉丸

中村扇雀百姿



大阪新町浪花踊



（上の右）大西席品江（上の左）大西席國葉（下の右）山下席梅葉（下の左）木原席皆作

大阪南地芦邊踊



（右）伊丹幸豆千代（中）富田屋お市（左）富田屋八千代

大阪堀江木の花踊



(上)油屋松露・同松右衛門(下)油屋松子・同繁之助(欄外)丸三席初丸

東京新橋演藝會（歌舞伎座所演）



（上）吉野山道行の松秀と榮龍（下）奴道成寺の米松

楳茂都扇性の門弟 (一)



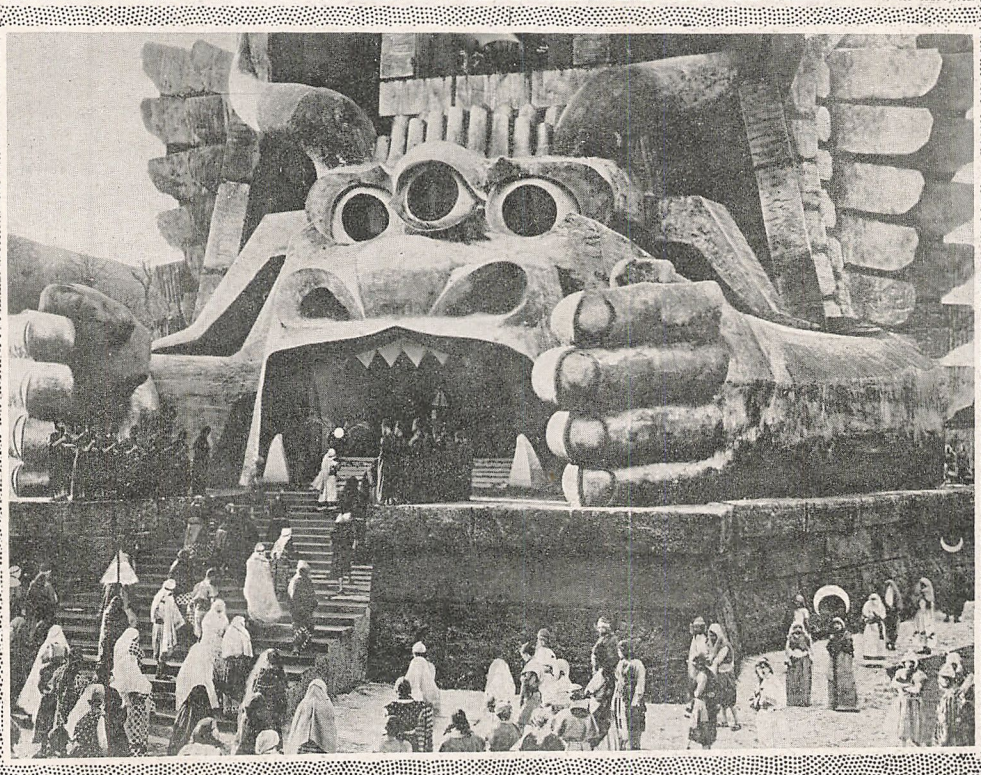
(一)
(上の右)神戸新中檢の梅幸(上の左)同恵津
(下の右)大阪新町大西席の鶴子(下の左)同山下席の作鶴
(二)
(上の右)神戸新中檢の高麗藏(上の左)同松子
(下の右)大阪新町大西席の豆鶴
(下の中)同山下席の梅奴(下の左)同梅香

楳茂都扇性の門弟（二）



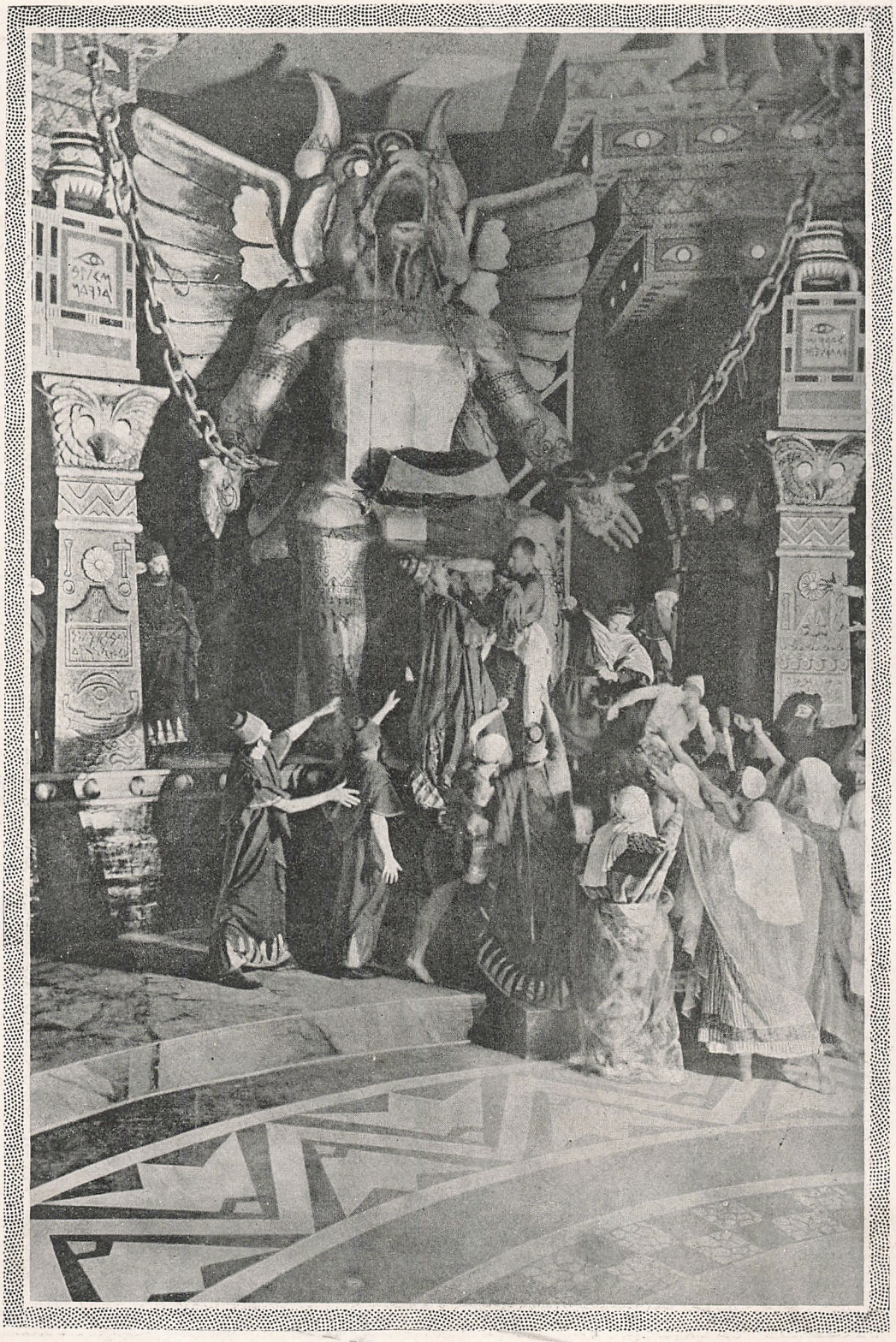
活動寫眞「カビリア」(一)





伊太利の大文豪ダヌンチオの傑作をイタラ會社が活動寫眞にしたもので、今月あたり東京で封切りになる筈である、上圖は乳母ノレフサと主人公カビリア、下圖はカルタゴ大聖院の怪像、奈良の大佛より高き事五十尺、毎年の祭禮には犧牲として多數の童女を其の前に焚殺すのだ

活動寫眞『カビリア』(二)



『カビリア』は古羅馬のカルタゴ戰爭時代で、場所は伊太利と阿非利加の兩方に跨り中々大仕掛の仕組になつて居る、此寫眞はカビリアが件の怪像の前に引出され、將に火中に投ぜられんとする刹那、巨漢マシスキによつて救ひ出さるゝ處

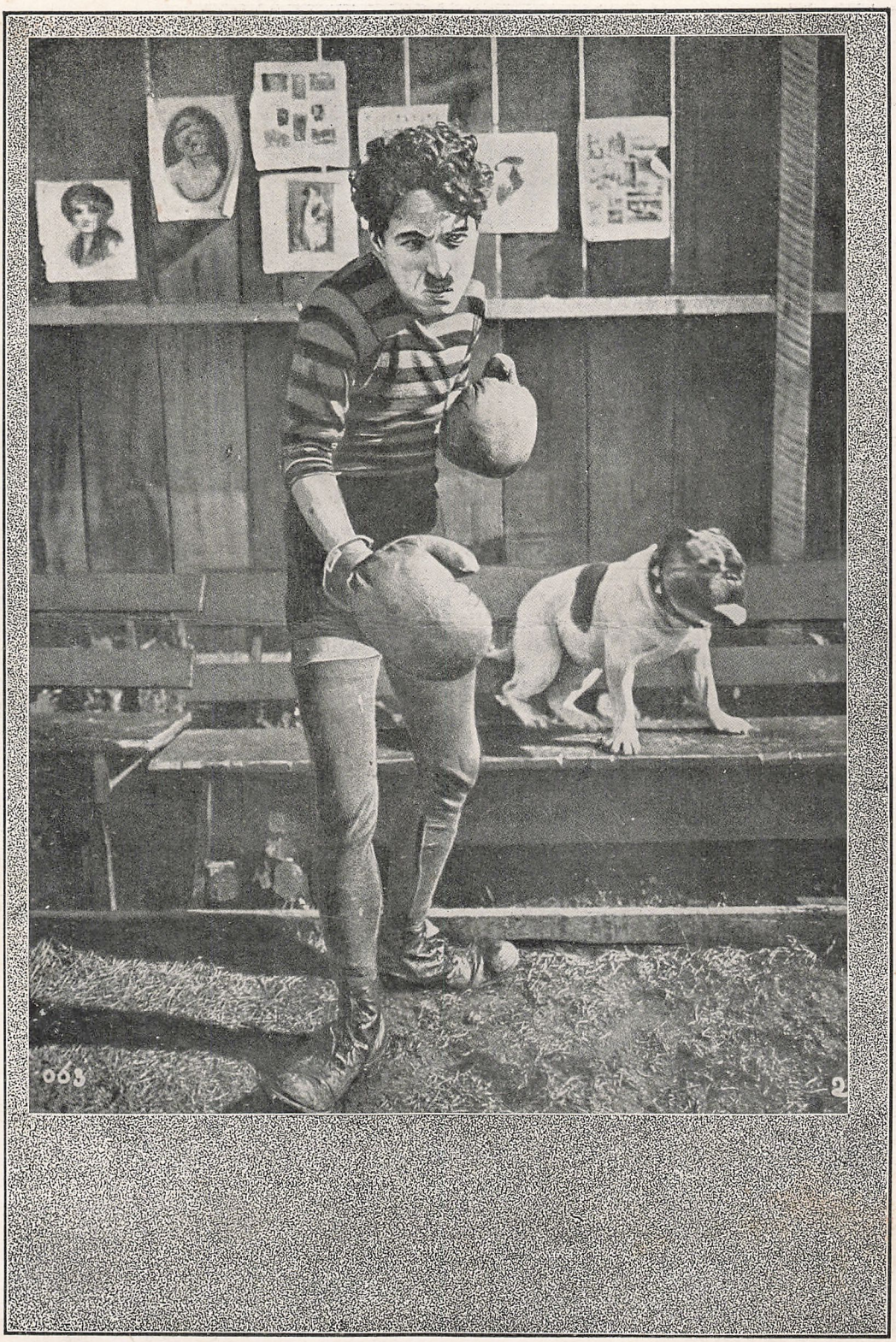
活動寫眞「夜の巴里」





四月十五日に突如として淺草帝國館に現はれ滿都の士女を熱狂させた活動寫眞で、上圖はマキシム美人のドンキーダンス下圖はカメロン娘のスローダンス此寫眞が映寫されると滿場破れるばかりの喝采で辯士の説明なぞ少しも聞き取れない程の歡迎であつた。

チヤーリー・チヤプリン

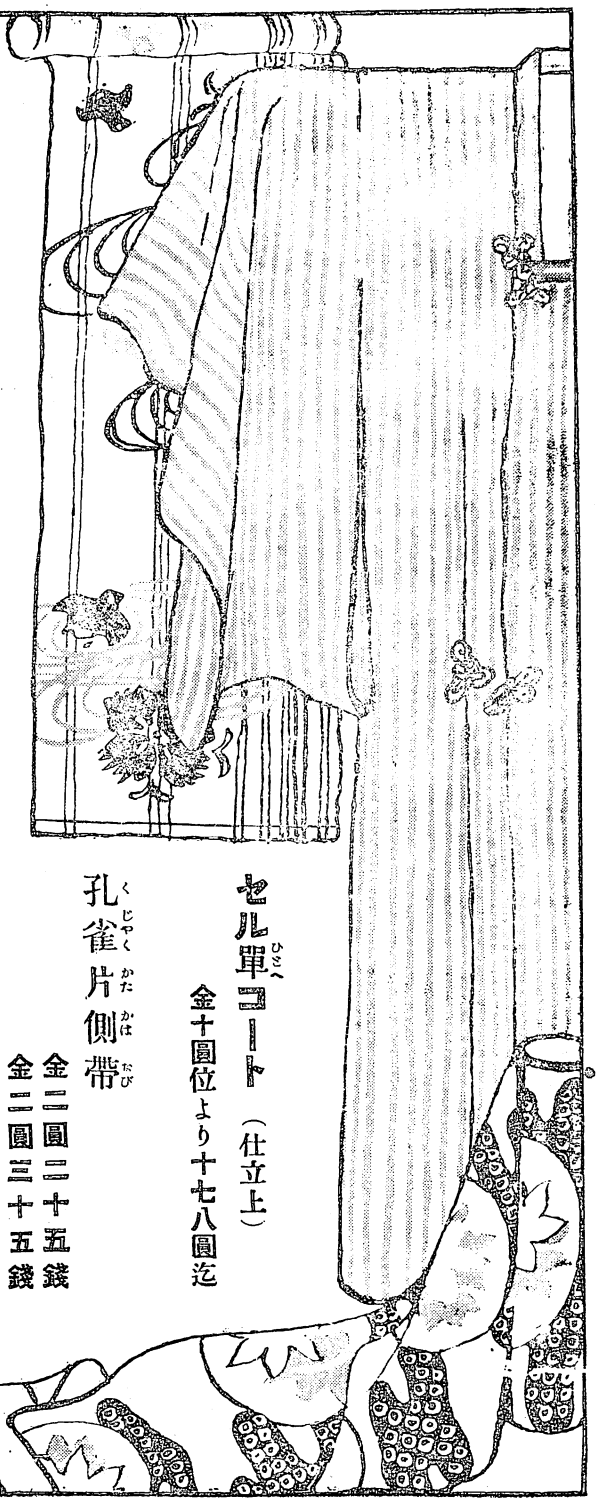


今までアルコール先生と呼ばれて居たチアリー、チヤプリンは、今度『新演藝』懸賞募集の結果によりチヤアリー先生と改名する事になつた。此改名には最初彼をアルコール先生と命名した淺草帝國館の辯士楠井紫光君も大賛成で、四月廿五日、同君自身同館に於て有改名の披露をした

米國活動寫眞役者の花形

キーストン會社のメーブル、ノルマンド孃、上圖は其の素顏、下圖は喜劇お轉婆娘、孃に關する記事が本文中に掲げてあります參照して下さい。





綿京華織片側帶
金一圓六十五錢
（御年齢により柄合種々取揃へ有之候）

セル單コート（仕立上）
金十圓位より十七八圓迄

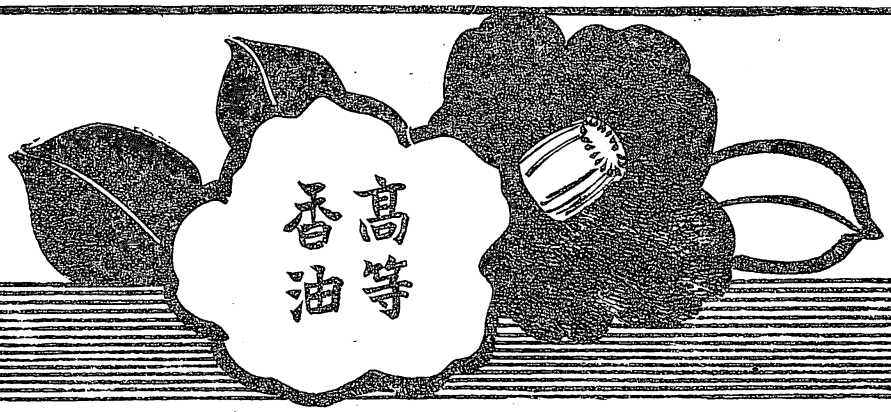
孔雀片側帶
金二圓二十五錢
金二圓三十五錢
金二圓四十五錢

送料	コート	帶側
書留小包	九錢	十二錢
代金引替小包	二十四錢	二十一錢

松坂屋

いとう呉服店

東京上野廣小路
振替東京五八〇〇番



花つばき

日本一の高等香油

定價
大瓶 金一圓
小瓶 金四十錢

東京新ばし
本舗 福原資生堂
電話新橋三二四番

▼全國到る處に販賣す

喜谷實母散



産前産後婦人病
血の道の良薬

主治効能
△子宮病
△白帶赤帶
△下腹痛み
△氣ふさぎ
△逆上頭痛
△月經不順
△血の道
△こしけ
△足腰冷込
△産前産後
△難産流産
△經期腹痛

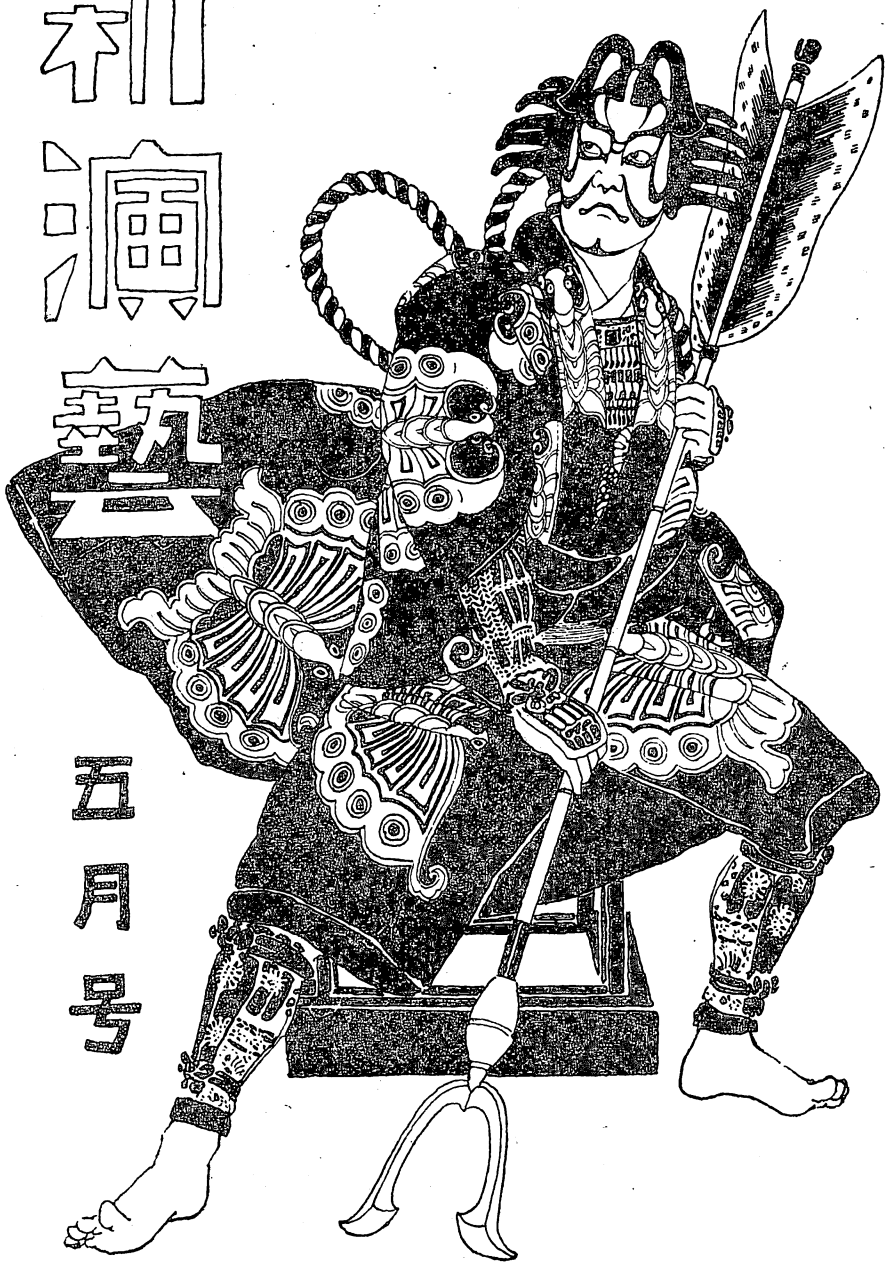
△偽物あり御求の際は喜谷實母散と御名指の上賜上候

定價表

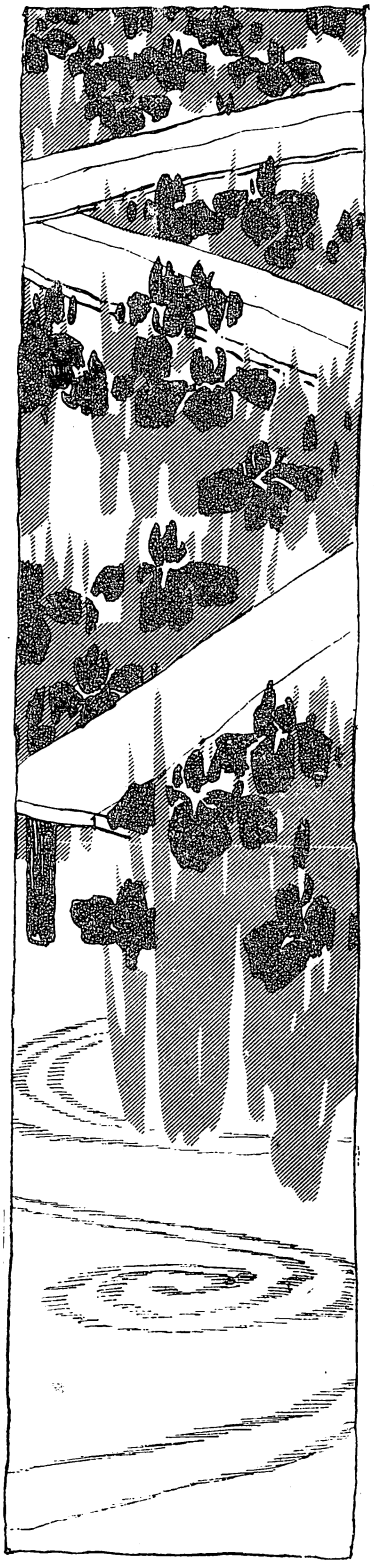
本法實母散一貼金	十錢
同三貼	金三十錢
同五貼	金四十五錢
同七貼	金六十錢
同十四貼	金一圓二十錢
同廿一貼	金一圓六十錢
同三十貼	金二圓十錢
送料	二錢
	二錢
	四錢
	六錢
	八錢
	八錢

東京市京橋區中橋大鋸町
本舗 喜谷市郎右衛門
電京五五番五六番(振替口座二一五四)

新演藝



五月号



舞踊劇と國立劇場

坪内士行

四月の雜誌には大分シェークスピヤの事が出ました。此の號には父逍遙が何か書きます筈ですが多忙の爲め私に代理をせよとのこと。何かの雜誌に、夏目漱石氏に沙翁に關しての講演を賴みに行つた者があつたら、「人竝の事しか云へぬから講演はせぬ」とか云ふ趣意で斷られたとかありました。同氏一流の皮肉ではありますが、全くのところ今更らシェークスピヤに就いて新らしい事を云ひ立てるのは學者にも難義な仕事。まして私に何で新說を立てられませうぞ。それでどうしても申す事がシェークスピヤを引つかゝりとして、それに關連する餘の話に亘り、その方が本體になりませう。すればそれが自然「なすべき事」として私の望む一つ二つの註文ともなります。

全體シェークスピヤと云ふ人は御存知の如く今から三百年前に五十三歲で死んだのですが、生れた土地も死んだ所も同じストラットホードと云ふ小さな町。これはエボンと云ふ淸い、細い小河の岸に添つた至極人氣の穩かな所で、年々歲々夏毎に休暇利用の米國人が見物に入り込んで、例のヤンキー式の金撒き風で、或は市街を、或は道路を改良して、あたら風情を損じては行きますもの、さて一般の景色、住民は、よし三百年の昔通りでは無いまでも、都會と違つた奥ゆかしい趣を殘して居ります。さうした慕しい土地の感化もありませうが、シェークスピヤの書いた脚本を見ますと、近頃の社會劇とか家庭劇とかとは違つて、肩の張る議論詰めでもなければ、クド〳〵した人情噺でも

なく、いかにもおつとりとした、世の中のすいも甘いも嚙みわけた叔父さんのお話と云ふ味で、皆さんにお馴染の深い「**ハムレット**」にせよ、「**ヴェニス**の商人」にせよ、「**マクベス**」にしても皆さうです。

殊に、まだ日本にはあんまり紹介もされず、紹介するのに難義でもありますが、彼の書いたローマンス劇「眞夏の夜の夢」、「御意のまゝ」「第十二夜物語」、「冬の物語」、「あらし」、等の類は一層作者のゆたかな詩人的の氣分が覗ひ知られて、例へば春霞立つ**ストラットホード**の野邊に遊んで、柳ゆく木陰に草喰う馬を眺めやりつゝ、河上の白鳥に餌をやつた私の感じもそれと同じ事。恍惚として我れかを忘れる思ひのある嬉しい作で、もとより之等は謂はゞ我が國の所作事に依て、理屈一方て解釋しようとしたり、道具立や衣裳ばかりで嚇しつけては丸で價値も何も無くなるものですが、從來英國あたりでも專ら**シェークスピヤ**の作の悲劇や史劇の方に力を盡し、大仕掛な興行をして來ましたのが、その反動でもありますまいが、近頃は漸くローマンス劇の方に新運動が行はれ來つたのは面白い現象だと思ひます。近い例が英國近代での名興行師と云はれた**バーカー**と云ふ人の出した**シェークスピヤ**の作は三つながら揃つてローマンス劇ばかりです。これは一つにはさうした芝居の方が書家なり舞臺演出案者の自由が利き、勝手に腕が振へるからでもありますが、又一面には近頃の芝居が、かの**イブセン**の出現以後段々純寫實に傾き、理屈が多く、同じく喜劇にしてからが、滑稽諧謔よりは皮肉諷刺にばかり力が籠つて、さらぬだに、セチ辛い世の中を一段と樂しみ少ないものとする風になつて來たところから、何とかしてもつと餘裕のある、味は有りながらふわりとした趣の史劇ローマンス劇があつて欲しいと云ふ一部の人の好みから起つた運動とも見られます。不幸にして英國にも斯ういふ趣の作を書く人がなく、止むなく、「御意のまゝ」などに手を着ける事ともなつたのでせう。

右の如き脚本の上場されたのを見て最も感じたのは、すべて**シェークスピヤ**の芝居はさうですが、取りわけ之等は色彩と音樂と及び舞踊を交へて、その趣はオペラでも無く、お伽芝居でも無い、さりとて我が所作事と全く同じでも無い特殊な味のある事です。之は悲劇ですが「**ロミオとジュリエット**」は今立派なオペラが出來てをり、又「あらし」も昔からオペラに作り改める企てがあつたとか聞きます。私共の考へでは、なる程唱ふのを主とするオペラとしての試みも面白いでせうが、あゝ云ふ作は日本の所作の如くに舞踊を主として舞臺に上せたなら（どう云ふ音樂を、どんな風に使用するかは大問題ですが）非常に風變りなものが出來上らうと思ひます。丁度西洋では今度の大戰爭が始まる前には露西亞からの藝術が大流行で、文學も、オペラも歡迎されましたが、その中にも人の耳目を驚かせたのは彼の國の舞踊でした。恐らく今度の如き戰亂とならなかつたならば、露西亞の舞踊と**シェークスピヤ**の芝居とが相提携して何等か新奇な藝術が成立したのではないかとさへ思はれます。同じく喜劇の中でも御承知の「**ヴェニス**　商人」。これは普通日本などでは法庭の場しか場に上せませんが、あの芝居の大詰などはそつくり所作事にでも仕組まれさうな趣考、詞句。まして其他のローマンチック劇に至つてはいくらでも其の方面に新工夫の餘地があるように思はれます。近頃英國で其等を上場する時には**セシル シャープ**など、云ふ英國民謠樂の大歌の曲などを應用し、又盆踊り式の舞踊を盛んに取入れてはをりますが、何にしても英國人も獨逸人なども動きの方は到底佛蘭西人や又は日本人程に巧みでも無く、研究も

行届いて居ない。自然今のところでは矢張り舞臺の裝飾、衣裳、仕組みなどの方が專一の攻究題目になつて居るようです。

勿論**シェークスピヤ**はさう云ふ芝居を舞踊劇として書いたのでも無ければ、我々日本の者が其等の作に新らしい西洋樂をつけて、西洋式な舞踊をつけようと云ふのでもありません。前に申したのはたゞ西洋に於て西洋人が試みたらと申すだけの註文。日本では、私の望みではもうそろ〳〵第二期の舞踊劇新作の運動が起つてよい頃だと思ふのでシェークスピヤを引合ひに出したゞけの事。

父逍遙が樂劇論其他を書いてからもう隨分になります。その間どれ程の新運動があつたか、六代目菊五郎や時雨さんの努力は傳聞しましたものゝ、別に之と云つて根據を定められたと云ふ噂は存じません。「新曲浦島」や其他が書かれた時代は一人二人が無理に氣勢を煽つた風で、全體から申すと時機が至つて居なかつたのだとでも申せませう。卽**イブセン**物などが——實演鑑賞は別問題としても——流行になるべき智的な、切詰つた時勢であつたので、人の心に餘裕が無かつた。唱つたり踊つたり何が面白いと理屈で押通す頃だつたのでせう。當節は大分變つて來て居るように見受けます。と申すも、一つは西洋で露西亞舞踊などが受けて居る噂を聞くからでもありませうが、又一面には例の反動と申さうか、飽き易いと申さうか、**イブセン**張りの物や、寫實、智的な作ばかりでは滿足せず。もつと藝術的なゆとりのある作を求めつゝある傾向が見えます。飜譯劇、新派劇から漸く默阿彌に變りやがて近松に溯らんとして居るなどもその趣を示す一現象でせうし小說にしても京阪風、德川期脈の物などが受けるなど、時代の嗜好を表して居ます。これで私はそろ〳〵第二期の舞踊劇運動が起るべき時だと思ふのです。何も此處に舞踊劇論を始めるのではありませんが、例へば近頃の英國興行師が**シェークスピヤ**の作を上場する時には、出來るだけ古代の音樂や舞踊、乃至は片田舍に殘つて居るような物を採用して居るのに見ても、我が日本に於ては一層昔風の大間な音樂や舞踊を研究して新藝術を創出する必要があるように思ひます。島村抱月氏が先日某紙上で「現今の人が歌舞伎劇を喜ぶは、芝居としてゞは無くてオペラとしての要求からである」と云はれて居ますが、歌舞伎劇は一面から見ればオペラの要素も舞踊劇の要素も兼ねたもので頗る複雜な形式のものですが、と同時にいかにも不純な、又あまりに寄せ集めデッチ合せた一時の風習を基とした藝術で、長い年月の間に精練され、一種の立派な藝術となつて今更ら猥りな改修を許さぬ事は後に述べる如くでありますもの、將來我々が望み、新に起すべきものが、あれと同じ形式の物であつてはなりません。ワグネルの考へた如き大湊合藝術は立派に完成出來うるものならば此の上もない目出度い事ですが、さもなくば矢張り唱ふを主とするオペラ、舞うを主とする舞踊劇、及び純劇と三方に分けて行くに越した事はない。

その中の純劇は、例へば先月號に父が書きました如き近松の新改作其他に手腕を振う餘地は澤山あるのですが、オペラと云ふものは、あながち帝劇其他での試みが失敗に終つたから申すのではありませんが之は國民性にもよる事。一寸申しても、藝術國としては可成り古い歷史のある英國に立派なオペラが無くて、比較的新進な獨逸にあり、佛蘭西や露西亞にはオペラもあるが舞踊の方が盛んであるなどは、天才

の出現したとせぬにも原因はありませうが、結局は世人の嗜好如何が根本だと思ひます。日本にも成程謡とか淨瑠璃とかの唄ひ物、語り物が盛んですが、さて之を舞臺などに上せるとなると、人々の喜ぶのはその音樂的情調よりも寧ろ色彩や動作の方に重きを置いて居ます。これなどが日本の舞踊をして世界に類の稀な位にまで發達させ、又我が浮世繪などを世界の藝術界に持出しても恥しからぬ物とさせた所以でせう。勿論舞踊劇と申すものは舞踊ばかりが研究されたのでは駄目。何よりも音樂が肝心要ではありますが、オペラなどゝは違ひ非常な音樂的天才が出なくとも、よく呼吸を呑込んで作曲する人さへ出れば宜しいわけ。丁度踊り子に取つては一流の長唄其他の名人よりも、多少音樂家としては下つても、間を見、舞臺の呼吸を知つた地彈きの方が踊りよくもある、見る者にも心持のよいのと同じわけ。それで私は先づ第一に日本の音樂家、殊に日本音樂を練習した連中がもつと西洋の芝居其他に通じて新らしい藝術を出す心がけをもつて欲しいと思ひます。西洋音樂を研究した人で日本の音樂に興味を持ち、その方面へまで没頭して行く人は可成り澤山あるようですが、私は飽くまで日本趣味を根本として出發したい願ひですから、舊式な習慣を事情にのみ囚はれずに彼の長所を我が藥籠中の物となしうるだけの見識ある日本音樂家の出現を切に祈ります。「新曲浦島」や「かぐや姫」が作曲上に困難な點があるので成功されぬのは致し方がないとしても、其他の時雨さんや父逍遙の曲の多くも、成功したものはあつても未だ我々の胸にヒシと徹するもの、無いらしいのは何としてもその音樂が充分清新な趣を帶びて居ないからに相違ありません。舞踊と云ふものが何等かの拍子、音樂につれて行はれる動作である限り、音樂に清新の味が無ければ自然從來の舞踊のツギハギ物の範圍を出ないのも止むをえますまい新らしい音樂家が出れば新らしい振附師も出て來ようと思ひます。

或人は、「音樂よりも作の方が第一だ」と云はれませう。それは改て申すまでも無い事。が、義太夫が居なかつたら近松もあれ程氣乘りがして淨瑠璃を書かず、**バーベーヂ**か技を振はなかつかたなら**シェークスピヤ**もあれ迄の努力をしなかつたであらうと同樣、劇はその形式は何にもない、上演せられるだけの張合が無くては書き續けられるものではありません。や、音樂的氣分の漂はんとして居る今の日本にまだ眞劍になつて舞踊劇に筆を染めようとする人の無いのは全く此の理由に他ならぬと思ひます。此處で一歩を先んじて――音樂者は今に出るものと假定して――寫實劇を離れた作（今までの舞踊劇を書かれた人の作はともすれば餘りに純劇の領分を犯し過ぎて居ます）、例へば**シェークスピヤ**が「眞夏の夜の夢」や「第十二夜」を書いた心持と同じ心持で書かれた舞踊劇とを試みる人も居て欲しいものです。

話はもとの**ストラットホード**町に戻りますが、あの町には河の岸に赤煉瓦の小やかな劇場と圖書美術館とを一つに竝べた建物が在りますどちらも内容を見たところも貧弱なものではありますが、その趣意は此の英國一の、いや世界一の大劇作家**シェークスピヤ**の生れ故郷に紀念館を建て、置かうと云ふので、名もそのまゝ**シェークスピヤ**紀念館とつけてあります。この貧弱な劇場には春と夏に**ベンソン**と云ふ俳優が來て**シェークスピヤ**の作物を二週間乃至一と月位づゝ興行します。田舍廻りを事とする俳優として大して面白い藝も見せず新式な舞臺面

を工夫するでもありませんが、いかにも舊式な大間なお催し風の興行が土地の風情にも調和して、又となく奥ゆかしい趣はあります。**ベンソン**と云ふ俳優はかうしてもう三十年の餘も**シェークスピヤ**の芝居を專門に打つて廻つて居りますので地方の者などに此の偉大な脚本家の作を紹介する上には此の上のない努力を續けた男、近頃でこそ市村座其他の連中か默阿彌物などを頻りに演出して當て、居りますが、あれ等は全く興行上の金儲けが第一の復活なのでせう。到底默阿彌その人の藝術に心から感服しての研究鑑賞の態度とも思はれず、又長續きしようとは思はれません。英國人が自國の大脚本家に對する眞摯な態度は羨しいものです。それで此の**ストラットホード**町にも今申した記念館はありますもの、、なほ首都**ロンドン**の眞中に大詩人を紀念の劇場を建て、國家の保護の下に英國將來の劇の發展を計らうとした企てが數年前から唱へられて居りました。それはつまり此の大脚本家の名を冠した劇場を國立劇場として、彼の作は勿論、他の作、殊に普通の興行師の手では資本の點から上場し難いと云つた風の物を演出して行かうと云ふのです。**シェークスピヤ**と云ふ名を冠した劇場は英國に今でも可成り在ります。寄席にさへ在ります。が、それを國立劇場にしようと云ふ所に此の新計畫の意味はあるのです。と申すのは、どうも近頃の英國の興行師が金取り主義專門になつて藝術の發達を毒するからそれを排せん爲めに國家の力を借りんとするもので、昨今の戰爭で中止の有樣ですが、中々に當局者の意氣込みはえらいものでした。

新進の米國は別として、歐洲大陸の諸國には殆んど何處にも國立の劇場が在ります。無いのは恐らく英國位なものでせう。日本にもありません。國立劇場と云ふものは決して利ばかりあるのでは無く、種々の弊も伴ひますけれど、或意味から申すと國立劇場の無いと云ふ事はその國の執政者なり國民が劇に對して冷淡であり。藝術を解する事が疎いと云ふ事にもあります。それで英國人もやつきになつて運動を始めたのでせうが、然しあの國で幸ひな事は、國立劇場こそなけれ、國王は年に何度となく劇場へ來臨あり、その他宮中に於ての所謂上覽芝居のお催しなども屢々で、俳優の藝とか見識が何も特別に日本の俳優のより優れて居るとも思はれぬのに拘らず、受けて居る待遇はずつと上です。日本では能劇が多少よい取扱ひを受けて居るのは事實です。國立の能舞臺と稱すべき物は無いにもせよ、昔は諸大名の保護の下にさながら獨逸諸邦の劇場が經て來たと同じような隆盛を傲り、今も昔ながらの型をくづさぬ程の保護を受けて居ます。然るにさうしたオペラ式の上品な能劇と變つて、もつと型のくづれ安い、趣の變り行き易い歌舞伎劇、換言すれば日本の國民劇に對しては何等保護の用意も方法もされて居ぬように存じます。

前にも申した通り——又今迄の識者の云はれる如く——從來の歌舞伎劇と申すものは猥りに手を入れ、改良などを企つべきものでは無いあれはあれで立派な既成藝術。これからは能劇と同じように、いやもつと嚴格に雅樂、舞樂と同じように昔ながらの型、風趣を傳へるこそ肝心なのでせう。それには今の歌舞伎俳優や興行師の如くに生活の道に追はれ、利益問題に先づ苦しむのでは人情の自然として時勢に伴はんとし、所謂流行に適せんとする小細工を施すのは止むをえません。萬一雅樂等が宮中に、能劇が大奥などに保護せられたと同じ意味で將來の日本國家が歌舞伎劇を在るがまゝに保存せんとするならば、それには何よりも國立劇場を建て、利益問題に拘らぬ興行上演をなす方法

を講じなければなりますまい。帝國劇場と云ふ立派な西洋式の建物が出來て非常に結構ではありますが、僅か女優を養成したと云ふ事と、宮樣方が一度ほど御見物になつたと云ふ記錄を作つた以上には何等日本の現在及び將來の劇壇に資する事業をなしえて居ません。近頃は團十郎座建設の議などを持出す人もあるようですが、それやこれやは個人的な又は利益問題を主とした運動であつて、到底深い、尊い價値のあるものとは認められません。今の如くにして進むならば、成程その時々の嗜好には合せて行くかも知れませんが、昔ながらのゆかしい歌舞伎劇の味を傳へる俳優も劇場も無くなつてしまひませう。若しさうでもなつたらば日本藝術界の大損失。何とか今の中に防禦の策を講じて置きたいと思ふのです。つまり國寶を納める庫を一つ欲しいと申すのすのです。

英國の國立劇場設立案者などの說によると、國立劇場で新進作家の作をも上場しようとの事。これは英國あたりでは何等か特殊の事情があるかも知れませんが、私は不賛成。新進の作家とか、新味の運動は既成の藝術を保護すると云ふ目的で出來た團隊の助力を受くべきでは無い。佛蘭西の自由劇場にしても獨逸、英國、さては露西亞へ新らしい劇運動は必ず有力な個人、又は市井の者の團隊の後援によつて發生して居ります。若し日本に國立劇場が出來て、その中で新作を上場するとでも申すのなら、新らしい舞踊劇、新らしい近松劇などは或は試みらるべきものでせう。それと申すは、私の望む歌舞伎劇保存を主旨の國立劇場はもとより純日本風の舞臺でなければならぬ。それで多少の不便はあつても、その歌舞伎劇と脈の似通ふ新作劇の上場は强ち無理ではありますまい。然しながら空想めいた私の望みを云へば新らしい近松劇、新らしい舞踊劇を試みる舞臺としては、裝飾其他は飽くまで日本式であつて欲しいが、今までのあゝダゝ廣い、横幅ばかりの歌舞伎座風の舞臺で無く、あの三分の二位の、小ぢんまりしたものを建てゝ欲しい。その他註文を出せば限りはありませんが、私は以上に申した舞踊劇の新作、新曲は昨今の機に乘じて試みらるべく、鼓吹すべきもので、決して空想にのみ止めたく無いと存じます。又國立劇場の議もさらぬだに芝居と云ふものが低く見られ、殊に歌舞伎劇は全く俗衆の戲の如くに思はれ來つた日本にあつては殆んど藪から棒の世迷言とも聞かれませうが、西洋人が事毎に就いてかの希臘古劇の失はれたのを悲しんで居る例に見ても又近頃は盛んに日本、支那あたりの劇場が西洋に輸出應用されて居る實例に見ても、我々本國の日本人が國民劇たる歌舞伎劇の變形し行くを傍觀して居てよい理由はありません。私は昨冬御大典の折などにこそ新舊劇壇を網羅した大演藝會でも開催して　天覽をも忝くせんと志す程の有力者、輿行師が出て來ようかとアテも無い希望を持つて居たのですが、それ等は一時的の企てとするも、さうした機會から段々と自分の國の立派な藝術をどう處置すべきかと云ふ事に我々日本人が上下よつて深く注意するようになつたならばと望んだのです。昨年の政府のやり方では中々實行されさうにも見えませんが、その面々を悟らせるのも我々の務めでありますまいか。ほとんどシェークスピヤの事は其處除けになりましたが、これも彼の人のローマンス劇を讀んでの感想であり、又ストラットホードの記念劇場や國立劇場案から暗示を得た私の望み。まだ〳〵こんな事では盡きませんが、今はホンの一つ二つを埋め草にと申上げました。

アドルフ・アッピア演劇論

——(二)——

エシウル・クツヤジ

オペラに於ても、また談話劇に於ても俳優といふものは『舞臺裝置の本質的な製造人』でなければならない。即ち吾人の見んと欲するものは夫れである。吾人の感情を受くるものも、また吾人の現在求めつゝある感情も一つに懸つてこゝにある。而して俳優といふものの現出の上に舞臺裝置を建設するといふことの種々の價値に就いては中々異論がある。またこれを成すためには俳優の實在といふこととの矛盾のすべてから脱却するのが必要である。

そうする爲めには俳優はいかがしたらいいであらう。

こゝに一例としてワグナアの『ジーグフリード』の二幕目を擧げる。先づ舞臺の上に一つの森を現はさうとするにはどうしたらいゝか、而してこれより先きに一つ聞くべき問題がある。夫れはこの森は登場人物と共に在る一つの森であるのか、また登場人物が森の中に在る一つの森であるのか。といふ事である。——吾々が演劇を觀るといふ事は一個の劇的動作に參ぜんがためである。この森の中には到底一個の繪畫が表現し能はぬほど色々のものが通り過ぎる。即ちこゝには澤山の撰擇すべきものが含まれてゐる。色々の人が色々の演技をする、又色々の事をその森の中で物語る、吾々は舞臺の道具を組み立てるとき只單純に一つの森を見るといふことの欲求を有つたのではない、けれども吾々はこの森の中を通るものゝすべてをその連續した狀態のまゝに緻密に見ることを願ふ。舞臺に於ては部分部分の綿密な智識は殆んど言葉に盡しがたいほどのもので、かくも完全に自然を變更した道具丈に驚嘆を惜まないわけにはゆくまいと思はれるが、しかし觀客の眼は自ら登場人物の上にそゝがれるやうになるのは必然である。而してこの時若し森といふものを主として考へるならばその森は俳優の上に又俳優の周圍に存する特別な一個の霧圍氣として存するものとなるであらう。——即ちそのものは他の處に於て見る森とは異つた活々した動きのある一個の實在となつて見える一つの霧圍氣なのである。即ちこの場合その繪は只單純な一つの繪ではなく一個の幻想上の舞臺となり、不動の繪畫が生動の繪畫となる。

斯くの如くにして舞臺裝置といふものは時間的に繪畫の布局をなすのである。何ら拘はるものなき獨立の繪畫から出立するのではなく、この不完全な道具立を俳優に依つて生かさうとするのである。即ちかくすることはその繪畫の明暗遠近の妙を究らに觀んとする欲望に外ならない。而してそのためにはすべてを犧牲にするとも厭はないのである。こゝに於て『ジーグフリード』はこゝにも彼所にも存在する事を得るであらう。即ちこゝに彼所に『ジーグフリード』のための樹立があり、小徑がある。

吾人は繰り返へして言ふ、吾人はも早やこゝに於て一個の森の感じを與へやうとすることを求めず。一個の森の霧圍氣に在る一人の人間の感じを出すことを求めるであらう、即ち實在と云ふものは生動しない幻想の側に置かれたる一個の生きた人間にあるからである。而してこの人物が接觸する處のすべてはその人物に取つて既に定められたる處のものである。而してまたその他の部分は彼の周圍に一定の霧圍氣を創造せんと努めてゐるものなのである。故に若し吾人が吾人の眼を一度び『ジーグフリード』から遮斷するならば舞臺上の繪畫は吾々に必要な幻想を與ふる事を失くするであらう。舞臺の道具はジーグフリードを支持するものではない。かくて微風に依つて戰めく森がジーグフリードの眺めて惹きつけるとき吾々觀客は生々した光りと影を浴びてゐるジーグフリードを觀るであらう。そしても早やそこには拙劣な演技に依つて生ずるさまざまの動作を必要としないであらう。他なし、舞臺的幻想とは俳優の生々した現出そのものにあるからだ。（川路柳虹）



二つの手紙

松井須磨子に送る手紙

吉井勇

一

私は思ひ懸けなくもあなたに向つて、こんな手紙を書く事になりました。「與ふるの書」式の堅苦しい事は、とても私には書けませんから、私は今女の友達に送るやうな心持で、この手紙を書かうと思つてゐます。そして又私はあなたがこの手紙を、私の女の友達として受け取られむ事を望んでゐます。

過去を振り返つて考へて見ると、月日の立つのは早いものです。帝劇の「ハムレット」で始めは舞臺の上のあなたの姿を見出してから何時の間にかもう數年の時は過ぎてしまひました。全く時は夢のやうに過ぎてゆきます。そして私は過去を振り返つて考へて見ると、その夢のやうに過ぎてゆく時と云ふものが、どんなに怖ろしい力を持つてゐるかと云ふ事を、つくづく感ぜずにはゐられません。ちよつと出し物を較べて見ただけでも、直ぐにさう感じられるでせう。「人形の家」から「眞人間」へ——一口に云つてしまへば、墮落には違ひありませんけれども、私は決してその事を批難しようとは思ひません。實は私がこの手紙を書かうと思ひ立つたのも、あなたに向つて批難を加へる一部の人々に、云ひたい事もあつたからなのです。

繰り返して云つて置きますが、私は今女の友達に送るやうな心持で、この手紙を書かうと思つてゐます。私の何時もの癖として、まづ回想に耽るのをお許し下さい。

二

私が始めてあなたにお目に懸つたのは、たしか一昨年の夏、鎌倉劇場にあなた方の一座が來て、「復活」を演つた時のやうに思はれます。或はこの以前にお目に懸つた事があるかも知れませんが、それは今私の記憶に殘つてゐません。丁度その時は避暑客の出盛る絶頂で、あなた方の芝居も三日間滿員と云ふ景氣でしたが、それでも何處かに旅興行の寂しさがあつて、私は何となく心が惹かれました。それで私は最初の晩樂屋を訪れる氣にもなつ

たのです。

もう幕が明く間際の事でしたから、樂屋はかなり混雜してゐました。私が階子段を上つてゆくと、直ぐそこがあなたの部屋で、丁度島村さんもをられたものですから、私は幕が開くまでお邪魔をしました。その時私達はどんな事を話したか、今ではまるで覺えてゐません。唯その時あなたがカチユシャの紛裝のまゝ、鏡臺の上にだらしなく座つて、ひどく苛々した蓮葉な調子で、外の彼者を急かしてゐた聲が、いまだに耳に殘つてゐるだけです私はその時如何云ふ譯だか、源之助の切られお富を聯想して、急にあなたが好きになりました。

「復活」と云ふ芝居は、カチエシャの唄がある爲めに、ひどく通俗的なもののやうに思はれますが、私はかなり藝術的價値のあるものだと思つてゐます。脚本もよく原作の香ひを傳へて、流石に大きな靈魂の苦悶の聲を、舞臺の上から聽く事が出來ます。私は始めての芝居を帝劇で見た時、目に涙が滲んで來るのをとどめる事が出來ませんでした。そして私はこの夜再びあの不幸なカチユシャの爲めに涙を濺ぐ事を餘儀なくされたのです。

その翌日の午後あなたは島村さんと御一所に、海岸の散歩の歸り懸けだと云ふので、私の家に寄つて下さいましたが、あなた方はこれから旅興行にお出懸けになるし、又私はあまり東京に往かなかつた爲めに、それつきり長い間お目に懸る時を失つてしまひました。

三

「その前夜」が上場されるに就て、その脚色者である楠山君から唄を作る事を頼まれて喜んでそれを引き受けたのは無論友達の脚本と云ふ事もありますが、ひとつには又あなたに對する、憧憬もないではなかつたのです。この時作つた「ゴンドラの唄」は、實を云ふと鷗外先生の「卽興詩人」の中の「忘想」と云ふ章に、

「其辭にいはく、朱の唇に觸れよ、誰か汝の明日あるを知らん。戀せよ、汝の心猶少く、汝の血は猶熱き間に、白髮は死の花にして、その喚くや心の火は消え、血は氷とならんとす。來れ、彼輕舸の中に、二人はその蓋の下に隱れて、窓を塞ぎ戸を閉ぢ、人の來り覗ふことを許さざらん。少女よ。人は二人の戀の幸を覩はざるべし。二人は波の上に漂て、波は相擁し相就き、二人も亦相擁し、相就くことは其波の如くならん。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。」とあるのから取つたものですが、幸か不幸かその節が稍難かしかつた爲めに、あまり流行せずに濟んでしまひました。

あなたと私との舞臺上の關係は、唯この「ゴンドラの唄」ひとつだけです。しかし私はこれに依つて、再びあなたにお目に懸る事が出來たし、又あなたの熱心な稽古振りを見る機會を得ました。その日は今にも降り出しさうな空模樣で、楠山君と二人で外へ出ると、江戸川の水が黃昏の底に、冷たく光つて流れてゐました。

四

こんなくだらない回想を、何時まで續けてもきりがありませんから、もうこの位で止めにして、私が何故にこの手紙をあなたに差し上げる氣になつたかと云ふ譯を、ちよつと手短かに申し上げませう。お氣に觸つたら御免下さい。譯と云ふのは外でもありません。私はあなたがこれまで、多くの批難を受けながらも、數年の間續けて來られた、不斷の努力

を尊敬すると同時に、それがすべて空しくはないかと云ふ事を、獨りひそかに危ぶむからです。凡そこの世の中に、空しい努力を續けてゐる程、悲慘な事はありますまい。私は近頃しみじみとこの事が考へられて、人間と事業と云ふやうな事を思はないではゐられません。それで私は不圖こんな手紙をあなたに差し上げる氣にもなつたのです。

つい五六日前の事です。私は用事があつて淺草に往き、駒形の通りを歩いてゐると、異樣な廣告の行列に出會ひました。彼等の持つてゐる赤い旗には、白く文字が染め抜かれてゐます。見るとそれには「松井須磨子一行」「カチューシャ劇」「常磐座」などと云ふ文字が記されてゐるではありませんか。私は思はず立ち留まつて、この異樣な廣告の行列を眺めました。カチューシャの唄を奏してゐる笛の音や太皷の響は、慵けに春の空に消えてゆきます。そして私は次第に砂埃の中に遠ざかつてゆくこれ等の人々を、悲しく見送らずにはゐられませんでした。——あなたにかう云ふ光景をお知らせしなくてはならないのを、私が如何に心苦しく思つてゐるかと云ふ事を、あなたはよく御存知の筈だと思つてをります。

私は公園に出るのが何のかのと、さう云ふ野暮は申しません。唯その怖れるのは、こんな事をしてゐる間に、次第にあなたの藝が荒んでゆきはしまいかと云ふ事なのです。それはあながち杞人の憂ではありますまい。

五

私はまだ一部の人が云ふ程に、あなたの藝が荒んでゐるとは思ひません。私はあなたの藝に「眞實」があり、從つて「力」があると云ふ事をよく知つてゐます。あなたが殆んど新劇壇の人氣を一身に集めてゐるのも、その「眞實」があればこそです。あなたが今日新しい女優の第一人者となつてゐるのも、その「力」があればこそです。しかし一度その「眞實」を失つたら、再びそれを摑むのは、中々容易な業ではありません。又一度その「力」を無くしたら、再びそれを取り返すのは、殆んど不可能な事だらうと思います。

私はこの二三年鎌倉に住んでゐて東京から遠ざかつてゐた爲めに、あなたの芝居を見る多くの機會がありませんでしたけれども、舞臺の上のあなたの「眞實」が、次第に失はれてゆくのを感じました。殊にさう思はれたのは「その前夜」を見た時です。あの熱心な稽古振りに感心した私は、その舞臺を見て失望しました。あの「眞實」は何處へ往つてしまつたのでせう。そして又あの「力」は何處へ往つてしまつたのでせう。私は暗い觀客席の椅子に靠れて、遙かに舞臺から響いて來る自分の作つた唄を、悲しい心持で聽いてゐました。暗いヴェニスの夜の溝渠を、ゴンドラに乘つて下るやうな、悲しい心持で聽いてゐました。

もうそれから一年過ぎてしまひました。この間の帝劇の「眞人間」(私は如何しても暴力の爲めに變られた「お葉」と云ふ名を書く氣がしません)も、病氣の爲めに妨げられて、到頭見る事が出來ませんでしたから、この一年の間にあなたの藝が、如何云ふ風に變つたか、私は少しも知らないのです。しかし私がこんな手紙を差し上げるに際して、かう云ふ事を申し上げるのも、又徒事ではないだらうと思ひます。

取りとめのない事を、長々と書いてしまひました。漸く多事ならむとする劇壇の爲めに折角御自愛を願ひます。末筆ながら島村さんを始め、一座の方々に宜敷。(五年四月四谷にて)

井上正夫君に宛てた手紙

久保田萬太郎

井上君。

私があなたに手紙を書かうと思うてもう半年にあります。藪から棒にこんなことをいつても分らないかも知れませんが、去年の九月あなたが眞實に公園のみくに座へ出ることになつたとき、初日にあの「胡蝶蘭」といふ臺灣の芝居を見て、私は一寸そこに無常を感じなければならないことがあつたので、早速「井上正夫に與ふるの書」をあなたに書かうと思ひました。だがそれは二三枚書いてすぐに厭になつて、そのまゝ途中でよしてしまひました。

丁度神經衰弱になる前でしたから、あなたに與へてこれが眞面目に新派の役者の下らないことを痛論しようと思つたのでした。——今にしてみると、そんな莫迦〳〵しい心もちは全くもうなくなつてゐますからどうかご安心下さい。

だがその後になつて、新聞に何かあなたのことが出てゐたり、みくに座の前を通つたりすると、なぜかその度に、さうだ、私は一度井上君に手紙を書かなければならなかつたのだといふやうな心もちになりました。

考へてみると、一昨年の春、花月にハアゲマンの歡迎會があつたとき、かへりに松山君のところで初めてあなたにお目にかゝつた以來、大金の惜春會で一度、本郷座の樂屋で一度——私はまだあなたに二三度しかお目にかゝつてゐません。だが私にとつては眞砂座以來の深馴染、どこか銀座あたりで邂逅することがあれば、無論私はあなたと、「暫く」「暫く」位なことをいひ合ふやうなことになつてゐるものと以前から固くさう思つてゐました。いままでも何うかすると、「近來はどうしてゐます。」といふやうなことで、思ひもかけずあなたが私のところへ遊びに來るのではないかといふやうなことをとき〳〵思はれることがあります。

ところで私はあなたに一度話したいと思つてゐることがあります。有樂座の新時代劇であなたが「馬泥坊」をやつたときのことです丁度それは私が慶應義塾の豫科二年のときで——そのときにはまだ私はいまのやうにこれが愚にもつかない小說を書いたり何かするやうなことにならうとは全く考へてもゐなかつたので、たゞそれは小說や芝居の好きな世間見ずの苦勞のない學生でした。忘れもしないクラス會があつて橫濱へ遊びに行つたかへり四五人のクラスのものと途中でわかれて一人これが有樂町の停車場で電車を下りたのでした。

だがもうそれは八時すぎ、丁度番組の第一の「秋の悲」の切れたところで、そこには燈火のいろが全く暗く疲れ盡してゐました。——私はなんともいへない空漠な便りないやうな心もちにすぐ襲はれなければなりませんでした。

今から思うと、それは四分にも足りない心細い見物でした。

やがて「馬泥坊」の幕があきました。自由

劇場の一回も二回も見なかつた私にとつては西洋の芝居を舞臺の上にみるをばこれが最初だといつてもいゝのでした、今でこそショオでもあるまいといふやうな口幅つたいこともいひますけれど、そのときはまだ、勿論シヨオについて何の知識も持つてゐず、牧師が出て來て、罪人が出て來て、シエリフが出て來て、私窩兒が出て來て——さうして最後に罪人が卓の上に躍り上つて演說するまで、私はなんともいへないある強い力で胸の上を壓迫へつけられてゐるやうな心もちになりました。——二時間あまりといふもの、私は全くあなたに依つて話されるブランコオの臺詞に惹きつけられました。——私は全くあなたの眞實に動かされなければならないのでした。

「お袋の身につけたものを欲しがつたなぞとセンチメンタルな名にうたはれたくないんだ。」と怒鳴つたあなたの聲が、何故か私にいまだに耳に殘つてゐるやうな氣がします。

幕になると——甚だそれは心細い喝采の中に——私より二側ばかり前にゐた三人づれの若い人がすぐに席を立つのでした。何の氣なしに顏をみると、その中に一人は、その時分まだ大學にゐた「新思潮」の後藤（末雄）君でした。

後藤君と私とは以前一しよの中學にゐた關係があります。

『君は一人かい。』といはれて、『あゝ一人。』とそのとき私のこたへたのを覺えてゐます。——その時分にはまだ私も一人で芝居をみることが出來るほど落ちついた染々した心もちに生きてゐられたことを思ひます。

時計をみるともう十時でした。あとのチエホフの芝居を殘して、『歸らないか。』とさそはれたまゝ『あゝ歸らう。』とそのまゝ私は後藤君なんかと一しよに外へ出ました。

三人のあとの二人は、一人は和辻君、一人は木村（荘太）君でした。——和辻君は「新思潮」に「ウオレン夫人の職業」を譯してその時分このショオ通でした。

芝居を出てから電車まで、『ショオも面白いね。』といふやうなことで、和辻君と木村君とがしきりにショオの議論をする後から、私は默つてこれが噂い路をボンヤリあるいてゐるのでした。——數寄屋橋の近所がいまのやうに開けてゐず——僅の間にこのごろは自棄にあの邊は賑やかになりました。

それからもう七年になります。

その七年の間。——あなたもかはつたけれど世間もそれは隨分かはりました。この手紙を書くについて、いまその當時の古い「歌舞伎」を引張り出して來てみて、私はなんともいへない心細い便りないやうな氣になりました。

丁度自由劇場の第三回の試演のあつたときで——その自由劇場の「夜の宿」の評判にならんでそこに「馬泥坊」の評判が出てゐます中村春雨氏（まだこのときには吉藏氏でなかつたものと見えます）と、山崎紫紅氏と、岡田の奥さんとが、言葉を盡してそこにあなたのブランコオを推讃してゐます。さうして春雨氏も、紫紅氏も、今度は見物が來なかつたやうだけれど、二回三回と辛抱してやつてゐたなら、そのうちには必ず景氣がよくなるからとしきりに激勵してゐます。——だが二回三回と辛抱してなほあなたは終に悲しい結果を見なければならないのでした。

更にその前の月が「歌舞伎」をみると、そこにあなたの新時代劇といふのを起すについてこの悲痛な告白が出てゐます。それと一しよに本郷座の新社會劇の評判がそこに種々書き立てられてあります。出しものが「勝利」

といふピネロの飜案と、「波」といふ中村春雨氏の新作で、その「波」の女主人公に扮した花房露子といふ女優について、島村抱月氏や伊原青々園氏が、「驚嘆すべき女優である、今度の新社會劇中で第一の收穫である。」といふやうなことをいつてゐます。わざ〳〵これが本郷まで立見に行つたから知つてゐますが、隨分この「波」といふ芝居はベタ〳〵した氣色の惡い芝居でした。だがいま伊井君の一座にゐる東を向うにまはして芝居をした當年のこの花房露子が、いまの田村俊子夫人だといつても嘘だといふ人があるだらうと思ひます。

――それはショオ通の、「坪内博士に與ふる書」や「新社會劇團を葬る」といふやうなものを書いた和辻君が、いまはもう全くシバヰのシの字も知らないやうな顏をしてこれかニィチエやキエルケゴオルでなければならないやうなことになり、同時にこれがい、加減に擧措をよして、音なしく親父のいふことをきいて商人になる筈だつた奴が、道樂で讀んだり見たりした小說や芝居を役に立て、その日その日を送らなければならないやうなことになつたのもこれを思へばそれほど不思議ではないのかも知れません。

新時代劇の沒落（といつては惡いのかも知れませんが）以後、再び新派へ立戻つたあなたは始終なんとなく落ちつくことの出來ないやうな工合にみえました。全體新派の纏りがつかないやうなことになつたのがその時分からでした。――そのうちにだん〳〵世間が調子づいて來て、自由劇場と文藝協會とを中心に、そこには試演劇場だの土曜劇場だの近代劇協會だのといふやうなものが續々と出來上つて來ました。森先生の「一幕物」と「續一幕物」とが飛ぶやうに賣れて、まさにそれは新しい芝居でなければ夜も日もあけないやうなことになるのではないかといふやうな景氣になつて來ました。――かういふことになつたとき、私は痛ましい犧牲になつたあなたと新時代劇とのために一掬の泪を濺がなければならないのでした。

自由劇場で、「寂しき人々」をやることになつたときあなたが出てヨハンネスをやるといふやうな風說が行はれました。あなたのためにそれは喜ばなければならないことだと思つてゐたのに、それは風說ばかりでとう〳〵何のこともなかつたことを殘念に思ひました。

――だが同時にそれは機會さへあればいつでもまた新時代劇を再興する心もちであなたがゐるといふことを聞いて、あなたのために、さうして世間の新しい芝居のためにその機會の來ることを祈なければならないのでした。

「所謂新しい芝居が西洋の飜譯劇をやることであるとすれば、大正二年の後半期は後世の驚異でなければならない。」とある批評家がいつたことがありましたが、今にして思ふとそれは大正二年の秋はとにかく新しい芝居の黄金時代でした。藝術座の「モンナ・ワンナ」公衆劇團の「エレクトラ」近代劇協會の「マクベス」――さうして自由劇場では小山内氏が西洋からかへつて來たところで三年前に一度やつた「夜の宿」を再演してわれ〳〵を十二分に滿足させて呉れました。――實際それはこの分で行つたら始終はどういふことになるのだらうと思はれるほどの景氣でした。目のあたりにかういふ渾沌とした世の中の來たのをみて、私はこゝに再び志を抱いて半途に空しく斃れて新時代劇の運命を悲しまなければなりませんでした。

この渾沌とした世の中にあつて、あなたの存在のあつたのはそれは野外劇の試演でしただがそれはあなたの爲事としてあまりに小さ

く淋しい心もちのするものでした。さうしてその結果よりみてもそれは至つて用意の足りない、全く段取のついてゐないものでした。——丁度そのとき私は三田文學に毎月芝居のことを書かなければならないことになつてゐたので、その爲事のためにこれが田端まで出向いたのでした。——十一月になつたばかりのそれがまた自棄に寒い日で、芝居をしまつたときにはもう四邊は全く日が暮れてゐました。夕霜が下りて、上弦の月がそこに心細く沈みかけてゐるのでした。——「必ず何かやります。」といつたあなたの閉會の辭をなぜか悲しい痛ましいことのやうに思ひながら、足許の危い暗い崖路を岡村君と二人でトボ〳〵とこれが停車場の方へあるいたのでした。

上野で電車を下りたとき、燈火の中に、岡村君も私もはじめてそこに開放されたやうな心もちになりました。

だがこの黄金時代は大して長い生命を持つてゐるのではないのでした。大正三年になるとこれが問題にならないほど景氣が惡くなりました。種々それには理由がなければならないのでしたが、要は新しい芝居の役者とさうして仕打の、すべてに於いての厚かましい、微塵遠慮と云ものゝないヤリ口が世間から愛想を盡されなければならなかつたのでした。

藝術座がイブセンをやつても、無名會がシユニツツラアをやつても、さうして公衆劇團が所謂創作の芝居ばかりをならべても、とてもこれがその頽勢を挽回することは出來ないのでした。——偶々藝術座が「復活」をやつて人氣になつたことが、かうなると却てそれが新しい芝居の落ち目になつたことを悲しく證據立てるやうなことにならなければならないのでした。

『必ず何かやります、そのうちに必ず何かやります。』と宣言したあなたはそのとき、明治座の伊井君の芝居で「ちきり伊勢屋」の傳次郎の友だちをやり、伊井君のいつもの近松研究の犧牲になつて「當流小栗判官」の郎黨某を勤め、さうして新富座の大合同に「かたおもひ」の實直な下男でこれか見物の泪を強要することにつとめてゐるのでした。

ですが、新派が今日のやうな悲しい羽目になることは、この時分からもうすでに分つてゐるたといふことがいへるのでした。

ところで去年の春のあの「實花あだ花」の騒擾以來、私はしばらくあなたの消息に接することが出來ませんでした。そのうちにあなたが藝術座へ出て「おもひ出」の皇太子をやるといふやうなことが傳つて來ました。私はそれを聞いたとき「井上君も苦しいだらう。」と何とはなしにフトかう思ひました。——それがあなたにとつて仕合だとも不仕合だともさういふやうな事はまるで考ませんでした。

だがそれもたゞ風説だけにとゞまつてゐたのでした。

惜春會であなたにお目に懸つたのはそれから間のないことでした。あのときは生憎幹事といふことでこれが落着かなかつたので、あなたの側にオチ〳〵坐つてゐることも出來なかつたのでしたが、あなたは長田君や楠山君の前でたいへん元氣に話をしてゐたやうに私は思ひました。

七月になつて本郷座があきました。あなたは何のこともなくその興行で「目黒巷談」の晋太郎と「サロメ」のヨカナアンを引きうけたのでした。——だがそのときにもうあなたは公園に出るといふことに身體が決定つてゐたのでした。

八月になつて、世間にそれが知れたときに

は誰もその思ひがけない報知に驚きました。さうして誰もその訛傳だらうといふことをうたがひました。——だがその通信の新聞に出た日、『眞實でせうか。』と會ふ人毎にこれが訊かれたとき、『おそらく眞實だらう。』と言下に私はかう答へました。——それは前にも一度新派を捨て、新時代劇といふものをはじめたあなたのことだからといつたらあなたを侮辱することになるでせうか。

恐らくあなたは活動寫眞の役者になつたといふことを、それほどの、われ〳〵が思つてゐるほどのそれを墮落とは思つてゐないのではないかと私は考へます。

あなたの摯實、あなたの熱情。——私はこのごろ五年前六年前の世の中のとかく戀しくなることを何うすることも出來ない。

氣紛れで書きだした手紙が思ひのほか長くなりました。もう大分夜も更けました。とりとめのないことをいつまで書いてゐたところで爲方がないからまう止します。

今夜はそれから久しぶりで「新綠」を讀みながら寢ようと思ひます。（四月十五日駒形にて）

本社發行の新家庭五月號

五月壹日發行……壹部三十錢送料三錢

新規募集の懸賞　理想の夫下の句づけ

表紙　花あやめ（石版十二色）……德永　柳洲
卷頭　馬上の少女（二色版）……
同　山羊　（二色版）……
同　皐月晴　（二色版）……
同　上海の子供（二色版）……
われらの主張……主筆
歷史小說光秀の妻（近藤紫雲畫）……碧瑠璃園
短篇小說美貌……上司　小劍
薰風、衣更して……名越國三郎
萬古不易の明倫和歌集……下田　歌子
長野の渡邊敏先生……丸茂　天靈
私の教へた生徒の中には……檜山　友藏
ヴアイオリンの話……水野盈太郎
失禮な手紙……大田黑元雄
白氏文集繪物語（山岸青村解）……結城　素明
御伽學問……本間　久雄
犬と子供……益田　太郎
犬好きの人……米山　蟻兒
江戸前鷄肉……竹柴　晋吉
挿花の順序とリボンの結び方（寫眞版）……
電車で逢つた女店員……たちばな
廢物利用のいろ〳〵……宇賀村鶴子
上野公園で瞥見した今年の流行……鈴木　泉
お米の學問……奥村たつ子
お母樣の通學する學校……
子供の洋服（挿畫）……
鐘淵紡績會社の女工……

懸賞當選發表　和歌の添削　花「見の衣裳　向ふ三軒兩隣



愛蘭劇の片影

大田黒元雄

回

愛蘭（アイルランド）のダブリンがアベイ座といふ小さな劇場を有してゐる事や、此の劇場が英國中で文藝座と名づけらるべき唯一つのものであるといふことは、こゝに改めて云ふ必要が無いかも知れない。

アベイ座は僅かに六百人を容れ得るだけの小さい劇場であり座附の俳優の類も亦極く尠い。けれども彼等の演ずるものは多く愛蘭人の書いた愛蘭劇である。**イエーツ**と云ひ、**グレゴリイ**夫人と云ひ、**シンヂ**と云ひ、此等の名作家は皆一身を郷土の藝術のために捧げた。その結果として現はれた幾多の作品は何れも郷土的の色彩に富んだものである。

アベイ座のレパトリーは主として、かういふ作品から成つて居る。

アベイ座の人々の演技は極めて眞摯で、藝術的である。彼等の郷土的且つ藝術的の香の高い藝風は、小さいアベイ座を世に知らしめたアベイ座の一團が始めて倫敦に現はれたのは千九百三年の事であつたといふ、そして年を終るに從つて彼等の藝術は、倫敦人中の一部の人々に極めて親しいものと成つて、多くの賞讃を受けるやうに成つた。

私は此の一團の演技を一昨年の六月倫敦のコート座で見る。昨年も戰爭中にも關はらず常例通りの興行が催されたといふ事である。

私の見た最初の愛蘭劇（アイルランドげき）**イエーツ**の「キヤスリン・ニ・フーリハン」であつた。此の幻想劇に就ては、其の晩のプログラムの端に記されたイエーツの言葉がよく説明をして居る。

『或る晩私は夢を見た。其の夢は眞に近い程判然としたものであつた。それには一つの百姓屋が浮んだ。そこは有福らしく灯は輝き且つ婚禮の話に樂かつた。此の家の中に不意に一人の長い着物を着た老婆が來た。多くの歌がそのために作られ、多くの人が其のために命を棄てたといふキヤスリン・ニ・フーリハン（Cathleen-ni-Houlihan）といふ此の老婆は全く愛蘭其の物に外ならなかつた。私は若し此の夢を小さい劇に書けたなら、外の人にも亦自分の見たやうに、自分の夢を見せることか出來るであらうと思つた。』

併し此の說明は事實此の芝居を見ない人には餘りに空漠として居て何の事か解らないであらう。そこで私はこゝに此の作の筋を簡單に書く事にする。

「キャスリン・ニ・フーリハン」は、時代が千七百九十八年といふ事に成つて居る。愛蘭の**キラ**に近い農家では**マイケル**といふ青年が、其の兩親や弟など、明日に迫つた婚禮の事を語つて居る。遠くに人々の叫ぶ聲が聞える。程近い**キラ**　佛蘭西人が上陸をしたのであつた。そこに一人の老婆が來る。此の老婆は名前を**キャスリン・ニ・フーリハン**と云ふ愛蘭の傳說的の女で、國に變事の起る際に、國内を步き廻るものとされて居る。ところが彼女は今**マイケル**の家に來た。そして他國人のために押領された家や地面を取り返さうと努めて居る事を語る。彼女は自分の仕事を援けるものを求める。

そしてそれは辛い仕事ではあるが、極めて立派な事だといふ。此の不思議な話に耳を傾けた**マイケル**は萬事を忘れ、己れの妻と成るべき娘をも棄てゝ、此の老婆の後を追つて何所ともなく出て行く。話といふのは此の樣なものである。

キャスリン・ニ・フーリハンにはアベイ座第一の女優**サラ・オールグツド**が扮した。此のやうな役を演ずる事に於ては、世界での名優と云つてもよいであらう。

黒い長い着物を着た不思議な老婆の話に**マイケル**は例へかたい魅力を感じて、自分に出來る仕事があればしやうと云ひ出す。此れに對して老婆は、自分を援けて呉れるのは辛い仕事だ。今日紅い頰を持つて居るものが、蒼い頰を持つやうに成るだらう。けれども自分のためにした事に就て、人々はよく酬ひられたと思ふだらうと答へる。そして彼女は猶語を續ける。

其の聲は次第に力を增し、高さを增す。やがて言葉は歌に變じる。彼等は永久に記憶され、永久に生き、永久に語られ、且つ永久に歌はれるであらうと歌は云ふ。

They shall be remembered for ever,
They shall be alive for ever,
They shall be speaking for ever,
The people shall hear them for ever.

こゝのところに現はした**サラ・オールグツド**の藝風は私の忘れ得ないものである。聲に力と高さとの增して、遂に歌と成るあたりは、比類ない出來であつた。彼女の聲の殊に音樂的な事は最もうれしい。

私は一昨晩藝術座の「清盛と佛御前」で須磨子の恐ろしい今樣を聞いてから、殊にあの**サラ・オールグツド**のやうな女優の演技が懷かしく成つた。

「キャスリン・ニ・フーリハン」は廣くないコート座の舞臺に適して居た。場面は極く通例のものであつた。窓から見える外の景はヌーボー式で描かれて居た。人々は皆愛蘭らしい着物を着て居た。**マイケル**兄弟はどちらも上衣無しで、白い折襟のシャツを用ゐて居た。老婆は黒い長い着物で同じ色の頭巾を被つて居た。其の髮は白く且つ短かく垂れて居た。**サラ・オールグツド**の事は既に云つたが、其の他の人々も皆忠實な理解ある藝を以て、此の**イエーツ**のファンタジーを特殊の光彩あるものとして居た。

「キャスリン・ニ・フーリハン」は開幕劇として、演ぜられ其のあとには**シンヂ**の「フレイボー・オヴ・ザ・ウエスタンウアールド」があつた。けれども私はこゝに自身の最も好んで居る**シンヂ**の作品の所演に就て書く事を、他日にゆづること、する。

猶此の**シンヂ**の作以外の愛蘭劇——**マレイ**の「モーリス・ハート」「金の愛」**グレゴリイ**夫人の「うわさ」「月の出」**マツカーシイ**の「押領者」等——の印象記も亦いつか機を見て書く事としたいと思つて居る。（三月廿八日）



ローシイ氏歌劇團の人々

（向つて右より）
後列　榎本東波　桑折辰男　黒田達人　町田金嶺
中列　竹内平吉　深海清高　服部靜雄　武田健　小智徹　久留崎政次郎　鈴木之夫
前列　清水靜子　無門テル子　井上増布　小林節子　原ノブ子　ローシ！　岡村フミ子　戸井田シノブ　清水金太郎

ローシイ氏の歌劇團

いづみ生

▲ローシイ氏が帝國劇場を去つて、新に歌劇團を設ける企圖があると云ふ事はもう誰でも知つてゐる話だがその興行法や公演場や方針に就いて知りたいとおもつて、麹町三年町のローシイ氏の家を訪ねた。葵橋を渡つて二丁程、坂の中腹の角に、その練習所と住宅があつて、ピアノの音が靜かに洩れてゐた。門を押して中へ入ると、右手がその稽古場らしく、左手が住宅であつた。犬小屋の中に白い犬が一匹、眠てゐるのかと思つたら、眼を開けておだやかにこつちを見てゐる。練習所の方をことこと叩くと、原のぶ子さんが顔を出した。やがて應接室へ通されて待つてゐると、竹内平吉氏が來て話しをする。

▲オペラハウスと云ふものは、世界のあらゆる國の、重なる都會には必ず設けられてゐるにも係らず、この日本の東京には一ツもありません。尤も歌劇と云ふものは、この國では、さう一般に觀客を得る事が出來ないやうな狀態にありますから、算盤を持つてかかつて

は、合はないので、隨つて興行主等には緣の遠いものでせう。ローシイさんなどの云ふのには、帝劇で歌劇部を廢した事は、その成績が惡いのではなくて、段々オペラの方の勢力が盛になるにつけて、舊劇の方の人達から嫉妬の眼を以つて見られ、それが原因して遂に帝劇とは絕緣しなければならなく爲つたのだ、との事ですが、それも一理ある事として、とにかく日本に於ける歌劇は全く幼稚なものたる事は事實ですし、觀客も在來の演劇に比べれば、少いのも無理はありません。

▲で、ローシイ氏は利害關係を離れて、この日本のオペラハウスの建設者の第一人者たらんとして、いよいよこの練習所を開くことにしたのです。そして同氏は、この劇團の支配人であり、專務取締役であり、會計係であり、用度係であり、舞臺監督であつて、あらゆる方面の責任者なのです。何から何まで同氏が一人でやつてゐるやうなわけで、ローシイ劇場と云つてもいい位なのです。

▲幹部は、ローシイ氏夫妻、清水金太郎氏、原のぶ子氏、それに私とそれだけで、あとは皆若い人達ばかりなのです。

▲興行法は勿論歐風にやります。連中をこさへて、無理に見物をこさえさせるやうなことはしません。……日本の能のやうに品のいいものにして、上流の生活をしてゐる人の娯樂機關にするやうにしたいとおもひます。ただ無暗に見物を呼ばうとするやうなことはしません。……それに後援者とか金主とか云ふものがありませんから、或意味で自由な興行をする事が出來ると思ひます。

▲金主や資本主に絕えず干渉せられて極めて窮屈なおもひをして開演をするのでないから、利益を目的とせずにあくまで歌劇の普及と云ふ事を目がけて進まうとおもつてゐます。さうして、をこまがしい話しですが、小さいながら極めて優れた歌劇團を組織いたしたいとおもつてゐます。

▲公演する場所は、最初溜池の演伎座を改築して、そこで開演する事にしてゐましたが、思はない所から迫害を受けて、そこはやめる事になつてしまひました。そして赤坂見附附近のある所を……はつきりした場所はまだ申しあげられませんが、とにかく或る建築を改築して、そこで今年九月一日に初演をすることにしてあります。

▲練習生は今の所二十人ばかりゐます。皆眞面目に努力をする若い人達なので、たのもしいと思つてゐます。成績も仲仲ようございます。……オーケストラに女をつかつて見やうとおもつてゐます。墺地利のウ井ンに女ばかりのオーケストラのある座がありますから女でも出來る事は女をつかつて見るつもりです希望の人があつたならばここの練習生とする事を喜んで致します。熱心と、素質と、趣味とを持つてゐる人ならば、誰でもっ

▲上演するのは、主として佛蘭西か伊太利のもので、日本人にふさはしい作にしやうと思ひます、獨逸のワグネル風の作は、いいには違ひないけれども六敷いので初めの内は演りません。一般の觀客に解のいいものから手をつけやうとおもひます、初めは割合に俗受のする易しいものから、次第に高級なのを演じるやうにしやうとおもひます。先オルフオ、次にクロシス、コルネビルレ、それからマダムアンゴー。ラ、マスコット。クリスピノー。ペテーデーク。レ、ブリガン。グランド、ロセス。ラ、ブツペー。レ、ミシー。ベレレーナ——それらを第一期のものとして、九月一日から來年の六月までに上演します、開場時間は七時半で十時四十五分に終るやうにします。ボ

ツクスが十二圓、一等が三圓、バルコンが二圓、三階が一圓。それにオプンバアをこさえて、酒を呑みながら見られるやうにしたいと思ひます。極家族的な、ちんまりした、そして品のいいオペラハウスにする心算なのであります。

▲座名は、オペラコミック、アカデミイと云ひます。

▲コーラスが二十四人、オーケストラが二十四人……これは主として女をつかひます。原さんがソプラノ、清水氏がバリドン、柳かね子君がコントラント、服部靜雄君がヴヽ、佐藤清光君がテノア……さうした所はほぼきまつてゐます。

▲とにかく初めての企なので、責任やら抱負やらが澤山あります。我々一同はその結果がすこしでもいいやうに願つて、專心努力してゐるのです。とにかく日本に於ける歌劇が何れの日かに何人かに依つて開拓され、普及されなければならないのですから、吾々の一團がその第一人者たるべく、どこまでも奮勵しやうと思つて居ります。

……竹内氏がさう云つて記者に話してゐるところへ、ローシイ氏が扉をあけて入つて來た破れるやうな聲で竹内氏と話してゐたが、やがて、その公演場の椅子を見せるから、と云つて、練習場の中へ記者を連れて行つた。清水氏原氏を取圍んで、十七八人の男女が、歌を唄つてゐた、その側に、黒いレザーを張つたしつかりした大きな椅子が一つ置てある。

「かけて御覽なさい」

と云はれて、それへ腰をおろして見たが……別に變つた考も浮んで來ない。ピアノの圍りの人達は繰返し〳〵歌を唄つてゐた。

ローシイ氏の歌劇團（いづみ生）

ピアノの夕

大田黒生

「ピアノの夕」は去年の暮に第一回を開いてから、既に五回催しました。場所はいつでも大森の私のところです。

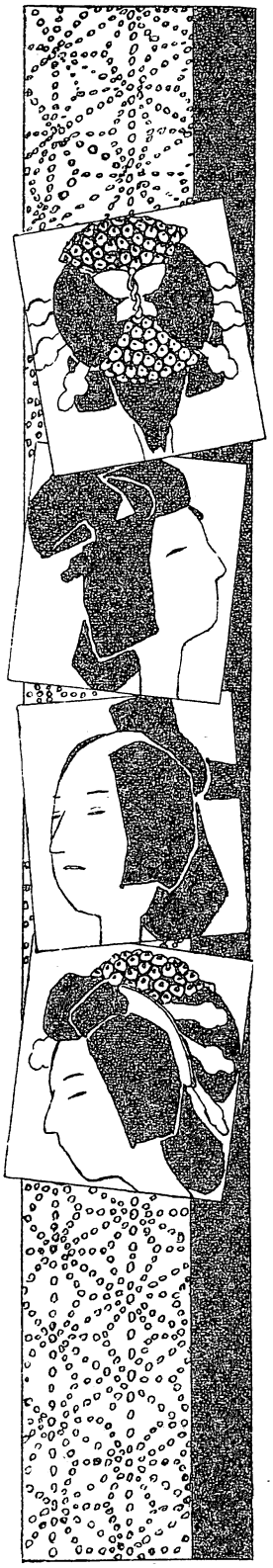
「ピアノの夕」は云ふ迄もなく普通のコンサートと打解けた家庭的の面白いものです。しかも私達は下手ながらも研究と云ふことは忘れない積りで居ます。かういふと自慢のやうに聞えるでせうが、此の「ピアノの夕」の曲目は恐らくは日本で最も進んだものだと信じて居ります。そして來會者も音樂に關して進んだ頭を持つて居る人が多いのです。

先月廿五日の晩は丁度第五回の夕でした。

演奏は八時頃に始まつて九時過に終りました。此の夕が第一回近代露國洋琴樂演奏に宛てられて居たので曲目は全部露西亞の作曲家の作品から成つて居ました。

私は今のところ今月の「夕」を廿九日の晩に開かうと思つて居ます。そして今度のを芬蘭の天才シベリウスの作品のみを演奏する「シベリウスの夕」としやうと思つて居ます。

私は此のやうな催がもつと多くの音樂好きの間に行はれるやうに成る事を希望して居ます。そして此の廿二日の晩あたりには白金の德川賴貞氏の邸でも此種の集りの第一回を開く事に成て居ます。かういふやうにして音樂がもつと普遍的な且、社交的なものと成れば其の發達も少しは早いであらうと思はれます。（四月一日）



歌舞伎座が株式になるまで

（歌舞伎座今昔物語の三）

田村成義

久しぶりの團菊

これまでの歌舞伎座の興行法では、團十郎でも、菊五郎でも二度續けると失敗に終る事は前にいつた通りである。そこで千葉は久しぶりで團十郎、菊五郎の顔合せをしたいと思ひついて、二人を纏める事を小生に依頼した。

そこで小生は双方を說いて、愈々その年、卽ち明治二十五年の十月『河内山』以來三年振りで、いや『河内山』の時は團十郎が病氣になつたから、本統の意味でいふと、開場以來久振の團菊顔合せを實現する事となつた。

狂言は櫻痴居士の新作『關原譽凱歌』卽ち伊吹落の書下しに、中幕が『皿屋敷』淨瑠璃が上が『素襖落し』下が『釣狐』の三つ面であつた。これは何しろ久しぶりの團菊顔合せといふので非常な大入であつた。

伯圓物と『鏡獅子』の書下し

翌二十六年の一月は例に依つて小生が菊五郎だけで開けた。この時は圓朝物が續いた後であつたから、伯圓の講談から探して、『安政三組盃』を選んで、河竹新七に脚色ませた。小向井の梅屋敷の場が好評で、この時も大入であつた。切の菊五郎の『奴凧』の宙乘りも好評であつた。

後に三月十日初日で二度目の團菊の顔合せ、一番目が團十郎の義時、菊五郎の公暁、福助（今の歌右衞門）の實朝で、櫻痴居士の新作『東鑑拜賀卷』、中幕が昔からある『枕獅

子』の傾城を、品好くお小姓に懐痴居士が書直した『春興鏡獅子』二番目が菊五郎の『黒手組の助六』に團十郎が鳥居新左衛門を勤めた。

この時菊五郎が團十郎の『鏡獅子』を評して、堀越は成る可く芝居でないやうに、只の女が踊るやうに〳〵と骨を折つてゐるから素人が見ては少しも面白くない。無駄な處へ苦勞したものだといつた事があつた。然るに團十郎が勤めてから二十餘年、その評をした五代目菊五郎の子六代目菊五郎がその『鏡獅子』を二度も勤めて好評を博してゐるのも一奇といふべきである。

團菊左の顔合せ

歌舞伎座の重役甲子屋萬造は、兎角菊五郎を嫌つて、爲に小生に迄反對であつた。そこで菊五郎を排斥して、久しぶりに團十郎、左團次で開けやうといふ議を起して、千葉を說いた。千葉もその氣になつて、小生に向つてこの次は菊五郎無しにしてくれと話した。小生がこの事を菊五郎に告けると、菊五郎も面白くないから、小生と二人相談して、それから九藏（後の團藏）と久しぶりに顔を合せて、大に歌舞伎座の團十郎、左團次に對抗しやうといふ事になつた。そこでその事を九藏にも交涉して、小屋は昨年新築したばかりの二長町の市村座といふ事で、談はどし〳〵進んで行つた。

丁度この相談の最中の事であつた。小生等の友人早川龍介君が佛蘭西へ洋行するに就いて、三月の二十八日、その送別の宴を三十間堀のきつねに開いて、菊五郎も小生もそこに遊んでゐた。すると火事があるといふ事であつたが、淺草見當といふので、別段氣にも止めずにゐた。然るに暫く經つと、その火事は神田和泉町から出て、昨年新築したばかりの、これから吾々の大に活動しやうといふ、市村座が燒失したといふ報が來た。こゝに於て吾々は大に驚いた。やはりこの相談に預つてゐる高田梅吉（明治座茶屋花屋主人）の如きは仕方がないから横濱でもこしらへやうなど、いひ出した程であつた。

然し小生は別に見る處があつたから、翌朝自身に千葉を訪ひ、菊五郎をこれから生涯使ふつもりか使はないつもりかと聞いてみた。千葉の答はもとより一時の事で、生涯使はないつもりではないといふ事であつた。そこで小生は、そんなら自分に新富座を貸してくれ、菊五郎、九藏で開けたいからと申込んだ。千葉は尠からず弱つた。折角歌舞伎座で團十郎、左團次といふ珍らしい顔合せで開けやうと思つてゐるのに、つい目と鼻の先の新富座で、菊五郎、九藏といふ又珍らしい顔合せで開けられては大變な打擊である。そこで千葉は小生に何とかなるまいかと妥協を申込んだ。それから種々相談の末、それではいつその事歌舞伎座の團菊左で開けては如何だらうといふ事になつた。で、初めに交涉した九藏は横濱へ行く事にし、愈〻開場式以來の團菊左を纏めて狂言は一番目『十二時會稽會我』中幕『勸進帳』二番目『髮結の新三』で、五月六日に初日を出した。處が初日から賣切を出すといふ景氣で、この興行中座の裏の辨當屋から火事をして、一日芝居を休まなければならなかつたにも拘らず、非常な大入續きで、實に三十八日間打通した。その純益實に二萬圓、小生はこの芝居を纏めるに就いて、空歩を二歩だけ貰ふ事になつてゐたので、打

上げ後四千圓貰つた。然し小生は思ふ處あつて、その四千圓をそつくり千葉に預けてしまつた。

團菊左の大失敗

大入で三十八日間打通したこの團菊左の顔合せは芝居の頂上かと思つた程であつた。扨てその次には小生が增長して、引續いて團菊左の顔合せをする事になつた。前には小生は二歩の空歩を貰つたばかりであつたが、この次は、これまで盆の芝居に團十郎の出た事のないのを引張り出すのではあるし、前の大入の餘炎の醒めない中ではあるし、大丈夫成功を見越して、取敢へず前に千葉に預けた四千圓を提供して、千葉と半分〴〵で直ぐに七月興行を開けた。狂言は圓朝の『安中草三』を地内の河竹に書かせたものに『瓦罐寺』のだんまり、『襤褸錦』の大安寺堤で、この年三月歿した坂東家橘の子竹松を市村家橘（今の市村羽左衛門）と改めさせて、新七を勤めさせる事にした。

處がこの計畫見事に外れて、前とは反對に非常な不入で、終に十七日の日殘りで舞ひ納めるの止むなきに至り、千葉へ預けた四千圓が無くなつた上に、千七百餘圓も出さなくてはならなくなる。日殘りの貸しは千葉の持といふ事にして、この興行大失敗に終つた。

さてこの失敗の原因を徐に考へてみると、第一に小生が增長して己惚れたからである。これまで圓朝の物ならいつでも當つたから、『安中草三』もきつと當るだらう位で、脚本に研究が足らなかつた。次に團十郎の進藤治郎左衛門が半活歷で頗る淋しいものだつた。斯ういふやうに見物に氣に入らない原因がいくらもあつたのである。何でも彼でも團菊左と役者の顔ばかり合せた處で、見物は呼べるわけのものではないといふ事で今更ながら感ぜられた。

淘宮家の團十郎評

この次は九月、團十郎ばかりで開けた。狂言は『大久保彦左衛門』『日向島』『八笑人』といふのであつたが、この時或る淘宮の先生の所へ茶屋からこの狂言の番附を持つて行くと、その先生がこれを見て、團十郎は淘宮術で自分の弟子でもあるし、贔負だが、この芝居は入りませんねといつた。それは何故かといふと、團十郎が芝居を忘れて自分といふ事ばかり考へてゐるから駄目だ。我子の愛着心に囚はれて、福助といふ立派な人氣役者がありながら、娘の實子にやらせるやうではこの芝居は必ず入らないといつた。果せるかな、この芝居はこの先生の豫言の如く、甚しく不入であつた。

この事を聞いて小生の思ふには、子役のある芝居で、無暗にその力を測らずして、我子に大きな役をつけるといふ事は惡い事である。戒めなければならないと思つた。

團十郎の掛物

その年の十一月、明治座の新築落成して、その開場式を行ふ事になつた。就いては團十郎は半日出る事になつて、『扇屋熊谷』を勤め、それから歌舞伎座へ來る事になつた。爲に歌舞伎座の十一月の狂言の立てかたは、勢見どりのやうにしなければならなかつた。則ち『小栗』『矢口』『重太郎内』『鳴門』『眉間割』『新七つ面』といふので、小栗の波七に猿之助（今の段四郎）頓兵衛が片市、お船は久しぶりに大阪から歸つて來た訥升（今の宗十郎）重太郎が新藏、お弓が秀調で、團十郎は眉間割の光秀と『新七つ面』を踊つたきり

である。一體菊五郎が一番目で活動したり、團十郎をしまひだけに使つたりする芝居に成つた例がない。果してこの芝居は成なかつた。僅に十八日しか打てなかつた。

一方明治座は開場式だけに大入だつた。

明治座と競爭

翌二十七年の一月は、例に依つて小生が借受けて、菊五郎一座で開けた。一番目が『雪駄直しの長五郎』中幕が『八重垣姫』二番目が『明烏』であつた。この時明治座では其水の新作で『伊達模樣好織分』といふ伊達の實錄の書替へ物で、歌舞伎座と競爭の有樣であつたが、歌舞伎座の方が勝であつた。

逆樣の番附

その次は三月である。千葉が小生を呼びによこしたので行つて見ると、今度は私が狂言を考へたが一つ譽めて貰ひ度いといふ。如何いふ狂言かといふと、一番目が菊五郎の惣太に福助の松若で『櫻餅』中幕が團十郎の八重桐に菊五郎の源七で『嫗山姥』二番目が團十郎が大判事と鱶七とで『妹背山』といふのである。そこで小生が、成程どれ一つ非難を打つべき狂言はない。然しながらこの番附は逆樣に張つて見れば全部好いが、斯ういふ順ではどれも皆駄目な狂言になりますといつた。然しこの時も團十郎は明治座との掛持で明治座の方は一番目が『清正誠忠錄』の書下しで、團十郎はそれを勤めてから來るのだから、どうしても『妹背山』を一番目に廻すわけには行かなかつたのである。狂言の竝べかたが逆であるばかりでなく、前にいつた通り、菊五郎が先へ活動して、團十郎が後で活動するといふのだから、矢張成績は小生の豫言の通り惡かつた。

この時明治座の毒饅頭で。「梅が枯るれば」の童謠は菊五郎の梅幸を呪つた唄だといふ噂があつた。

日清戰爭と歌舞伎座

この頃朝鮮の東學黨事件から、日清の國交が漸く危險になつて、世間は何となく騷がしく、芝居などはだん〳〵景氣が惡くなるばかりであつた。

五月八日團十郎ばかりで開けた芝居は『日蓮記』に『琵琶の景清』『五月人形』といふのであつたが、團十郎の日蓮は妙に政治家めいて不評であつて、當時日蓮上人の開帳があつて、歌舞伎座で小憩をするなどと景氣をつけたがこの芝居は終に非常な不入であつた。

こんな事で千葉も厭氣がさして、當分芝居はやらないといひ出した。すると大札の鈴木幸平が自分一人で、七月十五日初日で『玉汗勉强競』といふ大名題で、若手ばかりで見取りの狂言を竝べて開場したが、初めから非常な不入であつた上に、七月十九日に終に國交斷絶して日清戰爭は開始し、市内の交番には召集令が張出されるといふやうな騷ぎで、終に僅にこの芝居八日限りで打上げてしまはなければならなかつた。

この戰爭の爲に七月から十一月まで芝居は休んでしまつたが、さう〳〵も休んではゐられないので、十一月團十郎菊五郎で開ける運びになつた。狂言は櫻痴居士の書いた『日清

戰爭』と切が『吃又』で、團十郎が大鳥公使に扮して、片市の袁世凱と談判をしたり、菊五郎の原田重吉が立武門を乘越えたり、盛に時好に投じやうとしたが、餘り面白くなく、大損であつた。

爲に千葉は愈々厭氣がさして來た。

千葉の違約

その翌年二十八年の一月は、又例年の通り小生が、菊五郎一座で『安中草三』以來遠のいてゐた圓朝物の『粟田口』をやる事にして、歌舞伎座を借り受ける約束をした。當時の歌舞伎座は今日の如く松の内に開場するやうな事はなく、いつも十日過ぎに開けるのであるから、元日より十二日迄、稽古がてらこの『粟田口』を横濱へ持つて行つて、好く練つた上で歌舞伎座へ持込む事にした。すると例の小生と菊五郎とには兎角反對の甲子屋萬造は、新年早々横濱の古物をやる事もあるまいといふので、千葉に焚きつけた。元々千葉も厭氣がさしてゐる處だから、萬造のいふ處を尤として戰爭中でもあるからといふ口實で、前の約束を取消して正月は休むといつてよこした。

そこで小生は俄に守田に相談して、當時新富座の座主をしてゐた加内長三郎に談をしてこの座で開ける事にした。

豫定の如く横濱を十二日間打つて歸つて來て、新富座でこの『粟田口』と『鎌倉三代記』で開けると、非常に大入であつた。歌舞伎座の千葉側では古物ではといふので一旦約束をしたるに拘らず斷つたのだから、この成功を見ては、鳥渡小生に對して面目ない人になつた。

千葉と小生と變な仲になつたので、その次には甲子屋萬造の智惠で久しぶりで團十郎と九藏（後の團藏）との顔合せをしやうといふので、伊藤專造を使つてこの顔合せを纏め、狂言は『先代萩』で九藏が仁木、團十郎が政岡と男之助、中幕は櫻痴居士の書いた『向井將監』で二月二十八日初日で開けた處、これは久しぶりの顔合せが利いて非常な大入であつた。

川上の出演

この頃漸く勢のついて來た川上音二郎の壯士芝居は、日清戰爭劇で愈々景氣づいて來た豫々川上は如何かして歌舞伎座の舞臺を踏みたい望があつたので、山下淸兵衞の手から『日淸戰爭』を歌舞伎座でやりたいといふ事を千葉へ持込ませた。その頃川上には關根默庵がついてゐて、山下と關根が骨を折つた末、兎に角千葉が川上に逢はうといふ事になつた。

烏森の湖月で千葉、山下、關根、川上が逢ふ事になると、川上は木綿物を着てゐるといふ風采で、千葉との談も固い事ばかりいひ、用談が濟んでから藝者でも呼ばうといふ事になると、川上はそんな事は無駄ですといつてどん〳〵先へ歸つてしまつた。後で千葉がいふには川上は私に信用を得やうとして木綿物を着て來たり、固い事ばかりいつたりしてゐるが、そんなに信用が得たければ、今日の勘定でもして行けば好いになど、冗談をいつてゐた。

兎に角この會見で談は纏つて、五月十四日初日で『日淸戰爭』劇を開けた。これは團菊の『日淸戰爭』より却て時好に投じて、非常

な大入であつた。

その次には七月十四日初日で、やはり川上一座で、司法省出版の『誤判錄』を脚色したものを演じたが、これは失敗であつた。

舞臺張替の要求

正月の『粟田口』以來千葉と小生とは變な間柄になつてゐたが、この頃に至つて又千葉の方から接近して來た、再び小生は相談對手になつて、十一月は團十郎で開ける事になつた。

すると團十郎は、出ない事はないが、壯士役者の踏んだ舞臺をその儘踏むのは厭だから、どうか舞臺を張り替へて貰ひ度いなどゝいひ出した。まだその時分はそんなに舞臺も痛んではゐないのに、張り替へるなどは大變な騷ぎなので、有繋に千葉も弱つて、削りでもしたら如何だらうなどゝいつてゐたが、結局灰汁洗か何かして團十郎の方を治めてしまつた。

この時の狂言は一番目が『大阪陣』中幕は『暫』二番目が遠眼鏡に岡崎で『伊賀越』であつた。久しぶりの十八番の荒事が利いて、この興行は大入であつた。

株式組織の萌芽

千葉がだん〳〵歌舞伎座に厭氣がさして來てゐる事は前にいつた通りである。この興行中に千葉が小生に向つていふには、どうも歌舞伎座を持てゐると損をする。私が生きてゐる中はまだ好いが、若し死んだ後まで持つてゐたら、私の家の財産は歌舞伎座の爲にめちや〳〵になつてしまふ。それ故常に廢業屆へ印を捺したのを持つてゐて、何時でも私が死んだら廢業してしまふやうに家族の者にいひつけて置いてある位である。就いては成るべく今の中に賣つてしまひたいと思ふが、適當な買人はなからうかとの事である。そこで小生が、適當な買人といつた處で、斯ういふ大きなものであるから、さう容易く手を出さうといふものもあるまいと思ふ。それよりはどうです、粉にして賣つたら賣れるでせうといふと、千葉が粉にするとは如何するのかといふから、卽ち株式にする事にしたら必ず賣れ口が早いでせうといふと、千葉も成程と頷いた。

そこで價格は地所なしで五萬圓、小生へ報酬として四千圓出さう。若し地所附ならば十萬圓、それで小生の報酬はやはり四千圓だといふ。

それから買ひさうな人はあるかといふから、後藤象次郎伯の夫人の弟の井上竹次郎といふ人がある。この人ならば多分話に乘るだらうといふと、千葉は何分賴むといふので、小生は早速井上の番頭木村松次郎を呼んで、この談を井上に持込ませた。間もなく新橋の某待合で小生と井上と會見する事になつて、尙詳細にこの事を談すと、井上も大に氣が乘つて、談は大分順調に進んで行つた。

一方小生が考へるには、この談を櫻痴居士にして置かないと、必ず打毀すに違ひないから、こちらで抱込む必要がある。そこで小生は櫻痴居士に向つて、今度斯ういふ談が持上つた。就いてはあなたの所得となる大向の上りは元の通り本領安堵といふ事にして、談を進めたいと思ふが如何だらうと相談すると、櫻痴居士も千葉のやり口に慊らなく思つてゐた處であるから、大に乘氣になつて株式說に贊成した。

こゝに於て小生は歌舞伎座を株式組織にする事に就いて極力骨を折る事になつた。



信州の旅芝居研究

栗島狹衣

▲信州へ來て芝居をしました、信州といふ國は日本中でも大國の旗頭で、旅芝居を組立てる點からいふと、特殊の研究を要する土地でせう、信州廻りといふ旅役者の群は、大抵東京のあぶれ者で、新舊兩派の團體が十五六組も入込んでゐるやうです、歌舞伎の方には概してヨタ物か多いので、中村壽三郎だの市川福圓だの中村梅女だのといふ正體の知れ無いのがいくらもあります、此中でも越後から來る三升屋金六だの、飯田から出た中村信濃だの、狐憑きの澤村源之丞だの、斯ういつた連中のは、相當の團體として歡迎されてゐるので、土地の風は歌舞伎七分の新派三分です、新派では古顏の澁井アソブヤ鹽井伊輔、藤田芳美や菊田謙一、此等の座は比較的大座として活動してゐます、此中でも脚本に力を入れてゐるのが藤田で、『茶を作る家』なんか早速に舞臺へかけてゐた事もある樣です、背景や電氣などに全力を注ぐのは菊田で、彼は自分は經營者で舞臺へは立たず、舊派の中村某を座頭に据ゑて、新舊兩面劇といふ仕組みを取つてゐます兎も角他國の樣に、只此國を通過する劇團許りでなく、所謂土着の團體が、北から南へ西から東へと、渦を作つて歩いてゐるのは信州の特色でせう、而して信州の御客樣は工場の糸取り女より外は無いので、お蠶芝居は卽ち信州の芝居であります、

▲信州の人は生糸を賣つて米を買つて喰てゐます、米を作る田よりも桑を植ゑる畑を大事にしますから、米の値段が安いから百姓の懐中が悪いなんといふ、普通の旅廻り勘定は、此處へ來ると算當が違ひます、第一百姓なんかを當にしたら大間違ひで、始終生糸の値段さへ注意して、糸取り時期の研究が、卽ち芝居時期の研究であるといふ事をさへ忘れなかつたら、金儲けは自在です。

▲先づ壹月は女工が前年貯めた金を費ひ切る時ですから、これは書入れです、それから二月は舊暦の土地がありますから、新の正月をやる土地から、次第に舊正月の土地へ打込むと景氣は持續されるのです、多く北信地方卽ち長野から東北の土地で、上高井郡の須坂町から、下高井郡の中野町、下水内郡の飯山町などへ向つて行くのだそうです、三月の中旬から四月へかけてぞく〳〵霜枯れて、春蠶時期の仕込みにかゝるから、女工などは遊ぶ餘裕が無くなります、五月は無論ダメ、六月も同樣、七月には休み出來るから、養蠶全盛地の諏訪方面もよくなつて來ます、八月九月には秋蠶も全く片付くから、九月の中旬から十月、十一月が信州第一の黄金時代、生糸商賣の信州人の財布に、タンマリした金が小躍り

してゐる時です、それで十二月になると正月を前にしてゐますから又ダメになる、こんな工合で信州の芝居時期は、全く生糸の期間から其盛衰を繰り出してゐるのです、だから土地馴れた役者の群は、此時期をねらつて、仕事をして歩く、而して霜枯れ時になると、北は越後路に、東は上州路へ、南は甲州へと逃げ出す、土地不案内の藤四郎が、こんな事を知らないで、久しく土地に芝居が無いからよからう』なんて乗込んで行きますと、土地の人間は外を向いて相手にならない、自惚れて手打ちを掛けると悉く失敗、先づ吾々の仕事は斯ういふヘマで十中の八九を失敗に終つたのです、素より士族の商法といふ形ちで、

▲信州は日本の高原地で、大抵の處が海抜二千尺以上の土地ですから、雪が降らないでも寒帯氣分が漲つてゐるし、五月の中旬にならないと花らしい物が咲きません、其時分まで炬燵へもぐり込んで、お茶ばかりガブ〳〵飲んでゐます、一體が不粧になりますから、雨だ雪だといつたら見物は斷じて來ません、天氣の晩でも闇よりも月夜を喜ぶといつた風て見物が可成贅澤に出來てゐます、だから月の無い時の興行よりも、月のある時の興行が成功するといつた風です、殊に此國の中部に位する更級や埴科方面では、月夜になると桑畑の間をゾロ〳〵と人が出て來る、月の無い時は在所が動か無いとあきらめて、此邊へ來る芝居はトヤをするといふ位です、それに此邊は信州の町離がゐる、ツマリ穢多村があるのである、そこで闇夜にあるく者は町離だとけなす、何うでもお月樣を最負の後楯にしなければ、乞食芝居でも幕は明かないのです、

△信州は山國で、平かな處が極めて少いが、その中でも四箇處の平原地があります、曰く松本平、曰く伊那平、曰く善光寺平、曰く佐久平である、芝居の一番了解する土地が、伊那郡の飯田で、伊那平の一つに所屬してゐます、その次が松平市で松本平の中心、その次が佐久で佐久平の平野にある諸部落、一番位倒れが善光寺平の中心たる長野市です、飯田は名古屋文明の系統を引いてゐます、飯田は文明の利器たる鐵道の侵入さへ許さない難嶮の土地で、どう考へても山の中の一王國でありますが、一度受けた名古屋文明を、改革もしなければ逃竄もさせません、純の純な飯田氣分は今も昔も變らないといひます、そこで飯田では芝居の狂言が十日も持つて、値段が安くては馬鹿にするのに、長野では畢竟安ければ無錢でもいゝ、位、狂言なんぞは二日も持てば最上であります、松本は眼が高いと自慢をしてゐましたが、それも近來は低級へ足を踏み外して、値段は勿論安いが結構、それでも狂言は三日位は持つ、佐久方面は無論田舍ですから、こんな割合には比較も取れませんが、田舍の割には目が高いといふ評判です、

▲田舍の劇場に碌なのは無いが、劇場は松本の松本座が信州第一の建築、それに次いでは長野の千歳座、飯田の曙座と若松座とがあるが、曙座の方が上等で東京の大名題は此方へ乘込む、往年西から鷹次郎も來たし、東から五代目菊五郎も來たと、土地の人は自慢にしてゐる、此外の小部落へ入つて行きますと、木挽小屋だの米倉だの、蠶の乾燥室だのを其儘の舞臺があります、先年宗十郎が義理で乘込んだ辰野の辰野座、あれは米倉へ舞臺と花道とをつけた丈けの事で、玄冶店を園遊會用の紅白の段幕一つでやつたといふ珍談もあります、それに引換へて岡谷の岡谷座は、小屋主が柳盛の大道具師であつた丈け、萬事を江戸前に揃へて、舞臺でも道具でも小綺麗に出來上つてゐますが、小屋主は信州第一の『理

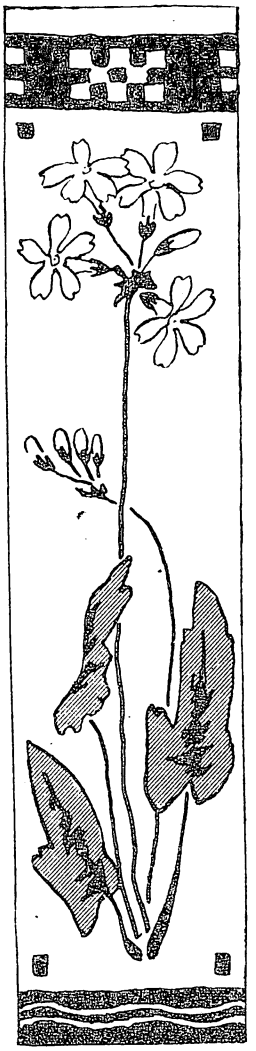
想劇場』だつて威張つてゐますが此處は諏訪郡中心の製糸場で、本當に工女のヘソクリを絞る處ですが、先づ七月と九月十月十一月といつた樣な時に來れば、旅芝居は屹度ぬけて行きます、殊に岡谷は不思議な位見物がおとなしくて見る目が高いには一驚を喫します、これは研究したら、東京仕込みの紳士が、生糸工場に多くゐるせいだといひますが、ハツキリしません上諏訪の都座も東京の大名題を上けますが、土地は思つたよりも痩せてゐます、それよりも北信の須坂の須坂劇場、吉右衛門で開場した小屋だが、土地もいゝし小屋もいゝ、此處の樂屋の風呂はラヂーム鑛泉だと、風呂番のお爺が自慢してゐました、

△信州は芝居の雜用が悪いと旅役者がこぼします、米のよくないせいもありますが、魚の安いのが無いのと、其供給が越後まはりですから、頗る大味なためでせう、伊那方面の御馳走には稻子の佃煮と蜂の子の三杯酢とをたべさせます、信州一帶にゐる雜巾の樣な面付きをした藝者といふものは、丁度稻子の佃煮や蜂の子の三杯酢と調和さるもので、恐らく町と名の付く處には、此等の魔性の者は跋扈してゐます、ゐない處は達磨屋の領土で、公娼のゐる處は極めて少い、長野の鶴賀新地や松本の横田新地は立派な遊廓、其外飯田にも上田にも坂城（埴科郡上田附近）、諏訪、鹽尻それから下高井郡の山中で、澁温泉へ行く途中の山間に湯田中の遊廓があります、公娼所在地よりも私娼所在地の方が芝居は繁昌します、篠の井なぞは、全く達磨屋のために新開の町となつたのですが、芝居と達磨屋との規約があつて、芝居歸りの若衆を白首がつかまへる、其處で十一時半を過ぎるカブリの芝居は、忽ち達磨屋の嚴命を蒙つて、開演中止を申込まれる事さへあります、信州中で一番面喰つたのは此新開の町でありました、

▲吾々はそう思ひます、都會人に見せて藝術心の向上を圖る芝居も必要ですが、田舍者に見せて自然に藝術臭い匂を嗅せる芝居も必要だろうと、けれども一足飛びやあ何にもなりません、藝術座の須磨子さんが來ても上山艸人君が來ても、新藝術の憧憬は百姓や糸取り女には出來ない、殊に刺戟性の强烈な藝術で、大分メンケンしてゐた見物が多い、それは百姓や糸取り女ではない、松本や長野にゐる相當の人間です、もつと桁を下げても田舍者趣味を向上させる芝居はある筈です、處で東京の大名題がやる出芝居式のでなく、所謂旅芝居の劇材改良が、芝居道といふ物の上から必要な研究題目となりますから一概に旅を廻るのは無意義な劇的事業ぢやないといふ事になります、すると日本全國中で特殊な土地の研究が無駄でないといふ事にもなりませう、旅芝居に於ける信州研究は、此意味から吾々には興味を以て從事する事が出來ました日本中で興行地の一番多くある國は、信州より外には無いと思ひます、西では播州めぐり土佐廻り、それに越後廻りなども、興行地多數の部類ですが、信州ほどには行きますまい信州の十六郡中で、一郡に二箇處乃至五箇處の小屋があります、而してそれが生糸時期につれて一時に興行全盛り景氣を出す、それは丁度福岡縣の興行地が、石炭の相場で左右されるのと、新潟縣のて石油で動くのと同例だが、生絲の方が相場が荒いから、結果も從つて荒くなりますそんなら、お前達は儲けたかいと聞かれたら、額を叩いて引込む丈けです『なあに今度は儲けますよ』と、生涯こんな事をいひつゞけて、吾々はお目出度くなつて仕舞ふんでせう。

帝劇市村十文字

青柳有美



「帝劇と市村との劇評を……」との御註文に「是は又文筆勞働の商賣冥利、誠に以て難有き仕合せ……」と、早速安々御受けはしたものゝ、愈々芝居を見物してから二三日措て、筆を執らうとして試れば、さて〳〵劇評と申すものは六ケしいものだと、今更の如くに氣がつく。竹の庵の翁さんが、何の役者も〳〵一列一切に「よし〳〵」で押し通されたり、切りに通を探り廻したがる御仁ですら、何んの彼のと故るい芝居の註釋立てばかりして肝腎の芝居の段になれば、チヨイ〳〵刷毛で撫でたぐらいで終結にしてしまはれるなどのも、あゝ〳〵無理からぬ事と漸くにして覺つたなどは、血の循環の遲いと申すものだ。西洋の新聞雜誌にある劇評とても、大抵は我が邦のものと似たり寄つたり……劇評難は、西も東も同じと見へる。そんな事では文筆勞働者の名折になるぞと若しも識者に嘲り罵られたら、些か商賣の面目を全ふする爲め、廣十文字に掻つさいて御覽に入れる覺悟での「帝劇市村十文字」……これでも帝劇と市村との四月狂言を縱橫無盡に批評した劇評の積りなんだから、大膽も此處まで來れば、滑稽になる。但し、折角見ても、何んとも感じなかつた處は何とも申上げませぬ。思へば鬼太郎君は劇評家の第一人にて候也。

帝國劇場

梅幸の政岡

これが、男優の女形ばかり見てゐた頃ならば、一番目の「先代萩」で、梅幸の政岡などを拜見に及べば、難有くつて〳〵堪らず、それでなくとも、仕合せと外國人に生れでもして、あの政岡を見たものなら「あれでも男なんですか」と大に感歎して樂屋に罷出で、梅幸に握手でも求むべきところなれど、不幸にして僕、日本人に生れ、殊には近頃女優大流行とあつて女優劇と申すものを見せられる爲め「あれでも男なんですか」なぞとの異人めいた感服が能きず「あれでも女なんですか」と云ひたくなつたのも是非無き時勢であらう。西洋から歸朝つて來られる劇通先生たちが、いろ〳〵と女形の缺點を擧げて、是非共女の役は女優を以てせざるべからずと主張されるのも、畢竟は、永い間女優にのみ馴れて來た眼で、久方振に梅幸の政岡の如きものを觀れば、是れと彼れとを比較し、女形の缺點が忽ち眼につくのに因るものだらうと今度此度つく〴〵感じ

申した。あの政岡の格構は、何う考え直しても、藁人形に襤を衣せた形である。それに、源平の鶴千代が例の菓子折に手を觸れやうとするのを遮り「若し毒……」と曰つて一寸、思入をする處で、頸を三度ばかり、繰返して左右に拈つたところは、アマクなつた螺旋を揉み込む時のやうに見へて、梅幸新型十八番のうち、スクルウ型とでも申すものだらうかと思はれた。それから、若君に差上ぐる御飯の米を磨く時の運びが又頗るの珍乙も同じ十八番のうち櫓漕式とでも名づくべきものだらう。又「まだ〳〵千松などの……」といふ處では、一寸くり顎をシャクつた丈けで、鶴千代にお聞かせ申すのやら、千松に聞かせるのやら、政岡御自身すら見當がつかなかつたらしく見へたが、大方、鶴千代に聞かせ申しながら、千松をも諷する意を寓した老巧な技だらう。

幸四郎の仁木

世の中は萬事塞翁の馬とやら。何が仕合せになつて、何が不幸になるものか、其邊全く以て解らぬ次第と申したいのも餘の儀に非ず、帝劇に花道の無いのは、下萬民の久しく是れまで遺憾とせるところなりしに、その遺憾が塞翁の馬で、幸四郎の仁木は花道の無いのに却てウンと引立てられたからとの事だ。園十郎の仁木は、スッポンからセリ上つて引つ込む前に、一度幕外から舞臺に向つて二三歩あゆみ、そこで又一ト芝居して見せたものだといふが、正面棧敷の西の方へ片寄つたあたりからは、たゞ後背を拜まされる丈けで、何が何やら薩つ張と、解らなかつたものである。ところが、帝劇には幸なる哉花道が無い。舞臺の下手からセリ上つて愈よ幕外になれば、同じ團十郎張でも、横に上手に向いて二三歩あゆみ、それから又退いて「ウフフ……」と大芝居がやれる、これで、仁木にも新型の引込みが出來、幸四郎の藝振りも、隅から隅までズウィツと、あがつて見られたのだから、花道の無いのが却て幸四郎の仕合せになつたと申すものだ。それから、双傷の場でも、あの假半花道のカーテンをカラ〳〵と、妙な音をさして開けると、平常ならば、西の特等席に充てられる處が、黒幕を壁代にした小さな喑室になつてるので、その喑黒の中、上半身白の着附で襷十字に綾成し、ピカリと光る短刀を振り翳して仁木の仁王立になつてる風趣は、花道のある歌舞伎座などで七度生れ變つて來ても迚ても見られぬ圖とあつて、爲に又幸四郎の藝振りが上ること二三枚、世の中は何が仕合せになるやら、全く解らぬとは此處の消息だ。たゞ、問注所の場で、呼びあけに應じて舞臺上手より登場つて來た時の仁木は、如何に良心の呵責が烈しいからとて、既に鉛の熱湯でも背を割つて注ぎ込まれ、酷い拷問の兩三回も受けた後の姿らしく、然も其れが、大奸は忠に似たりを粧ふ爲めの僞善とも見へず、全く大膽不敵の趣に乏しく、その癖、宗十郎の勝元が松助の外記に「それなる一札之に持て」との、地獄極樂の界が這個一つで決しやうといふ大事の證據調べに取りかゝらんとする時の聲を聽きながら、平然として瞼下の筋肉一つピクとも動かさぬなど、餘りに矛盾せる二重人格らしいものを見せたので、爲に幸四郎その藝振りを、今度だけは落すこと二三枚で無からうかと思はしめた。

氣分劇花水橋

近頃流行の芝居に氣分劇と申すものがある。氣分劇とは何んでも、明瞭せぬ芝居のことだとやらで、舞臺は薄暗くてモヤ〳〵するばかり、臺白も何を言ふてるのやら何の意味やら是又モゴ〳〵するばかりで明瞭せず、それや

これやで朦朧の間に何となく觀客をして氣分を味はしむる處が、氣分劇の上々なるものとあつて、三越と共に流行には遲れを取らぬ帝劇は、時々松葉先生の氣分劇やら其他、諸先生の氣分劇を演けるが、「今度の先代萩」の序幕「花水橋」の場なども亦氣分劇であるらしく、青い光線をウンと使ひ、舞臺をボンヤリさして明瞭り見せず、宗十郎の賴兼は、フニヤ〳〵……モニヤ〳〵……」と水飴を伸ばして詰めたやうな臺白を言ひ幸四郎の絹川には力士の心もちが些つとも顯れて來ず、舞臺も役者も飽くまで朦朧を尊び、殊に初日には開幕前、舞臺面を寫眞に撮るため、マグネシユウムを燃やしたので、その餘煙濛々として場内に漲り、一層その日の此の場は氣分劇の氣分劇らしき處を發揮してモヤ〳〵したが、味はつた氣分は鼻から吸ひ込まれたマグネシユウム氣分と申すものであつた。たゞ、宗十郎の賴兼が「我が行く先は？」と阿の息で問ひかけたら、假令その間に一寸とした立廻りが介在るにしろ、絹川は之を吽の息で受け、「……この通り……」と答ふべきところを、二優の間に阿吽の呼吸が合はず、臺白が離ればなれになるので、爲に折角マグネシユウム氣分を味つてボンヤリさせられて居つた心理狀態が、急に醒めて正氣になり、瞭然りしてゐましたのは、誠に以て遺憾千萬の至り。

黃金の茶釜

「先代萩」御殿の舞臺は、飽くまでの金ピカで、バツクになる襖は素より金ピカ、風呂に廻した小さな屏風然たるスクリーンも金ピカであるが、風呂も釜も亦金ピカ色であつた。三代將軍家光の長女千代姫が尾州家へ御降嫁の折、御持參と相成れる初音道具に揃へられた風呂釜はまがふ方なき黃金である由は、かね〴〵承り及んで居るが、假令鍍金にもせよ、伊達家の竹の間へ据ゑられる風呂釜まで、金ピカで、四面より燦爛たる金光に光り照されては、その中で芝居をする役者はその金ピカ色に光を奪はれて、殺されてしまうは必然。如何に黃金は金物の王でも、かう餘り金ピカを濫用すれば、却て舞臺面の毒になる、せめては、風呂を圍む屏風然たるスクリーンだけでも銀色にするか。或は風呂釜を金ピカ色のものにせず、普通のドンヨリせる鐵物にしたら却て舞臺も役者も引き立つたらう。

飯炊き省略論

一體、御殿の場に「飯炊き」をつけたのは、「先代萩」の書き卸された當時、政岡役を勤める役者にハイカラな茶人があつて「河原乞食でも、これ此の通り茶の湯ぐらゐは、チヤンと心得てムるぞ」といふところを觀客に示し「あッ」と驚かしてやらうとの魂膽から產れた趣向だらうが、俳優が自動車に乘つて英語を喋舌る當節柄、その俳優が舞臺で茶の湯がかりをして見せたからとて、觀物珠に、帝劇の御定連たる東京の貴婦人令孃など、憚りながらあッとも、すッとも、更に驚きもせねば、又感心するものでも無い。河原乞食が茶の湯がゝりをするからとて驚いたのは「先代萩」書卸し當時のことだ。「飯炊き」も、今日の時代」となつては、寧ろ「御殿」の蛇足である。何事も時勢に忠にして輕使主義の帝劇たるもの「御殿の場」に「飯炊き」を態々觀客の御睡眠時間として取つて置きなどせず前部を省略つて榮御前の登場から見せれば、可かつたのに。榮御前序でに松助の榮御前に就て云へば、あのチヨコ……チヨコと、兎が刻み足をしたやうにして歩くところなど、人の知らぬ邊で藝をする役者だと、通御連中の定めし感涙に咽び給ふところでムいますだらう。

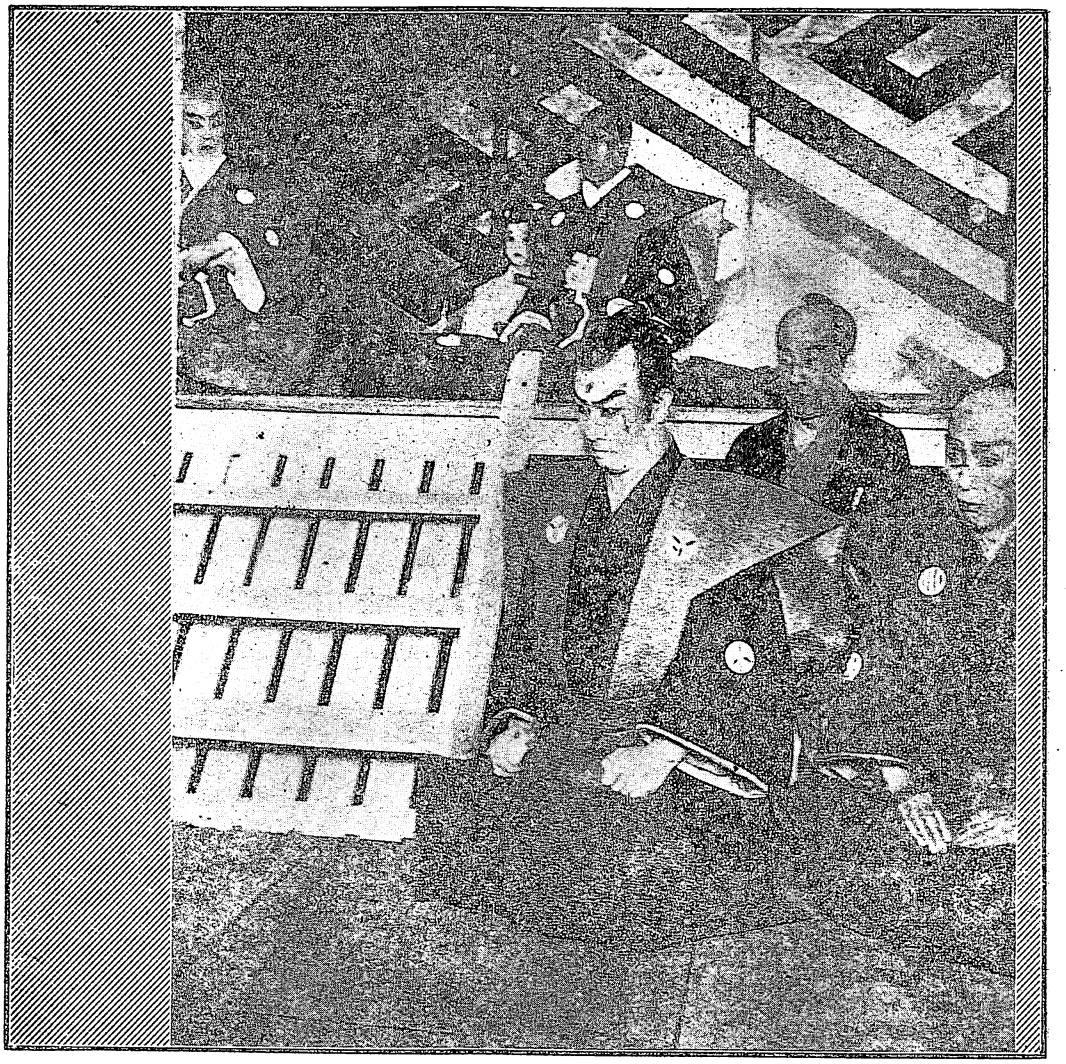


帝劇「先代萩」花水橋の場……宗十郎の頼兼・幸四郎の細川

歌劇式玉藻前

少女歌劇團とやらもあるさうだが、まづ以て帝劇の專賣と申してよきものに、オペラがあつた。そのオペラも昨今は御廢止になつたとか、或は御廢止になるとか人の噂に聞き及んでるにも拘らず、右田寅彦先生御歌作の「玉藻前」には、大分其演出法が、持ち込まれたらしい。流石に妖怪變化のお芝居だけあつて、怪しい臭いニホヒがした。臭いぞ〳〵？オペラ臭いぞ。西洋のオペラなら、役者の唄にあるところを、これでは、長唄連が引き取つて唄つたのだが、長唄の伊十郎も加齢の故か、ソロ〳〵聲の片足を棺桶の中に突つ込みかけて來た。頓と昔の伊十郎とは思へぬ。筆取る商賣の者が朝日新聞社に抱へられると孰れも皆な不思議に耄碌しはじめるが、帝劇に抱へられると尚且、役者のみならず長唄の太夫までが、耄碌しかけるものと見へる。梅幸の玉藻前が、清涼殿の階段に長い朱の袴を流し懸けて腰を下したところは、まことに美しかつたに、相違ないが、如何に之から宙を翔つて那須ヶ原に飛んで往かうとの魂膽を胸の底に潜め置いたるにせよ、顎をシヤクつて、上向加減になるのは、惡る

大阪方面の寶塚には、



川細の郎十宗・名山の蔵幸・木仁の郎四幸・貫鬼の蒲四郎……場の決對同

い形だ。藤間勘右衛門が踊る時に、顎を如何に取扱ふか御覧ぜられたら、思ひ半ばに過ぎ申さう。幸四郎の泰親も、尚且、洋劇部の感化を受け、ロシー新作の「人形のバレー」をでも眞似たものか、一ト臺白ごとに語尾になれば、その昔日本にもあつたと聞く首振り芝居の小供役者の如く、切りに首を左右に振つて御覧に入れたなぞは餘りに見識が無さ過ぎると申すもの。さて「宮城門外の場」の大道具に、御所の御門と塀とをセリ出しにしたのは、帝劇の御自慢だと承つたが「先代萩」床下のセリ出しとツキ合つて、御自慢物にしては、餘りに智慧が無さ過ぎる。それよりも梅幸の玉藻前が白面九尾の狐の本體を現し、宙乗になつたところで、お伽繪草紙に畵かれる文福茶釜然たるあの白狐の背中に、小さな探照燈でも据ゑ付け、雲氣技師をして大に技倆を發揮せしめ、燈光をパーッパーツと明滅させて、物凄き光明の尾を空中に曳かせる仕掛にでもした方が、遙に御自慢になつたらうに。

毛剃の背景

茲に天下の一大問題がある。「毛剃」の「元船の場」で、既に錨が抜けられてあるからには、あの

元船は定めし航海中で、一寸ばかり贓品積入の爲め沖合で停船したにしても、總ては船の航海中に起つた出來事だらう。船が航行中ならば、背景の瞬時〳〵に變つてゆくのが、物の道理ではムらぬか。然し、背景を變へてゆくのがイヤだとあらば、船を動かすより外は無い、然るに、背景も變らず船も進まず、それで錨が拔けられてしまつてるんだから、若しや此の船そのうちに南洋の新占領土あたりへ漂流に及びでもせぬかと心細く感ずるが、それよりも寧ろ、御自慢の大道具方に智慧が餘りに足りなさ過ぎるのを甚だ心細く思はざるを得ぬ。船が進んでるやうに見せる趣向なぞ手數の無いことだ。背景を環にした筒袋に仕立て、置いて、之を絕えず廻轉させて居りさへすれば、それで船は航海中のことになる。ところで、幸四郎の毛剃の臺白廻しだが、流石、役者が新知識だけあつて昨今内地に在留してムる外國人の日本語如き「それよろしいわ……た……し、あなたスキ。あ……の人、ペケあります」式なりしとは、振つたりな〳〵。何んと云つても、四月興行で梅幸第一の出來は政岡でも玉藻前でもなく「毛剃」の「奥田屋の場」一寸登場るばかりの奥田屋姉お琴であつた。第一に拙いのが政岡。

飛鳥山の背景

大切の「八笑人」を觀ては、たゞ面白く可笑しいと思つた丈けで他に殆んど何も胸に浮ばなんだが、櫻の枝を釣り下げたりなどせず、實物を旨く背景に接觸さして、パノラマにして見せたところは、如何にも大道具方に智慧のある。工夫だと思つた。之で「毛剃」の「元船の場」での智慧の無いのと差引勘定がつき、帝劇の半期勘定と等しく、良いバランスが取れる事になるから、目出度し〳〵。

市村座

立幟の示威運動

劇中劇といふものが大流行で、そこでもことでも劇中劇〳〵と騷いだのは、確か昨年あたりのこと。當大正五年の四月には什麼したものが妖魔劇が大流行で、まづ帝劇には玉藻前の白狐、歌舞伎座では道成寺の蛇體、それから市村座では戻橋の鬼女と、それは〳〵何方に向ひても妖怪變化ばかりであつたが、四月の市村座米吉改名披露兼五世菊五郎銅像建設記念劇には、更に又、劇中劇ならぬ芝居外の芝居といふものがあつた。警察官憲の御役人より承り奉るところによれば、「芝居」と「芝居で無い」との別は、本臺を着けると着けぬとの區別にあるとの事だが、米吉改名披露の口上には、之に居竝ぶ面々初めから舞臺座きになつて幕を開けず、當初、舞臺を空にして置いて、三津五郎を先頭に、菊五郎以下一人づゝ、本臺で揚幕の奥より現れ、丁寧に一禮に及んでから、正面毛氈の座に着き、小團次、米藏、歌六、吉右衞門まで揃つたところで、小團と三津及び菊との間に目でする相圖の知らせがあつて、小團次が、揚幕に引つ込み、茲に米吉の時藏を導いて舞臺に座らせたなどは、一同本臺を着けたとあつて芝居外の芝居であると申さずば相成るまい。さて劇場の表がゝりはと觀れば、是處には示威運動の幟行列といふ珍しい餘興がある。今度の改名劇で、米吉の時藏に、幕やら幟やらがタンと贈られて景氣づいては、男寅方の御威勢に關るとでも思つたものか、よし町の半玉連あたりの名で、男寅に贈る幟が立てられたりな〳〵、米吉の時藏に贈られた幟の數ほど立てられた。之れで時藏黨に對する男寅黨の示威運動をした積だらうが、之れからの

役者も之れまでの役者の如く、人氣の中心を花柳界に置きさへすれば、それで萬全と思つたら、大間違ひ、人氣の中心は之を男女學生の間に置くやうにせねばならぬ、小說家が學生の間に評判になれば賣れッ子になるやうに役者も學生の間に評判となれば、賣れッ子になる。

吉の政右衛門

飲んだ酒なら醉はずばなるまいだが、飲まぬうちから現に醉つてるのは、餘りと云へば早手廻し。これも酒造稅の高い御時勢とあつて經濟主義から來たものだとしても、吉右衛門の政右衛門が「伊賀越」婚禮の場で、御殿よりの退出早々、まだ祝言の杯事さへせぬうちにはや醉ひ心地になつて見へるのは、實に不可思議千萬の次第である。これは多分、御殿に於て殿樣より御酒賜はつて歸つたとの意をほのめかす爲めの腹藝と申すものだらう。後段になつて醉心地にならねばならぬからとて、醉はぬ先から腹の中で醉態振りの準備を整へ置かぬと、機に及んで急に氣を變へ得られるぬのが心配での未熟からではあるまいか。然し、大抵の役者は、或る一定の機になつてから致すべきことを、前の前から豫め準備して置くので、氣の變り目が鮮かに顯れず、又太陽スペクトルの赤であるべきところが、後の黃に響影されて、橙になつてるやうな藝を爲るから情けない。梅幸の政岡には、藥人形に襠を着せたやうな趣があつたが、さて又、吉右衛門の政右衛門には、箸を折つて人間の形に纏め之に衣裳を着けさした如き趣があつた。動作が總て雷光のやうに直線的で、如何に武士だとは申しながら、それでは餘まりだぞよ。羽織を一寸捌いて着るところの科などにしても、吉右衛門の政右衛門を見ては、成るほど鴈治郎は名優のうちだな、との感を深ふする。それに又、吉右衛門は、腹に力が這入らず、不思議と胸に力の這入る役者だ。吉右衛門の如きは、腹藝の役者でなうて、胸藝の役者とでもいふべきものだらう。政右衛門の妻お谷を扮た國太郎が、昔の如く貧弱なところが無くなり、ハバのついて來たのは、赤ン坊でも三年たてば三つになるとの古語眞に我れを欺かず感心したが、菊三郎が志津摩の母を扮ても何をしても、對手の役者の呼吸をウケる事の旨いのにも、流石は老巧で若手連の及ぶ處に非ずと感心させられた。感心序でに、婚禮の場で腰元を勤めた柏三郎にも一寸ウマイところがあると感心した事を申添いて置く。

菊次郎のお米

「伊賀越」に登場る沼津の平作の娘お米は、よし江戸の吉原で瀨川と謂つて花魁をしたことのある女にしろ、既に堅く言ひ交した志津摩といふ男があつて、その爲め盜みをしやうとまでの大それた心になるほどであつてみれば浮氣つぽいところなぞ、露些かあるべき筈のもので無い。ところが、菊次郎のお米は、「棒端の場」で吉右衛門の十兵衛に惚れられるだけで自分が十兵衛などに惚れるやうな氣に相成つては、言ひ交した志津摩に對しても甚だ以て相濟まぬわけであるに氣がつかず、十兵衛の親切を父の平作より聞かされゝや、何んとなく野心がムラ〳〵とでもなつて來たものか、流れの勤めをしたことのある身に急に娘らしく羞にかんで、十兵衛に惚れたやうな素振りを演て見せ、沼津の宅まで十兵衛を伴れ込んで泊めやうとするなどは、如何に前身が遊女だからとて、餘りと云へば不所存千萬の至りだ。それとも、十兵衛用意の印籠に藏められた藥が、斬り傷の妙藥なる由を父の平作より聞いたので、色仕掛で十兵衛を沼津の自宅に泊め、之を盜まうとの魂膽から、かく惚

れたやうな素振りをして見せたのだとすれば何處かで盜心の萠した心理狀態の具合を演て見せねばならぬ筈だが、菊次郎のお米には、愈〳〵十兵衞の床に近づき、印籠に手を掛ける刹那まで、盜心の萠した模樣が一寸も見えなかつた。これでは、少々盜人の三昧に入り過ぎて變テコなものだ。斬り傷の妙藥に就ての話を、父から聞いた時に、多少の芝居をして置かぬから、斯んな事になる。女形に色氣は何よりも大切なものだといふが、色氣も斯う過ぎては、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しだ菊次郎といふ役者は、兎角「過ぎる」のが好きな女形なものか、印籠盜が露見に及んでから後はウレイが効き過ぎ、何かの恨みで其場に化けて出た花魁の幽靈の如くに見えたのは物凄い心掛けと申さゞるを得ぬ。

歌六特有の癖

癖といふものは實に不思議なもので、小さい一寸した癖は目障りにもなり、他人に嫌氣を起させもするが、癖も歌六ほどに大仕掛で、五分の際さへ無いほどの三昧に入つてしまへば却て大きな愛嬌になる。況んや歌六は既に老人なるに於てたやだ。「伊賀越」の平作を、歌六が一世一代で勤めるのだと誇り、觀客が又之を見てヤンヤと喝采するのは、歌六特有の癖が今や三昧に入つて五分も癖で無いところがなく、一轉して愛嬌になつてるからだ。悴の改名披露劇に、好い御景物を持合せたものと、歌右衞門は定めし淡んで御座らう。

八重桐廓話

改名披露興行といふものもさて〳〵六ケしい趣向のものだ、折角、晴れの興行に不評を取るやうでは、末々までも當人の利益にならぬとあつて、誰がやつても一般から不評の這入る餘地の無さそうな藝題を擇むのが、賢い法と感ずいたものか、歌舞伎座の福助は「道成寺」を演し、市村座での時藏は「八重桐廓話」——孰れも臺白の少ないもので「道成寺」は殆んど振りばかり「八重桐」はクドキ澤山。たゞ或る型で身體を動かしてさへ居れば、芝居をせずとも濟み、併も自體の動かし方の巧いか拙いかは、素人に一寸解るものが少ないから、不評の入れやうが無いだらうとは、親爺連も息子等に幸あれかしと、却々名案を考へ出したものと、ホト〳〵感服の外は無い。然し、福助の道成寺と時藏の八重桐とを比較すれば、今度だけの軍扇は、兎も角、時藏の方にあがる福助は、まだ役をスマターし切れず、役に追ひ廻はされて疲れてゐるほどだが、時藏は稍々役をマスターし得て餘裕がある。福助の舞臺はお淀めくが、時藏にはお淀めいたところが無い。時藏は成長したら、恐らく、梅幸のやうな役者になるだらう。それにつけても、藥人形や、兄の吉右衞門のやうに箸を折つて人の格構にした樣な役者にならぬ心懸けが、今より肝腎だ。生れついて惡るい癖が首にあり、親子三人揃ひも揃ひ、鋏を倒にして五十度の角度で立てたやうなところだけは、矯正し得ぬまでも、腰元の白菊を扮た米藏は、年功を積んでる丈け流石に時藏よりも役者らしい



菊五郎の小百合

が、笄の差し場所がウマクないので、辨天小僧めいて見えたのは、御氣の毒さま。

音藏と式佐

新古演劇十種の内の「戻橋」は、五世菊五郎銅像建設記念のためとあつて六世菊五郎の鬼女で演ぜられたが、土間の中に板を渡して假花道を作り、吉右衛門の綱と手を引いて歩るくなぞはまさに以て新レコードらしく、是も實に五世菊五郎銅像建設記念たる所以だらう。ドウセ新レコード序でに、背景を全然寫生的のものとせず、獨逸のスタール式のやうにシムボリックのものにしたら、一層新興味を湧し得たらうに、流石の六代菊五郎にも、これだけの新レコードを作る勇氣は無かつたらしい。「戻橋」で何よりも愉快に感じたのは、長唄の音藏が近來に於ける長足の進歩だ。よし伊十郎ほどの音量が無いにしても、昨今での音力は遙に伊十郎の上にある。既に音力が音藏に劣るとすれば、伊十郎の特色たる蠱的なところは、全く其價値を失つてしまつたものといふべきで、音藏の唄ひ振りの、伊十郎の如く粗野で無いところは音藏の價値を一層高むるものである。それからモウ一つ感心したのは、常磐津岸澤式佐の三味線だ。「早瀬の流れ」を彈いたあたりは舞臺に面り激流を現ぜしめたるかの如くに想はしめた。式佐は松尾太夫と一緒にして置くべきものだ。之を二人離ればなれにして、式佐を竹遊に附けて置くならば、藝術の罪惡とも申すべきものだらう。



吉右衛門の渡邊源次綱

二番目は省略

下手の長談議で餘り長くなり過ぎるから、二番目の「美代吉殺し」は省略することにする。然し「番小屋の場」での電氣の使ひ方が、餘りと云へば餘りに拙なることだけは言はざるを得ぬ。松助の夜番人藤兵衛が立ちあがると、藥鑵頭のところだけ強い光線を上から受けて明るく光る。菊五郎の清七が殺意を生じた際の心理的變化が讀み得られぬ。されど、終末に致して讀者諸君に長々御體屈を相かけ申したのを御詫びするが、市村座の場代平土間小物料とも二圓五錢は、ちと高か過ぎる。これでは十錢の連鎖に跋扈されるばかりだ。それでも、この高い場代を取つて、猶ほ且つ連日の大入は目出度し。

新刊紹介

現代英國劇作家　（大田黒元雄）

本書は世界の劇壇に重要な地位を占めて居る現代英國の八劇作家ショウ、バーカー、ガルスウオーシイ、メースフキールド、ホオトン、シンヂ、イエーツ、レディグレゴリイ等に關する評論を載せたもので、著者が倫敦滯在中の研究を發表したものである。そして各作家の特質と傾向とを論じ傍ら其代表作の梗概に迄及んで居る。著者は其の簡明な且鋭利な筆を以て此の書の中に現代英國劇作界の大觀を描いて遺憾ない。演劇研究者の好參考書と云ふべきである。裝幀は服部憲夫氏の手に成り莊麗である。（四六版布製函入、定價一圓洛陽堂發（行

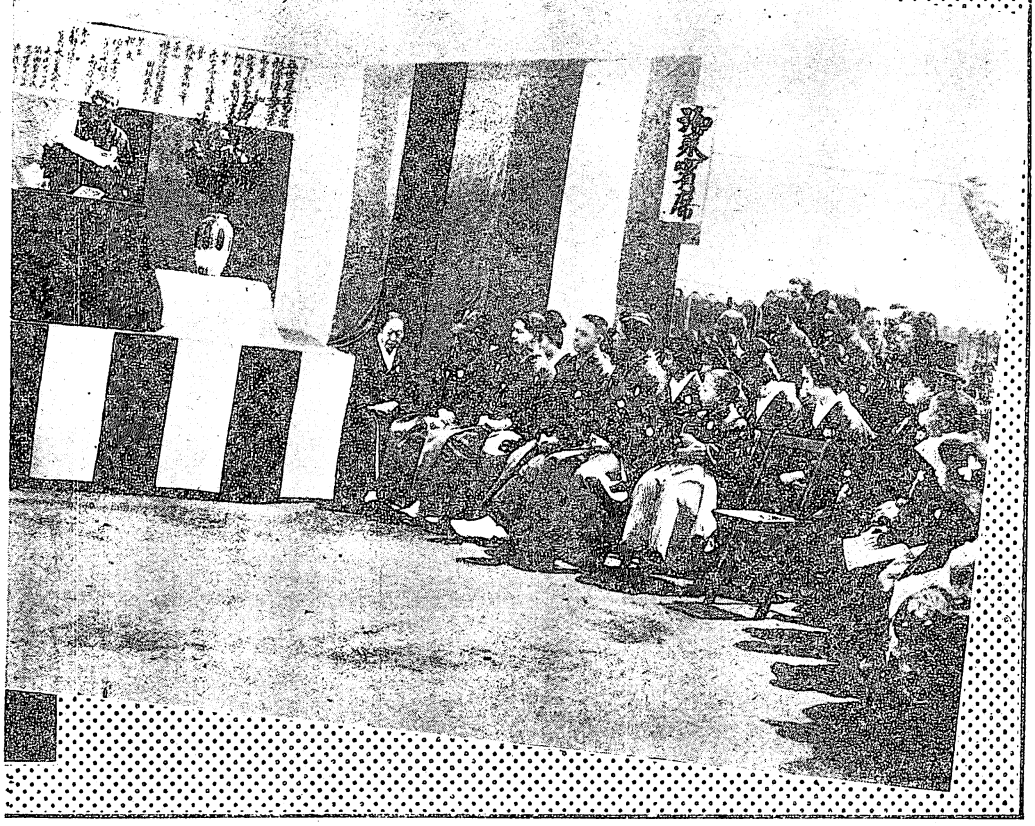
五代目尾上菊五郎銅像除幕式

五代目尾上菊五郎の銅像は渡邊長男氏の原型、岡崎雪聲氏の鑄像で豫て出來上つて居りましたが、今度その筋の許可を得て深川公園不動堂の右脇に建設される事になつて、三月二十日を以つてその除幕式を擧行しました。この日音羽屋門下はいふに及ばず、都下在住の俳優を初め、各劇場關係者、盛り場、五代目と親しかつた紳士などで、來賓二千、非常な盛會でありました。

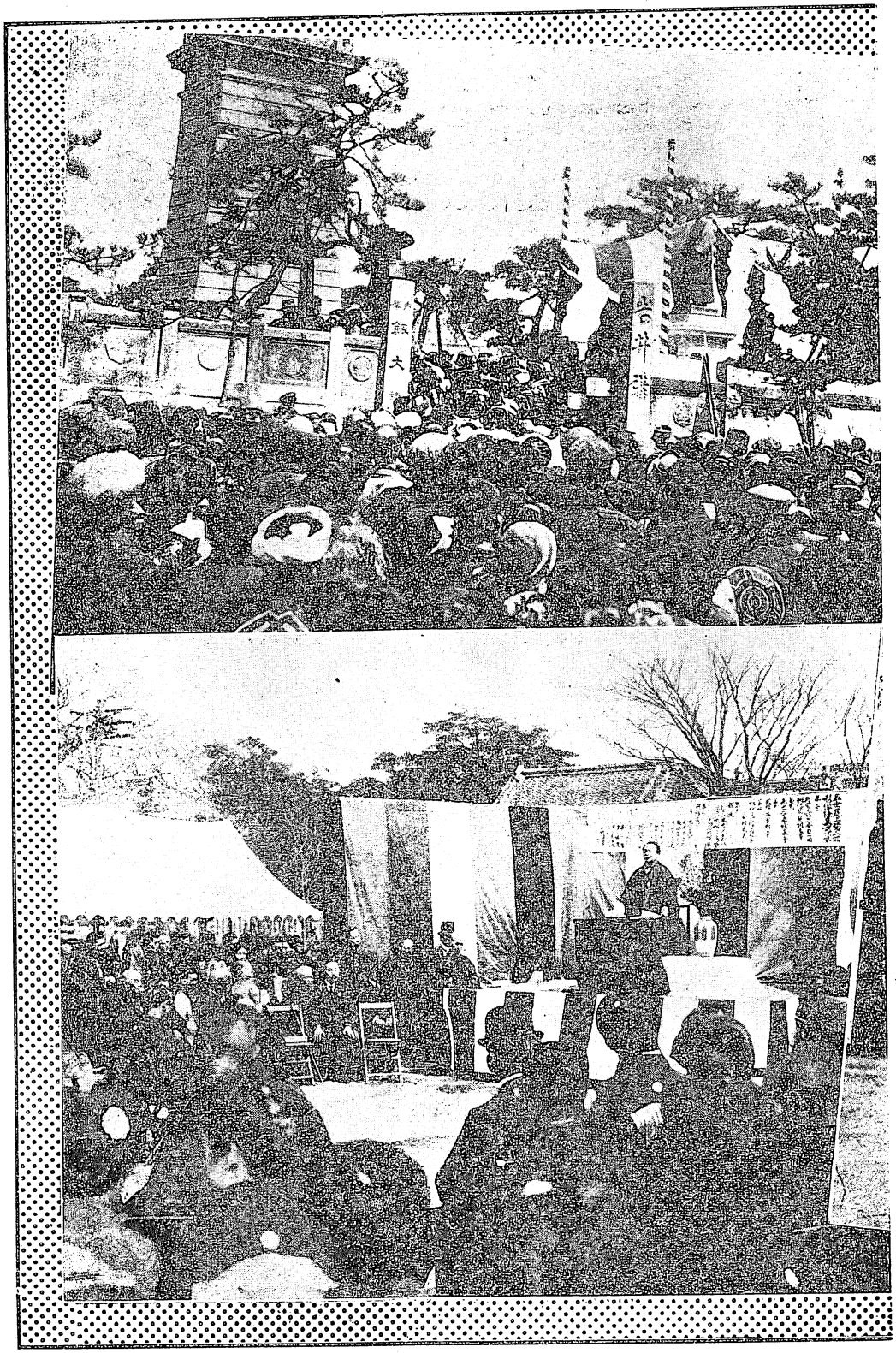
上圖は各區赤筋連の木遣が終つて、未亡人里子さんに依つて除幕の綱が引かれ身長六尺三寸、羽織袴の五代目の活るが如き姿が現れた刹那です。下圖の右は式場に於ける齋藤孝治氏の式辭朗讀で、右の方に竝んでゐるのは、未亡人里子、尾上梅幸、尾上菊五郎、市村羽左衞門、坂東彦三郎、市村竹松などの遺族の人々です。

左は大倉喜八郎男が帝國劇場の社長といふ資格で演說をし、最後に男卽吟の狂歌を朗讀してゐる處です。狂歌は

遠からん者も來にけり音羽屋の
近き身寄も見ゆる式場



五代目尾上菊五郎銅像除幕式……四一





『葵上』と女の執念

歌舞伎座四月狂言の一番目

井桁佐平

幕間のどよめきは華かな氣分を觀客の胸から胸へ傳へて流れた。これから『葵の上』の幕が明かうとしてゐる。腮に白髯をたれた老人が、眼鏡ごしに繪本を見てゐたが、ちよいと傍をふり向いた。そこには老人の娘らしい白い顏が、紅い半襟のいろを美しくこほして、麗かに浮いてゐた。

「以前にこの『葵の上』を見たことがあるが。覺えてるかい。」と老人は、繪本を下に置いた。

娘は頷くともなく頷くやうな眼をした。「あの時は、深川へ嫁つた姉さんが、まだ家にゐたころで、一緒にきたわねえ。」

「もう十年ばかりになるだらう。早いものだの。あの時が書下しだつたが、あの頃は歌舞伎座もいくらか役者が揃つてゐて、活氣のある芝居を見せてくれたこともあつたが……。」

かう言ひかけた老人は、ふと言葉を斷つてしまつた。過去をふり返りがちな自分の癖に心づいたからであらう。ただ胸の底で、いま帝劇にゐる幸四郎が高麗藏といつて、當時の人氣役者として光君を勤めたことなどを思ひだしてゐた。

遠くから木の音が聞えはじめた。

朱く鳥居の立つた彼方に、遠く下加茂神社の社殿が見えた。杉の樹が棒いろの太い幹を高く聳えさせて、青ぐろい葉は重たさうに茂つてゐた。その神々しい境内に、今日は葵祭

狂言役割

左大臣藤原道兼……仁左衛門
近衛大將光源氏……羽左衛門
横川阿闍梨……段四郎
右馬允安近……左團次
民部大輔惟光……市藏
白川兵衛尉宗連……歌十郎
源氏北の方葵上……源之助
女房葉末……秀調
同濱萩……市之丞
六條御息所……歌右衛門

の行列を見やうとて、多くの人影が賑かにちらついた。

鳥居の前に古びた網代車がある。見すぼらしい姿をした女房、侍、仕丁が寂しく附き添つてゐる。それから少し離れた隅に華かな物見車がある。大ぜいの侍、女房、仕丁が、りりしく着飾つて、その周圍を取りまいてゐる。この古びた網代車と華美をつくした物見車——古びたのは光源氏と忍ぶ仲の六條の御息所の車で華かなのは、光源氏の北の方葵上の車である。一人の男を爭ふ二人の女は、思ひがけなく車をならべたのである。

「その車、とくとく取り除けられよ。」

華かな物見車に附き添ふ侍の白川兵衞尉宗連は、その粗つぽい眼を光らせて、じろりと古びた車の方を見る。「見る影もなき破れ車乘つたる主は知らねども、わるく意地を張ると、爲めにならぬぞ。」

古びた車の側にゐる右馬允安近は、淡く皺の浮いた顏を、無念さうに顫はせた。「某、ここにあるからは……。」

「退かぬとあらば、退かして見せう。」

宗連の聲は尖ついた。侍、仕丁の姿がばらばらと入りみだれて、古い車を支える安近は手あらく突きのめされて、その車も隅に退けられた。そこに華かな車がゆつたりと陣取つた。宗連は隅へ押しのけた古い車をちらりと見て、赫い顏にせゝら笑ひを浮べた。

古い車の安近は眉をぴり〳〵と顫えさせて唇を噛んだ。

「お忍びにあらざれば、この不覺はとるまいに……。」

白馬にゆつたりと誇がつて近衞大將光源氏が出てきた。烏帽子に黑い直衣のその姿は、白い馬上にきらびやかに目立つた。黃金づくめの佩刀と金の鐙が光つてゐる。後に民部大輔惟光が馬でつゞいた。

烏居の前までくると、もう華かな車から北の方の葵の上が出て、待ちうけてゐたのに逢つた。紅、葡萄黃のいろをちらした五つ衣がけばけばしく見えた。

光大將は馬かり下りた。

「常には外出もし給はぬに、今日は何として參られた。」

「妾は思ひがけざりしが、若き女房の口々にかけ離れしものでさへ、今日の祭に大將を、見奉らんと遠國より、はるばる參るほどなればと、もの騷がしう申す故、俄に供奉を申しつけ、思ひ立つたるこの物見……。」

光大將はその言葉を聞き流すやうに四邊を見た。ふと二つの車に心づいた。

「群集の中に、一きわ目立つ物見車の華やかさ、それに引きかへて、あの車の、いと古びて、床しきは……。」

華かな車を疎むやうに、古びた車を懷しさうに見る——古びた車の窓の簾をあけて、こちらを見てゐる御息所の氣品のある顏……思はずはつとして、その優しい眼のいろは、いくらか慌てた。

葵の上はそれに心づいた。古い車の方を見る。夫の顏を見る。

「あの女性は……。」と訊く眼つきは、男の心を探るやうに。

「いいや、屋形に使ふる女房にて、御心置かるゝものにあらず。」

光大將はきつぱりといふと、ふと遠くからひゆう、ど、どんと神樂の音が聞えた。

「はて、心なの。」と古い車の方から、ちらと華かな車の方に眼を移して、しつとりした聲で、「調べよなあ。」

静かに鳥居をくぐつて、彼方に入つた。

葵の上は古い車の方を見た。そのきれの長い眼は妬しさにいくらか曇つてゐる。

「あの御車に召されたる女性を、これへ伴ひまゐられよ。」

かういふので、女房の濱萩が、古い車のところに近づいて、その由を傳へたが、古い車に附き添つた女房の葉末にきつぱりと斷られたので、葵の上の聲は忌々しさうに昂つた。

「何事にても、妾の心に叶はぬはなき世の中何人か知らねど、人の心を無にするは、作法を知らぬものぞかし。宗連、たつて、これへと申しや。」

「は、はあ……。」

宗連の赭い顏が古い車のところに動いた。粗つぽい聲がする。その太い手が車の簾にかかつて、めりめりと音がして引き裂かれた。車の中から引き出されるやうに御息所が出てきた。黑い下げ髮、綸子の五つ衣、藤いろ千劍菱の大帷子に、緋の精巧の長袴の裾を赤く引いて、その白い氣品のある顏を紅い扇で隱してゐる。

「とくとくあれへ、まゐられよ。」と宗連の尖つく聲。

御息所は突きのめされるやうに前に跼けた力なく膝をついて、葵の上の見るのを、紅い扇で避けてゐる。側に葉末が悲しさうに戰いてゐる。

宗連などが肩を怒らせて、拳を握つてゐるのを、葵の上は止めた。憎惡の念をつゝんだ嘸とらしい眼つき。「定めて我が夫の、隱れて眺ゐる花であらう。散らすも無殘、捨てゝ置きや。」

「お言葉ではござりますれど、踏んで踏んで踏み躙り、落花微塵に……。」と宗連の聲は氣色ばんでゐる。

「わが妬みの心より、狼籍せしと言はれんもうしろめたければ、手あらきことはせぬものぞ。」

葵の上はいくらか前へ出た。じつと御息所の方を見る。眼の光りの淸々しさ、色のくつきりとした白さ、品をふくんだその口元。

「ても、あでやかな……。」と葵の上は、思はず言ひかけて、ふと心づいたやうに唇を結んで、そこらを見廻して、「眺めぢやなあ。」

わざと澄して、御息所を意としないやうに行きかけたか、折ふしそちらをふり返つた。

御息所は眼を喰きながら、葵の上の行方を見送つてゐる。口惜しさ、悲しさに、微かに唇が顫えてゐる。葉末の取り出した床几に腰をかけた。右の手を胸によせた。

「かばかり人は情なきものなるか。妾はわが身こそ恨め、つひ人を恨まぬに、いかなればこそ、この狼籍――淺間しき浮世ぢやなあ。」

聲はしつとりと沈んで、憂はしげにうつ向ひた。

「御道理でござりまする。世が世であれば藤原家の、姫君などに幅をきかされ、默つてゐるではなけれども……。」と葉末の聲も泣いてゐた。

「人の妬みをうくるのも、君としのびの戀ごろも、晴れて逢はれぬ心のなやみ。」と御息所は、濕つた眼で葉末を見て、「葉末、察してたもいの。」

葉末は悲しさうに聲を呑んだ。

曲つた腰を忙しく動かして、安近が歸つてきた。齋の宮の許まで使に行つてゐて、今の騷ぎは途上で聞いたのであつた。

「この上都に止つて、猶も憂目をうけんよりも、かねて申しあげし如く、伊勢へお下り遊

ばしませ。」

かう宗近が勸めたが、御息所はうつ向ひて聲もない。葉末も薦めたが、やはり默つてゐる。

惟光が光大將からの御文を御息所に屆けて去つた。沈んでゐた御息所の顏に明い微笑が浮いた。その御文を懷しさうに見てゐる。

「伊勢へお下りは、いかゞでございまする。」

「御挨拶は……。」

安近と葉末は、右と左から——御息所は、手から御文を放さない。

「妾は、やはり、都の中に……。」

「この上に憂き事の、大波小波がをしよせなば。」と安近。

「身を浮き舟の、波にまかせ……。」と御息所は、思ひきめたやうな顏の色——

「とは言へ目前、この有樣。」と安近は悄れかける。

「思へば、悲しい。」と葉末。

「口惜しい。」と安近も聲を顫えさせて。

「ああ、いや、必ず人を恨むまいぞや。」

御息所の品のある聲はきりつとしたが、語尾は低く顫えた。いくらか前へ出て、じつと方向を見てゐる。その白い手から扇がばらり

と落ちた。それを葉末が拾つてわたすと、ふと心づいたやうに、さつと紅く扇をひらいて白い顏をかくした。微かにすゝり泣く聲がもれた。

『中村歌右衞門丈』と金絲のきらつく緞帳が舞臺にたれてゐる。廊下には見物の女客が、赤、朱黃、紫の美しい衣物のいろをちらつかせて、微かな衣ずれの音を殘しながら、此方から彼方へ、彼方から此方へ消へてゆくのが眼につく。

「やつぱり男に心が殘つてるんだわねえ。」

ふとかういふ女の聲がした。

「源之助の葵の上が可憐さうだ。さぞ窮屈だらう。」

かういつたのは男の聲であつた。その一群は三階の賣店の方へ上つて行つた。

葵の上は脇息に左の肱をもたせて、寢衣に小桂の肩をぬいで、眼の光りは窶れて力がない。その寢所の近くにある護摩壇に燈火が二つゆらめいてゐる。大臣柱に欄間がついて、巾帳の影がものものしく見える。

葵の上は物の怪に惱まされてゐた。照日の巫女が梓の弓を鳴らして歸つた後で、葵の上は「今宵は惱みもなく、心地よう爽かなれば……」と看護の女房達を次ぎの間に下らせて勞らつた。

護摩壇の燈火が寂しく瞬いてゐる。

葵の上は憔れた手を胸によせた。

「今宵はいとゞ心地もよし。嬉しや、暫し、まどろまん。」

白綸子の着つけに、下げ髮が長く黑い。護摩壇のところへ出て禮拜して、脇息に肱をよせた。

ど、ど、ど……怪しいひびきに、青白い光りが、うつすりと絡むやうにわたつて、四邊が暗い。二つの燭火がちらちらと戰いてゐる。ど、ど、どろ、どろと鈍い音は陰にこもつて葵の上の後の巾帳の蔭に、ぼんやりと人の影——檜垣に唐草模樣の小桂をまとふて、柑子いろの長袴が薄闇に滲んで、白く浮いた顏に髮がみだれて凄い。御息所の生靈である。手にした檜扇に長く房がたれてゐる。ど、どろ、どろ……と怪しい音は、消えてはつづきつづいては消えた。

うすら怖しい薄闇に、生靈の青白い顏がく

つきりと浮いてその姿はぼんやりとぼかされてゐる。やがて脇息によつて眠つてゐる葵の上の側に近づいた。ど、ど、どろと怪しいひびき……じつと葵の上を見つめたままで、じりじりと其方に——闇にくろずんだ柑子いろの長袴が、低くうねつた。

「葵の上、起きさせ給へ——」

怨めしさうな聲は冷めたく聞えた。

葵の上は脇息から肱を落して、ふと眼を醒ました。側にぼんやりと立つ女の影——思はず褥から飛びのいた。

「あれ——」

聲を戰かせて、左の袖をあけで、その顏を隱した。左の袖がぶるぶる顫へてゐる。

「今宵もわたらせ給ひしか。」とおびえたやうなその聲。

戀の執着——五月前の葵祭に、戀の敵からうけた無慘な憂目を忘れかねて、恨みに恨み泣いた念は、淺間しい形となつて、かうして葵の上を夜な夜な惱ました。ど、どろ、どろ……怪しい音は、薄闇に氣味わるくひびいて生靈が葵の上を追ひ廻してゐる。檜扇でうち据ゑてゐる。

苦しや、許させ給へ、葵の上は呻くやうに叫んだ。

「いやとよ。憂目を見給ふとも……。」

ど、どろ、どろと鈍い音に、その語尾はうつすりと消えて、生靈の青白い手が、葵の上の黑い髮に絡つた。葵の上の叫ぶ聲が痛々しい。小桂をふりかぶつて、きつと睨む生靈の凄さに、葵の上はそのまま倒れてしまつた。

「父上樣はおわさずや。父上樣は……。」

葵の上の父の大臣藤原道兼が出てきた。横川の阿闍梨も馳けつけた。

「またも惡靈來りしか。」

「執念き惡靈、いで、ひと祈り、祈つてくれん。」

阿闍梨は珠數をふりながら護摩壇に上つて護摩を焚いて惡靈退散の祈禱をした。護摩の火はゆらゆらと燃え立つた。ち、ち、ちん、ちんと禱りの鐘。白い煙。青い炎——

「はや、はや、ここを、去り候へ。」

道兼はきらりと白く太刀を閃めかせた。生靈はたぢたぢと跼めいて、葵の上に近づかうとするのを、阿闍梨が遮つて、珠數を押しもんで祈つた。生靈は苛つくやうに摑みかかつても、すぐ禱りの威德に壓されるやうに跼けて、護摩壇の周圍を廻り廻つて、苦しさうに悶えた。護摩の火はいよいよ強く燃え立つ。その赤い炎に苦しんでゐる生靈の姿がありありと映つた。

白い煙がもくもくと湧く。護摩の匂ひが鼻を撲つ。赤い炎のゆらめきが劇しい。苦しさうにのたうつてゐる生靈の凄慘さ——

「神を祭る野宮で、怪しからぬ護摩の匂ひ、護摩を焚くのは何者ぢや。」

御息所は跼めくやうに奥から出てきた。髮はみだれて、その聲は呼吸はんでゐる。

緣側の上に安近と葉末の姿が見えた。廂につるした燈籠は、ぼんやりと光つて、漸次にせまる曉の光りに、うす淡く剝げかけてゐた。

「護摩の匂ひは、少しもいたしませぬが。」と安近は不審さうな顏。

「この、まア、高い匂ひが、聞えぬといふことがあるものか。あれ、あれ、ますます高う聞えるわ。」

「こは、異なることを仰せなさる。」と安近はそちらを見ると、ふと御息所の右袖が焦けてゐるのに心づいた。「片袖の焦けたるは。」

御息所もそれを見て、怜りした顔つき。「まあ、何時の間に……。」

「昨夜、お召更への、この御寢衣。」と葉末も思ひがけないやうに。

「こは合點がまゐりませぬ。」

安近は、御息所が葉末をつれて、お召替に奥へ入つた後で、その首をかしげてゐた。

光大將からの使として惟光がきた。安近はそれを上手に招じた。

「して、使の趣きは……。」

「昨夜、葵の上の枕頭に、いつもの如く生靈現はれ、以ての他の御惱み……護摩の炎は生靈の、片袖につくよと見る間に、そのまゝ姿は消え失せたれど、葵の上の御容體宜しからず、齋の宮伊勢へ御立の御見送りは、宥させ給へとの仰せでござる。」

「護摩の火が、生靈の袖に燃え移りしとか。して、右の袖か、左の袖か。」

「たしか右の袖と申した。」

「右の袖――」と安近は、思はず聲を高めたが、ふと氣がついたやうに、その聲を沈ませて、「恐ろしい生靈でござるな。」

奥から葉末が出てきて、御息所が俄に御心が變つて、伊勢へお立ちになることを知らせた。惟光はこのことを光大將に傳へるために去つた。

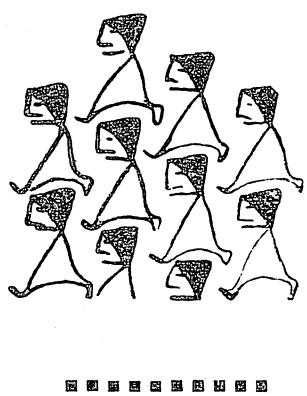
「やれ、やれ、嬉しや。急に伊勢へ御下向と決したるも、これも大神の御守護なすところであらう。……これにて、最早、恥辱をうくることもなし。われらも滿足いたす。早の旅の御仕度を……。」

安近は葉末を忙き立て、旅の仕度をさせた。ち、ち、ちと蟲の聲。安近の眼は考へるやうに光つた。

「惟光が來つての物語と申し、火の氣のあらぬ御寢所にて、片袖の焦げたるはいぶかし。かて、加へて、急に伊勢へ御下向とは、深き仔細がなくてはならぬ。」

御息所は護摩の香ひと袂の焦げた跡とを、蔭ながら聞いた惟光の話に思ひ合せて、ぞつとするやうな思ひがした。何といふ淺間しい心であらう。いかに戀に心は盲目となつてゐたからとて、始めて知つた我が身の罪の恐ろしさ――その罪亡しに、伊勢へ下つて、御神に身心を捧げることになつた。今までは身にも替へて愛しかつた光源氏がきて、それを止めたが、御息所は心を飜へさなかつた。戀に執着する餘りに、人間の淺間しさを見た御息所は、潔く戀を捨てゝしまつた。

かくて御息所は新らしい道を辿つて行つた。



繪卷物を展げたやうな舞臺面は、たゞ高尚に、きらびやかに、美しかつたが、その底には、暗い人間の心の淺間しさがのたうつてゐた。日本の女性の心の生活を、或る程度までこの『葵の上』が語つてゐた。

「大した道具だつた。せめて死んだ園十郎に一目見せてやりたかつた。」

白髮の老人は呟くやうに言つて、胸に活歷元祖の九世園十郎を思ひだしてゐた。

今月の懸賞

これは何の芝居ですか



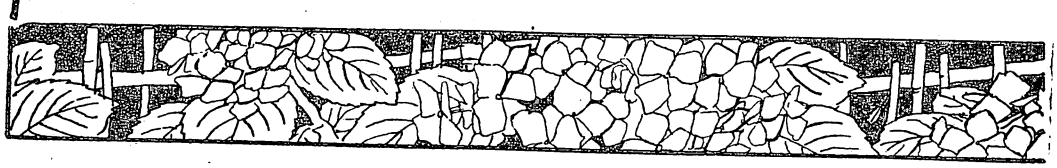


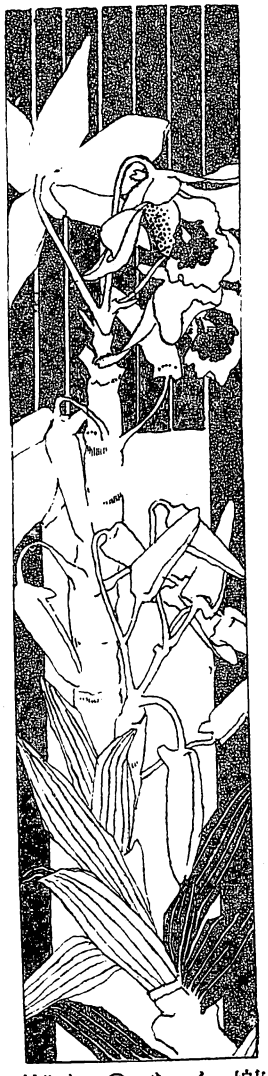
右の頁にある寫眞は、此の四月に東京の或る座で演ぜられ、頗る好評を博した芝居です。何と云ふ芝居ですか藝題を當てゝ下さい。普通に呼び慣れてる藝題で宜しう御座います。

當つた方には左の賞品を上げます。當つた方が多勢あつた場合には籤引をして受賞者を定めます。若し又當つた方が少なかつた場合には、殘りの賞品は本社で頂戴して仕舞ひます。然かし斯んなやさしい懸賞ですから當つた方が少ないと云ふやうな事は、萬々無い事だらうと思ひます。現に先月の懸賞なぞも、あれでは如何にもやさし過ぎて困る。何だか馬鹿にされてるやうだと云ふて御叱りの御手紙が、頻々として本社へ舞ひ込んだ位ですもの……

一等……百人に對し……一人一圓づゝ合計百圓呈上
二等……百人に對し……極彩色木版繪葉書三枚づゝ

答案は葉書に限る…締切は五月廿日…發表は本誌七月號





金光教祖とお艶殺し

大阪中座の四月狂言

香取　染之助

仁左衛門が一寸顔を見せて引きあけて了ふと、大阪の劇壇は淋しい姿を見せねばならなかつた。中座に殘つた多見之助と我童に、德三郎、吉三郎を加へた一座のみが獨り、華爛な踊り季節の大阪の劇壇を粉黛してゐるのである。

壹番目「桔梗旗揚」四幕、中「金光教祖」一幕二番目「お艶ごろし」三幕といふ、花時で少しは道樂もしてみたいと云ふ竝べ方である。この中で「金光教祖」と「お艶ごろし」の印象記を書く事にしよう。

金光教祖

金光教の奇蹟を仕組んだ有り難い、所謂お冥助唯一の宗教劇なのである。其の觀客も、之れを大別して、無遠慮に大笑する人と、可愼やかに沈默してゐる人の二種にする事が出來る。私は其の何れにも屬せず、極めて平凡に極めて平氣に之れを見物した。

第一場は大谷街道立場茶屋である。茶店の娘お玉（廣三郎）が、許嫁の權次の身持が惡るくなつたのや、父の藤作がそれが爲めに結婚を許してくれない事などを悔んでゐると藤作（松十郎）が戻つてくる。藤作は金光教の信者なのである。紋付の羽織を着て、つけてゐる袴の下から藍色の股引が見えてゐるのも、さうした田舍の信者らしい氣持を起させる。悅しさうに迎えたお玉は、藤作に「どうぞ權次さんを勘忍してあげとくなはれ。」と耻しさうに賴む。遠く教會の方を向いて合掌してゐた藤作は、やつとふり返つて「勘忍してくれつて、」權の事やつたらどうも困まると云ひながら、酒や博奕で身をもち崩してゐる權次の非をあげて罵る。併し、お玉は惚れてゐる權次の事とて尙ほ懇願する。藤作はどうしてもきかないので「金光さんがまだお許しならんよつて……。」と云つて、家の中へ這入つて了ふ。お玉はとりつく島もないやうにうなだれて、この上は權次をすゝめて金光信者にさせねばならないと呟やく。そこへ醉つぱらつた權次（我童）が、蹣跚として出て來る。お玉はそれと知らないで、自分の戀の果敢さを恨んでゐる。權次はそれを見てお玉の背に自分の背を

當てる。「あれ、權次さん！」と、お玉が縋らうとするのを、權次はよけて逃げる。お玉はそれを追ひかける。お玉がやつと取り縋つて「權次さん。」と甘く恨まうとすると、突然、髷を握んでお玉を足下に倒す。そして如何にも氣持よく笑ふのである。

お玉は、權次に「金光樣へお願ひしてせめて博奕だけはやめて、一日も早うお許しが出るやうにしておくれ。」と賴む。すると權次は「なに、金光？　金光が何んぢやい。」と罵る彼はいくら信心しても金光教祖が結婚を許さないので、自暴自棄に身をもち崩したのである。その結果いくらお玉が賴んでも耳に入れないで、權次は「金光は俺の戀敵でえ。」とか、「何んぢやい、金光、金光てえ、金光は狸を使やがつて、金光は狸ぢや。」とか云つて盛んに罵倒するのである。お玉は金光の惡口を聞いてはゐられない。併し、戀人の口から出る罵倒であるから本人を憎まうとはしない。それは戀が教理よりも重い爲であらう。

權次は「この村ばつかり日は照れへん。お前、大阪を知つてゐるか？　なあ、え、大阪へ行つて二人が差し向ひで暮さうやないか。」と、お玉を促して道行きと洒落ようとする。

お玉は、藤作が怖しいのでそれを承諾しない「あんな親爺はほつとけ。」と云つて、お玉の手を執る。お玉は怖しさうに逃げる。逃げるのを押へて「親爺のあの眼玉が何んぢやい。」と嘲けりながら連れて行うとする。（註ニ曰ク。藤作（松十郎）の眼は慥かにあの眼玉たる敬稱を受べく事程左樣に偉大なのである）

行かうといふ、可厭だといふ、この二人の爭の最中に權次の母お岸（關十郎）が出て來る。お岸は山伏に歸依してゐる異教徒なのである。權次は、お岸を見るなりお玉の手をはなして、極り惡さうに横を向く。お岸は、權次のその不法な事を責めて、十四の年に父親に死に分かれた時、お前の事はくれ〴〵も賴まれた甲斐もなく今のやうなその身持ちちつとは母の身にもなつてくれと意見する。すると權次は、母親の同情のもとにお玉を得んと、急に泣き出して、お父つあんの事を云はれると面目ないが「ちつとは俺の身にもなつて、な……。」と甘へながら、お玉を貰つて呉れと切願する。

お岸が、お玉を貰ふと云ふ事より、身持を諫める方が急なので、權次は下手な泣狂言を捨てゝ了つて「そんならもうゐ、勝手にしやがれ……。」と怒鳴りながら「お玉は俺が引張つて行く。」と、縋るお岸を倒して、お玉を連れ出さうとする。その騷ぎに藤作が飛び出して來て、權次をつきのけお玉をかばひながら「何をする。」と詰問する。權次は、お玉を貰ふんだと云ふ。すると藤作は「金神樣の仰せはそむかれん。」と云つて、嘲けるやうな調子で「櫻の木に茨の花は咲かせんからな。」と云ふ。（傍ら顧みるに、こは茨の木に櫻の花を咲かせんの誤りならんか。但し三日目所見の事。）それを聞いて權次はその譬喩が癪に障つたと怒り出して、藤作に食つてかゝらうとする時、遊び仲間の一人が「今、例のが始まつてゐるんだから來い。」と云ひながら、無理に權次を誘つて連れて行つて了ふ。

取り殘されたお岸は、それでも悴可愛いや別れのつらさで、權次にお玉を添はしてやつてくれ、さうしたら屹度權次の身持もよくなるに違ひないと、泣くやうにして藤作に賴む。藤作はこの一擧兩得の策を冷然と排して「神は非禮をうけたまはぬ……。」と云つてから、何んだか一寸一度聞いただけでは覺えられない教理をすら〳〵と喋つて「谷川の流れも清く澄みぬれば隈なき月の影も宿らん」と濟ま

す。「そら何んのこつちや」と、お岸があつけらかんとしてゐる隙に、藤作はお玉を連れて家の中へ這入つて了ふ。

お岸は獨りになつて煩悶しながら「今となつては、あの金神様がうらめしい。」と歎く。その歎き聲を聞いて知行院雲岳（吉三郎）が山伏姿で出て來る。そして「お前に恨みがあるのはあの金光ぢや。」と云つて、何かお岸に耳うちをする。お岸はそれを聞いて喜ぶ。二人は茶店の床几に腰を下ろして、尚ほ密々と相談をした結果、お岸は茶店の店先きにあつた保命酒を一瓶とつて袖でかくす。

舞臺が廻ると、金光教廣前の場である。神前に禮拜してゐた二三の者が立ち去ると、お玉が出て來て禮拜する。そこへ奥から「笠岡から七里、唯人間の正しい道を往還するばかりぢや」といふ信者、齋藤又三郎（德三郎）が出て來て「おゝ、お玉さんか、毎日よく御信心で結構ぢや、例のお前のお頼みの事は今日は一つ私から金光様へお頼みしてみてあげませう。」と云ふ。一日も早く戀の成効する事を祈つてゐるお玉は、それを聞いて悦びながら又三郎と共に奥へ這入る。あとへお岸が四邊を憚りながら出て來て神前に保命酒の瓶を供へる。遠い所から來た旅の男が中臣秡を高高と誦する。やがてその男も去つて了ふと、花道から權次が出てくる。そのあとから遊び仲間の一人が、權次が博奕で負けた金を催促しながら跟いて來る。權次は土足の儘で神前へあがつて、賽錢箱へ手を突き込む。そして賽錢を握みながら「さあやらう。」と、仲間の男の前へつき出す。仲間の男は、それは賽錢だそんな事をしたら泥棒だと云ふ。權次は、金光はお冥助を人に與へるものだから、俺も今お冥助を貰ふのだ「可厭ならやめとけ。」と手をひく。金を見せられたので、さう云はれると急にその男も周章て出して「そんなら貰はふ」と財布に收める。そして「云つとくが、これは俺がとつたのぢやねえぜ、いゝかい。」と、權次と自分に云ひ譯をしながら、その儘去つて了ふ。

仲間の男を捉へて、こゝでも散々金光の惡口をたゝいた權次は、そろ〳〵供へてある神酒德利をとり出して呑み始める。それを、以前の旅の男が再び出て來て、格子の間から垣間見て驚きながら廣前へ飛び上り、權次から神酒德利を奪はうとする。その騒ぎに今一人の信者が駈けつけて來て、こゝで巴になつて大騒動が勃發する。荒れ狂つた權次は、殆んど凡ての神前の供物を投げつけて、三寶などは足下に踏みにぢつて了ふ。神殿は荒されたのである。それに怖れをなした二人の男は一人は鼻血を出し一人は頭を抱へて逃げ去る。

權次はほつとして、こんどは保命酒の瓶をとり出して一寸口をつける。「何んぢや、甘いものやな……。」と云ひながらも、疲れに咽の渇きを覺えてゐるので呑む。そしてその場へ倒れて了ふ。又三郎が奥から出て來る。彼は荒れた神前を可厭な顔をもせず片付けてから、一度禮拜して、權次を呼び起す。呼び起された權次は、それが又三郎であると知ると又倒れて寢て了ふ。又三郎は、權次を金光教に導いて道德的な人間にしてやらうと「賽錢は神から賜はつたが、今一つ賜はるものがあるぢやらう。」と暗にお玉の事も含んでゐるやうなあたりから、ぼち〳〵と說教を始める。併し勇敢なる權次は返辭もせずに寢てゐる。

雲岳が出て來る。そして又三郎に、金光はゐるかと訊いて「神とやら生神とやら云ふものに逢ひたい。」と云ふ。又三郎は「金光様は今神と對面してゐる。」と云つて、あなたは誰

れかと訊く。すると雲岳は「役の行者の流れを汲む山伏、知行院の雲岳といふものぢや、金光に逢つて宗論がしたい。」と云つて、こゝで二人の間に争論が始まる。雲岳は「狸を使つて愚民をまどわす。」だとか「不動明王の利剣の偉徳を知れ。」だとか云つて、うんとメートルをあける。又三郎は「神も佛も一緒」だとか「何をしようと心の儘ぢや」だとか云つて納まりながら最後に、金光は何ものも敵にはとらん、併し神徳は見せよう。」と、ゐばる。それを聞いて雲岳は、それではあとから大勢の山伏を連れて來て、利剣の偉徳を見せてやると、ぷり〳〵と怒つて去つて了ふ。

寢てゐた權次が急に呻吟き出す。又三郎は「どうした、權次。」と驚く。權次は苦しさに堪えられないで、腹を押へて半身を起す。そして「俺に毒を盛りやがつたな。」と呻きながら、保命酒の瓶を指してそれを呑んだのだと云ふ。藤作とお岸が出て來る。お岸は、權次が保命酒を呑んだと聞いて仰天しながら、それには自分が毒を入れたのだと白狀する。矢張り毒が入れてあつたからと、權次は悲しさうに「何をするんや。」とお岸を恨む。お岸は雲岳の言葉を用ゐて、その毒酒で金光教に一大破滅を生じさせやうとしたのであらう。

金光教祖（多見之助）とお玉が奥から出て來る。お玉は、權次の側へ馳せ寄つて泣き悲しむ。教祖は端然として死苦に悩んでゐる權次を瞶つて「野の中の古井戸へ落ち込んだやうなものぢや。」といふ。そして今毒酒で苦しんでゐる事は「決して神の罰ぢやと思ふては不可ないぞ。」といふ。權次は、神の罰やない、親の罰や。」と苦しいなかから呟やく。それを聞いて教祖も滿足した顔をして、藤作とお岸に、お玉と權次を結婚させても好いかと訊く。藤作も教祖の云ふ事であれば同意する。お岸も勿論異存のありやう筈はない。そこで教祖は、お玉と權次にその毒の入つてゐる保命酒で盃をせよと命ずる。それを聞いて皆が驚く。

藤作とお岸が止めるのも聞かないで、お玉はその保命酒を呑む。「もうかうなつたら自棄や。」と云つて權次も、お玉から瓶をとつて呑む。そして二人は苦悶する。教祖は神徳を見せようと云ふので、苦悶してゐる二人と、驚いてゐる藤作と、歎いてゐるお岸と、何かを豫期してゐる又三郎を背にして神前に端座する。その時澤山な信者が出て來て教祖の左右へ竝ぶ。教祖は朗々と「高天ケ原に……」と中臣祓を始める。會衆がそれに合唱する。

祓に連れて次第に權次とお玉の苦悶が薄らいで來る。卽ち不可思議が示現して來たのである。雲岳がのつそりと出て來て、權次の樣子を凝視めてゐる。いつしか苦惱の影がすつかりと二人の體からとれる。權次がそれを金光のお冥助だと意識した時、喜悦の情に亢奮してお玉に「拜め、拜め！」とすゝめて、自分もその場へ坐つて禮拜する。皆が禮拜する。それを見て雲岳も周章てゝ兜巾脫いで跪く。この祓の合唱のうちに目出度く幕が下りる。

お艶ごろし

「お艶ごろし」は谷崎潤一郎氏の小說を三幕六場に脚色したものである。私がその小說を讀んだのは隨分以前の事であるが、それでもこの芝居よりはずつと好い印象が殘つてゐるそれには脚色の可否とか、技藝の巧拙とかいふものもあらうが、併し何よりも私を可厭に思はしめたのは科白の拙劣といふ事である。きび〳〵とした江戸辯、江戸兒が意氣の唯一の表現手段であるあの刺すやうな對話を、この一座の誰が話し得るだらうか。元來「お艶ごろし」は興味中心の作物である。その興味

は辰巳の意氣を湧出せしむる俠な言葉に盛られてこそ、始て凄艶な美に陶醉する事が出來るのである。これが錯雜した科白で演出された時、幻滅を味はう者は恐らく私一人ではなからう。

殊に、この芝居の重要人物の一人であるお辰に扮した廣三郎の科白は、最も此の情趣を破壞するものであつた。そしてや、終始一貫した科白を遣つてゐたのは清次に扮した吉三郎であつたが、それでも抑揚と響は全然大阪のものだつたのである。

それから脚色と演出法に於て最も氣持惡るく感じた一つは、大詰のお艶殺しの場の終りに春一郎を出して、變に飜譯ものめいた文句を、柝なしで幕があく芝居の科白のやうな調子で云はす事である。この「お艶ごろし」は爛熟した江戸末期の空氣の中に、谷崎氏のアブノオマルなセンシビリテイが滲み出てゐる興味中心のものであるから、徹頭徹尾絢爛な情調を湛えてゐなければならないのである。それに、あのとつてつけたやうな白〳〵しい科白と態度、えゝ、道樂にも程がありやす。

印象記は全部書いて行くと隨分長いものになりさうだから、大詰の場のみにとゞめて、



その他の場面は脚色振りを窺ふ爲めに唯筋書き位の程度に書いて行く事にする。

序幕、駿河屋質店の場。いつも素足でゐるといふやうな意氣好みの駿河屋の娘お艶（我童）は、いましがた出て行つた兩親が、今宵にも緣談を調へて來さうなので、情人の手代新助（德三郎）とそれを苦にしていろ〳〵と相談をしてゐる。その相談の最中、船宿の藏多屋清次（吉三郎）が這込つて來て、店先きの格子の影でそれを立聞く。そして話が爲い加減に詰つて來た時飛び出して、あとは引き受けて屹度夫婦にさせるから、兎に角今から私の家へ來て暫く身をかくせとすゝめる。新助は主人の手前さうもならないと云ふのをとうとお艶もすゝめるので、亡命を承諾する。お艶がいそ〳〵として清次に、お前の方には澤山藝者衆もゐるだらうと訊くと、清次は、深川だから羽織衆の意氣なのが毎日見られると云ふ。それを聞いてお艶は悅し相に微笑む。

駕は直ぐ廻はすからと云つて、入口をあけながら「船宿は義理で駈落三日置き、か、何だこりや柳樽にある文句さ。」と、清次は出て行つて了ふ。お艶は小判を出して來て、否む新助に渡す。そこへ船宿の三太（關十郎）が駕昇を連れてやつて來る。お艶が駕に乘ると駕昇は三太を殘して急いで去つて了ふ。新助は、自分の衣服を取り出して持つて行かうとしたが、いやこれも矢張り主人から貰つたものだから、無斷で持つて行く事は出來ないと、急ぐ三太の聲にひかれて門口へ出る。冷たい雨が降つて來る。駿河屋と書いてある新しい傘に、二人は身を寄せて出て行く。

小名木川河岸の場。夜の雪が河岸の家並に降り積つてゐる。舞臺は蒼い光りに沈んで、觀客席は闇である。お艶の乘つてゐる駕について清次が出て來る。清次が駕を一足先きへやつて了ふと、そこへ清次の女房のお辰（廣三郎）が出て來て、今の駕に乘つてゐるのは駿河屋のお艶だが、お前は私を見捨てるつもりかと恨む。すると清次は嘲けるやうに笑つて「玉は深川さ。」と云ふ。「深川とは？」と訊くと、清次は、新助とお艶の出來てゐる事や、お艶が辰巳の羽織振りに憧憬れゐる事などを話して「深川へ賣りとばし、たんまりと溫まるつもりだ。」と云ふ。新助の事は三太が呑み込んでゐると聞くと、お辰も安心して家路へ、そして清次は駕のあとを追つて、共に別れ〳〵に立ち去る。

新助と三太が相合傘で出て來る。水色の手拭で頰かむりをした新助は實に美しい。新助は一刻も早うお艶に逢ひたいので、清次の家へ急がうとする。うまくそれに相槌をうつてゐた三太が、突然懷から匕首を取ツて斬りつける。手許が狂つて新助の顏前できらつと光る。三太は思はず匕首を後ろへかくす。新助ははつと驚いて、今光つたのは何んだらう？と訊く。三太は、大方稻光だらうとしらばくれる。間もなく再び三太はきりつける始めて自分を殺すのだと自覺した新助は、夢中になつてそれを防ぐ。とたんに三太は物につまづいて石で顏を傷ける。慘然く血の滲んだ三太の顏と、恐怖に閉された美しい新助の顏が重つて慄る時、凄艶の氣が舞臺に充滿する。いつしか匕首は新助のものになつてゐて、彼はそれで三太を刺す。三太は死んで了う。併し、新助は自分が殺したのだとは知らないのである。彼はやゝ暫くしてから自分の手にある匕首を見てぶる〳〵と戰慄く。時鐘が靜寂に鳴り響く。やがて新助はがた〳〵と顫ふ足を踏みしめ〳〵、取り亂した姿で、清次の家を指してよろけて行く。花道をよろけて行く時、觀客席が薄暗いから、新助は人の頭の上

を流れて行く魔のやうに見える。此の場の徳三郎の新助は確かに上々吉であつた。

船宿清次内の場。 お辰が獨りで留守居をしてゐる處へ新助が出て來る。お辰は、三太か？　と訊くと、新助は三太の聲色を遣つて、戸をあけてくれと云ふ。お辰は、新助の首尾はよかつたか？　と尋ねながら戸を開けると、新助が崩れるやうに這入つて來る。それを見てお辰は、はつと驚いたが、度胸の据つてゐる女なので、何をしに來たのだと詰る。新助が、お艶を出してくれと頼むのもきかないで、お艶なんか知らないと、散々毒ついたので、新助は、とうとお辰を柱に縛り、泥棒だ〳〵と喧しく騒ぎたてるので手拭で猿轡を銜めて了ふ。そして血眼になつて家内中を探がす。この家にゐないと云ふ事が判ると、新助はお辰の繩目を解いて「これは私が悪るかつた。」と謝罪しながら、お艶の居所を教へてくれと兩手をつかへて頼む。自由な體になるとお辰は再び泥棒〳〵と叫んだり、新助を罵つたりする。そしてお艶の居所はどうしても云はないのである。堪えられなくなつた新助はまたかつとなつて例の七首でお辰を斬る。お辰は逃げて上手の部屋へ走る。新助は追ひかける。部屋の中でキヤツと云ふお辰の悲鳴がきこえる。

新助が部屋から出て來ると、清次が戻つて來る。その物音に新助は行燈の灯を吹き消す。そして清次とすれ違つて、新助は逃げて行く。

二幕目、深川尾花屋座敷の場。 旗本の高井時之助（松十郎）が、深川の藝者染吉（實はお艶）に日夜耽溺してゐる同じ旗本の芹澤春一郎（多見之助）を引張るやうにして連れて歸へると、そのあとへ清次が這入つて來て、あとを見送つてゐるお艶に、約束通り芹澤から金をとつたかと訊く。お艶は、すました態度で忘れたと云ふ。それを聞いて清次は、お前は芹澤に惚れたのかと云ふ。するとお艶はどうだかととぼける。染吉のお艶は、深川へ賣られてからすつかり羽織氣質の女になつて清次なんかは鼻であしらうやうになつて了つたのである。清次は、お艶を情人にでもしたやうな氣持で、今宵も芹澤からお艶が金をとつたと思つて受取りに來たのである。

清次がふと業平町の親分の家に新助がゐると口を辷らすと、お艶は「えゝ、業平町に新さんが？」と、死んだとまで思つてゐた新助の便りを聞いて驚く。それを見て清次が、逢ひたいだらうと訊くと、「昔の男も可愛いからね。」と云ふ。清次が、新助をいためるといふのをお艶がとめる。清次は、ぢや三百兩の金を芹澤からとれと云ふ。仕方がないからお艶は、それでは今晩「寺島の」と清次へ渡つて「寮に押し込み」とお艶へ戻つて「三本ばかり稼がうね。」と云ふ事になる。清次は、お前も好い度胸になつたと、喜んで奥へ去る。

お艶が獨りになつて過ぎこし方を思つてゐると、何處からか長唄の聲が聞こえて來る。お艶は三味線を執つてそれに合はし、自分も、逢ふておくれな無理ばかり……」と唄ふ。そこへ新助が出て來て、「お艶さん！」「おゝ、新さん！」と云ふ事になつて二人は奇遇を喜ぶ。

新助は、三太とお辰を殺したので自首をしようとしたのであるが、一と目お艶に逢つてからと此所まで來たのである。彼は、自分もこれから自首して出るから、あなたも駿河屋へ戻つてくれと頼む。併しお艶は、藝者稼業が身に泌みたと云つて、それを承知せない。そして、こんな稼業はしてゐても身を任したのはお前一人だと云つて、とど新助の自首を思ひとどまらせる。新助は、自分一人だと聞

いて非常に悦ぶ。

清次の聲がするので、お艶は周章て、新助を庭へかくし、灯を吹き消す。そして暗がりに出て來た清次に氣をかねながら、新助に「今晩、妓丁になつて向島の寺島村へ迎えに來ておくれ。」と云ふ。「誰が？」と不審さうに清次が訊くと、「お前さんがさ。」と云ふ。

寺島芹澤の寮の場。 清次がお艶をつれて、芹澤へ強請に來る。併し、清次は萬事をお艶に賴んだつもりで、自分は柴折戸の外で待つてゐる。芹澤は、今しがた歸つて行つた時之助にすゝめた酒がその場にあつたので、それを注いでやりながらお艶の來た事を悦ぶ何時まで待つてゐてもお艶が話をきり出さないのと、甘い所を見せつけられるのとで、清次はその場へ飛び出す。そしてお艶は俺の女房だといふ處から啖呵をきり始めて「四つにしてえと云ひたいが、そこは金に轉んで……。」と強請る。芹澤も怒つたが、お艶が賴むので三百兩を清次に與へる。お艶は金を箱から出てゐる芹澤の後の姿に手を合せて拜む。

金をとつたので清次は、お艶に、もう用がねえから歸へらうと促すと、お艶は、私は芹澤さんに惚れたのだから、お前一人お歸りと云ふ。それを聞いて清次が怒り出す處へ、仲町の檢番から染吉さんを迎えに參りましたと、箱廻しになつて新助が出て來る。清次は新助と知つて驚き、うつてかゝらうとするのを、お艶が飛び出してとめる。

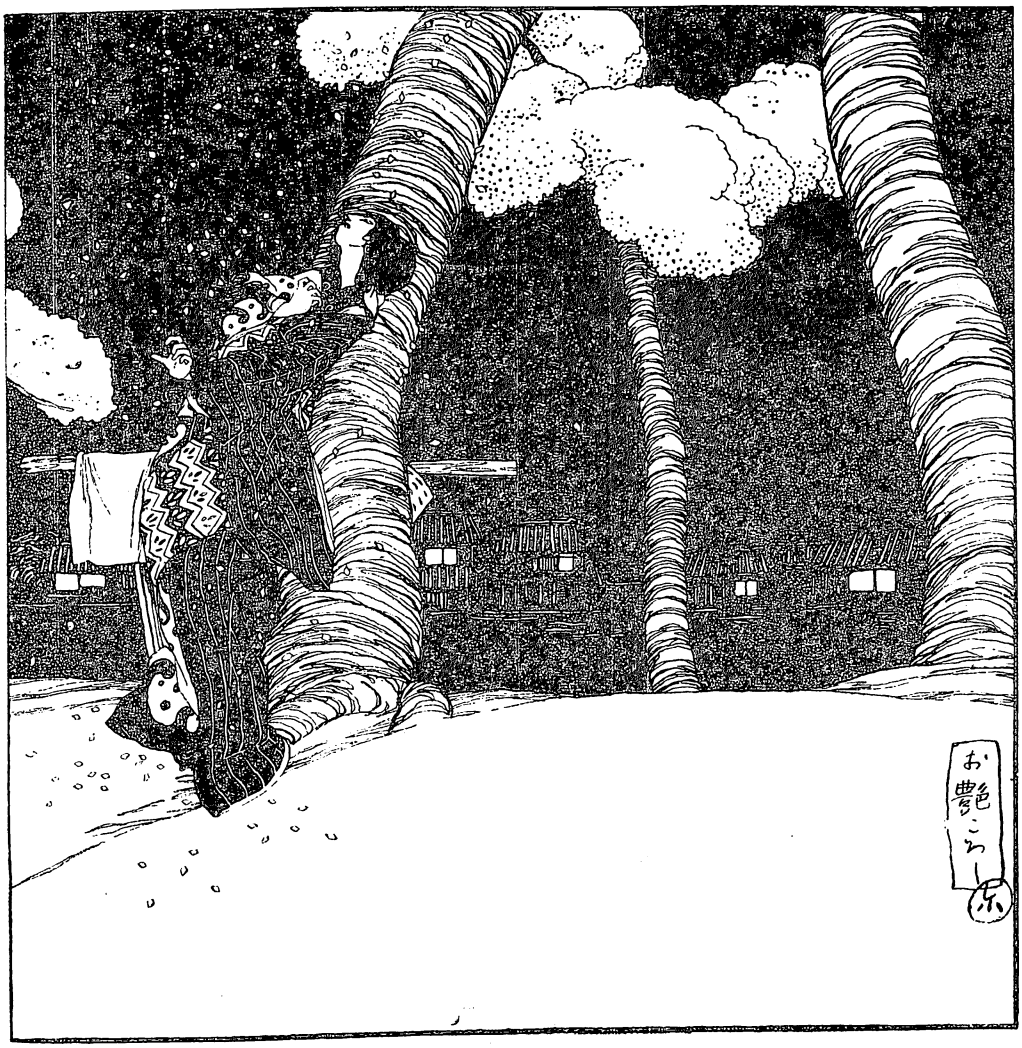
大詰、向島三圍土手の場。 土手には萬朶の櫻が咲いてゐる。對岸の家並の灯が隅田川に映つて、黄色な滿月が靜かに空にかゝつてゐる。上手からお艶を乘せた駕について清次が出て來る。駕舁を去らしてから清次は少し用があるから出よと云ふ。お艶は、何んだつてそんな所へ駕をおろしたのだと呟やきながら駕から出る。清次は、俺も、もうこの土地にはゐられねえから、この三百兩を資本に、上總か房州へ高飛びをしようと思ふから俺と一緒にこれから逃けてくれないかと相談する。お艶は「可厭だよ。」と、きつぱり云ふ。「私はつく〳〵お前が可厭になつたのだよ。」と云ふ。清次は、お前が可厭になつても、俺は未だ未練があると云つて、かうなりや腕づくでもと、匕首をぬいて脅威す。これからお前と別れてみつちりと私の爲めに稼がなけりやならないと云つたお艶も、どうかすると命が浮雲ないので、遂に高飛びを承諾する。

清次は、匕首の鞘が何處かへ飛んだと云つて、あたりを探す。「そんな馬鹿な眞似をするものだから。」と云つて、お艶も探してやる。間もなく清次は「あんな處へ落つこちてらあ」と云つて、匕首を傍の櫻の樹に刺し、土手を河端の方へ降りて行く。お艶はそれを見て樹に刺した匕首を奪ばひ續いて土手を降りて行く。土手下でわつと云ふ清次の叫び聲がある。

手負になつた清次と、匕首を閃めかしたお艶が土手下から出て來る。「うぬ、俺を斬つたな。」と二人が捨闘してゐる處へ、新助が出て來てお艶に力を添へる。匕首は、またいつか新助の手に握られる。清次は「俺を殺しや化けて出るぞ。」と叫びながら、とうと新助の爲めに果敢ない最後を遂げる。死骸は水供養とあつて、隅田川へ葬むられる。

ほつとした新助は「もうこの上はいけない、三人まで人を殺したのだから、わしと一緒に死んでおくれ。」と賴む。お艶は、思ひがけない言葉だと驚いて「何を云つてゐるんだよ、馬鹿〳〵しい。」と相手にしない。新助は、一緒に死んでくれと繰り返へして賴む。

新助が、死んでくれ〳〵と、あまりくどく云ふのでお艶は「お前は本當に氣が弱いね。」



と云つて、「この染吉の妓丁になつて一生私の情人になつておくれ。」と、新助を昏惑しようとする。死神の訪問を受けた新助は、そんな事で中〳〵承知しない。

お艶は、新助の野暮な事が腹立たしくなつたのでとうど「私が身をまかした男と云ふのは、お前一人ちやないのよ。」と云ふ。新助は「一人ちやない？」と激怒する。お艶は、清次にも芹澤にも身を任したと云つて、「それを今まで知らないとは、お前もよつぽど鈍間だね」と嘲ける。新助の血管は破裂しさうになる。お艶は憐むやうな眼付きで新助を見下ろしながら續いて「實は芹澤の春さんには、とうから惚れてゐたのだよ。」と惚ける。新助は激怒を超越して諦の中に自己を見出し「わしが悪かつた。もう何んにも云はない、どうぞ一緒に死んでおくれ。」と、また心中說を提出する。お艶は、まだそんな事を云つてゐると云つて「私は、春さんとしたい三昧をして、酒と色とで世を送るんだよ。」と云ふ。

新助は、どうかして合意心中をしようと思つて昔の事を云ひ出し死を強請する。するとお艶は「執念の強い色情狂だね」と、きつとなるなり、新助の顔を毆る。これで新助も決心



して「もう仕方がない、三人まで殺した。四人の人をば殺さなけりやならない。」と、お艶に斬つてかゝる。「私は殺されても死なない。」と云つてお艶はそれを防ぐ。新助の鋭い刃が身内に這入るとお艶は喘ぎながら「殺すんだつたら、一目春さんに逢しておくれ。」と云ふ。

致命傷を帯びたお艶は、艶麗な姿を櫻の樹にもたせて空を見上げる。櫻の花片がはらはらとお艶の顔に散りかゝる。新助は七首を持つた儘、絶え行く美しいものを凝つと瞶つてゐる。「私のこのすさまじい顔を、屹度芹澤さんに見せておくれでないよ。」と、お艶の息は次第に細る。それを聞いた新助は、うつぶしざまに七首を腹に刺してそれを引き廻す。

春一郎が傘をさして上手に姿を現はす。

そして「武士には武士の血が薄れて行くやうに、女にも女の情けが消えて行く。」とかなんかと面倒臭い事を云つて「女は哀れなものぢや。またあの男も不憫なものぢや。この芹澤も淋しく暮して行かねばならん。」と、べら棒にたわいのない事を云ふ。それを辛棒して聞いてから、櫻の樹に身をもたせてゐるお艶は「春さん、この顔を見ちやいやよ。」と云つて、片肌脱ぎになつてゐる美しい襦袢の袖で顔を、かくす。これで幕。



―劇場スケツチ―

立見場の人々

豐島屋せん

『すみだ川』にも立見場のことが書いてあつた。それを讀んだ時に、芝居の立見場の暗い灯の下を、隱れ家のやうになつかしんでゐる少年が、このけばけばしい都會に外にもゐるとおもつて、淡い淋しいよろこびを感じたりした。それはもう幾年か以前の事で『すみだ川』の宮戸座の立見場を描いた一節に輕い亢奮とうれしさとを感じた少年も幾つかの年を寄つた。その四五年の間には、いろいろな心持を經驗したり、苦しめられたり、悲しんだり、すこやかな澄んだ心が、幾度か混濁した世界に沈んだ。そして、純な趣味も、嘆美も潔癖も幾分か傷けられた。だけれども、芝居を見ることは忘れなかつたので、ひまがありさへすればよく出かけて行つたが、もう、以前ほど、素直な心では見てゐられなくなつて立見場の暗い隅で涙ぐましい心持に成るやうな純な時間がまつたく少くなつてしまつた。さうした感傷的な僅かな時があつたならばそれは非常に尊重しなければならなかつた。

市村座は三月卅一日に四月興行のフタを開けた。しほしほとした樣子の好きな米吉といふ若い役者が、どこか古めかしい感じのする名の時藏になる披露の出物は『嫗山姥』であつた。その外に『伊賀越道中双六』とか『戻り橋』とか二番目には「時鳥雨夜蓑笠」と云ふ狂言が竝べられた。その世話狂言は、先年羽左衛門が歌舞伎座で演つた「浮名異羽織中裏」と同じもので、新藥お巳代と云ふ深川の藝者を、但馬屋と云ふ呉服屋の手代の清七が殺した事實を脚色だものである。羽左衛門が演じたのを見た時に私は面白くつて堪なかつたから、今度もぜひ見やうとおもつてゐた。

四月一日……四月馬鹿の惡戲もされずに日が暮れた。その日は何故だか氣が沈んで、くさくさしてゐたので、また立見にでも行かうかしらと、空を見ると、朝の調子では二三日降るかと思つてゐたのに、所々雲が切れて、思ひがけない頃になつて、薄い夕日が窓からはかない光を投け入れたりした。

……松永町で降りて、泥濘を避けて市村座の前に立つたのは、六時すぎてゐたらう。芝居の前には明るい大きな電燈が、爽やかに光つてゐた。その光を見ると、それがかうした劇場の中の歡樂を代表してゐるやうに思へた私の好きな「光」である。

少札を賣る人は、矢張いつもの人で、一段高い所に二人竝んで跪坐をかいてゐた。一人は禿頭の老爺さんで、一人は二十七八の若い衆であつた。この二人はいつも同じやうにこの札場にゐた。……上の方に、新らしい木の札に「新古演劇十種の內、戻り橋、金二十錢」と書いてあつた。まだ戻り橋かと私はおもつ

た。狂言さへ知つてゐれば、見たいとおもふ幕の開く時間を調べるのは、胸勘定で必ず間違はないのに、今日二番目の序幕と見當をつけて時間を計つて來たのが、一幕前に來てしまつた。五十錢を出して、三十錢のツリと、一枚の札を受取つて中へ入つた。鍵の手に曲つた石の段に足をかけたときに、幕が開いてゐるのを知つて、下駄の足音を忍ばせながら上へあがつた。段を登り切つた所に男がゐていつものやうに私の渡す札を受取ると細長く切つた紙切を引替に呉れた。それを貰ふと私は「戻り橋」がもう半ば過ぎてゐるのを知つた夫はその次の幕の觀覽券の樣なものである。

中は薄暗かつた。そして非常に込んでゐた人達は自分の前に立つてゐる人の肩と肩の間から、すこしでも豐富に芝居を見やうとして首を伸してゐる。

……舞臺は明るく綱と早百合とが何やら話しをしてゐた。うしろに山があつて、小川が流れてゐた。もう「見現し」になつてゐたので、早百合はやがて太い聲を出して、正體を現して綱と、二人の郎黨に追はれながら、舞臺の陰に入つてしまつた。……吉右衞門の引締つた聲、それから菊五郎の疳高な聲、それが暫く舞臺に聞えなかつた。シンとした場内……下手から若い男が一人出て來ると、踏臺の小さいやうなものを置いて行つた。大薩摩が初まるのだ。

間もなく音藏の太い聲が押し出されるやうに場内に流れた。三味線の鮮やかな撥さばき……それが輝くやうに聞えて來た。はげしく動くときは、谷川の水が岩の間を小かくくだけて流れるやうに、またそれが小川のせせらぎのやうに、三味線の音は色々と變つた。絲の音がゆるやかになると、唄の聲が靜かに聞えた。大きな河の流れのやうな、おだやかな調子が人々の心持を靜かにさせた。

三絃が亂調になると、霰のやうな拍手が起つた。それがをさまると唄の聲だけがきこえてゐた。やがて唄ひ終めると同時に、うすい山おろしの音がきこえた。そして舞臺がぱつと暗くなつた。

はげしいツケの音、どうどうどう……と云ふ太鼓の音……。

「音羽屋ァ……」

と私のすぐ側にゐる三十恰好の男が叫んだ……六代目とか音羽屋とか云ふ呼聲がすさまじく聞えてゐた。吉右衞門の綱が出て來るとまた大變であつた。播摩屋と云ふ聲と、六代目と呼ぶ聲が交々亂れて、ただわァわァ云つてゐるやうに聞えた。

吉右衞門と菊五郎とは、暫らく立廻りをしてゐた。菊五郎がその長い髮をぐるぐると振り廻し初めた。と、山を描いた道具幕がするすると下りて來ると、鬼は綱を引つかんだまま　するすると宙乘になつて、上の方へあがつて行つた。

道具幕が落ちると、それは大きな屋根の上であつた。破風の側まで綱は引あけられてゐる。ところが屋根の角のところで宙乘が動かなくなつた。鬼は手を、もがくやうに動かしてゐる科を續けながら、箕の子の上を振あほいで何か云つた。

「どうしたんでえ。早くしねえか」とでも云つたんだらう。間もなく二人の身體は屋根の中央まで動いて來た。と、綱が刀を横に一つ振ると、どツと庇の上へ落ちた。鬼が宙に、綱が片手に太刀と片手に切り取つた腕を握つて、キツと上を見あげた。

音羽屋ァ、播摩屋ァ、とまた怒鳴る人があつた。柝が入つて幕がしまると場内は急にざわざわとして來た。

「戻り橋」を見に來てゐた人が多かつたと見えて、立見場は大いに搖れた。「ええ替ります　お次は十錢頂きます。』とどこかの隅で云つてゐるのが聞えた。

どんどんと人は減つてしまつた。次の幕へ殘る人は、鐵の棒へつかまつて、前通りに一列ゐるだけであつた。私の側には高等學校の正帽をかむつた青年が立つてゐた。無造作にふところ手をしてゐる紺飛白の着物……二三册の本をかかえてゐた。その側に、むかふを向いてゐる女があつた。根の低い丸髷に結つて、ほつそりとした撫肩の、廿四か五であらう、卷煙草を呑んでゐる。

「何だ、お前來てゐたのかい」と云ふ聲がすぐ後にきこえた。振り向くと、後の一段高い所に、二十位のどこかの店の者らしいのに、二十三四位の同じやうな風をした男が話しかけてゐた。

「ああ、戻り橋から見てゐるんだ」

「よかつたかい」

「うん、隨分よかつたぜ。吉右衛門はいいねえ。そりやいいぜ」

「……六代目はどうだい。いいだらう」

「樂々とやつてゐた。もう手練れてゐるんだものね。常磐津が今日はだめだつたよ。あのわれはあたご……ツて云ふ所があるだらう。あすこなんかぶちこわしだつた。それに調子が低くつてね」

「大薩摩はよかつたらう」

「あア。まあね。……だけれども音藏は嫌いさ。變に無粋でね」

「そこがいいんだらう。長唄を鼻にかけて意氣に唄ひでもすればやつぱし打毀しさ」

「……それもさうだね。……おや、幕が變つたぜ」

なるほど幕が替つてゐた。今迄下谷の三業組合から時藏に送つたものが、今度各區の消防から、やはり時藏にやつたもので、あらゆる組合の纏が書いてあつた。四谷のもある……と育つた土地の纏がすぐ眼に入つた。その幕はすぐ變つて、今度中央に大きく魚がしと書いてあつた。と、それもやがて替つて、次は「柳ばし」から來た幕だつた。

「……すゐ分澤山幕が來てゐるわね」と丸髷の女が云つた。連の男は三十位のキビキビした職人風の男であつた。女がさう話しかけたのに對して男は「うん」とうなづいて見せた。

「ほら、御覽さい。あの兩端に澤山くくつてあるでせう。あれを皆引くんでせうか」

「さうさなあ」

「とても引き切れないわね。一日中に引かれないのもあるかも知れないわね」

「だから金がかかるのよ。ただ幕をやつただけぢや濟まねえ。心付次第さ。折角幕をやつても、引かれないぢやつまらねえ」

「だからお前さんは守田に幕を贈いんだね」

「ちげえねえ」大笑ひだ

そんな事を云つて二人は笑つてゐた。女は帶の間へはさんでゐた手を出して、二の腕まで見せるやうにして兩方の鬢のほつれ毛を撫でつけた

……次第に中は込んで來た。私の後には五十五六の小柄な男が立つてゐた。その人が卷煙草をくわへてゐたので、私も急に呑みたくなつて袂を探つて煙草を出したがマッチが無かつた。

「……おそれ入りますが」

私はさう挨拶して火を借りた。煙が蒼白く顏を撫でながらゆらゆらと立昇つた。

「よく入りますなあ。今日は二日目でせう」

と、その人が話しかけた。一言二言話してゐる內に、その人は昔の芝居の話を初めた。坂

彦だの、權十郎だの、團十郎、菊五郎だの…。

「その頃の立見は、夜はあんまり入りませんでしたよ。芝居の方でも灯をつかはないやうな算段をして、朝は早く初めても、宵の口に打出してしまふんです。それに乘物の便は惡し、どうしても夜になつて立見場へ入つて來る人つて云ふのは、近間の人でもなければ來ません。當節のやうなものぢやござんせん」

さう云つて、その人は微笑の中に昔を思ひ浮べるやうな眼付をした。

「それに、見物だつても、當今のやうに品のいい人は來ません。がらがらした人が多くつて、きびきびと騷ぎ立てたものです。近頃は歌舞伎座あたりの立見に行つて見ますと、髭を生かして洋服を着た紳士が、奥さんなんかと一緒に入つてゐますが、變つたもんですな然し、立見場てえ所は、洋服を着て入る所ぢやありませんよ。まつたく、歌舞伎座のやうな所は、他座とはちがつた建てかたですから可笑しくはありませんが、此所だの新富座だののやうに、昔の通りの立見場へは洋服は向きません。

「さうですなあ」と私は笑つた。この年寄はすこし醉つてゐた。どこかで幕を催促する爲に手を叩いてゐた。

「……幕合が短くなつたのは、見物には餘程助かりますぜ。今ぢやすこし幕間が延びるとすぐ見物が湧くが、昔は悠長なもんでしたな芝居をしてゐる時間も、幕の閉つてゐる時間も大して違はないんでさ。さうでもないかな」と、聲を出して笑つた。

「尤もお値段も安かつたんですから、幕間の長いの位、辛抱しないわけには行きませんや。一幕三錢とか五錢とかですからね。新富で團十郎が「勸進帳」をやつたときに十錢で、おう今度の堀越のは十錢とるぜ、なんて云つて感心してゐたんです。ところが今ぢや羽左衛門の勸進帳が三十五錢、此間の雁治郎の炬燵が三十五錢ですからねえ。驚ろきますよ、まつたく。然し、昔しは小屋なんかきたなくつて、天井も低くつてね。私なんざ、御寬の通り脊が小さいんで、梁へ手拭を通して。それへつらまつて伸をして見たものです。今ぢや見よくなりましたし、道具はいいし。……でも、長谷川ァつて云つて、道具をほめる人なんぞちつともゐませんね」

その人は一人で機嫌よささうに種種と話しかけた。

幕は仲仲開かなかつた。方方で思ひ出したやうに手を叩いてゐた。

「……開けろうツ」

「……幕を見に來たんぢやねえぞ」

そんな事を叫ぶ人があつた。

鐵柵の間から、私は場内を見渡した。東も西も、うづらにはあでやかな藝妓や半玉が居たり立つたりしてゐた。御園おしろいの提灯の淡い灯が美しく棧敷の上に竝んでゐた。……遠くで二丁が入つたのが聞えて來て、それが次第に近くなつて來ると、人人は新たにざわついた。

「もつと、前へ出たいなあ」と云ふ子供の聲がきこえた。振返つて見ると、それはこの立見場には珍らしい十五六の少年が十九か二十位のその姉さんらしい人と私のすぐ後に立つてゐた。その女は銀杏返しに結つて黒繻子の襟をかけた下町風の娘であつた。私は少年を前に出して一足下つた。娘はかろく少年をたしなめてゐた。頸足の長い、ほつそりした娘であつた。この姉と弟の感じ易い心に「巳代吉殺し」の芝居はどう展かれて行くだらう。

……柝の音が早くきざまれて、立見場の人も靜かになつた。（四月二日）



道頓堀から鰻谷へ

玉谷五十一

浪花梨園の春、仁左の中座、獨り初日から樂までブッ通しの大入札、道頓堀の人氣はこゝもとに浚はれた形で、一向に冴えませんでしたがお負けに市川齋入の葬禮など、何かと出來事多かつた彌生の江南、そこに表ばかりでない裏木戸の立話、かいあつめて御報申上けます。

梅玉と福助との腹の中 □

下らぬ名跡爭ひと云へばそれまでゞすが芝居道では八釜敷いもの、一つです、何と云つても歌右衞門といふ先生は偉らい男です、とう〳〵悴の兒太郎に福助を名乘らせて仕舞ひました、定めてゴテ付くだらうと大阪でも觀測されてゐた梅玉父子は一向にダンマリで納まつてゐます、駄目な喧嘩と底が知れてゐることを愚圖々々云つたつて始まらぬと早く見切りをつけたのは流石に梅玉です、この人は「忍從」といふことを二六時中モツトーとしてゐる老人で何時かも鷹治郎の氣儘に少し氣まづくなつたこともありましたがジツト堪えて過ごして仕舞ひました、然かしいくら忍從主義の梅玉父子だつて決してお人善しではありません、人一倍利口な人達です、之れに應ずる一策は出來てゐて腹の中へソツト藏ひ込んであるのです、一策とは外でもありません、梅玉の手許には「玉助」といふ名があるのです、玉助といふ名は彼の有名な梅玉歌右衞門の隱居名です、歌右衞門が隱居して玉助となり梅玉を名乘るに至つた由來ある名跡、仁左衞門から梅玉の名を讓られた砌、玉助の名も一緒に今の梅玉の許へ贈りました、だから此際、梅玉は歌右衞門とも表立つて爭はずと云つて兩福助も面白くない處から思付いたのは玉助の名です、自分が玉助を名乘るは二から一へ逆戻りしたやうな都合になるし、丁度好い折だから悴福助に玉助を襲がせたら此方の面目も立ち、蹈付けられた譯にもならず好都合だと悴福助とも相談の上、かういふことに腹をきめた樣子です、襲名披露劇は何時になりますかそこまでは解つてゐません。

辨天座と市村座連中と □

三津五郎と勘彌とは先年、東京の長唄連と共に浪花座へ來て舞踊をのみ見せましたが菊吉等は如何にも御無沙汰過ぎます、之れに就いて大阪ではいろんな揣摩說が傳へられてゐます「久振りの大阪だから若し行くなら先代のに劣らぬ立派な乘込みを仕度い」とか或は「大阪は險呑だと菊五郎が云つて大事を取つに動かぬのだ」とかいつてゐる人もあります又餘りに給金が高いので仕打が逡巡してゐ

るのだとも云ひます、昨年から市村座連は近い中に辨天座へ來る約束が成立してゐる、同座の座主尼野と市村座の田村との間には堅い約束が取結ばれてゐる、けれども世間の景氣が悪いので少し持直した曉に大いに迎へるとの噂が立つてゐます、この噂には根據があります、昨年、辨天座の尼野が突然に上京し、東京で活動して戻つて來ました、尼野は大阪興行界の奇人です、家に巨萬の富を擁し旦那然として一面には紳士として身を處してゐる人です、自分が信じた芝居ならばいくら入りが悪くつても平氣で自分一人で觀ようといふ人です、近年は番頭任で芝居へ顔を出しません、ですから今の辨天座は九州や名古屋の旅役者等の芝居をやつてゐます、「眠れる獅子」と目されてゐる尼野が卒然として立ち上つたのだから大阪の興行界は烏渡どよめきました、尼野はどんな仕事を東京でやつて來たか誰も知りません、尼野は舊の如く上本町の邸内で默つて漢籍を樂んで讀んでゐます、然し噂の市村座連は更に來さうにもありません。

東京役者が入れ代りやつて來るのに獨り市村座連は來ません、大阪の見物は芝居話が出ると「一體菊五郎は何んで來まへんね」と云ひ合つてゐます、中には菊五郎一座の思はせ振りも大概にして置けとブツ〳〵云つてゐる人もある位です。

大阪若手役者の前途は□

どうでせう、靜かに頭を冷やかにして最負不最負などを思はずに考へてやつて下さい、大阪の若手には延若がゐます、德三郎がゐます、我童がゐます、右團治がゐます、壽三郎がゐます、もう一人成駒家の寵兒の長三郎がゐます、これらの前途を考へてやつて下さい。

延若は自身で許してゐる丈けに手八丁口八丁です、何んでもやれぬことはないと信じてゐる強い男です、近くは八百藏の向ふを張つて「安宅」の辨慶をやりました、四月の京都では又々八百藏の向ふを張つて「鈴ヶ森」の長兵衞を出します、昨年でしたか東京で助六流行の節、延若は歸つて來て京都で黑手組の助六をやつてスッカリ東京の助六擬ひのシグサを見せて當時、藝者連に配つた烟草入れには蛇目傘に杏葉牡丹ならぬ杏葉井筒の縫模樣を現はして「どんなもんぢやい」と長い顎を撫で、ゐました、此男東京では評判が好いやうです、大阪でも中々に人氣があります、若手中で人氣第一とも云へませう、然し唯一言にして此人の藝を評せば「達者」といふ二字に盡きませう、何でもやりこなす代りに落着いた持味が出ない、この人の前途には人氣の花の山はありませうが貴い藝術の林には到達の出來得ぬ人であらうと思はれます、けれども強い男です。

德三郎は萎びてゐます、家柄の筋の息子で人氣もありズン〳〵進んだ重みある藝風であつたのが中頃でいろんな事情の爲めに頓挫を來たしたのです、近年、大病以來、當人はヤキモキしてゐますが舞臺が淋しくつて影が薄い、巧者な藝ですが妙に癖のあるセリフが打壞しで一向に揮ひません。

延若や德三郎等に比べて年下の我童や右團治この兩人は困つた男です、此間仁左衞門が中座へ來て我童と一座し『藝が下がつた』と呟いたさうです、叔父さんの最負目に見てもさうです、然し下がつたとは云へません、まだしも近頃はあれで上つて來たのです、叔父さんのイリュージョンと本當の我童の舞臺との間には久しき前から徑庭があつたのでした男をさせると男のやうでなく、女をさせると

女らしくない、これぢや困るではありませんか、此人の利器は美貌です、美貌には相違ないが臺舞顔として色氣が薄い、口元に妙な癖がある、それから叔父さんに小さい時分から従つてゐたので叔父さんの短所が自然と映つてゐます、後援には松美會といふ夥しい連中が控へ、色町では延若に次いでの色男として活躍してゐますが役モメを又しても釀すので松竹では持餘します、嘗つて一度、松竹に反旗を翻し、市藏等を語らひ、太夫元を探して來て地方巡業に出ましたが歩興行で散々損をして再び松竹の手へ逆戻りした始末です、役モメといへば三月下旬、父齋入を失つた右團治もよくモメる男です、延若や我童と共に所謂ボンチ役者です、延若をボンヤン、この二人をボンチヤンと色町では呼んで騒ぎます、右團治も鶴連、新鶴連などいふ大勢の後援を京大阪に持つてゐますが、舞臺と來ると我童と共に兄たり難く弟たり難しで、唯此人の利器は宙乘りだとか立廻りなどの荒つぽい藝ともう一つはだん〳〵粗つぽくなりましたが父譲りのトコトンが——山村仕込みの——達者ですから所作事も出來れば兒雷也だの鯉退治などは獨特の畑です。

壽三郎は稍〻これらの人々に比すると後進ですがメキ〳〵と人氣の出た若手です、これは偏へに鴈治郎に引立て、貰つたお蔭であの不格好な大兵が相當に形がつき、立役又は敵役にも押出しが立派と評さるゝに至つたのですが未だ〳〵之れからです、菊壽會だの壽會だのいふ連中もあります、餘り遊びませんが色町では「壽やん」と云つて殊に南地では人氣者です、不思議なのは鴈治郎と一座する時は藝がグツト冴え、延若等と一座してゐる時はもう一と息き冴えません、まだこの程度の若手です。

最後に長三郎です、十年一日の大根と罵られても當人平氣でニヤ〳〵笑つてゐます、こんなのが晩成するのだと久しく思ひ續けてゐた人も此頃では少し心元なさそうな顔をしてゐます、第一に顔が貧弱です、次に調子が悪いこの二つが長三郎の藝を實質以上に貧しく見せるのです、長三郎は利口を馬鹿で包んでボンヤリと呆けてゐます、應揚な迫らぬ藝風には見どころがないでもありませんが、覺束ない、但し取得は大阪若手中第一の舞踊——東京式の——達人であることです、踊りにかけては大阪で敵はありません、全體、大阪の若手と東京の若手とは舞踊に於いてお話しのならぬほどの相違です、これは土地の事情と先輩の不熱心にもよりませうが若手自らの不鍛練の結果です、長三郎はこの好い畑を持つてゐるのです、振事劇といふ方面の天下を開拓すれば好いのです、親も當人も近年はこれに氣がついたか頻りと稽古をしてゐます、大阪の若手で所作を出さうといふのはこの男と右團治とタツタ二人です情ない始末ちやありませんか、東京は市村座連を始め左團次一派といひ、若手に頼母しいのが澤山あるに引かへて大阪の若手を思へば悲しくなります。

大阪囃子連中の二葉會

昔の大阪の所作事と云つたら大阪の芝居附屬の囃子連が出語りをやつたものです、故人齋入の如きはこれも故人の數に入つた阪東小三郎の唄でなければ山村舞は舞へぬといつてゐました、大阪の囃子連は器用です、清元でも常磐津でも長唄でも地唄でも何でもやります、地唄に對して江戸に生れたそれらを江戸唄と一口に呼んでゐます、それで常磐津でも長唄でも殆ど聞き分けられぬ同一の節廻しでやります、聲量を第一とし、次ぎに聲の美し

いことを八釜敷く唱へます、節廻しなどは聲量と美聲とに任せてドシ〳〵やつゝけるのです、今の常磐津通、長唄黨が聽けば唖然たるより外はありません、三味線に於ても又然りで達者に彈きまくるばかりです、この江戸唄なるものが又豐後と長唄とに二分されてゐます、豐後とは常磐津のとですが江戸唄卽長唄のやうに心得てゐる者もあります、さうしてこれらの人達の唄ふのと東京のと同じ曲にしても同じきは文句のみです、こんな始末だから漸次に芝居の所作地には東京から杵屋連中、常磐津連中のチャキ〳〵がやつて來て占領して仕舞ひ、囃子連は僅かに小劇場とか、よく〳〵東京連が手廻はらぬ場合とか又は常の下座のみの御用を勤めてゐるばかり。

こんな事を何時までも續けてゐてはならぬと數ある囃子連のうちに氣の付いた人達が主唱者となり松竹が後援者となつて今度二葉會といふ會が成立されました、二葉會の重なる連中は唄方の玉村富五郎、阪東德三郎、紋では中井猪三郎、中村新三郎、鳴物では小川源次等で技藝會員は五十名あります、これらの人達は道頓堀の各座その他の芝居附です、目的は東京の長唄を研究し、又上方の獨特たる地唄の復興を圖り、大阪でも東京に負けぬ立派なお囃子連を養成し、時々演藝會を催し、大いに揮はうといふにあるらしい。

右の玉村富五郎の談に據れば、一例せば「奴道成寺」の如きは上方で出來た曲である、こんな類の曲がまだ〳〵ある、又東京に行はれず上方にのみある好い長唄の曲もないとは云へぬ、取分けて地唄と芝居との關係に至つては昔の大阪歌舞伎狂言をあの優雅な澁い落着きのある地唄がどれ位に美しく彩つたであらうか、我々の仲間には先代延若を始めとして古名優の囃子をやつてゐた老人連も大分にある、我々の囃子連は舊夢から覺めねばならぬ時が來た、來たといはんよりもう遲い位だ、これから一生懸命にやるのだと語つてゐました、けれども在來の型を破るのは六ヶしい仕事です、若しこれが貫徹された曉はまことに浪花梨園の慶事です、長唄もさることですが地唄が法師連にお株を取られ、唄へば可笑な盲人聲で、彈けば所謂手事の繁手なチリ〳〵物ばかり、誤られたる地唄、墮落せる地唄で散々なる今日、かういつた連中の手に復興されゝばそれ丈けでも此會の設立の價値は充分に認められます。

近松座の首振淨るり再興

大阪島の内の西北端、四つ橋の東に建つた近松座は大隅の死後幾くならずして、伊達と靜とは文樂へ、人形遣いの玉造、文五郎等も亦文樂へ、團平と錦とは春子との不和から去つた後の近松座は遂に開散となり劇場は入札に出て同株式會社重役數名の所有となり、目下は賃貸をしてゐます、近松座の殘黨の春子以外は何とかして復興をといろ〳〵運動しましたが敗れ、春子を除き、彌雛、菅以外と三味線竹三郎等とが圖り、團平、飾と合し、中村扇、片岡秀丸を始め子供役者大勢を招いて之れを舞臺にかけ、子役連は身振りばかりで床の淨るりに合せて演ずる昔の首振芝居を再現したのは本年の二月でした仕打はなく發起人で芝居を借受けてやつたのです、うまく當つて每興行大入を占めてゐます、大入りで儲かるのは宜ろしいが之れでは近松座の復活ではなく首振芝居の復興に外ならぬといふ評判です、淨るり連四分、子供最負六分の見物です、子役の人氣は素晴らしいもので扇や秀丸等の組見は中々賑ひます。子役の勢力が强くなると共に役モメが出來て手古摺らせるのは滑稽です。

まだ〳〵お話はありますが又その中に——

（三月末日記）

浪花三廓春の踊

和哥乙鳥



大阪の春の踊は堀江の木花踊に始まつて北陽の浪花踊りを名殘りとする。一と昔前までは南地の蘆邊踊が獨り占めだつたが物變り星移るにつけて追ひ〳〵と殖えて九年前から新町が始め出し三年前から堀江もやる、去年から北陽もやる、どちら向いても踊りづくめ、春の夜をジツトしてゐられぬようにする罪な三味太鼓の音、坊子何ぞ今夜の情に堪えんといふ始末、花の乏しい浪花では紅い灯に喚く花に醉ふ人ばかり。

堀江木花踊

三月の十四日から四月の三日まで、建つて三年目の技藝練習場はまだ殘んの木香をなつかしませる門内には幹の太い枝垂櫻が大雪洞の灯の片明りに今を限りと咲き亂れてゐる、近く寄つて見れば幹だけは櫻、花は悉く造花、これが滅法うまく出來てゐるので一杯喰はされる、特に待合席の欄間には西鶴だの、近松だの、像が板額に描かれて懸けられてゐる、今度の歌の題は「在原業平朝臣」ダラリに帶を結んだ可愛い給仕の女の童が菓子と茶とを持つて來る、菓子は都鳥を模した生菓子、下には瓶敷川の板を添え、それに「名にし負はゞいざこと問はん都鳥」の歌が燒付けてあらうといふ、別に特等客には大和業平山から出る「女余慶」のお守をお好ならばさし上げますとある、業平山とやら業平寺とやらは今はもうないとか廢れとか、これから思付いて廓の洒落者が製造のお守「女避けやおまへん女が余慶に出來るといふ結構なお守だ



す」とのこと、弦の廓には思ひ付屋さんありと見え、三月の廿八日には業平の命日とやらで業平祭をやつたさう。

作歌は井關鴫洲、振付は西川お嘉儀、節附は今藤長十郎、鳴物は六郷新三郎、大道具はこゝの自慢とやら、背景は木村芳忠、午後六時から毎夜四回、弦の踊は第一回から歴史物を題材としてゐるのが他廓の名所づくしに比して一異彩、昨年迄は義太夫の素淨瑠璃一場を挟んだが本年は止めた、堀江は由來、義太夫藝者の本場として知られたところ、せめては地方に用ゐて細棹と連彈きでもさせて貰い度かつたといつてゐる人もあつたやうだ。舞臺面は七段返し、第一は奈良雪解の澤の景で二十四人の踊子が杉の間から若菜籠を手にして現はれて舞ふ、踊子の衣裳は濃紫地に花紅葉は雅びてあつた、第二は東五條の巻、正面に御殿作りの大道具、寒紅梅が咲いてゐる、踊子六人で三人は仕丁、一人は業平、二人は供といふ思ひ入れ——第一より第七まで第六富士の巻の半衣裳以外は前記の衣裳のまゝ——業平は廓中の第一流の若手藝者が交る〳〵勤める松子、繁之助、秀丸、玉太郎の四人である、第三、筑摩祭は琵琶湖岸の社頭、踊子は兩花道から左右十六人、手に〳〵鍋の心持ちで銀扇をかざし出る、第四は龍田越、舞臺は龜の瀬の溪流で紅葉をあしらつた頗るの大道具、素囃子で聽かせる、始めは琴入りの靜かな高雅な氣分を見せ、後段急調に變ずる、第五は八つ橋、踊子十二人杜若をもつて舞ふ第六は富士の巻、三保の松原の背景、踊子七人羯皷を打つて舞ひ入つて仕舞ふとセリ上りで踊衣裳の上へ狩衣をつけた業平と白丁の仕丁姿四人とが現れて舞ふ、第七は隅田川の巻で櫻の雲の墨堤を見せ踊子二十四人繪皷をもつて舞ひ納めて打出しとなる。

南地 蘆邊踊

今年で三十二回である、四月の一日が初日で向ふ廿一日間毎夜六時より四回開演、何と云つても春の踊の本場、演舞場の門の南手の洋館が特等の入口になつてゐる、入口で切符と引かへに番附と茶券とを受取つて右へ廻ると組物、茶室がしつらへられその茶室を取卷いて長い卓と椅子とがある、椅子に腰を下ろす、床には和歌の短册、その前の花活に岩藤を活け、銀の皆具の釜、風呂がある、やがて舊弊の髪に結ひ、昔の藝者風俗、下前の衿をグルリと返して裏の紅を見せてあるといふ美人―藝者―が現はれて來てお手前をする、可愛い給仕の女の兒が竹で美しく編んだ籠、それには青と淡紅と二種の袋を縫付けてあるのと別に吉向樂燒の皿に菓子を盛つたのとを持つて來る、見てゐるとお客はこの菓子に添えた紙で皿をも包んで右の提げ籠の中へ入れて持つて歸る――籠と皿と菓子とをお土産として特等客に呈するのである――。

微かにイヤー〳〵と皷の懸聲と連彈の花やかな音が聞えてくる「もう始まりましたさかい、どうぞ」と案内する、二階の待合所を通り拔けて本館の席に腰を下ろす、舞臺は金襖である、番附を見ると立案者森下露風（當場顧問）、作歌生田南水、節調杵屋六四郎、振付花柳輔次郎、山村若子、同はる子、鳴物、望月長左久、小川てるなどとある。背景は木村芳忠、田中芳隆、唄につれて兩花道から十六人宛の踊子が出て來た空色縮緬に神鏡と鳩笛に櫻花をあしらつた繪模樣、之れに金糸で刺繡を施したもの、帶は鹽瀬羽二重に緋とセンサイとの市松型に金糸で櫻の花を散らし刺繡にしたのをダラリに結んでゐる、髪は舊弊の島田である。

金襖が第一で第二は男山八幡の雪景、舞臺





は中門より唐破風極彩色の山門を遠くに望むと踊子十六名、手拭を持つて出で「たれに白羽の」より神の矢をもつて舞ふ、第三は和歌の浦の初春、遠景に權現山から和歌の浦曲一帶の風光を描く、上手、下手から片葉の蘆を持ち八名宛踊子が出て來て後ちに手踊となる、第四、住吉神社の夏、正面に石の大鳥居の造りもの、左右の石垣、反り橋、神社など見える、十六名の踊子、五色の長い房付きの鈴をもつて出て舞ひ後ちに二枚團扇を持つて住吉踊の振りあり、第五は柿本人丸塚の秋月、舞臺上手に筆柿の立木、中央に草の宿、下手に人丸塚あり、後山より月が昇る、舞方十六名金の短册を持つて出る、第六は伊勢内宮宇治橋の春、宇治橋の道具、正面に檜の大鳥居、五十鈴川を隔てゝ、内宮の神苑を望む、こゝへ十六名、菅笠を携へ伊勢詣りの賑やかな春の旅の情緒を利かせた振がある、これが終ると戸帳の幔幕が舞臺際一杯に降りる、ツナギの三味線、鳴物あつて皷唄あつて幕を落すと春日神社の春の景、松杉の間に櫻が咲く、名物の春日燈籠は無數に立つてゐる、それ〴〵がパッと明るいのは夥しい電燈裝飾である、踊子十六人上手の木の間から、又十六名は下手から、花傘を持てると、花の枝を持てると合して三十二人が花やかに舞納めて打出す、特等、一等、二等と一杯に詰つてゐた人は一度に雨崩を打て出口へと向ふ、各等の待合室には第二回の開演を待てゐる人は溢れてゐた。

新町浪花踊

四月の三日、ドンタクの宵から向ふ廿一日間、瓢箪町の婦徳會場に於いて第九回の浪花踊が催される、東手の入口から入ると立關前に紅白の桃の造花がある、立關で下駄札を受取つてズイと特等の待合室に入る今年から弦へ道頓堀の旗の酒場が出張して有

料酒場を一隅に開いた、待合室の西端、廊下を隔て、特等客の爲めに茶席がある、床には英一蝶が信香落頭、牛背の達摩幅が例年の如くかゝつてゐる、南地と同じ舊弊風の藝者が椅子手前をする一方に五色の酒、一方に釜の松風、何といふ皮肉なアナクロニズムだらう、花柳向きに華客を作らうとする某々社の新聞屋さんが眼玉をギロ〳〵させ乍らこゝに群る男女の客のうちから好い種を拾はうとしてゐる『△△さん、どうぞ見のがしてや』と一件を引張れて、それほど氣がかりなれば獨りで來れば好いのに堂々と手を引合つて入つて來るから諞はれる浮名を怖れて眼の鋭い人達に頭をペコ〳〵下げてゐるボンチもある、開幕に間があるので樣敷裏から舞臺裏へ、急な段梯子を中二階へ上ると振附の楳茂都はんが黒眼鏡をかけ、被布のやうなのを着て腰に小さい瓢箪やら根附の類をブラ〳〵提げ乍らお美彌さんと共に入つて來て役者連と何か話してゐる、そこから更に三階へ上ると幾室かの藝者支度部屋に逢着した「大西席」「木はら席」などと各店の貼紙した下にはその店からの出演藝者が屯をなして衣裳をつけたり、帶をしめたりしてゐる、又一隅は化粧所で幾筋かの机を竝べその机の上には背中合せの鏡が夥しく立てゝある。鏡の一つ〳〵には牡丹刷毛で頰を叩くもの、紅筆で嬌唇を塗るもの、舌打ちして櫛を運ばせてゐるもの等の顏が映つてゐる、頻りと、

こゝから一段降りて奥へ進むと廊の女髪結が數名詰めてゐる、こゝへ廻つて來た役員の一人が「髪をもつと早う結うて貰はぬと藝者はんの部屋入りが遲なつてどむならんがな」といふ、その譯は晝間に踊子は各自の髪結の宅へ行つて結ふ——夜は髪結が出張して踊子の髪を繕ふことが主な用事となつてゐる——そのカスである、女髪結連、負けてゐない「イヽエそんな事あれしまへん、早う結うておまんねで、好え加減なことといふてはるのだつせ」と一喝する、「さうやろか」と役員さんはニヤリと笑ふ、左右するうちに幕が明た。

第一は丁字無地に大和の三山—歌傍、耳なし、香具山——を描き、銀泥の霞を引いたる襖、こゝは地方の置歌のみにて、襖が左右へ開けると第二、中尊寺金色堂の雪景、杉木立、光堂あり、紅地色の衣裳の踊子十四人立つてゐる、手に信夫摺の扇子を持ちて舞ふ、第三は高津神社西阪下の春、梅花、玩具店などあり踊子は紅衣と菜花色の衣との二組、全員二十八人、手に〳〵春駒を持つて舞ふ、第四、京都神泉苑の夕立、舞臺を暗くし夕立を利かせ、折々電光閃めく、此場踊子を出さず、素囃子にて聽かせる、第五、武藏野の初夏、山吹の里の茅舍などあり、二十人の踊子が手に草籠もちて振、第六、嚴島大華表、紅葉の遠景、踊子八名、宮島柿を携へて振、道具居どころ返しにて宮島廻廊となる、千疊敷奉納杓子あり、踊子八人、杓子をもちて振、第八は蘆屋川原の螢狩、踊子十四人手に卯の花を持つて出る、第九は洛東清水の春景、櫻の大釣枝多く垂れ、清水の舞臺、寶塔等あり、雨花道より十四人宛、手に黒と黄との渦巻模樣の日傘を持つて出て振いろ〳〵ありて畢る。

今度の踊の歌題「今昔和歌の俤」、生田南水作、楳茂都扇性振附、節調杵屋佐吉、鳴物福原鶴三郎、背景は野村芳國、衣裳は踊子のは二種、一つは菜種欝金、一つは朝日紅、模樣は同じ、肩より胸へかけて枝垂櫻、裾に有職の紅葉（各名所の）、これに金銀の摺箔、又囃子方のは唯地色のみが違つて濃紫、帶は黒地の伽羅錦は金の總匹田、銀の雪輪に雪花模樣を織り出したもの、踊子の衣裳及頭髪は寫眞參照を乞ふ。



東京の芝居は幾干で觀られるか

祝儀不祝儀共料理屋兼帶の歌舞伎座
茶代祝儀は突返す本郷座の本家茶屋
何時申込でも受付ける新富座の猿屋

▼芝居は金を澤山費つて觀る所の樣に云ひましたのは凡ての事が悠長で、金が今より費ひ嵩の有た昔の事です、此節は周圍の仕事が忙しくなつて一枚の銅貨も剝がして使ひたい樣な世の中になつてゐますから、成るたけ金を少なく使つて面白い演劇を觀やうとするのが人情、固く云へば社會の要求です併し長い間の慣習に捕はれて、木戸から留場の手で行つても、茶屋から行つても餘分の費用が掛つて安くは觀られない者のやうに思つてゐる人も有ます、劇場の方では爾う思つてゐる人とは違つて、怎したらば手輕だ便利だ安く見られたと云つて貰へるだらうかと各座方とも頭を惱ましてをります、但し玆に擧げる場代(入場料、觀劇料)は俳優の頭と脚本の料金の高い時に依て各座とも變りますから高い時と安い時との中間を揭げます、菓辨壽は附物のやうになつて居りますが各座ともお斷りになつて外の品を用ゐるのは隨意ですから、五十錢の菓辨壽を止めて十錢の鮨で晝食を間に合はせるとすれば左に揭げる値段より又安くなる者と御承知を望みます、又番付が不用ならば止めて好いので、其時は矢張左の値段より安くなる事になります、酒は各座一合十三錢二合廿五錢見當、立見は新富本郷共其興行に依て違ひ新富は二三月の紙治の廿五錢は格外として平常は十二錢より二十錢位、本郷は八錢より十五錢、安宅ならば二十錢以上となります、各座の觀劇料、小物食料抔は終りに一覽表にしてありますからお見比べ下さい、三座共中以上で見れば平土間で二圓五十錢以上三圓、ズツと安直で又究屈で無くすれば三座共一圓足らずで見られます、左に各座の觀劇程度を揭げませう、

歌舞伎座

▼特等▲ 特等は棧敷、鞠、五人詰、觀劇料一人二圓八十錢、菓子、辨當、壽司五十錢、小物十錢(火鉢、敷物、茶)番附十錢、出方又は茶屋の者へ祝儀一人廿錢(遣らずともよし)〆三圓五十錢又は三圓七十錢

▼一等▲ 高土間五人詰、觀劇料二圓五十錢、菓辨壽小物番附祝儀前に同じ、〆三圓廿錢、又は三圓五十錢

▼二等▲ 平土間四人詰、觀劇料二圓、其外前に同じ、〆二圓七十錢又は二圓九十錢

▼三等▲ 梅松竹と云ふ平土間の背後觀劇料一圓廿錢其他同上〆一圓九十錢又は二圓十錢

▼四等▲ 大入場觀劇料六十錢其外同上、〆一圓三十錢又は一圓五十錢なれども

▼三等四等▲ に限り十五錢均一の辨當が有るから夫れを買ひ、祝儀は出さず、菓辨壽も斷れば三等一圓五十五錢、四等九十五錢で濟みます、見馴れぬ人や地方出の樣子の知れぬ人は梅松竹の三等で見るのが一番便利で安い、見よくつて出入が能く、側に出方がゐるから役者の名も聞けるし、小用所から歸つて來て居た所が知れぬと云ふ不便が無い、十五錢均一の辨當だからと云ても少しも惡くは無い、辨松と花月が交代で拵へるので、辨松の辨當花月

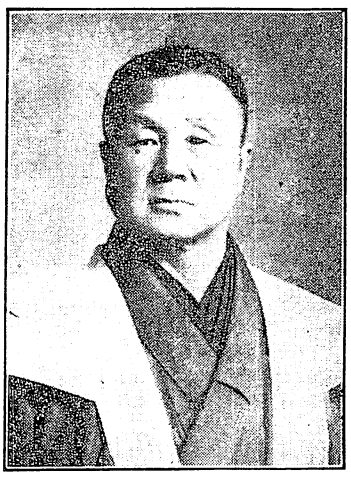
の辨當と云へばカマいと相場が極つてゐます

▼お極り外の食物▲　菓辨壽を止めて何か外の物となれば一人前壽司十五錢、天丼（天金）卅五錢、饅重（竹葉其外）四十錢、食堂に行けば三品五十錢、汁粉五錢、そば五錢、同種物十錢、辨當卅五錢、茶は一瓶五錢

▼土産物▲　運動場に芝居に緣ある繪葉書、櫛、銀紙入、手拭其外一品二錢以上有り、出方又は茶屋に賴めば役者、狂言に因みし物の折詰、箱詰十五錢より三圓迄で出來ます

▼見る方はお早く▲　芝居を觀るならば、序幕の開く前か、開く頃に行くと好きに坐り所が取れて面白味が長う御座います、夫を早く行くのは百姓じみてゐると云ふ詰らぬ所へ力瘤を入れる人もあつて、開いてから二時間三時間態々遲らして來て通がるのは一番いけません、坐り所が滿足しなくつても外へ取換る所は無し、後から來れば前に來た人より割は惡く、出方や茶屋に怎かして呉と云はれても何とも仕やうがなく、切角愉快に來て不愉快で歸る人も時々あります、成るべく早く來られる人は早く來て惡るい所は相談すれば幾干でも滿足出來るやうに取計ひが付くのです、

▼懷中を打明ける事▲　外見を張る場所ではあるが無い袖を強て振る必要はありません、出方に向つて幾干しか持つてゐないが、夫れで場所も見繕つて辨當も附けて呉れと懷中を打ち割つて云つて貰へば夫れ相應の場所の見好い所を取て註文だけの食物を出す事が出來るから、手ツ取早く明けスケに話して貰ひたいと云ふ事です、夫れを躊してゐて自分で場所を極め食物を註文するので、勘定の時に不足を生じ時計を置いて行く人もあるし、羽織を脫いで行く者もある、去年も八王子の手前の在へ泊り掛で出方が勘定取りに行た事があつたそうです



武井定吉

▼花見が芝居になる▲　お花見の四月時分は能く雨が降る者で前夜晴て翌朝降つたり、朝出る時は晴てゐて十時頃に降られる抔と云ふ事は度々有ります、爾う云ふ時には花見の會費として、三人で一圓五十錢有るが花を止めて芝居にしたい、場所も能くして辨當菜を附けて見せて呉れとか、乃至は團體で十五人拾二圓丈け集まつてゐる、夫れ丈けで辨當に酒の二三本も附けて場所も一寸見計つて、見せて貰いたいと云ふ申込があります、其時には又其の樣に取計らいも出來ます、只電話で成るべく早く御申込みになる事が肝要です、早くさへ申込めば思つたより安くつて好い場所で見られるやうに出來ます、

▼婚禮披露の觀劇▲　婚禮の披露を料理店でするとと一人前七八圓掛けても踊一ツ滿足に見られない、其れを歌舞伎座へ御申込になると、お芝居を上等場所でお見せ申して其外に案内所の二階へ金屏風も立て、二度會席膳部の御料理と御酒を上げ、御飯を上げお土産の引物まで附けて夫れで、料理屋で召上ると同じの會費でお引受けお取持をします、之れは度々と云ふよりも毎興行に幾口も有まして招ばれた方は、大喜びで、殊に御婦人は藝妓の代りにお芝居が見られますから一層のお喜びです、其料理も七品以上附き一人前五圓以上何圓でも御勝手次第です、夫れから夫れと呑歩く事が有ませんから、電話で用も足りますし小供衆も連れて來て、殆んど無會費で見せられます、近頃此申込は益々殖るばかりです

▼精進落としにも▲　御墓參の御戻りの精進落としも觀劇を兼てお申込が却々有ます、此方は昨年から始めましたが、精進落としは何方でも御一人前七圓前後も遣つて料理屋で藝妓まで招てなさいますが、御酒の呑る旦那方には藝妓も好いでうけれど、婦人小供には根ツから面白くないので、御代參を出す方も有ります、夫れも當座でお引受をしますると

お芝居を好い場所で見て婚禮の御披露と同じやうに七品以上のお料理で二度お膳を出して引物までして、料理店と同じ會費でも出來まするし、其半分で遣れとならば夫れでも出來ます、之れは好い仕組だと云ふので今では諸方から申込がありまして花見芝居の開いて四日目頃、芝の大丸吳服店さんから此精進落とし觀劇會のお申込を受けてゐます。（出方頭武井定吉君の話）

新富座

▼特等▲　場所は棧敷、鴉五人詰、觀劇料二圓七十錢、菓辨壽五十錢、小物十錢、番附八錢、〆三圓卅八錢（祝儀は出方、茶屋共一人二十錢見當、出す出さぬは客の都合、以下祝儀は一々勘定に入れず）

▼一等▲　高土間四人詰、觀劇料二圓四十錢、菓辨壽其外前に同じく〆三圓八錢

▼二等▲　平土間四人詰、觀劇料二圓、其外六十八錢、〆二圓六十八錢

▼三等▲　平土間の背は、觀劇料一圓、其外六十八錢、〆一圓六十八錢

▼四等▲　同上、觀劇料六十錢、四五等は廿五錢均一の辨當あり夫れに小物番附を合せて〆一圓三錢十二錢の鮨を辨當にすれば九十錢

▼五等▲　大入場、四十錢、辨當廿五錢、小物番附を合せ〆八十三錢、十二錢の鮨を辨當にすれば七十錢

▼番附▲　繪入筋書付は八錢、役割丈は六錢

▼食物と土産▲　鰻重四十錢六十錢（竹葉）天井四十錢五十錢（天金）食堂洋食三品五十錢、壽司上十五錢、汁粉五錢、玉子雜煮十錢、みつ豆五錢、葡萄餅五錢、外水菓子種々、お土産は運動場に有りて歌舞伎と値段大抵同じ、

▼不意の附込も受る▲　此座の茶屋、猿屋の出方鹿さんは名代の穴師で（芝居では座席の事を穴と云ひます、其穴の割り振りをするのが穴師です）如何に滿員で最う這入れまいと思ふ時でも此人に一度申込むとゴムの袋を開けるやうに何處へでも入れるのが不思議な程で是だけは猿屋の獨特の呼物になつてゐます、其外芝居見に就ての鹿さんの爲た成程と云ふ話は新演藝第一卷三月號九十四頁に有ります、參考にお讀み下さい

本郷座

▼特等▲　棧敷、鴉四人詰、觀劇料二圓五十錢、菓辨壽四十二錢（又は五十二錢）小物十錢、繪番附八錢〆三圓十錢

▼一等▲　高土間二人詰、二圓廿錢、其外同上六十錢、〆二圓八十錢

▼二等▲　平土間二人詰、一圓八十錢、其外六十錢〆二圓四十錢

▼三等▲　松竹梅四人詰、一圓其外六十錢

▼四等▲　正面下（松竹梅の竝び）五人詰、六十錢、辨當廿五錢、小物十錢、繪番附八錢〆一圓三錢、辨當を十錢の鮨に代れば八十八錢

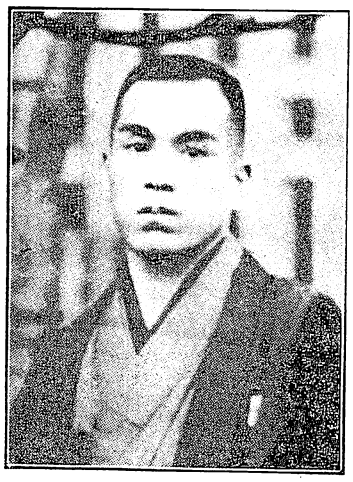
▼五等▲　大入場、廿五錢、外四等に同じく〆七十八錢、辨當を十錢の鮨にして六十三錢

▼食物と土産▲　辨當廿五錢、廿五錢鮨十錢より天井廿五錢より、鰻重四十錢五十錢、食堂洋食三品とパン紅茶付五十錢、そば五錢、汁粉六錢、土産物の値段は他座に同じ

▼松竹直營の特色▲　昔は劇場内に於て出方の習慣として觀劇料、食物のお立替をして置いて、愈よ閉場間際になつて附掛をした勘定書を出して請求しドサクサ紛れに不當の利益を取つたさうです、恁う云ふ惡習慣は松竹直營になると共に全滅させまして、凡て勘定書は一應私し共座内の係が檢印を押し、餘剰錢があれば赤インキで何圓何十錢と記しをして差出しますから其の間に少しも違つた事は生じません、賣店の品物は一々調べて價格と相應しない不當の利益を收めない樣に注意を致し、辨當は宮子松島の二軒から入れますが辨松花月に劣らぬ品物を選ませ持て來る度に檢査をして差支への無い物をお客に出すやうに致して居ります、便所に行たお客に水を掛けます事も種々の弊害を生じますので是は一切致させません。（龜田庫三君の話）

▼本家茶屋の勉強▲　上方では座主の事を本家の旦那と申す所から座主直營の茶屋を本家茶屋と云ひます、夫を其儘用ゐてをりますのですが御存じの無い方は昔からの芝居茶屋の樣に思召て、茶代祝儀は取らぬと云ふけれど其れを取らなければ茶屋を經營して行かれまいから取らぬと云つても遣れば取るだらう位に半信半疑でお越しになる方が有ます、併し私の方では松竹直營の興業ですからお客樣が澤山來て下さいますれば其方で利益が御座いまして本家茶屋も經營して行かれると云ふ譯なのです、其邊の具合を充分お客樣に呑込んで頂きたいのですが未だ一般に知れ渡らないのが遺憾で御座います

▼場所と女給▲　此樣な本家茶屋の經營振を御承知無いお客樣は茶代祝儀をお出しになりますから、委細を申し上げて失禮ですがお戻し致してをります、送り迎へ其外お給仕をする女中は他座で男のする出方丈けの用を勤めてをりますが、御祝儀を頂いて夫れで生活いたすのでは御座いません日給を主人から貰つてをりましてお客の出す御祝儀に目の眩れるやうな者は一人も雇つて有りません



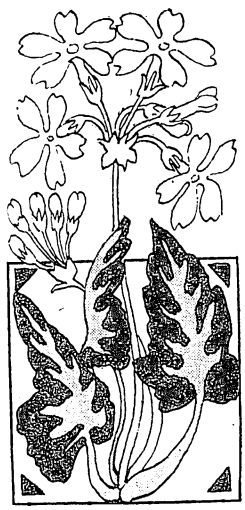
木村平三郎

ので祕密にも御祝儀を頂く事は無いのです、玆處に本家茶屋の最も得意と致しますのは、お場所の極く能い所を毎興行必ず取つて置く事で御座います、平土間の一番觀よい五、六と云ふ所は出方にも取れないので是れがかりは本家茶屋の特長です、夫れ故早くからお附込みになりますると此得難い上場所が取れますが、茶屋は公平にお取扱かひを致す爲めに此場所も矢張申し込順の早い方からお極め致してをります、又早くからお出掛になつて開くまでの時間を戸外に立つて待つておぬでなさる方が有れば本家茶屋の廣間へおぬでになれば火鉢や茶の用意もしてお待ち合せになれる樣にして有ます、

之れは本家茶屋へおぬでのお客樣ばかりに致すのでは御座いません、座の出方に馴染の有る方でも不意に來た方でも御遠慮なく來て頂く事にして御座ます（本家茶屋主任木村平三郎、米原德三郎君の話）

▲誂物と携帶品▲　是れは各座とも其の係りの話ですがお辨當でも其外の食物でも食事の前一時間か、又は一と幕位ぬ前に何々をと註文すれば座方より料理店へ註文して充分注意させる事が出來るが、爾うでなく幕の下りる間際になつてサア辨當だ何だと一度に註文を出されると座方は早く拵らへさせる氣でも料理店の方で間に合はない、其内に食事の時間が過ぎると云てお客は急ぐ、座方では氣が揉めるで據ろなく新規に生魚から切すのが待遠しいので出來てゐるのを持つて來ると云ふ事が偶々あるさうです、觀劇と食物とは附き物でして切角面白い芝居を見ても食物が美く咽へ下からぬと面白味が幾干か減る傾きがある、是非食物は早く誂へて貰ひたいと云ます、又冬は外套頸卷其外お預けになる物が多い、閉場際になつて直ぐ持つて來てとお急ぎになるのが十人が九人迄で座方も實に困る、是れも閉場前一時間か一と幕前かに請求して貰ひたいと

觀劇料	特等	一等	二等	三等	四等	五等	小物	番附	菓辨壽	辨當	壽司	鰻重	天丼	洋食	汁粉	そば	みつ豆	土産	祝儀
歌舞伎座	二、八〇円	二、三〇円	二、〇〇円	一、三〇	六〇銭	四〇銭	一〇銭	一〇銭	五〇銭	二五銭	一七銭	四〇銭	三五銭	五〇銭	五銭	五銭	五銭	五銭	二錢以上	一人三〇
新富座	二、七〇	二、四〇	二、〇〇	一、〇〇	六〇	四〇	一〇	八	四〇	二五	一三	四〇	四〇	五〇	五	五	五	五	同	同
本郷座	二、五〇	二、二〇	一、九〇	一、〇〇	五〇	三五	一〇	八	四三	二五	一〇	四〇	三〇	五〇	六	五	五	五	同	同



芝居の楽番

水木銀之助

芝居の楽番と云ふのは、賄方又惣菜役を指して云ふ通稱で、芝居の興行が始まると、出勤の役者は、時間にも依るが大抵夕飯は樂屋で喰べるやうになる、名題役者は昔からお手錢で思ひ〳〵の食事を取るが、所謂大部屋連と稱する人々は座方から飯と香の物だけを支給される。がまさか飯だけで食事を濟す譯にも行かず。其處で楽番が出來て惣菜役を勤める事になる。是れを芝居道では楽番と云ふのである。

其處で楽番役にはどう云ふ者がなるかと云ふに大部屋連の中でも古顔で、一寸した物菜の煮方ぐらゐは心得た器用な世話好な人物を特に頭取が撰んで役附ける。これが一芝居中の謂ば女房役で、日々大部屋の賄に上る菜の物は凡て此の男の手で作られる。それで此の楽番役に當る男は年寄の餘り舞臺へ出ては働けない家には子供も多く下廻りの給金だけでは暮らしが附かないと云つた樣な役者で謂ば一座のお情けに依る者が多い。一寸斷つて置くが初日と千秋樂の日だけは座方は飯を出さぬ例になつて居る。從つて此の兩日は楽番も立たないのである。

さて楽番は、まづ初日中に大部屋連の一番體のあいて居さうな時——狂言の都合にも依るが大抵六時前後を見計ひ、明日から何幕目に楽番を出しますと落のないやうに觸れる。

そこで二日目になると楽番は、芝居のあく前、豫れて知合の八百屋魚屋からなるべくカサのありさうな甘さうな安さうな物を仕入れて來て、三階の大圍爐裏で焼くなり煮るなりする。炭は座方から支給されるので此れはお入用お構ひなしに使へる。さて楽番の時刻になると新相中、子役等に大きな膳を出させて用意をし、顔が揃ふと上分から順々に席に着く、楽が汁物などの場合には、子役新相中等の役者が後に扣へて給仕を勤める。此れは子役、新相中處の見習ひがなすべき仕事として昔から定められて居る。此れが中々つらい役目で、役者になりたて所謂新相中見習の時代は、役者の辛棒よりも此方を辛がつて中途から逃げ出して了ふ者も多くある。併しそれも昔の見習ひ時代から見ると今は大分樂になつてゐる。此處で一寸面白い事は汁をかへる時で、あいた椀を子役なり新相中なりへ渡すと、まづ一聲張上げて、誰々さん——おかはりと名前を知らしてから楽番に椀を取り次ぐ事である。汁物は大抵二杯が定めで三杯目になると一寸楽番で手加減をする。一々名前も呼ばせるのはそれそこに一寸いきさつがあるからである。序に楽番の毎日つける菜の種類を上げて見やう。汁物では蜆と大根の味噌汁、さつま汁、カレーまがいのごつた煮、煮附類では蒐翁と豚の煮付、牛べん。鹽物ではサンマに鮭に目刺。又時にはあんかけ豆腐、節物では木の芽田樂などでお安い者も偶には出す。この外にはから汁と葱と油揚のつゆがある。前のを縁儀をかつひで大入汁と云ひ後のを樣の似てゐる處から竹虎汁と云ふ。

さて其處で、一體此の楽番の費用は何處から出るかと云ふに、これは中日（興行日數が二十日ならば十日が芝居の中日になる）に出勤中の名題俳優一統から楽番祝儀といふのが出る。名題となればどんな俳優でも弟子の一人や二人は持つて居る詰り自分達の弟子が楽番を喰ふ其の禮に出す祝儀その費用で賄ふのである。然し乍ら狂言に依り名

題數の多い時と少ない場合がある。從つて楽番が受ける祝儀高は一定してない。其處で楽番係りは大凡中日の祝儀高を豫想して一芝居中の經濟を立てないと飛んだ喰ひ込みが出來る譯である。尚此の中目までの楽番費用は一切楽番係りが立て換へて置くので、祝儀が豫算より尠なかつたりすると急に中日後から楽番がひどくなつたりする。自腹を切つてまで御馳走をする譯にも行かないので、これは勢ひ仕方が無い譯だが、さあさうなると大部屋連が承知しない。餘り楽番が儲過ぎるからこんな者を我々に喰はせるのだと、忽ち頭取まで申出る。頭取は其れとなく楽番に注意して其二三日何んなものを出すかを見て居る。それで全く楽番がひどいと決まると頭取は楽番の權利を取上げて了ふ。其處が楽番の手心を要する處で詰り老練でないと總てが甘く行かない。昔の楽番は大部屋中の惡者が專制的に遣つたもので毎日楽業や大根ばかり喰されてゐて一言でも苦狀を云へば下廻りはひどい目に逢されるので仕方なしに楽番の腹を肥さしてゐたのであるが、併し今日では却々さうはゆかなくなつた。かう云ふ工合で今の楽番は却々骨が折れる。名題數が增して祝儀高が多くなれば結構だが、弟子も從つて多くなつて來るから却々樂はさせない。誰れもただでこんな役を引受けるものはない。老練の者は其處に手心もあるのでたまには旨いものも喰はせて多少の利益も其處に見る事が出來るので其の儲が所謂楽番の手數料となり役德ともなるのである。

前にも云ふ通り、昔は楽屋の方が權威が強く、新相中時代には所謂大部屋生活の修業の一周狀として必ず楽番の手傳ひを命ぜられ。よく人參や大根など買ひにやらせられる。それを直ぐ近所で間に合ふものを遠くの八百屋魚屋豆腐屋まで買ひにやらせられる。役を濟してまだ襟のお白粉を落す暇もなく。大きな笊を持たせられて其處まで買ひに行き、それを袖で隱して急いで楽屋口から這入らうとすると、そこらに遊んでゐる女子供達が、ヤア見れえ役者が豆腐を買つて來たぜ、とわいわい噪し立てる、顏を眞赤にしてやうやく芝居の中へ這入ると頭取前でおい〳〵水をたらして行つちや板の間が汚れらア氣をつけねえ、とカス（小言）を喰はされる。あゝもう〳〵明日から役者はやめだ〳〵とよく思ひ〳〵したが、それを思ふと今の相中なんざア楽なものだ——とは圍爐裏端で古參株からよく聞く話の一つである。

新刊紹介

◎淺草物語（久保田萬太郎著）

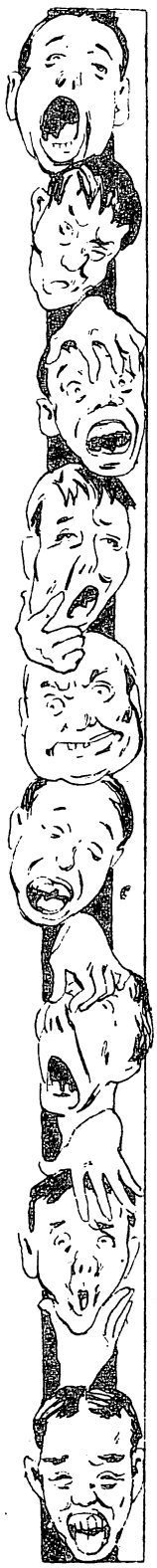
淺草で生れて淺草で育つて淺草に住んでゐる著者が淺草といふ特殊な下町情調を描いた戯曲六篇小說四篇を集めたるもの、生活と作品と好く一致せる點に於て、會話の最自然にして然も一種の哀愁を帶びたる點に於て、今の文壇に何人も企及する事の出來ない一境地を占めてゐるのはこの集である。殊に小說に於て『朝顏』（明治四十四年一月作）戯曲に於て『プロローグ』（明治四十四年八月作）といふ處女作にして然も作者を一時に有名ならしめたものを入れてあるのもこの集をして一層有意義たらしめてゐる。（定價九十五錢、麹町區有樂町粮山書店）

◎校訂長唄集

六代目岡安南甫校訂岡村喜一郎編纂を更に足立朗々が增補したもので古い稽古本を土臺として綿密なる校訂を施し尚必要なる符合を記入したのが特色である。（定價四十錢、神田區鍛冶町富文館淺草福井町松陽堂）

◎箕輪心中　情話新集七篇

岡本綺堂氏の脚本『箕輪心中』と『心中淚花春雨』とを同じ作者が小說體に書直したものである。（定價四十錢、牛込區矢來町新潮社）



樂屋風呂

川尻清潭

豫て好劇家の宿望であつた、梅幸と羽左衛門との顔合せは、計らずも横濱座三月興行の舞臺に實現して、然も出し物は得意の十六夜清心、土地の名妓が清元の出語りに竝んで景氣を添へた上人氣、逆に東京のお客を引寄せた程の大手柄を、興行主の大谷はつく〳〵と見物して、此狂言を其儘同じ兩優の顔合せでいつか一度東京の芝居で演つて見たいとの注文、羽左衛門は素より贊成、所で梅幸の曰く同じ演らせて下さるなら、十六夜が倒の六十にならないうちに願ひます。

右梅幸の十六夜と羽左衛門の清吉が、大寺の貸附所へ强請に出る花道の白に、久し振での二人の舞臺、此相手計りは外の者では氣が合はないと云ふやうな、一寸當込みの文句もあつて、それが又見物に大受け、芝居は連日の滿員で大入大繁昌であつた所から、千秋樂の晩には當り祝ひを六丁目の千歲樓に開き、一座の幹部及び主立つた關係者が集り關内の名妓が杯盤を周旋しての大陽氣、本當にお二人さんの舞臺は格別でしたわねえ、外の人では見られませんよなどゝ、そんな話許りで持切り、兩優も一倍興が乘つて、今度東京での顔合せの時まで、此狂言は二人で取つて置こうとの約束、梅幸は隙かさず、態と女の身振聲色で羽左衛門の背中をポンと叩き、ねえお前さん、其口を忘れずにキツト浮氣をお仕でないよ、

所がまだ一ト月と經たぬ此四月興行に、前月の橫濱座の狂言を其儘、一番目の『先代萩』を帝國劇場で、二番目の『十六夜清心』を歌舞伎座で出す事となり、然も歌右衛門へ十六夜の役が廻つたのを、歌右衛門は柄にないと再三斷つたにも係らず、これは書卸しに半四郎の勤めた役ゝ言はゞ『玄治店』の與三郎が蝙蝠安の玉に遣はれるのと同樣、おさよは清吉の玉に遣はれて居る役、それには先代菊五郎が清心を勤めた時にも、亦團藏が清吉を勤めた時にも、殊更に福助に十六夜をとの註文もあつた程の嵌り役、どうでも承知を仕て貰ひたいとの掛合、間へいろ〳〵の人が入つて漸くに納つた話を梅幸が聞き、成駒屋の兄さん

て雜誌の口繪の寫眞で樣子のいゝのに思ひを焦して居た所、蟻の思ひも天とやら、其小山内先生が橫濱座へ見物に來られたのを、座の主任の遠藤爲春がそれと知らせたので、小田切の胸には俄に波を打ち、せめて一ト言でも口を利いて欲しい望み、丁度幸ひ小山内氏は急に東京へ電話を掛ける用が出來て、それを仕切場へ賴みに見えたのを、主任が氣を利かして小田切に申附けた爲、面と向つてカーツと上氣は仕乍らも嬉しく御用を勤めたのを名譽として、扨其夜の打出し後に主任の前へ兩手をつかへ、私はもう、橫濱座のあらん限り御奉公を致します、

帝劇三月興行の中幕に、六代目が得意で出した『鏡獅子』は、新歌舞伎十八番の銘を打つた、市川宗家の許し物乍ら、團十郎歿後に於ては、殆んど菊五郎の專賣物のやうに好評を博し、伊原青々園氏は、是非尾上家の十種に加へたいと迄激賞された位、本人も亦皮肉な振事を充分に腹に入れて、然も故團十郎の癖を能く取入れた大苦心外に眞似手の無い味ひを出して居たのを、或日の事梅幸が見物して悉く感心し、六代目として踊の巧みなのに不思議は無いか、掌の白粉を薄くして赤味を見せたのは、流石色氣を忘れない心掛けに恐入ると褒め立てれば、六代目がそれを聞てハテ妙な所が氣に入つたものだね、

喜劇の親玉曾我廼家五郎一座が、紀尾井坂に伏見の宮邸の觀櫻會に餘興出演の依賴を受けて、一同無上の光榮を喜こび合ひ、其當日は朝湯に身を淸め、羽織袴の禮服美々敷着飾つて參邸の運びに立至り、扨座員を集めて嚴に申渡しけるは、謹みに謹みを重ねて必ず麁相なきやうにと云ふのを第一に、其外の心得事細かに言聞かせ、萬々手落ちあるべからずと觸れ出しければ、出勤俳優一同は仰せ畏り奉り、勿論違背致すまじと挨拶をする所に、當日の舞臺に役の無い連中がずつと罷出たとへ持役は無いにも致せ、せめては宮樣のお邸内の土だけでも踏みますれば、一代の面目家の譽れ、何卒此晴れの場所に御供を願ひたしとの賴み　さりとて用の無い者はどうにも仕方のないを、五郎はハテ何をがな思案投首、末座の一人おそる〳〵膝を進め、私共は衣裳屋臺屋に化て其荷車を引て入込ます、

右曾我廼家一派が新富座三月興行を開演中の事、『五萬圓』と題する脚本を上場の手都合にて、狂言の筋は上海の富豪を面白く取仕組んだ物であつた所、いよ〳〵初日の初日に警視廳から不認可となつて大騷ぎ、そうかと言つて豫備の新脚本は出來て居ず、どうにか許して貰ひたいと再三嘆願の理由は、現に此富豪なるものが上海に行はれて居ります以上天下公認の事實を脚色致しましたのに、別段差支が無いと信じます、特に寬大の御取計らひを願ひ上げますと申出れば、係官はいつかな聞入れず、如何やうに陳ずるとも相成らぬとの言渡し、そこを何卒と押して取縋るをえ、諄ひわ、それ程演りたいものならば上海へ行つて興行致せ、

是も矢張右一座が二の替興行中の事、大喜利の『勸進帳』を濟ませると其儘、舞臺に出て居るだけの俳優が、我先きにと風呂場へ駈け着け、一刻も早く歸り支度をする事が、やがて競爭となつて、今日は誰が一番だ、昨日は誰が先登だと云ふ大騷ぎ、負け嫌ひの五郎は、どうにかして一着を占めたいものと考へ

が十六夜に出ちやァ、私の横濱の十六夜が宿場女郎になつて仕舞ふ、

横濱座の千秋樂に、『先代萩』の竹の間で、村右衞門の鳶の嘉藤次が、いつもの通り天井から落ちて縛められると、羽左衞門の八汐がずつと傍近く立寄り、此日に村右衞門の馴染みの神奈川藝者勝奴が見物に來て居るのを、態と舞臺で素破抜いた大そしりの白に、イヤナニ嘉藤次、そなたは豫て外記左衞門殿の槍持、勝奴とは親しい中であらうがなと一本參れば、村右衞門は不意を喰つて目を白黑、アイヤ一向に存じませぬと云ふを、知らぬとあれば拷問に掛けて白狀させうかと責られて、サアそれはサア〳〵と繰上げになり、村右衞門は現在目の前に其女が居るだけに引込みが附かず、グット詰つて情けなく羽左衞門を見上げ、よろしくお察し下されい、

是も亦同じ日に同じ幕での大笑ひは、吉三郎の小牧が鶴千代の脈を見る所、平日は此件さへ濟めば、八汐が聲を掛けて『其方に用事はない、次へ下つて休息しや』と引下れるのを、此日に限つて『しばらくそれに控へて居や』と申渡したので、哀れや小牧は下手に座つた儘引込む事が出來ず、然も吉三郎が馴染藝者の戀香と云ふが、是も目の前に見物して居るのを、羽左衞門は豫てそれと心得て居るものから、聲を張上げ『コレ戀香、嘉藤次を呼び生けや』と命ずれば、吉三郎は大面喰ひ無據立上つて活を入れ乍ら、小聲で村右衞門に私語で曰く、『早くい、役者になりたい』、

『十六夜清心』の序幕へ出る小姓の求女は、書卸しに小團次が清心を勤めた時、先代菊五郎の役に當り、舞臺の上で小やかましく言はれた物、其後五代目菊五郎が清心を演る役者になつてから、亡くなつた菊之助、今の羽左衞門、今の六代目、三津五郎、丑之助、近くは横濱座の又五郎まで、いづれも此小姓を勤める者は、恐らく相手の清心に駄目を出されないのは、一人も無いのが不思議な位、それ程の難役でもあるまいに、一體どう云ふ譯だらうと羽左衞門に聞けば、アノ小姓は丁度聲替りの濟んだ年頃の者が勤める役、つまりは小言も言ひい、のに、又一つは自分が小姓を勤めて叱られたのを、清心を演る役者になつてからの意趣返し、然も自分がいぢめられた覺えがあつて見ると、それは全く註文を出さなければ、舞臺の上の形ちが整はない所があつてこれが皆んな僅な事で氣の附かない箇所なのです。

市村座四月興行の中幕に、六代目が『新古演劇十種の戻橋』を勤めるに就ては、前々手心はあるもの、、例の凝り性から尚一應型を糺したい熱心から、兄の梅幸へ其旨を通じて教へを賴むと、此振を能く見覺えて居る梅三郎が代理に出張して立つて見せたのを、六代目がすつくり寫して貰つての口上に、今度は悉く兄さんの通りに勤めますから、左樣御承知下さいましとの挨拶、梅幸が是を聞て、ナーニ私の型ぢやァないのだから、亡父さんに似るやうにするのがい、、

横濱座の日雇ひとして、數ある女ボーイのうち、小田切と呼ぶ廂髪美人、夙に文學思想に富み、客の案內をする用事の外は、幕が明いて居ても舞臺よりは小說に目を通す方が多く、新刊の文學書類は取替引替懷中を離さぬ程の熱心殊には青年文士の著作に憧憬れて、其中でも一番大好きなのが小山內薰先生、豫

或日の事部屋までは戻らずに、道具裏で衣裳を脱いでみごと、樂屋風呂へ眞つ先駈け、板渡しへ足を掛けると共に、スツテン轉りの大失敗、したゝか横腹を打つてウンと一ト聲、其處へ笑將が二番手に走り込んで、浴槽の中へドンブリと飛込み、第一番！と叫んだのを、五郎は殊の外に口惜しがりはしたものゝ、急所の痛手にたまり得ず、其晩から醫者へ通ふ體になつて、よろしい、覺えて居ろ、

五郎は何がな笑將への仕返しを考へて居た所、自分で調伏の法を書くのは露見の元と策戰おさ〳〵怠りなく、部下の蝶六に命じて計略を傳へ、笑將が芝居から歸つて宿屋へ寢た頃の時刻を見計ひ、女文字の手紙を持たせてタクシ——を迎ひに出せば、根が女好きの事とて忽ち其手に乘り、精々役者らしい拵へに派手な長繻絆を着込みどうも、お待遠樣でしたと、運轉手に迄愛嬌を振蒔て出掛けた所、手紙の文句に記してある『歌嵯峨』と云ふ待合が見當らず夜中の三時まで日本橋、よし町、新橋と探し廻つてそれでも分らず、一體何處から言附つて來たのですと聞けば、會社へお女中が手紙を持つて頼みに見えた計りとの曖昧な返事、扨はかつがれたかと氣が附たのはもう遲く、元の宿屋へ引返してすごすごと自働車を下りれば、運轉手はマツチを擦つて計算器を取調べ、料金は七圓廿錢になります、

明治座の四月興行に、堀越福三郎の出し物として見せた『車引』の梅王丸は、前々旅の興行で手心もあり、更にお師匠番の新十郎に就て磨きを掛けた物、本人も充分市川流の荒事で日に物見せん大抱負、扨松王丸は親類格の小團次に納り、次に櫻丸は、初め壽美藏へ持つて行つた所、二番目の『革足袋』で久松に出て居ますから、どうぞ御勘辨を願ひますとの挨拶、それから又五郎へ持つて行くと、何分一日出通しですから助けて戴きたいとの事、無據松蔦へ持込むと、私は女形ですからお受けは出來ませんとの斷り、斯う行詰ると奥役も途方に暮れて又元の壽美藏へと逆戻り、どうぞ御同門のよしみを思召て御受け下さい、

歌舞伎座四月興行に出勤の猿之助は、序幕の『矢の根』に顔を出して、跡は『道成寺』までの間を遊んで居る退屈凌ぎに、清元の桂壽郎と花月の權ちやんと三人連れ立つて、何か珍な事で時間を費したいとの目論見、どこに仕やうとの相談が、芝浦がよからうと取極り芝橋で電車を下りてのぶら〳〵歩き、精々芝浦の氣分が現はれて居る待合を撰んで押上り、不取敢藝者を掛けて呉れと頼めば、お泊りなれば三圓五十錢、お歸りなれば一圓五十錢との事、それでは歸る事にして三人呼び玉へとの註文を出し、やがてお座敷へ出て來たのが至つてお手輕な代物、サア〳〵陽氣に騷いだりと、先づ都々逸から喇叭節、お前とならば何處までもと云ふやうな事で、追々賑やかになつて來た時、女中が罷出でお銚子を附けませうかとの伺ひを僕達は酒は飲めないから此摘み物の豆で澤山だ、それよりはもつと三味線を彈て、清元でも聞かして貰ひたいと命じ藝者は心得て大眞面目に『冴え返る』を語り出す、それが又絃も節も申分の無い怪しい物猿之助は悉く感心して、一體それは何だと聞けば、アラ知らないの三千歲よ、桂壽郎はこれを受けて、三千歲とは何だ、直侍の事よ權八郎が重ね掛けて直侍とは何だ、仕樣がない人達だねえ、芝居だわよ。

中村扇雀の事

大愚堂主人



扇雀は捨子

天下の名優中村雁治郎の秘藏息子、中村扇雀、一名中坊ちやんは、明治三十五年二月十七日午後六時三十分の生れです、此時雁治郎が丁度四十三才の後厄でした、雁治郎には扇雀の前に女の子が一人ありましたが、それは赤子のうちに亡くなりましたので、扇雀の生れたのが、大阪では厄年の二つ子と云ふ忌み事になるのです、所で生れて六日目――是を六日だれと云ふ――の朝、其子を捨てると云ふ古例に從つて、生れて間の無い扇雀は、乳母――雁治郎の男衆鈴木善七の女房お鹿、今でも附添つて居る女――に抱かれて捨てられたのです、併し是は言ふ迄もなく本當に捨てるのではありません、言はばホンの形式だけの事で、それも前々から打合せてあつた、故中村霞仙の家の門口へ捨てに行つたのです、霞仙方では早速に右の捨子を拾ひ上げて、其一日だけを家に置て、神前で名前を選んで好雄と名付け、夜に入つてから霞仙夫婦が改めて雁治郎の宅へ連れて來て、『實は今朝がた家の前で斯う云ふ可愛い子供を拾ふたのや、是非貰ふて下さらぬか』との申込みで、雁治郎が快く承知をして自分の子にしたと云ふ次第それから先は蝶よ花よと可愛がつて育て上げ即ち今日の扇雀となつたのです。

親父の喜び

好雄の初舞臺は卅九年の十二月、京都南座顔見世狂言の夜の部の中幕、『太平記忠臣講釋』矢間喜内住家の場に出る疱瘡子の太市郎此時の役割は右團治《故齋入》の喜内、福助《今の梅玉》のおりゑ、離廷の眞弓、雁治郎の重太郎でしたが、父雁治郎の身になつて見ると、まだ漸く五才になつた計りの倅、たとへ本人が出たいと云つても、一ト口でも白のある役はむづかしいと危ぶんで、萬一イザと云ふ間際に子供の我儘から、モシも舞臺へ出るのを嫌がりでもしたら、それこそ取返しが附かないと心配をして、身替りの子役に嵐巖笑の弟子の巖右衛門と云ふのを賴んで、初日二日はそれが出ましたが、三日目になると好雄が何でも出たいと云ふので、福助と離廷だけに此旨を通じて、雁治郎には心配をさせない爲に態と知らせずに、幕が開てから福助のおりゑが屏風の中から太市を抱て出て、雁治郎の重太郎の目の前へ突附け、『大市は可愛う御

座んせぬか』と好雄の顔を見せましたので、雁治郎は不意の事と餘りの嬉しさに、自分の白をすつかり忘れて仕舞つて、暫くは默つて好雄の顔を眺めて居た事が、今でも一つ話に殘つて居ます。

舞臺で大便

併し流石は名優の倅だけに、初めて舞臺へ出た子とは思はれない上出來、『と、樣いなう』の白も立派に言へましたし、又重太郎が花道へ入るのを追駈けて、『とゝ樣いなう〳〵』と兩手を擧げてウロ〳〵と揚幕へ入りましたのには、樂屋は勿論成駒屋びゐきの客の一同が、涙を流して喜こびましたのです、それから引續いて每日出勤して居ますうち、丁度一週間目位の日になつて、矢張いつもの通り屏風の中に寢かして置て、後見の箱登羅と乳母のお鹿が、出になる迄の間を、菓子を當がつて繼いで居ると、いよ〳〵舞臺へ顏を出す間際になつて、好雄は乳母に取附て、『乳爺大便が出たい』と言出したのには大弱り、そうかと云つて子供に我慢をさせる譯にも行かず、仕方なく便所へ連れて行く、舞臺ではそんな事は少しも知らずに狂言が進んで、どうしても子供を出さなければならない破目となつて無據幕切れに遣ふ抱人形を福助のおりゑが抱て出ました、それまでは見物も氣が附かなかつたのを、好雄は大便を濟ませると其儘、すぐに舞臺へ出やうと言ふので、箱登羅が抱いて出て、中途から人形と取替へました時には、見物が手を打つての大喜こび、舞臺の人も皆んな吹出して暫くは笑ひがとまらず、飛んだ御愛嬌を演じた事がありました、尙一寸お斷りをして置く事は、好雄が乳母のお鹿を差して『乳爺』と呼びますのは、お鹿の亭主の善七を始終『爺や』と言つて居る所から、其女房に乳のあるのを取つて名付けたもので、いまだにお鹿の事を『乳爺』で通して居ます。

祈願の參籠

其後好雄は段々舞臺好きになつて、端役でも出るやうにして居ましたが、七才の四十一年四月の中旬　岡山旭座の開場式に、福助の政岡で千松を勤めました時、『狆よ來い〳〵』と云ふ白が言へず、千秋樂まで『チンヨトイトイ』で濟ませましたのは愛嬌があります、元來此好雄は赤ん坊の時分から非常に疳が强く、兩親も是を殊の外に心配して居ましたが右團治の興行中、八里程在へ入ると木鍋神社と云ふ疳の神樣があつて、不思議に御利益があるとの話を聞く所から、此芝居を打上げると其儘、乳母の夫婦が附添つて、泊り掛けで參籠をしました事もあつた位、是だけでもどれ程好雄を大事に掛けて育てたかゞ分ります其效が見えたものかどうかは知りませんが、好雄の疳は綺麗瀟洒と癒つて、皆さん御存じの通りの、實におとなしい坊ちやんになりました。

五錢の白銅

尙各座出勤の主なる役々を擧げて見ますと四十一年の九月に大阪の中座で、雁治郎の『增井兵助』に筆松、四十二年の一月に同じ芝居で『大江山』の大詰に、一本足から引拔て禿の小よし、同年十二月に京都南座の顏見世に『先陣館』の小四郎を勤めました、好雄が此小四郎を勤める迄に一寸お話があります、それは同じ年の十月に、雁治郎が東京の歌舞伎座へ出勤して『先陣館』の盛綱を勤める事になつた時、日頃勝氣な好雄は、どうにかして此東京の晴の舞臺に、小四郎を勤めたい望み

でありましたのを、父の雁治郎は中々許して呉れませんでしたから、子供心にも是を殘念に思つて居た所、歌舞伎座を打上げました歸りに名古屋の御園座で、雁治郎が再び『先陣館』を出す事になつたので、今度こそと思込んで、小四郎に出勤したい志願を述べたが、雁治郎はそれさへも聞入ませんで、小四郎の役は外の子役に振られたのを、好雄はいよ〳〵口惜しく思つて、其年の十二月の京都の顔見世に、又『先陣館』の出る話が耳に入ると、今度は作者の食滿南北に逢つて、五錢の白銅一個を丁寧に紙に包んで出しまして、『是を上げますから、白井（興行主）さんに賴んで、どうぞ私を小四郎に出して下さい』との強ての賴み、其熱心な事に親父の雁治郎も漸く得心して、好雄の願ひはやつと聞入られたのです

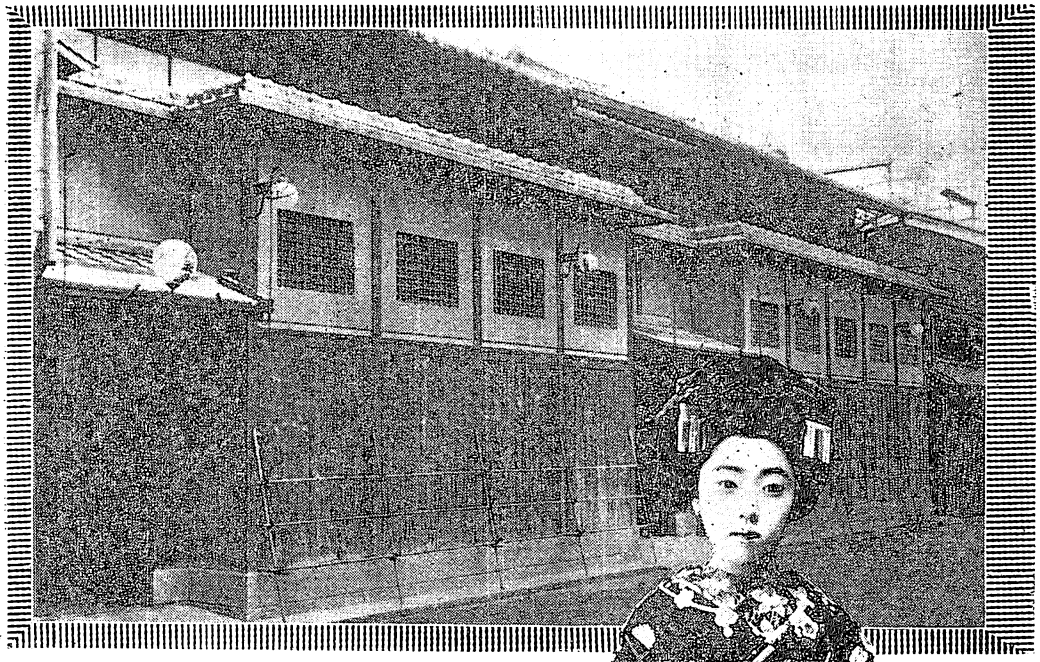
小便の言譯

小四郎を勤める事になりました好雄の喜こびは天へも昇る心地、一生懸命に稽古を勵みまして、先づ最初白だけをすつかり覺え込み次ぎに仕科の稽古に取掛つて、玉屋町の自宅へ三味線彈きの友太郎と一菱太夫とを呼寄せ奥の廣間を稽古場にしての大車輪、どうにかして此役で當りを取りたい決心で、それには順序として義太夫を腹に入れて置く必要から脇目も觸らずに習つて居ますうち、餘り稽古に身が入過ぎて、小便に行きたいのを堪へて居たのが、とう〳〵我慢が出來なくなつて、尾籠なお話ですけれど、坐つた儘で洩して仕舞つたのを、それでも席を離れずに腑に落ちる迄繰返し、扨いよ〳〵稽古を濟ませて、どうにも仕方なく立上ると、附添の者が忽ちに是を見付けまして、『ハテおかしいな、誰が水を零したのだろ』と言へば、好雄は態と眞面目になつて、『なんだすやろな湯が零れて居たのやろか』と一寸思ひをして天井を見上げ『ア、分つた、誰か二階から小便を垂れたのと違ひますやろか』、とテレ隱しは言ふもの、顏を眞赤に染めて居る可愛らしさ氣の毒さに附添もそれと悟つて、『そうだすやろ』と掃除を仕た事があつたのを、此頃になつて其話を持出して揶揄へば、扇雀は澄した物で、『一寸子供の時分其位に氣が働いたのや』

途中の怪物

本人の出し物としましては、四十三年の四月に大阪の中座で、中幕に『阿新丸』を勤め同年十一月二日初日の中座の興行から、中村扇雀と改名して『在原系圖』の狂言に、梅玉の蘭平で繁藏を勤めたのが九才でした、次に四十四年の二月、堂島座の開場式に『淀屋辰五郎』の書き物で、大役に出來て居る小僧を勤めて居ました所、その八日目の事、玉屋町の自宅から出勤の途中、今橋の傍で荷車とぶつかつて俥から轉げ落ち、左の眼の下に疵が出來て大騷ぎ、早速お醫者樣に見て貰ひますと、一週間位大事に療治をしなければならぬと言はれましたのを、本人はどうしても承知をせず、『わたい體は何とも無いのやから、痛いのさへ我慢すればそれでエ、のやろ、わたい今日も舞臺へ出ますわ』と言張り、兩親が止めるのも聞かず、顏の半面に繃帶をして舞臺へ出た事がありました、其後は同年三月丸の内の帝國劇場の開場式に、父雁治郎の政右衞門で『饅頭娘』を勤めましたのが、扇雀としての東京の舞臺の初お目見得です、跡は最近の事ですから皆樣が御存じの通り、尙舞臺以外の面白いお話は、又項を改めましていづれ其うちに……

（五、四、八、日）



大阪南地の大和屋

桃仙醉客

老女將お丑さんの采配振

梅の浪花の歡樂鄉、五座の櫓と細く流る、道頓堀の川水を隔てゝ、晝夜絃歌の聲湧く戀所、宗右衞門の一廓に富田屋と共に竝び稱される、大和屋は、見世を開



吾秀屋和大地南

いて已に二十三年、今日までに籍を列ねた美人實に九百二十七人と云ふ大多數に上つて居るが、お茶屋の方は開業以來未だ七年にしかならない七年の短日月に富田屋と肩を竝べる代表的の茶屋となつたのは、一ツに實際老女將おうし婆さんの振る采配が宜しきを得て居る結果と云はねばならぬ。

老女將のおうし婆アさんには子と云ふ者が無いから御茶屋の方は弟の娘おきぬさんを貰つて經營させて居る、見世の方はおきぬさんの實弟阪口祐三郎君が名義人で、抜け目の無い戀の懸引をして居る、此の祐三郎君は例の松本重太郎翁の薫陶を受けた算盤の人だから面白いではないか、老女將おうしさんも前身を洗へば、御多分に洩れぬ同じ流れの泥水育ち、若い時分には鶯とは行かなかつたが、山雀位は啼かせた苦勞人だ、然かしおうしさんが始めて宗街の一角に艶陣を張るべく骸子を投じた當時の大和屋なるものは實に微々たるもので何人も今日の大をなすとは思はなかつた。

松方侯爵に特別の御贔負

を蒙つたのが開運の始めで夫れから例の牡丹公春畝山人なども、お丑婆さんの氣性に惚れ込んで、一時大和屋の妓達には拾人も公の思寵を蒙つたものが在り、續では、良か女御と口癖のやうに云つた西鄕從道侯の引立に預つた、然かし大和屋をして今日あらしめたのは、何を云つても若主人公阪口祐三郎君の勤めて居た、華城財界の大立物松本重太郎翁を第一とせねばならぬ。老女將は深い考へがあつて祐三郎君を實業家にし樣と思つて松本翁に托したのであるが、其の後矢張り見世に居て貰はねばならなくなつて翁へ歎願して家へ引取らうとした、處が祐三郎君は藝者屋の經營が大反對でどうしても實業家として社會に立ちたいと云ふた、其時松本翁は祐三郎君に對し馬鹿野郎の一喝を浴せて、藝者屋の主人が何んで反對だ、苟くも自分の相續すべき家の商賣を嫌ふ大馬鹿者は、俺れと主從の緣も是れ限りだと、翁の事だから例に依つて威い劍幕だつた、すると一縮みに縮み上つた祐三郎君が恐る〳〵自分のやうな無經驗の者が實家の稼業に從事すれば潰して仕舞ふ事は請合いますが、到底今日以上に發達をさせる事が出來ませんと、少しも僞らず飾らずに告白をした處、此の不用意の一言に千金の價があつて、松本翁からは心配するな俺が引立てゝ遣ると言ひ切つた、其一言が在る處から、松本翁は夫れからと云ふのも財界の名士を連れて南に遊ぶ時は必らずに大和屋の妓を招聘すると共に、老女將に對して破天荒の註文を出したと云ふのは祐三郎を立派な藝者屋の主人公に仕立てるには

日本全國の情界へ色修業

に出せと云ふ、振いも振つた勸告をすると是れはまた意外に老女將が豫て自分が抱て居た意見と合致して居るので、祐三郎君は所謂見學と云ふので三年間の全國色修業に上る事となり、最初家を出る時には五圓札で五百圓と云ふ金を懷中して兵庫縣西の家檢番が色修業の振り出しで神戸から淡路に渡り夫から四國、中國、九州の各地引返して山陰道から東海道と、途中で金が無くなれば電報爲替で受取つて次から次への情界武者修業を試み、北は北海道の釧路、信越地方は新潟から佐渡へ渡つて小木、河原田、相川などの視察？を終つて歸阪すると同時に家も新築して軒續きに大和屋と云ふ大茶屋を開業して、全國各地で

見學して來た長所のみを執つた商賣の方針、是れで繁昌しなければ餘つ程世間がボンクラなのだ、斯んな風であるから見世からも（今は廢業して居るが）一時は浪花情界第一の誇りであつた。

政彌小光の二名妓を出し

た、政彌は當時八千代と共に南地に於ける斯界の双璧と謳はれ、縹緻も美しいが第一舞踊の素養のあつた事は八千代以上で、廢業した今日でも繪葉書屋へ行けば必らず、店頭に其の姿が飾つてある政彌は其の頃の鐵成金であつた廣島の瀬良大盡に莫大の金で落籍され瀬良氏一人の眺める高嶺の花となつて居る中に瀬良氏が事業で大失敗をして、紅緣が斷れると再び大阪へ戻つて來て、今では花の盛りの二十六を宗右衞門町で女將で暮らして居る有名な秋田屋の主人公こそ此の政彌なのである、で流石名妓と謳はれた丈けあつて政彌の逸話は數多く殘つて居るが、曾て其の名にあやからうとして肥前の唐津檢番中道屋に政彌と云ふ藝妓が出來て、唐津の政彌から懇篤の手紙が來ると、さう云ふ事なら末長く御交際を致しませうと二代目高尾が長崎の遊君薄雲と盃の遣り取りをしたのを眞似てか政彌は唐津の政彌の許へ態さ人を以て京紅から大阪名物の數數を求めて持たせて遣つた、唐津の政彌も大阪の政彌の盛名を聽て自分の藝名にした位の婦人であるから、大阪から行つた使者を呼子半島や芦屋の大門なぞを見物させて居る中に、唐津から別に使者を立て、唐津燒其他の土地名物を返禮に寄越したなぞは、一寸面白い話



光　小



大和屋にいた名妓政彌

ぢやないか、夫れからモウ一つ此の政彌が眞に名妓と多くの粋客に認められた事實談が在る夫れは政彌が賣り出して、一般から名妓として認められて來た時の事であるが或る大會社の新年宴會が住吉公園の茶亭で開かれた時の出來事で

其の席上に加つた一外人

が醉餘の狂態か、夫れとも、何か氣に喰はぬ事でもあつたのか、貴女に良い物上げると火鉢の中の一塊の火團を火箸に挾んで差し出すと、流石の政彌も一寸外人の面を熟視したが、何んと思つたか其の宴會に着て行た晴の衣裳の双袖を醜へしたかと思ふと、袖の下へ双手を入れて其の炭火を平氣の平左で受けたのであつた、黄煙は忽ち颯つと立ち昇つて異臭は四邊りに漲つたが、政彌は益々沈着き拂つて、其の炭を杯洗の水で消した後ち丁寧に櫻紙へ包んで袂へ藏つてしまつた、さうして大きな燒穴の出來た袂を平氣でお座敷を勤めて居た大膽不敵さ、外人は酒の醉も一時に醒めて大に無禮を謝したが、何人そ知らん其の席上例の瀬良大盡が居て其の度胸に惚れ込んで深く最屓にするやうになり、遂に自分一人の眺めの花としたのである、が本紙に發刊以來筆を執つて居る島川七石君も昨年此の政彌をモデルとして大阪朝報へ『亂れ髪』と云ふ小說を書き、主人公政彌を濱戸屋の梅香として書たが、村田正雄の一行と、大井高部の一行が同時に上場し前記の彩やかな場



の如は花柳界の大歡迎を受けたものであつた、夫れから前に書た唐津の

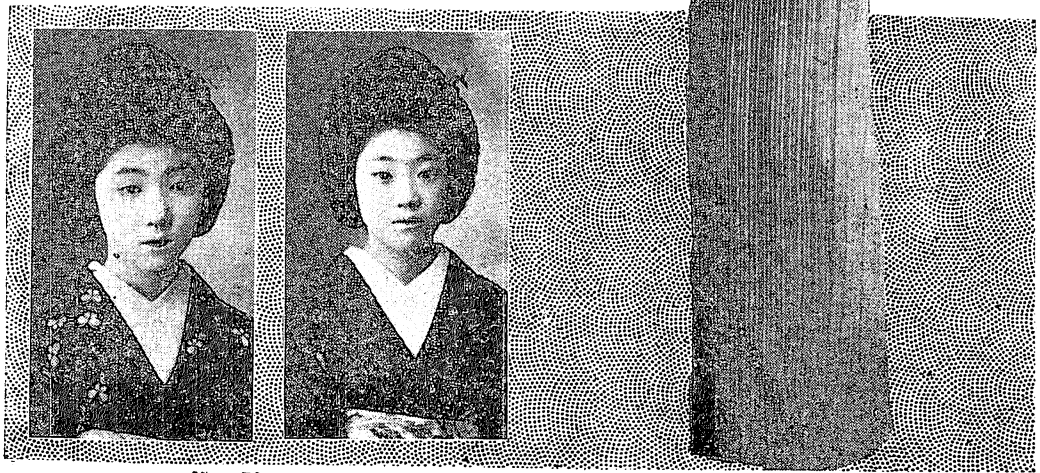
政彌は、大阪の政彌が落籍されると同時に、名妓の名を汚すと云つて直ちに朝龍と改めたが、不幸にして其の後間も無く病死した報知があつたので、政彌は廣島から遙る〳〵九州に渡り、唐津灣頭松浦川畔の行因寺と云ふ寺の境内に永久の眠りに就た未見の政彌を泉下に訪ふたなぞは情界に長く傳ふべき佳話ではあるまいか、夫れからモウ一人南地の誇りであつた大和屋の

名妓小光も理想的の紅裙

として今も尚ほ狹斜の巷に褄取りし當時の噂が高いが、此の小光と云ふ佳妓は始め新町に居たので、當時新町木原席の小光と云つては瓢街の第一流として押しも押されもせぬ姐さん株であつたのだ、さうして痩せ腕で妹妓を一人と實妹及び實母を養つて居たが、何が俤て一流となれば諸種の交際及附け届けなどに莫大の入費が要るから、當時に於て驚くべし木原の見世に三千餘圓と云ふ借金を背負て居たのだ、處が妹が少し餘許な金を借りて馬關へ行つたのは可いが馬關は人も知る如く、我國情界の七難場の第一位に押されて居る處、そんな處とは知らずに紹介人の甘い口先に乗せられて行つた妹は、餘りの事に仰天して小光の許へ再三再四手紙を以て、今の苦るしい境遇から助け出して呉れと哀願して來るし

母親は此消息を聴て涙の

日を送つて居る始末、日頃妹思ひの小光は何んとかして妹を助け出し度いと、木原席の主人に借金を頼むと幾ら一流の姐さん株でも其の當時に於て三千四五百圓と云ふ大金が貸して在るのだから、小光が涙ながらに數日間哀願したが、どうしても其の要求を容れて呉



大和に居た名妓小光（記事參照）右より大和屋つゆ同じ

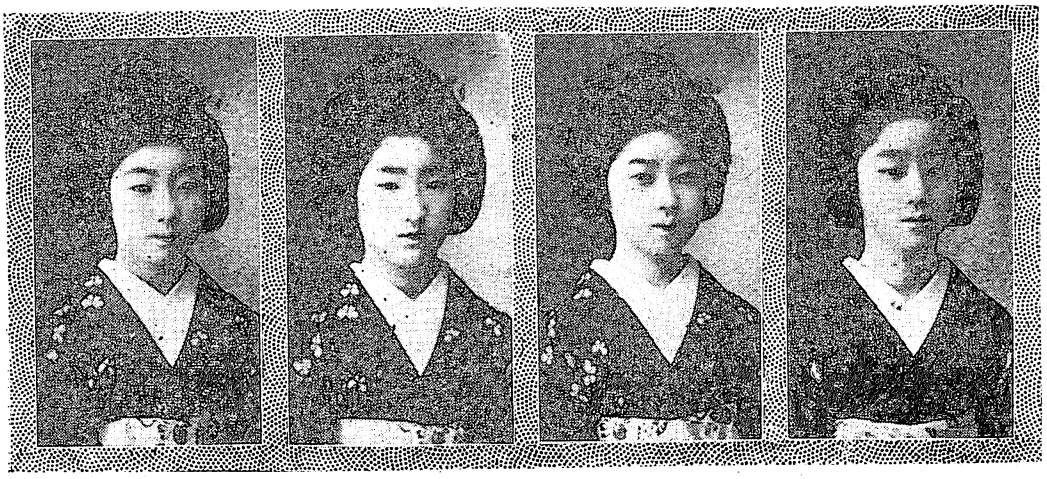
れ無い、が一方の妹からは日文矢文と云つたやうに、生命を捨てるやうな辛らい勤も我慢をするから姉さんの手許へ引取て呉れと、涙で綴つた手紙が舞ひ込んで來る、遂ひに小光は意を決した或夜、

單身大和屋を訪れた老女將

おうしに面會を求めた、老女將は豫て小光の名は聽て居るが一面識も無い、如何なる用事が在つて斯んな夜更けに人目を避けて逢に來たのかと頗る不審に思つたが、兎に角會見しやうと云ふ事になつた、初對面の挨拶をしとやかに濟ませた小光は開口一番、貴女を見込んでお賴みに來たが、御當家で稼くからどうぞ何んにも云はずに、此の小光と云ふ名に對して四千五百圓貸して下さいと切り出した而して前記の事情を落ちも無く物語つた後ち妾の要求を容れて下されば一生懸命に稼で御恩借しをするから、どうぞ木原席の小光を大和屋の小光として生かして呉れとの賴みなのだ、此の要求を默て聽て居た老女將は

即座に諾の一言を與へて

しまつた、流石に痩せ腕一本であれ丈けの大茶屋と、あれ丈けの大きな見世を持つ丈けあつて老女將は、烱眼早くも小光の將來を看破して、四千五百圓と云ふ大金を貸さうと承諾したのである、本人の喜びは察するに餘りあるが、驚たのは祐三郎君だ、賴む奴も賴まれる奴も本氣の沙汰では在るまいと、大反對を試みたのであつた、其の時老女將の言ふには親思ひとか妹思ひの女は幾ら大金を貸し出しても損をするやうな事は無いと云て、諄々と藝妓買入法の極意を祐三郎君に授けたさうだ、斯くて木原の小光は大和屋の小光となつて現れたが、何しろ老女將の意氣に感じて稼くのだから、如何なる端した座敷も一生懸命に働くし、生來が至つて溫和な性質の處へ藝に掛けては何處へ出しても一點の非を打つ處も無い女であつたから忽ちの中に賣り出して其の全盛は飛ぶ鳥も落すやうな勢で、然かも馬關から迎へた妹も千友と名乘らせて稼がせ自分は眞心を現はして老女將に恩返へしをして居る中に、斯う云ふ婦人であるから多くの紳士連が落籍しやうと云ふのを大和屋へ恩返しをするまではと辭退して益々賣つて居る中に大正二年の春



同一秀　同代秀　同七五三　同すま

株式の野村徳七氏に落籍

されて東區順慶町に立派な妾宅と一生喰ふに困らぬ財産を貰つて母親と共に、樂しい生涯に入つて居る、此の小光と前に記した政彌の兩名こそ、大和屋席が藝妓見世として二十三年間九百二十七人の中から産み出した珠玉であつて南地を飾る名花なのである、現在同席に居る六人組を始め舞妓達は祐三郎君が鼓に堪能であるため、平素仕込まれて居るし、其他の諸藝も老女將の監督を受けて修養に怠り無いから將來名妓として頭角を現す者が無いことも斷定は出來ぬが今の處大和屋に籍を置く九十八名の美人中あの子はと土地の同業者は云ふまでも無く外土地の同業者も大に眼を瞠て、居る、花も蕾の拾五の春を迎へた舞妓が在る、席主は今から何か書いて下さつては、本人の爲めにならぬからと云つて辭退して居たが、此の舞妓こそ將來の名妓として萬人等しく許して居るが、藝事は大人連を凌ぐし容貌は三十二相揃つた宛ら京人形のやうな可愛らしい未開紅の花だ

此の鳳雛麟兒は名を秀吾

と云て大和屋へ來てから、まだ間も無いが藝事殊に舞踊は既に其の堂に入つて居る天才である、夫れも其の筈此の子のお父うさんこそ、浪花梨園界に其の人ありと謳はれた名人荒五郎で名の通つた先代市川荒五郎なのである、其の荒五郎の末子として生れた秀吾であるから、亡き父の存生中幼い時から最も嚴格に舞踊を仕込まれた其他の行儀作法も、嚴重に仕込まれつゝ世の中の荒浪なぞは知らなかつたのが、父亡き後ちの一家の悲境から今は花の振袖を飜へす事になつたのだ其の他艶榮と云ふ舞妓も南地の一流株、先日解散した松柳會の幹部であつた富田屋の里榮の妹として華城の情界に出入する通人粹士に、其の將來を嘱目されて居る、兎に角此の兩舞妓こそ假りに名妓として永久の名は殘さずとも、近き將來に押しも押されもせぬ大姐さんになる事は筆者が牡丹餅大の判を押して受け合つて置く。

伊勢の山田から

神の都を威張つても、人口僅に四萬足らず、お芝居師の目から見ればズブの田舎の宇治山田市。滅多に芝居らしい芝居の來た事もありませんが、今度久し振りに雁治郎が梅玉、八百藏以下を率ひて四月六日から四日間、新明座と云ふ劇場で打ちました。開幕は午前九時、ハネは午後六時と云ふのですが、大抵の客は夜中の三時四時、手酷しいのは前の晩の十二時から毛布を用意して詰め懸けると云ふ騒ぎです。何だか遠い昔の猿若町江戸三座と云つた時代に逆戻りした樣な氣がするではありませんか。幕が開くと、觀客席は湧き返る樣な騒騒しい番附と首ツ曳きで、成太郎がカ、嘉七になつたんや。扇雀の元の名は長三郎ちうのや。テナ變な言葉が恰度畑で野良仕事をしながら訛り合ふ樣に、不作法に大きな聲で喋り續けられるのです。這麼觀客を對手にして居るのですから役者は箍を緩めて暢氣に演つて居ります。藝の事は名古屋其他で既に演じられたものですから玆に申上げるにも及びませんが、舞臺以外の事で鳥渡お知らせしたいのは雁治郎が此遠い伊勢三界迄例の喜代次を連れて來て居る事です。長三郎が病ひ上りで來て居る事は來て居たが、舞臺には出なかつた。それをダシにして打揚げ後、長三郎の保養の爲めとあつて次興行地の神戸へ乘込むのを二三日延ばしお綱で名高い旅館油屋の奥座敷で、喜代次と悠くり保養して行つたとは、老いて益々熾んなお爺さんではありませんか。（山田、悦痴亭）



文樂座の竹本津太夫

香川蓬洲

十三歳で始めて斯道に足を踏入れ、文樂座で三十餘年間の修業＝其津太夫の直話にかゝる藝談經歴談

まづ私の生れ故郷からお話しをしませう、福岡縣は豐前の小倉在、香春町と云ふ所で、實父の名は村上吉三郎、虎屋と云つて旅人宿を稼業にして居る家の私は息子です、而して本名は村上卯之吉、年齡は本年四十八歳になりました。

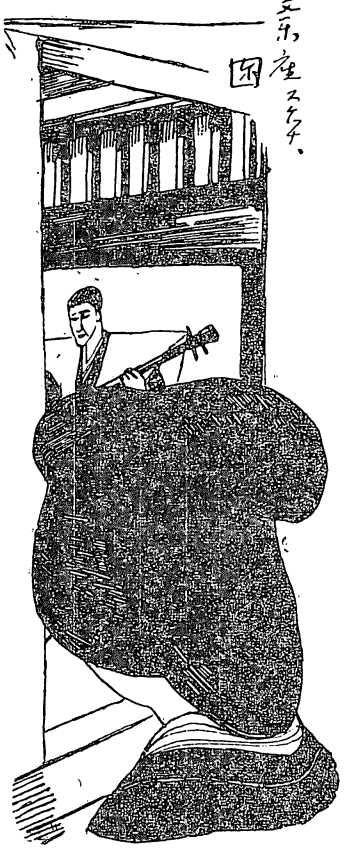
私の親父は田舍で大の義太夫好き、宅へ稽古を爲に來るのは、博多の鶴澤榮次郎と云つた三味線彈きで、親父の語る義太夫を子供心に聞き覺え、まだ舌も碌々まはらぬ中から、徐々とうなり出しましたので榮次郎が親父に勸め、私の十三の齡に手ほどきをして呉れましたのです、家業が宿屋ですから、お泊りになるお客の中には、物好きにも私に義太夫を語らせ、それを旅中の徒然になさると云つたやうな譯で、親父も金太郎になつて私に義太夫を習はせました。

當今では汽車が出來て交通に不便はありませんが、私の幼年の時分は汽車はなし、博多から中津へ行くには必らず香春の町を通らねばならなかつたので、多くの旅客の中には隨分藝人もありました、其中に京都の故人竹本綱太夫のお弟子で、綱尾と云ふ女義太夫語りが、九州路へ興行に來る途中私の家で泊り、私が榮次郎に稽古をして貰つてるのを聞いて居ましたが、其綱尾の一行が私の在所で一ト興行する事になり、私の家で暫らく逗留中、親父とも懇意になり、一日綱尾は親父に向『どうですエ親爺さん、此お子を妾に預け大阪へ修業に出しなすつては……失禮ながら大阪は義太夫の本場、斯うした片鄙な處にくよりは、大阪で良い師匠に就いて、一人前の太夫にしてお進けなさいよ』と頻りに親を說き勸めましたので親父も其氣になり、私の十三歳の時に其綱尾に萬事を托して、私は大阪へ來る事になりました。

大阪へ着くと綱尾は私を連れて、南地に住んで居られました、先代津太夫さんの處へ行き、私の事を委しく話してお弟子にして下さ

いと頼んだ處が、師匠は私の年齢を聞き、其熱心なのに感心し、早速承知をしたいが實は私も近日九州路へ巡業をする都合になつて居るから、マア歸るまでは私の兄弟子、竹本濱太夫さんに預けて置き、歸つた上で師弟の契約をすると云つて、私は濱太夫さんに預けられ、濱子太夫と云ふ名を貰つて日々嚴しい稽古をして貰つて居りました。

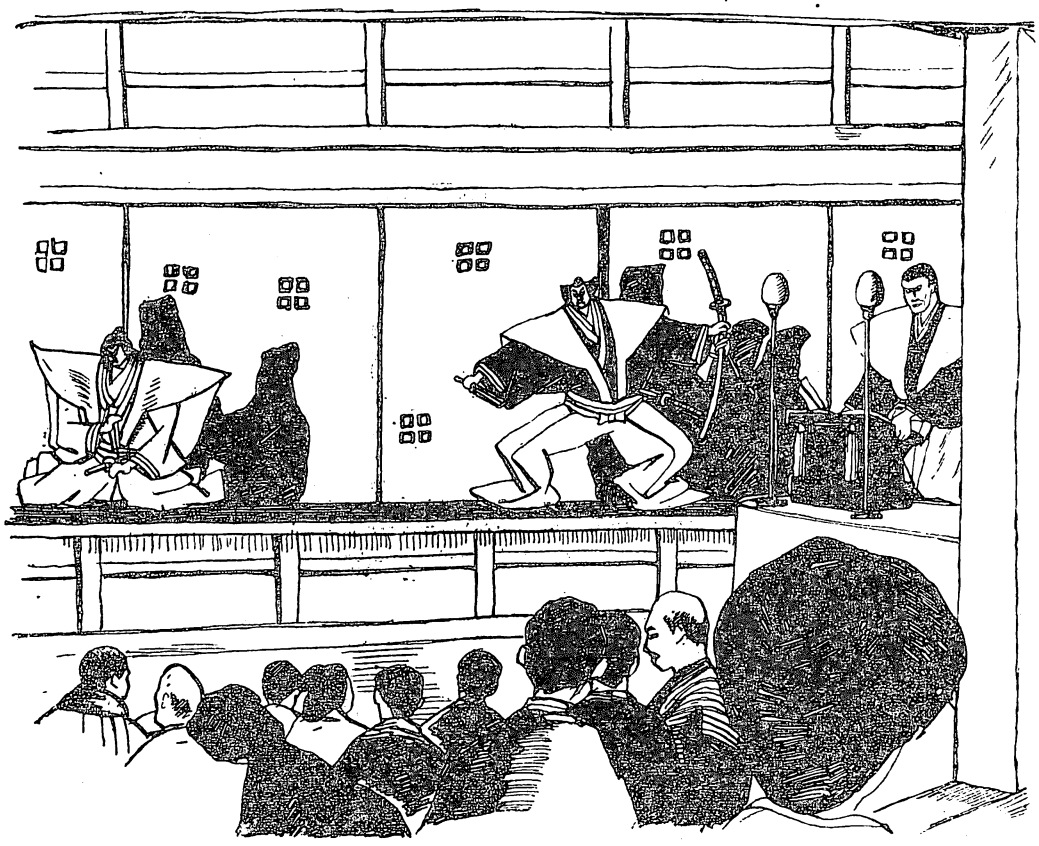
而して津太夫さんは先年亡くなられた、大隅太夫が未だ春子と云つた時分で、此春子を二枚目に、三枚目は千駒、橋、綠などを連れて廣島から中國を巡業し、博多から九州へ乘込む時に香春町へ立寄つて一興行、私の家で泊られまして親父からも私の事を聞き、歸阪されて更に御自分の弟子として、師弟の盃をして貰ひましたが、夫れが私の十四の年でありました。



其翌年、私が十五の時に津太夫は二枚目に織太夫、外に千駒太夫や綠太夫、私共を伴れて東京へ出稼ぎに行き、一年ばかり諸方の寄席を勤めて居りますと、其頃松島に在つた文樂座が、平野町の御靈神社の境内へ引越すに就いて、當時文樂座の支配人の渡邊さんと云ふ人が、態々師匠を東京まで迎へに來られましたので、私も師匠と一緒に大阪へ歸りました。

お話しが前後になりましたが、私は大阪へ來てから、南地法善寺の境内の津太夫の家で寢泊りをして、其家から濱太夫さんの處へ稽古に通つて居りましたのです、夫れから毎日〳〵文樂座へ通ふのですが、今日とは違つて開演は早し、朝の五時頃に師匠の宅を出まして、日の短かい時分は提灯を持ち、近所ですから鶴澤友松や野澤勝市などを誘ひ合して、テク〳〵と御靈へ出掛け、漸く大序を語らせて貰つて居る中に追々齢を取り恰ど二十二歳の時に文太夫と改名しました、が、私の此文太夫と云ふのは、繁太夫の前名の文太夫ではありません、文樂座の主人植村さんが、文樂の文の字を取つて、私を文





太夫として下さつたのです、其時の文樂座の狂言は前が『箱根靈驗雙仇討』で、私は序切の筆助住家の段の前半段を語る事になりました、御承知の通り、此の切を語ると云ふのが却々容易ではありません、而して番附に何々の段として、自分の名の上に、切と云ふ字を書入れて貰ふやうになれば、全くの切語りだと云ふ事が出來るのですが、私も其後に『大江山』の時に賴光の館、卽ち二段目の切を語り始めて番附の表に切と云ふ字を書入れて貰ふ事になりましたのです。

一寸この處脫走をした話

餘り話しが眞面目になつて參りましたから、其後文樂座を暫らく脫走をした事から、其脫走中の御難をお話しいたしませう、タシカそれは明治二十七八年頃であつたと思ひます、今の越路さんがまださの太夫と云つた時分の事で、其のさのさんが脫走組の隊長、次が私で其他に二三人、まづ最初に江州の彦根へ乘込んで、其次が若州の小濱、此小濱で興行中に大雨の爲に大洪水、なか〳〵の大騷ぎで興行は丸潰れ、據ろなく一月ばかりトヤを食つて一行は泣きの涙然りとてすご〳〵と大阪へも歸られず、秋風が身に染む頃から西の空へ歩を向けて、九州路を此處や彼處で稼いで居ましたが、其年の十二月に久留米へ乘込んで初日を出しました處が、一向にお客が來ない、又もや大の御難場と

なつてトヤをして居る中に、ヤツと熊本の方へ相談が出來ヤレ嬉しやと一行は熊本へ乘込んだのが、其翌年の一月、開場して見ると初日も二日目も割るばかりの大入に一行は大喜こび、三日目になるとサア大變、恐れ多い事ですが、英照皇太后宮樣の御大葬で一ケ月間の御停止。

捨てる神あれば拾ふ神

お恥かしい話しですが、斯うなると實際湯錢にさへも差支へて、一行は一室の中に額を鳩め、如何しやう〳〵と云つた處で、何地へ往つても音曲鳴物の停止は知れた事、每日每日爲る事もないので、かるた遊びをするには古はがきを細かく切つて賭けると云ふ哀れな身の上、處が同地の料理屋で一日亭の主人が此御難に同情し、私の家へ來て居なさいと、最と親切な言葉は地獄で佛、何分宜しうと賴んで、其一日亭で世話になり、漸と其一月を過す中に二月となりましたので、同地の東雲座で一週間の興行、之れは上々の景氣で夫れから長崎市に行つて、同市の榎木座で開演すると、是れは初日から非常の人氣で日々の大入滿員、七日間のつもりが十日になり、十日が二十日になり、都合二十五日間打續けましたが、扨斯うなると困るのは日々の語り物、同じ藝題を二度出すと云ふ事も出來ぬので、據ろなく端場ものを交ぜて誤魔化しましたが、イヤ實に辛い思ひをいたしましたが、之れが今日でも越路さんといつも其時の御難を話し合つて居るのです、此脫走した動機は別に文樂座に不平があつたと云ふのではなし、僅かの事から斯んな事になつたのですから、また文樂座へ歸りますと、座の方では此脫走連中の場割に一寸窮したと見えて『七福神』の掛合を演る事になりました、尤も此脫走中は私も越路さんも、文樂座の一座を脫けて居ましたが、其後は二人共相變らず今日迄一座をして居ので、いつも二人が指折算へて、卅餘年間文樂座に籍を置いて居のは、君と僕位であらうなど云つて居ります のです。



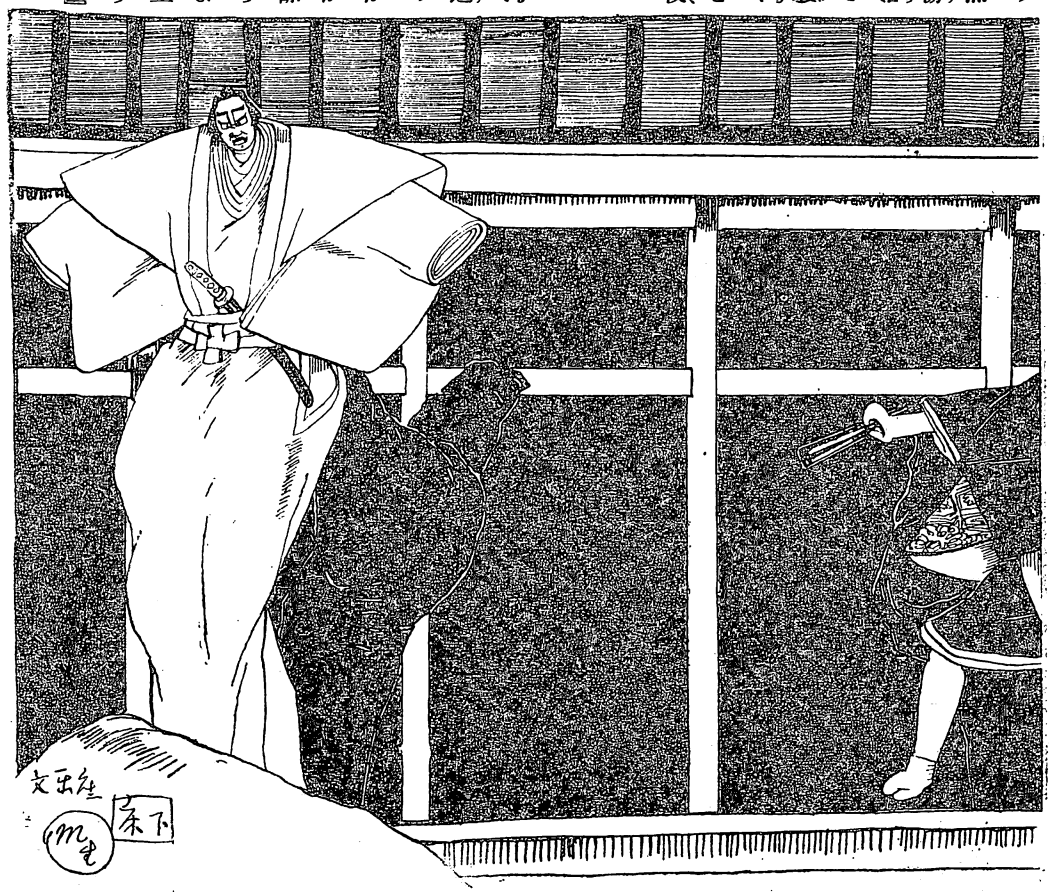
代り役が出世の端緒

先代の豐竹呂太夫が『八犬傳』の二段目、伴作住家の段を勤めて居られます時に、私は其の端場を勤めて居りました、處が呂太夫さんは病氣に罹られましたので、每日〳〵半分だけは私が代りを勤めましたのが出世の端緒で呂太夫の三味線は鶴澤勝鳳でしたが、其後また呂太夫さんが『一谷嫩軍記』の三段目、熊谷陣屋の段を勤めて居られた時に、私の役は二段目の流し枝の場の前半分を勤め居りましたが、此時にも呂太夫が病氣で、私が半分每日代りを勤めましたが、幸ひにも此興行が大當りで、恰ど三十七日間打續けましたので、私は座主から反物料を褒美として貰ひました夫れから追々役も上りましたが、此三段目の

代役には實に苦心をいたしました、何か扨まだ〳〵非力の身を以つて大役ですから、役が濟んで樂屋へ入ると、全然大病人の如うに、眼は血走つて蟲の息き、額も身體も熱湯のやうな汗、暫らくは動く事も出來ない位、ヤツと氣を落着けて宅へ歸ると、宅では布團を敷いて私の歸りを待つて居て、直ぐに按摩を呼んで徐々と身體を摩らせると云ふ騷ぎ、夫れが一日や二日ではなくツて、代りを勤めて居る中は毎日〳〵其の通りでしたが、此苦しみが何よりの功果となつて、一昨年私が本役で陣屋を勤めました時に、何程役に立つたか知れませんでした。

師匠津太夫の病氣

今から十四年前(明治三十六年)の一月二日が初日、其時の前狂言は『菅原傳授手習鑑』で故人の師匠は二段目、道明寺の切を勤めて居られましたが、其時に私は、三段目の口の茶筌酒を勤めて居ました、處が四日目頃に師匠は役が濟むと樂家で突然發病して、モウ翌日から舞臺へ出る事が出來なくなりましたので、差詰め私が代役を勤め、四十餘日の間引續いて二段目の切を勤めました、師匠はそれから約二年ばかり休んで居られましたが、全く病氣も回復しましたので、再び出勤せられました時に『伽羅先代萩』の埴生村の段を勤められまして、其後相變らず興行毎に出て居られましたが、明治四十一年十一月興行に師匠は『日蓮記』二段目を受持つて居られまして、同月廿五日に病氣再發、



文樂座の竹本津太夫（香川蓬洲）

役が濟んで部家へ入ると倒れたまゝ人事不省、早速お醫者さんを迎へて、漸く少し人心地が附きましたが身體を動かしては不可ないと醫師の注意、其興行はまだ日のあるにも係らず座主の方では突然に翌日打揚げると云ふ事になりましたが、師匠は一週間文樂座の部屋に寢かせたまゝで養生をさせ、其後同生病院へ入院をさせました。

日蓮上人直筆の曼陀羅

今では文樂座も松竹合名社の所有になつて居りますが、其頃はまだ植村さんが座主で日蓮記を出す時にはいつも文樂、卽ち植村家の什寶としてある、日蓮上人の直筆の曼陀羅を劇場へ持つて來て、お祀りをしてありまして、其曼陀羅を寫眞に撮つたのが、師匠の部屋に祀つてありましたから、私は師匠の枕許にそれを安置して、一生懸命に此曼陀羅へ師匠の病氣平癒の祈願を籠め、師匠が入院中私等夫婦は晝夜看病に心を盡して居りましたが院長さんの御盡力やら、また信心の御利益でやら、少しく快方に向ひましたので、一月足らずに退院をして、夫れから三四年と云ふものは法善寺内の宅で寢て居られましたが、身體こそ自由になりませんが、耳も眼も能く利き、殊に談話をする事が好きで、いつも寢ながら藝に就いての講釋をして呉れられましたので、私の爲めには餘程德を得ました、斯ういふ事を申しては濟まないですが、此長々の病中に、唯一つ迷惑に感じましたのは師匠の入浴です、何がさて少しも動けぬ身體ですから、近所の湯屋へ連れて行くのには、私と他に二人の弟子と三人掛りで、其中の一人が師匠を脊に負ぶつて行かなければならんので、これには一寸閉口をいたしました、其師匠が病中に私を枕許へ呼び『私の名の津太夫を貴樣に讓つて、私は綱太夫を襲名し、モウ一度本復をして文樂座の舞臺へ、綱太夫の名で出て見たいと思ふのぢや、が夫れは到底出來なからう、併し貴樣は私の息のある中に、三代目の津太夫になつて呉れ』と私に御自分の名を襲がせて下さいましたのは七年前、私が四十一歲の時でした。

明治四十五年（大正元年）の三月から私は暫らく文樂座を休んで、雲州地方へ巡業に出掛け、同年七月には山口縣の須佐村で暫らく逗留し、豫て御最屓を蒙つて居ります、久原樣の御座敷を勤め、夫れから九州の行橋で興行中、七月廿一日に師匠の病氣危篤との電報に接し、驚いて取るものも取敢ず同地を出發し、大阪へ着いたのが廿二日の夜の十一時頃早速法善寺の師匠の宅へ駈附けましたが、其翌廿三日の朝師匠は遂に黃泉の客となられました。

改名披露の語り物と失敗談

また話しが後へ戻りますが、私が津太夫と改名した披露の演題は『八百屋獻立』の八百屋の段で、前狂言が『繪本太功記』中幕が摩津大掾さんの『中將姬』私は追出しの附物で、八百屋を勤めましたが、此興行は十六日間大入を出しました、其後は附物、または三段目を受け持つて居りましたが、三段目語りとなつた最初の役は、大正二年九月興行に『祇園祭禮信仰記』の三段目、天下茶屋是齋内の段を勤めました、御承知の通り私は惡聲ですから自分の得意として語るものが誠に尠なく、マア强て得意ものと云へば『伊賀越』の沼津『紙子仕立』の大文字屋『反魂香』の吃又『菅原』の寺子屋『双蝶々』の橋本『盛衰記』の逆櫓、近頃は餘り演りませんが『四ツ谷怪談』の伊右衞門の内などでございます、私がこの惡聲に就い

て失敗したのは、或とき京都上七軒の岩上座へ出勤した事があります、其時に私が『壺坂』を語りました處が、最初の二上り歌で『夢が浮世か浮世が夢か』と語り出すと、モウそろそろ聽衆がワヤ〳〵と云ひ出しまして、例のサワリになつて『三ツ違ひの兄さんと』の處から『明の七ツに鐘を聞き、そつと抜出で唯一人、山路いとはず三年越』の處になると大槍を入れられて、到底段切まで語つて居られずスゴ〳〵と舞臺を引退つた事は今でも忘れはいたしません、が其癖にまた其後北海道へ出稼ぎした時に、止せば宜いのに此處邊では演つても宜らうと、また『壺坂』を出した處が、またもや散々の失敗、モウ〳〵夫れからは決して斯んなものは演らぬ事に極めました。

苦心した事と雜談

今も申した通りの惡聲ですから、稽古に就ても餘程苦しい思ひをいたしました、私は十三歳で大阪へ來てから、二十三歳まで師匠の宅に世話になつて居りましたが、當時阪町妙見さんの附近に居られました先代の豐澤新左衛門さんに教へを受けましたのが、重に端場もので『妙心寺』だの『饗七の上使』だの『菅原』の東天紅などを教へて貰ひ、また故人の大隅太夫さんがまだ春子時代に、切ものを教へて貰ひ『双蝶々』の引窓や『鎌腹』などは隨分嚴しい稽古をして貰ひましたが『大文字屋』などは此大隅さんの型を多く用ひて居ります、この大文字屋に就いては、師匠の三味線を彈いて居られました松葉屋（先代豐澤廣助）さんにも種々と教へを受けましたが、福島に米商をして居る素人の義太夫語りに、水魚と云ふ人があつて、此お方は大文字屋が十八番、殊にアノ法華の題號が巧いと云ふので、私は水魚さんの處へ題號を習ひに行きました、此題號を法華坊主で演る人と、傳九郎で演る人と二樣ありますが、水魚と云ふ人のは坊主の演る、正眞の題號が巧いので、私は題號を演る呼吸を教へられて、福島から歸る途中、尤も夜分の事でしたが、出入橋を東に渡り、南へ取つて藤田組本店の前の寂しい處で四邊を見ると、往來の人はなし、此處で一番題號の復習をしてやらうと、大聲を上げ『妙法蓮華經申すも愚や、祖師日蓮大菩薩』と演り出し『難行苦行なされしも、彼の一物をせしめん爲めの御誓願なり、なんめう』と惡聲を振立てたトタンに後ろから『コラッ』と大喝一聲、ハッと思つて振返ると洋服の人、さては巡査で、放歌を咎めたのかと思ひながら早速頭を下げ、謝罪ながら其人を見ると、酒に醉ツぱらつた何處かの人であつたので、先方でも氣の毒に思つたかして、笑ひながら行き過ぎました、斯う云ふ滑稽はまだ〳〵他でもありました何しろ惡聲ですから人さまの知らない苦勞をせねばなりません。

今から二十年程前に私は東京へ往つて、文太夫で看板を揭げた事があります。今の古靱太夫、前名津藥女太夫と一緒でありました。去年の冬東京の新富座で『大文字屋』を出しましたが此時はお庇さまで好評を博しました、其時にもまた先達て文樂座で演りました時の題號も、故大隅さんの型で、傳九郎で題號を演りました、傳九郎で演ると云ふのは、早く申すと寫實で、傳九郎が權八を呼出す合圖に、大文字屋の家内を格子の隙から窺ひながら、坊主の眞似をして題號をやつてるやうに演るのです、攝津大掾さんの大文字屋は、アノ聲ですから此題號も自然綺麗で、寫實の方ではありませんが私のやうな惡聲では、どうも寫實でないと美しくは語られません。

芝居がへり

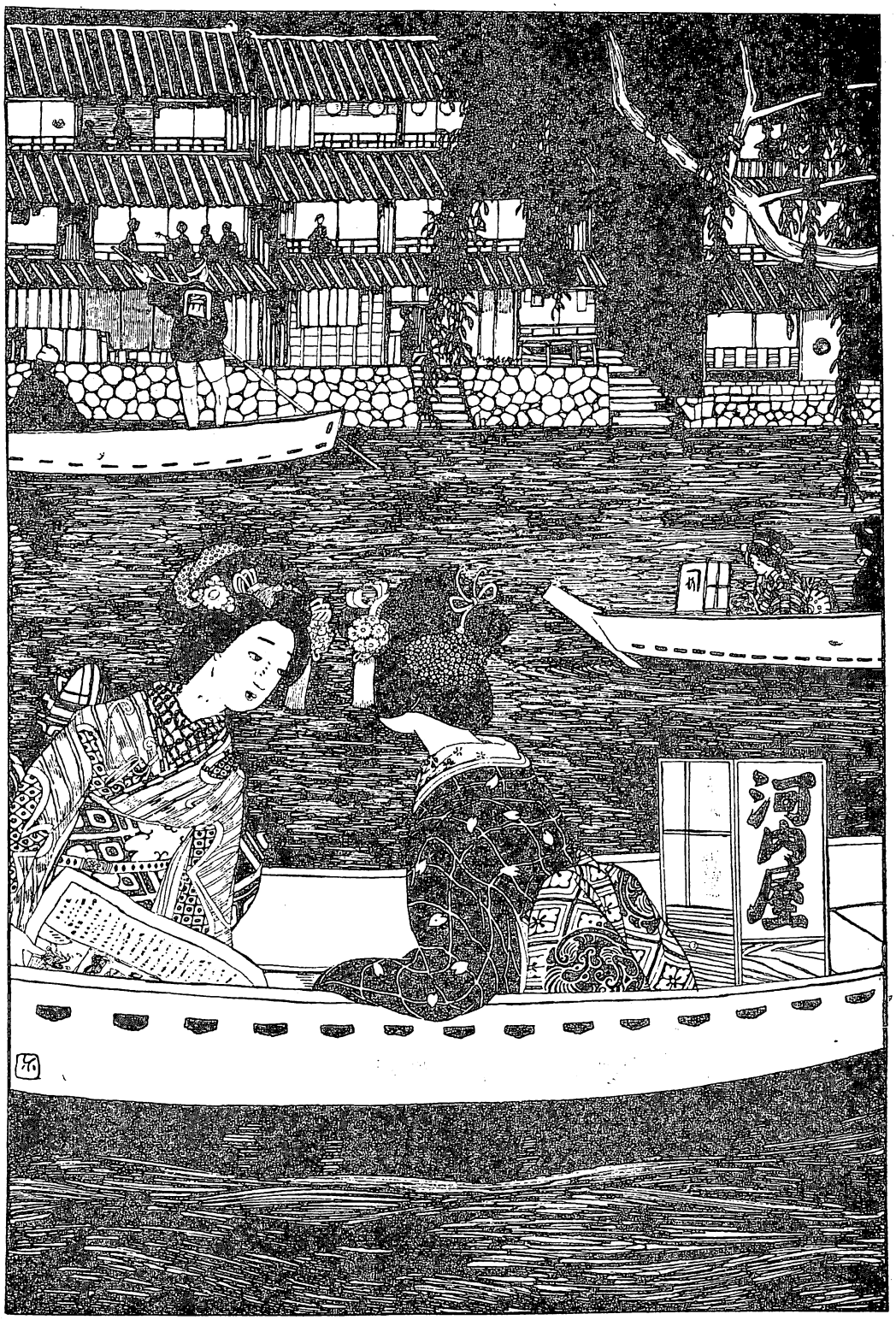
江戸が八百八町と衢の數を誇つたと同樣大阪では八百八橋と稱へて居ります。(實際の數は大小併せて四百餘りですが)全く橋と運河とは大阪の獨特の文明を語つて居るもので、自働車なく電車のなかつた時代、尚溯つて俥がなく蒸汽船のなかつた時代には、大阪人士の行通はその町を横貫縦貫する堀川を利用し船をやることを第一の機關として居りました。わけても芝居見物の行き歸りなどは船宿から茶屋、茶屋から船宿といふ順序を以てしなければ首尾全うされた娯樂とはいへなかつたのださうです。其の當時、婦人連中の芝居行きとなると、江戸も大阪も變りはありません。一晩寢ると髪が損じるといふので未明に髪結ひを呼んだものださうです。化粧は元より入念、それに伴ふ晴れの衣裳、持ち物履物共によろしくあつて滿艦飾で押し出すのでした。着換への衣裳等は凡て前日車や船で茶屋へ送り届けてあります。旦那さん、御家はん、御寮人はん、嬢さん、ぼんち、……それ等の人々の料多いのになると一人三組位づゝも用意してあります。如何しても大つゝらの三つや四つは要するわけです。その頃の幕合といふのが又頗る非常に長かつたさうですが、殊に正午前後の幕を飯幕と稱して一時間半二時間餘りも費したものださうです。つまりお客が茶屋へ戻つて食時を濟ませ衣裳を着更へ化粧しなほす猶豫を與へたわけなのです。

幕合といふ幕合にはぼんちはぼんち、娘はんは娘はんで連中を作つて芝居小屋を出で千日前あたりを散歩する。淡厚なおつくりでふきの厚い三枚重れの裾を引摺りながら福草履を穿いた芝居の客で、その頃の千日前は今よりも尚一層雜沓したと申します。そしてその連中を常客とした猿芝居、水機關、萬歳踊りなどといふものが先樣お替りの追出し式で大相賑つたものださうです。平常は出るにも這入るにも三所も格子を潜らればならない白晝も黄昏のやうな家の奥深く閉籠つて人形の着物を縫つたり、琴や茶の湯の稽古に退屈な日常を送つてゐる娘達にとつては、一日の芝居見物は全く開放されたやうなものだつたのです。

江戸もさうだつたといひますが、その頃の大阪の氣風として劇場では決して飲食をしなかつたさうです。つまり飯幕なるものゝ設けがあつたのもその爲めで、大抵の客は茶屋へ引取つて食事をしたものださうです。その頃の芝屋茶屋は一面料理屋のやうな組織で小間も座敷も澤山あり、又茶屋の數も今より遙に多かつたと申します。

かくて一日の遊樂が大詰の幕と共に終結する。打出しの噺(竹筴を叩き出でるやうな訝しなものです。出方の二人がおかめとひよつとこの面を被つて來配を振つて踊つて居ります。)で小屋口が又一しきり賑ふ。朦朧と立上る道頓堀川の夕靄が宗右衞門町の柳の糸に縺れ、揚屋揚屋の二階三階の障子を繪る桃色の燈火が、靜かな水の面へ映つて、まだ頭に殘つてゐる先刻の芝居の書割が現實世界へ表はれたやう、川を隔てゝ細い路次を行きかふ黑い男女の影凡てが今見た芝居の景色です。耳の奥では幽に幽に蠱貧の美しい役者の臺詞が誰も聞かせともない巧みな抑揚で聞えて居ります。振り仰ぐと高くかゝげた櫓の梵天にほんのりと滲み浮んだ朧月……袖かき合せて我と、我乳房を抱いて何ともなしに涙ぐむお染のやうな娘も少くはなかつたさうであります。茶屋の裏の棧橋には各々の屋號目標を書いた船行燈を點じて、歸り仕度をととのへた船が纜つてあります。……

(水島生)


河屋



鷺集庵棋茂都扇性



關西一の男振附

鷲集庵棋茂都扇性

——及び其門弟連——

美野一白

一

浪花の春の水が溶々として音もせで流る、東横堀に臨む氣の利いた濱座敷、久寶寺橋の西詰を南へ入つた東側の心憎き家構へ「鷲集庵」と記した扁額、宿の主は天神髯を生やした小作りの肥肉、家康の畵像を想はせるやうな異相の人、卽ち右の濱座敷で火鉢を隔て、話が始まる。

主人は棋茂都扇性、上方切つて唯一の男振附——隨分探せば京阪神の何處かの隅には一人や二人位の心細い男師匠がないでもなからうが固り扇性とは比べものにはならぬ——扇性は當年五十二歳、本職以外、琵琶、繪畵、俳諧、彫刻、陶器など、擧げ來れば才人徂くところとして可ならざるはない、遊藝のお師匠さんでゐながら、師匠が大嫌い、一と癖も二た癖も變つてゐる、先達も神戸で鎧兜の素敵な出ものがあつたのを二千金とかを抛つて購ひ戻り暫くは床の間に据ゑて睨みつくら眼を細うして樂んでゐたといふ、若夫れ筋の曲つた話となれば滅多に承知しない「そんな話は御免だす」と一喝して斥ける。

△祖父さんは「木彫の仙人」

「私の祖父は播州の出の人で系圖によりますと明石志賀之介の末孫に當るのやさうです」と師匠は語り出す、本姓は鷲谷といつたが京都に來て後、妙法院の宮の宿直近侍を勤めてゐた、時の宮は一品眞仁法親王樣であつた文

化二年に他界されたので三年の後、お暇を乞うて浪人となつた、宮家に仕へた砌りには下司此母と云つたさうだ、この人は餘程畸人で器量のあつた人、大阪へ來て天滿の老松町に住んでブラ〳〵と暮してゐた、金錢は手にふれるのも嫌い、慾が寡くつて名利に走るを好まぬといふのだから追ひ〳〵に貧乏になる、貧しくとも平氣だ、何を問うても知つてゐるので時の人は「老松町の由井正雪」と呼んださう、大鹽平八郎と親しかつた、大鹽は又しても訪れ來て道を談じた、變り者同志で意氣が合うたのであらう、餘りに人間が變つてゐたので口の惡い男が「木彫の仙人」と綽名をつけた、生きてゐる仙人ならばもそつと人間が柔らかだがあの人は木彫の仙人だ、硬くつて仕樣がないとの意味である、木彫の仙人が未だ宮家に仕へてゐた頃、御所に大橋のお局といふ方があつた、このお局は舞踊に堪能のお方で風流舞といふ舞の振りをよく心得てゐられた『私の祖父はこのお局樣にいろ〳〵と風流舞のことを傳授されました、又書き物をも頂戴して天滿の宅に持つてゐましたが大鹽の天滿燒けの時、とう〳〵系圖もその書き物も灰にして仕舞つたのは今から考へても惜しいことです」と扇性は殘念がつてゐる。

楳茂都流の舞踊は右の風流舞が源をなしてゐる、風流舞なるものは御所に仕へたお局の家に傳へたものと云へば幸若の類の舞踊であつたのか惜しむらくは傳書を灰燼としたので精しく研究することを妨げる、とは云へ町家の俗流に殘つた「さす手、引く手」とは自ら撰を異にした舞振りであることはその名によつても推する事が出來やう。

△天神樣の梅に因んで

扇性の楳茂都流の舞踊の初めは祖父から發してゐるが流名の名乘りをあげて之れを大成したのは先代扇性卽ち今の扇性の實父鷲谷將曹である、將曹が十六歲の時、木彫の仙人と呼ばれた奇人此母は世を去つた、天滿から上町は安堂寺町の骨屋町なる宅へ引越した、當時、山村流は盛んなもので能カブレの舞踊が天下を押へてゐた、將曹はこれを見てニツコリ笑つた、先代から聞いてゐる風流舞の骨法から自得し將曹は三十一二歲の時より楳茂都流を唱へ出した、楳茂都流とは嘗つて天滿にゐてゐた因みもあり、將曹は非常に天神樣を信心してゐるから天滿宮によつて「梅」の字を用ゐ、楳茂都と稱した、始め扇姓と記したが後ちに扇性と改めた、さうして素人で身を立てゝ子供などの稽古を一心に引受けて教へてゐた。

山村流は山村五登を以つて初代とする、役者から振附になり、能の本行を研究して巧みに自家藥籠のものとした、五登の妾（後妻とも傳ふ）に小床といふ上手があり、五登の養女にお蓮と呼ぶ名手があつた、山村の天下はこれらの人達によつて大阪を風靡した、五登の養子を二代目友五郎となす、友五郎は初代に比して凡庸の譏りを免かれぬけれども猶ほ父の業を墜さず、お蓮と共に山村流の爲めに盡した。

楳茂都流は「能に降參する」のが大嫌ひである、山村流の說く本行なるものを排斥し、全く囚れざる自由の舞踊の天地を作らうとした、山村流に對する一敵國であつた先代扇性も變物であつた、彫刻が上手で能面等は實に逸作とすべきものが遺つてゐる、大阪に明治の始め頃、「テニハ狂言」といふものがあつたこれは堀井仙助の座頭で一時人氣があつた、泉祐三郎の今樣能よりも纏りの付いたものであつた、この仙助の黑幕には將曹が控へてゐ

た、始め片山秀三郎といふ能師が衣食に窮した處から何か好い仕事はあるまいかと將曹の許へやつて來た、將曹がさらば堀井仙助といふ名を襲いで舞と能と芝居とのテニハを合はせる所作だからテニハ狂言と付けてやらうと將曹は命名親となつた後には二興行など將曹も出演した舞臺は御靈神社内にあつた小屋である、將曹が作もしてやつた、振附もすべてをやつた、この人にはかうした道樂氣が滿々としてゐた。

然し色町と芝居との師匠たることは嫌いで矢張、寡慾な一徹者、嘗つて弟子の娘の父なる某金持ちが將曹に「お師匠はん、角の芝居の東隣りからクルリと芝居裏かけての借家の家守を三年間してゐておくなはつたら必度この借家を進上します」とす、めたが、どうしても將曹はウント云はなんだ、又人あつて「何故芝居へ振付に行かぬか」と尋ねたに對し「役者に附合はうとするにはそれ丈けの見得を張らねばならぬ、そんなことまでして附き合ひ度いとは思はん」といつてゐた、後ちに新町から切なる賴みで將曹は實子の道三郎、卽ち今の扇性と共に敎へに行つてゐたこともあつた、それはこれから說かう。

△二代目扇性と劇場關係

「今から小三十年ほど前でせう、東京から芝鶴が辨天座へ來たことがありました、その時身替り音頭を出すので振をつけて欲しいと佐野といふ頭取からの賴みです、父と相談しますとお前がやつて見ようと思ふなら私が後見をしてやるとのことでとう〳〵私は振附を引受けることになりました」と扇性は思出での多さうな面持で天神髯を撫で上げ撫で下しつゝ語る。

當時二代目山村友五郎は旣に芝居へ出ぬことになつた、代りとして藤間竹遊といふ婆さんが振付けとなり、又この次には東京から市川お久といふ婦人が來てゐた、又南地の廓にも好い師匠が乏しかつたので南地へ楳茂都を迎へ度



楳茂都扇性妻女美彌と子息陸平

いと件の頭取へ交渉があつた、交渉したのは今の宗右衛門町桂屋の老女將小せんであつた、頭取は南地の事務所といつたやうな處へ師匠が行くことにして置いたが小せんではさうでない自分の店とか座形とかへ來て欲しかつた、この爲め頭取と小せんとの間にイキサツがあつてとう〳〵楳茂都は南地の稽古を斷わることゝした、南地へは行かなかつたが新町へは父と共に遊軍的の師匠として迎へられてゐた、新町の師匠には藤間竹遊が控へてゐた、楳茂都父子は新町の爲めに隨分と骨を折つて盡してゐた「父は二十三年前に歿しました、新町の事務所の落成式の時、私と父とで振付けをした舞踊を出したこともありましたが――」とのこと、先代扇性の行藏にはまだ〳〵奇話、逸話がある、或時、知人が餘り扇性が貧居だから金を借すから一つ商賣でも始めてはとすゝめた時、扇性は「もう少し金が出來てからにしよう」と答へた、その斷わつた理由は、一文もない處へ金を借りて來るとすぐにその金を喰ひ込む、それよりも喰ひつなげる丈けの金を持つてゐて借金し、借金丈けの商ひをするのが上分別ではあるまいかと偉らいことを云つた、すゝめた人も默まりで引取つたとやら、何せよあれ丈けの楳茂都流と名乘る丈けの流派を拵めた人は何處かに違つた點がなければならぬ、今の扇性は亡父のことについては「變り者」とのみで多く話さぬが變り者の一言には意味があるやうに思はれる祖父も變り者、父も亦變り者であつた、今の扇性は又更にズンド變り者に出來上つてゐる。

△其流風の及ぶところ

芝居との關係はホンの僅かで手を引いた今の扇性は色町に於て多く門下を持つに至つた新町は明治廿六年頃からざつと八年間ほど敎へてゐて一時中絕し又今年で第九回のその浪花踊が出來た第一回の當時から再び楳茂都は新町の師匠となつた、又北の新地へは明治廿八年頃から約十六年の久しきに亘つて稽古をしてゐた、神戸も今年十五年になる、楳茂都を師と仰いで相濟らぬは神戸の鷺集會連である、神戸の仲撿の藝者連から出來てゐる鷺集會は既記の如く十數年、宛ら慈父の如く楳茂都に親んでゐた、仲撿の有力者たる矢島某は楳茂都を推戴して厚く迎へた、年々大黑座で催さる、鷺集會の溫習會は立派なものであつた、然るに仲撿は近年、何かの紛紜で二分し仲撿と新仲撿とに分れた新仲撿は矢島一派、鷺集會連中が多い、仲撿は師として若柳吉藏師匠を東京から招き、その溫習會を催す、新仲撿でも相變らず楳茂都流の溫習會をやる、梅幸、お惠津、松子の如きはその錚たるものである、中でも梅幸は楳茂都門下の翹楚と云つても宜しい、硬いもの軟らかなもの何れにも適し、氣品の高い舞振りと溫雅な容姿とは群を拔いてゐる、又妓品から云つても梅幸の名は扇港風流に鳴るところ、廿六七歲の中年增とは思へぬほどに美しい、お惠津は嘗つて梅丸と云つたが哲名術に凝つてかく改名したのである、梅丸の技は才氣潑溂、輕妙無比である、梅幸の莊重典麗に對し梅丸の舞は奇峭である滑脫である、梅丸の風姿は梅幸と比ぶべくもない三枚目だが座敷振りからすべてが才氣で押して行く、だから最負が多い、楳茂都流で最も善く舞ふ者には朱骨で、扇面に梅を描いた扇を與へる、この扇を翳して舞ひうる藝者は關西にタッタ二人しかない、一人は梅幸である、一人はお惠津である、外に僅か數年の稽古だが有望な一人がある、それは

楳茂都門下となり度さに柳原から仲撿へやつて來たほどの舞踊熱心の松子である、今の鶯集會の花形は此三人だ、新町は二度目の事務所の師匠として稽古から云へば九年ほどになる、楳茂都門下の俊髦としては鶴子、作鶴、梅香、若勇、小石、千代作、豆鶴、梅奴等がゐる、朱骨槍梅の扇は許されぬがその次の扇たる槍梅の扇は鶴子、作鶴、勇菊、若勇、小石等に許されてゐる、右のうちに豆鶴、梅奴はまだ若いが師匠の秘藏弟子であるさうな、又昨年の始め北登布多會といふ會を鶴子等主唱となりて起し會員數十名、楳茂都を會長とし、同じ新町で藤間藤藏に習つてゐる若干妓の一團と相對して鎬を削つてゐたが本年三月、北登布多會は解散するに至つた、然し楳茂都の事務所教師たるは依然たりで藝者連から出來た同會が都合で解散したまでの話。

今日では西川石松の勢力地となつた北の新地も今から六七年前迄は楳茂都流の舞扇を持たぬ藝者は肩身が狹かつたほどであつた、今は傳信屋の女將となつた小金、廢業して阿波へ歸つた清子を始めとして喜代路、呂之助、小力（今の小金）豆力、豆樂、一奴、を始めとして北陽は當時、楳茂都流の淵叢であつた北の新地から車を飛ばせて早朝に師匠の宅まで押かけて稽古をしたほどの熱心であつた、小金、清子の兩人は大阪藝者中でも南地の小三（今廢めてゐる）吉勇等と相對して舞踊の上手と呼ばれてゐた、喜代路等の舞踊は花も實もあつた、かばかり全盛の北陽が急に西川振りと變じて仕舞つた、楳茂都は何も云はずに事務所の師匠たることを辭した、その後へ石松が入つた、さうして北の新地の美人連は馴れぬ名古屋振りを眞似るべく油汗を流して稽古をしてゐる、樣によつて胡盧を描く、愚も亦甚だしいと嘲つてゐる人もある、これには楳茂都と北の新地の有力者の小林剛三翁との意見の衝突があつた、楳茂都は骨が硬い、小林も云ひ出せば後へは引かぬ男、小林は名古屋の人、其女房は名高い佐藤のお國（舞踊の名手）である、名古屋の西川石松とは年來の親しい間柄、石松は娘のお花と共に折々來阪し、又暫く西の宮に病を養うてゐたことがある、北陽藝者の若干は佐藤の家又は西の宮で石松に幾番かの舞踊を習つた、楳茂都と小林との感情はこんな事からまづくなつた、變り者と變り者とは斯うして十數年の師弟の緣を斷ち切つた、又職分の弟子（女人弟子）としては楳茂都泰永（女）がゐる、師匠の手助をして神戸へ又は新町へも行つてゐる、扇性の妻にお美彌さんといふ內助の功の多いやり手がある、始めは門下で後に媒介者あつて早く妻を失つた扇性の後添へとなつた、舞踊は固り堪能、何時も神戸や新町の演習會には扇性と共に後見に現はれ、神戸、新町の代稽古もして中々に忙しい、扇性の先妻の一粒種に陸平さんといふ中學を卒業したばかりの息子がある、小さい時から舞扇とつて鳳雛の聞えが高い。

△今樣風流舞とは何ぞや

楳茂都の祖父が大橋の局から傳へられた風流舞は日本へ三味線が渡來した頃、大內の去る御方が三位に今樣を奏し、之れに振りを工夫されたのが始まり、その歌詞は多く傳はつてゐないが孝子賢女等のことを今樣に作られたものらしい、楳茂都流の三ケ條の極意、換言せば風流舞の極意は天地人の體、六法の備圓形の構への三つがある。

極意はこの三つだが詮ずるに「不動心の發露」といつたことを根本義としたもの、さうして楳茂都流は舞、所作、踊の三分子から成

り立つてゐるさうだ、舞とは朝日に鶴の羽をのして九天高く翺翔する如き悠々迫らぬ舞振を指すのである、所作とは喜怒哀樂の表情、踊とは手の舞ひ足のふむ所を知らずといつた發作的の感情の昂まりである、楳茂都流では扇舞を一番八釜敷くいふ、楳茂都流で最も誇るところは前に記した如く「能樂や狂言に降參せぬこと」である、扇性はドシ〳〵新作をやる、自ら筆をとる事もあれば、故久保田蓬庵老人（大阪の歌學者）に囑して執筆して貰つたのに振りをつけたことも屢々である、又「鳥羽屋獅子」だの「伏猫」の如き古曲に新らしい振をつける道樂も中々にある、「水の流れ」といつた文句で下を眺めたり、「鶯の囀り」といつた文句で兩袖を開いて鳥の形をする如き所謂「唄の文句に付く」振りは最も扇性の忌む振である、「私は俳諧をやりますが俳諧の附合せの心持ちを以つて振附に應用すれば面白からうと常に思つてゐます」とは扇性が折にふれて語る話、不卽不離の振附を八釜敷く稱へてゐる、東京の人が來阪して楳茂都の舞踊を見ると藤間に似たところ、花柳に似たところがある、大方これは東京の舞踊をも研究して後にこの流が編み出されたに相違ないと說くことも往々にしてあるが「私は他流の舞踊は今迄にあまり見たことはありません」と扇性は云つてゐる、その父も扇性と同じく見學などには出かけず、すべてが獨創的一家の工夫によつて古傳に基き作り出したのが風流舞である、山村の典雅にして地味なのに比べると楳茂都の舞踊は豐麗宛ら牡丹花のやうな眺めがある、さす手、引く手が花やかで自由だ、さうして、舞踊の形が繪畫的に出來てゐる、時にはあまりに花やかに過ぎはしないかと思はるゝほどに色彩が濃く、匂ひが高い、すべてが獨創的で好んで奇を弄し裏を行く、皮肉な凝性な扇性の面目はその一擧手一投足の舞振にもあり〳〵と窺ひ得られる

△楳茂都扇性、現在の地位

山村流は次第〳〵に滅びるも一方である、三代目の宗家に當る山村お友歿後以來、山村流は更に振はなくなつた、俳優中で山村流の名手たりし市川齋入は世を去つた、僅かに九郎右衞門町に山村らく（海老くと俗に呼ぶ）がゐるばかり、この老婆はもう八十を過ぎてゐる、始め山村五登（初代友五郎）に習ひ、後、姉弟子のお幸に仕込んで貰つた名人である、この人の孫におけいといふまだ三十そこそこの女がゐる、海老らくの造詣は悉くおけいに傳へてあるさうだ、又南地演舞場の師匠として山村若子、山村はるの二人がゐる、然れども大阪の山村舞は次第〳〵に東京の舞踊や名古屋の舞踊の凄じい侵入によつて隅へ押籠められつゝある、山村舞研究會を起さうかといふ同好の企てもないではないがこの調子だから覺束ない。

南地は前記の二人の山村師匠があるが藝者連は若柳、花柳の舞踊に凝つてゐる、北の新地は西川石松、お花の勢力範圍と化して仕舞つた、堀江は西川お嘉儀が師匠である、新町は楳茂都扇性を以つて廓の師匠と仰いでゐるが藤間派が一兩年喰ひ込んで來た、大阪は他國の舞踊の師匠の寄合ひ場所となつてゐる、大阪の鄕土藝術としての舞踊は山村舞と楳茂都流との二つでその山村舞は殘喘を保つてゐるに過ぎずとすれば殘るは楳茂都の一流である、扇性は五十を越したとは云へまだ頗る元氣で頑健な身體は壯者を凌いで堂々と門戸を張つてゐる、今でこそ南地、北陽の次にゐるが昔は本廓の格式を持つて南北よりも威張つてゐた新町は大阪の色町では一番古い歷史を

持つてゐる所、この新町が春の踊といひ、秋の温習會と云ひ、妓品には南地に劣るとも舞踊に於いて劣らず、侮り難き注意をひきつゝあるは楳茂都あるが爲めである、楳茂都の身體は大阪舞踊師匠として非常に大切な身體である、或人が「師匠」の瑕は餘り恒産があり過ぎることだ」と云つた、實にも扇性は金持ち過ぎる、恒産があり過ぎるから變人主義を頻りと發揮し、自分の意見に合はぬ處なれば何の執着もなく去つて仕舞ふ、話が五月蠅くなれば振附を斷わつて好きな俳諧を樂しむばかりだと嘯く。

△天神髯に吹く春の風

「好いお師匠はん」とは弟子の藝者連が皆、口にするところ、扇性は北陽と手を切つた時十餘年の久しき手を取らんばかりにして教へて貰つた北陽美人の姐さん連はオイ〳〵泣いたといふ、さうして事務所はどうあらうと自分は決して二心がないから昔どほりに教へて欲しいと驚集庵へ車を飛ばせて頼みに來た藝者もあつたが楳茂都は諄々と云うて聞かせて思ひ止まらせたさうだ、神戸連も又さうであらうが新町藝者も「お師匠はん〳〵」と懐いてゐる、楳茂都の稽古振りは頗る巧い、師匠によつては手に竹杖を持つて惡るい癖のある處を指して叱り飛せ、時には出過ぎた足や張過ぎた肱などを叩く人もあり「こんな事位出來まへんか」と衆人の間で云はれた當人は顔を眞赤にするほど嚴しい稽古をつける師匠もあるさうだが楳茂都は一切、こんなストイック——少し仰山さうだが——な教へ方はしない、何時もニコ〳〵と天神髯を扱きながら教へてゐる、いくら教へても覺えの良からぬ弟子だと何度も繰返させる、それでもまだ解らぬ時は輕い皮肉をいふ位、師匠がそれ丈に念を入れてやればいくら鈍根でも覺えられぬ譯はないと扇性は云てゐる、扇性の嫌いなは不眞面目な弟子である、又してもゲラ〳〵笑ふ、生意氣なのが浪花踊の節などには交つてゐる、教へても〳〵身を入れず惡るい癖の目立つ者には扇性は默つてゐてその惡い形を巧みに眞似て見せてニヤリと笑ふ、如何に不眞面目な女でもこのニヤリには忽ち參つて仕舞ふ、だから大勢の浪花踊の稽古は割に早く稽古が濟む。

之れは餘談だが七八年ばかり以前の事と記憶する、坪内博士が來阪された砌、楳茂都の稽古場——自宅——を訪はれたことがあつた丁度居合せた北陽の小金、清子をして扇性は「蝶蜘の拍子舞」を舞はせた、博士は舞を見た後、扇性と何かと振事劇に就いて談話を交換された、その時、博士と扇性との心は互ひに相通ずるものがあつたと見え、その後も双方から文のとりやりがあつたらしい、博士は出來るならば楳茂都に東京へやつて來ないかと勸められたとやら、扇性も博士の新作の振事劇の筋書を漁つて讀んでゐた「北齋と歌麿」などは愛讀の一つで「あれを頂戴して一つ私の道樂を加へて登場して見度いと思つてゐます、」と嘗て話してゐた、扇性は尋常の新作では承知出來ない男で、浦島でも玉手箱を開いて老翁と變ずるよりも玉手箱を開けば老翁が俄はかに若い美い男と變ずるといつたやうな逆を行つた奇巧が大好き、時には奇に過ぎたこともやるが今の上方の振附でこの人だけの理解もあり素養もあり、腕の立つ振附はありとしも覺えぬ、趣味の扇性は繪畫では舞尊と號し俳諧では氷紈といふ。

訂）新演藝四月號「八千代の時代は過去つた」の「中若勇」とあるは「吉勇」に、同じく一一七頁中の段に「闕の扉」とあるは「閨の扇」と訂正



大阪酒場通信

カフエー・クレナキ

近江青人

千日前の芦邊倶樂部の南横丁を一寸東へ曲りますとカフエー・クレナキがあります。

ドアをあけて中に這入りますと、成る程椅子や食卓を竝べて酒場らしくはありますが、何處かあたりの樣子が、棚に竝べられてある洋酒瓶と調和しない所が見えます。といふのは、こゝは以前汁粉屋であつたのを、鈴木といふ男が芦邊倶樂部から借り受けて、今の酒場を開いたからです。そんな事に氣がつく位ぬですから、尤もとりたてゝ云ふ程の裝飾もしてありませんし、三四枚吊り下げられてあります額などにも、眼をとめる程價値のあるものはありません。これがよく主人公、鈴木の性格を現はしてゐるのです。

鈴木は元來海の人だつたのです。だしぬけにこんな事を云ふと一寸變ですが、鈴木の話によりますと、彼は十九歳の時から料理人として船中に臥床してゐたのださうです。米國の軍艦ケンタツキ號にも三年間ゐたさうです。紐育と倫敦の間を通ふメールにもゐたさうです。十年前に喜望峰も廻つたさうです。シドニーを中心として南洋諸島の巡航もしたさうです。これ等の凡てが料理人として渡り歩いたのですから、それにするゝと實に恰好よく男性的にふとつてゐるものですから、酒場のマネーヂヤとしてカバレ・ヅ・パノンで異彩を放つてゐた事は無理もない事でせう。

鈴木は「旗の酒場」の開業當時から、店を預つて洋酒通を滿足さしたり、毛唐を迎へて話相手になつたりしてゐました。處が、一ケ年程たつてから突然鈴木は「旗の酒場」から姿を隱して了ひました。その原因は少しく鈴木に對して氣の毒ですから申上げずに置きませう。併し、それは決して破廉恥な事ではありません。と云つてあまり好い事ではありませんが、要するに蟲も殺さないやうな顔をしてゐながら、少しく變な手段を執つて本能性を發揮しすぎたのです。矢張り海の人ですな。鈴木の出たあとは「旗の酒場」も何となく心許ないやうに淋しくなりました。それで主人夫妻はまた鈴木を雇ひ入れましたが、間もなく鈴木は再び前例を繰り返へしました。それから鈴木の姿は二度と「旗の酒場」へは現はれなくなつたのです。

「旗の酒場」を出てから、鈴木は別府通ひの遊覽船くれなゐ丸に乘りまして、再び海上生活をするやうになりました。併し、それも一年間程でしたそれから獨力でそのカフエー・クレナキを開いたのです。新しく迎へた細君がその資本を出したのだといふ噂ですが、それはどうだか確かな事は知りません。カフエー・クレナキといふ名もくれなゐ丸からとつたもので、階下にはくれなゐ丸の大

きな寫眞を縁に入れたり、献立表もくれなゐ丸の献立表を使つたりしてゐます。

こゝは家主の芦邊倶樂部を玻璃戸一枚で往來が出來るものですから、暇な時にはよく給仕女などは活動の盗見に出かけたり、又倶樂部の方からも活辯などが珈琲を呑みに來たりします。何分場所が場所ですから、いろんな活動小屋の辯士を電話で呼び出して、活動のロハ見を頼むと云つたやうな客が多くなつて、あまり好い客種もなささうですが、それでも「濱の酒場」時代に鈴木と染馴みになつたやうな洋酒通が出かけまして、他では味はれない酒に舌鼓をうつてゐる事もあります。

今芦邊倶樂部にゐます倉橋仙太郎なども、よくこゝへ姿を現はしてパンを牛乳に漬けて食つてゐます。先日も私が行つた時、倉橋は東京から來た畫家らしい人を捉へて、矢張り牛乳にパンを浸しながら、

「まあ、落魄した倉橋の顔も一つ描いて下さい。」

と、云つてゐました。

畫家は寫生帳をいぢりながら微笑んでゐました。一週間も剃刀を知らないやうな蒼い顔や火鉢で焦したらしい木綿羽織の裾穴などは何んとなく落魄と云ふ言葉を裏書きしてゐるやうに思はれました。併し、倉橋は「かう云ふ仕事をしてからでないと、本當によい劇などは解かるものぢやないと思ひますれ。などと、やがてそれからそれへと氣焰を吐くのでありました。畫家はにた〳〵と笑ひながら默つてきいてゐました。

私は、倉橋が芦邊倶樂部でどんな仕事をしてゐるかを知りませんが、若し忘れられるといけませんからこの機會を利用して、倉橋はまだ新劇團に就て大なる抱負を有つてゐるといふ事を紹介して置きませう。

こゝの給仕女はどう云ふものか、よく代りますが、お末、おとくといふ二人は比較的長續きしてゐます。おとくといふのは、まだほんの小娘ですが、お末といふのは十九にもなりませうか、莫迦に口の大きな女です。併し、二人ともいつも陰氣な淋しい顏をしてゐます。「いつまでこんな事をせなければならないんだらう。」といふやうな眼をしてゐます。全體が淋しい感じに閉ざされた酒場です。それは電燈が暗いと云ふ爲めばかりではないやうです。

こゝでは通な洋酒のほかに、五十錢を出しますと、鈴木が自慢の London beyefsteak といふものを食はしてくれます。





江東劇場で失敗した
根岸治右衛門

島川七石

東京相撲協會の理事、九代目三河屋の當主、根岸治右衛門が、畑違の劇場經營に手を燒き、一家一門に尠からざる迷惑を掛け、あまつさへ、劇場其のものは二洲橋畔に、工事半ばの儘、根岸が大失敗を形ちの上で呵て居る、て當時根岸があの失敗を世間に曝露した時、芝居道の古武者で海千山千の大策師が、幕内から江東の一角を望んで赤い舌を出し、お相撲屋さんですものの芝居道へ手を出して、大トチにトチツてしまつたのは當然です、相撲での失敗なら河童が河で溺れたのだが、根岸さんのは土鼠が天上を企てて頓死したんだと皮肉な評をして居たけれども根岸は如何なる動機で江東劇場の經營を企てたかは世間一般は知らないのだ、裡面の消息を知らぬ社會は根岸に對しても千態萬様の評を下して居る、そうして賢愚を論じ、自惚れの骨頂と叫ぶ者があれば、調子に乘つた凡人の失敗と云ふ者もある、筆者は根岸が彼の大事業を企てた裡面も表面も熟知して居るから、謎の人根岸治右衛門を赤裸々に解剖し、彼れが江東劇場の失敗史を記して見やう。

東京相撲協會の智嚢と許され居る、根岸治右衛門は、實際世間で云ふ如く阿呆では無い、才氣煥發眼から鼻へ抜けるやうな手腕家である、然かも今は男の働き盛りと云ふ四十に手の屆いたばかりの油の乘り切つた、口も八丁手も八丁の仕事師だ、であるから江東の空に聳ゆる東洋名物の國技館も、當時常陸山梅ケ谷なぞの大力士が輩出した時とは云へ、赤手空拳、美事あの大事業を完成したものは、彼れの一生は勿論、國に角力道が廢滅せぬ限りは未來永劫、九代目根岸治右衛門の大功績として傳はるのだ、其の智惠者、三河屋の旦那、卽ち東京相撲協會の理事東京市會議員根岸治右衛門が、爲すべき事業もあらうに

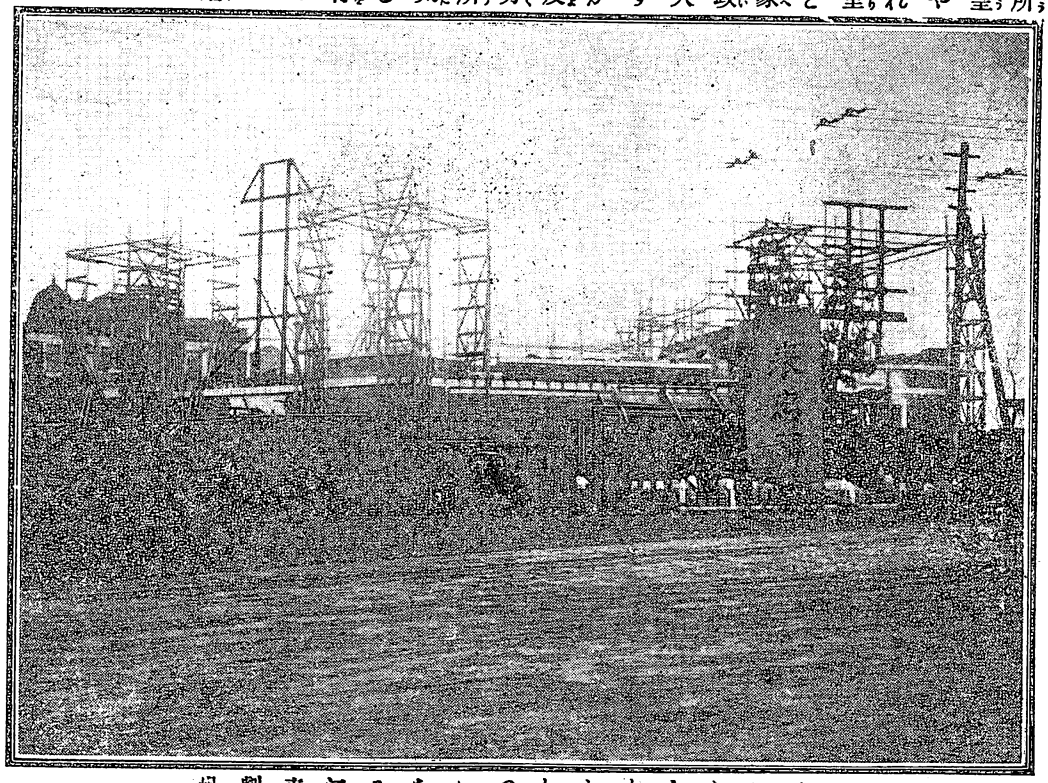
△相撲とは犬と猿の芝居道▽

へ手を出して大失敗をしたのは、當然の結果であつて、要するに根岸は白痴臺へ怜悧鏡金をして居たのだと後と先き見ずの世間知ら

ずだと罵つた者もあつた、けれども夫れは淺薄の議論で在り體に云へば根岸も、最初は二の足を踏んで居たのだ、退つ引きならぬ破目に陷つて、ウンとお臍の下へ力を入れるまでには、約一ケ月間と云ふものは、空ら仕切りや化粧立の時を費して居たのだ、けれども當時の根岸治右衞門は一面から云へば得意時代であつたから、多少處では無い充分の己惚れがあつたには違ひない、俺れがと云ふ大きな己惚れが一から六まで手傳つて云たのだ、成程當代角界に於ては無二の利け者であらう、威いお方であつたらう、が何を云つても懷ろ育ちの坊ちやん氣質が失せ無かつたから、あんな破目に立ち至つたのである、さうして根岸が如何なる動機で劇界へ乘り出したかと云へば順序として

△江東劇場の前身江東座の▽

成り立ちから記さねばならない、一體あの江東劇場の前身たる江東座の經營を目論見たる人は茨城縣猿島郡の富豪青木某の長子青木幸一郎と云ふ人で、此の人は年こそ若いが却なかの仕事師であつて、あの兩國向ふの東京協會の持て居る地を相し、場所と云ひ交通と云ひ申分無しと見て取て大劇場建設の希望を抱き、夫れには本所區に於て最も名望の在る人の後援やら盡力を得なければならぬと、鄕里猿島郡を根據地として常に自分の家へ出入して居る政友會の代議士小久保喜七氏に相談すると、小久保氏が二つ返事で府會及び市會に一大勢力を持つて居た本所の名物男青木庄太郎翁の許へ紹介して來た、すると青木は俺の樣な者でも力に成ると思つて賴られたのが嬉しいと云つて其の日の中から八方に運動して愈々江東座の建設に掛り、



立腐になんらとしつゝありる江東劇場

工事は着々と進捗して明治四十四年の暮には基礎工事が出來上つたのだ、が是れまでになつて不意に水の手が留つてしまつた、今まで青木幸一郎と云ふ人は鄕里の實父から金の融通をして居たのに、其の金がピタリと留つてしまい、一進も三進も行かないので基礎工事だけ出來上つた時手を退てしまつた、さうなると青木庄太郎翁は其の時まで自分の顔で建築請負業者にも無理を聽いて貰つて在るし座主と云ふ人が自分と同姓であるため、事情を知らぬ世間は庄太郎翁の一族と思つて居た者も在るから、夫れなら一つ

△俺れが後を引受けやう▽

と石材問屋の主人公は例の長兵衞を極め込んで工事を繼續する事となつたのだ、と同時に庄太郎翁は日頃根岸治右衞門の手腕に惚れ込んで、宛ら我が子同樣に可愛がりもしたし引立てもして、遂に根岸をして市會議員にまでした位だから、其の根岸を隱れたる參謀として株式組織に變更し、一株二十圓の一萬五千株、卽ち資金參拾萬圓の會社としたのであつた、さうして青木庄太郎翁が今少しく生存して居たならば一人で五千株を引受ける人であつた處、不幸にも庄太郎翁は明治四十五年の二月頃から病の床に就て、最初は左程でも無いと思つて居たのが段々重くなつて遂には大學病院へ入院すると云ふ始末、株式募集の勸誘處が、大正元年の五月遂に死亡してしまつたのだ、青木庄太郎翁が大學病院の白きベットの上で永久に歸らぬ旅の途に就たのは五月場所の新番附發表の三日前で、根岸の身體は二つ在つても三つ在つても足らぬやうな時であつたが、根岸は、幼くして父親に死別した以來、一方ならぬ恩寵を受けて居る翁の事であるから、常に枕頭に在つて看護して居ると、死ぬ三日前に枕頭へ根岸と自分の親戚である三崎芳之助と云ふ人と當時警視廳の會計課長をして居た長岡誠之助氏の三人を呼び根岸をして遺言狀の筆を執らせたものだ、庄太郎翁は根岸を我が子のやうに思つて居たからこそ口移しのやうな遺言狀を書かせたが、幾多の遺言の中には自分の營業たる石材商は合名會社にしろと云ふ事もあり、遺產の分配法やら

△江東座に關する後繼者の▽

事も在つたが翁も江東座の事は餘程氣に成つたと見え、自分が病氣の爲め一寸工事も中止のやうに成つて居るが、あの劇場が建設されゝば本所の繁榮に成ることであるから、親族會議の決議に依て青木一家の者が引續き株を募集して工事を繼續するなり、他に相當の人があらば其の人に引渡しても可いから是非とは云はぬが出來ることなら劇場を建設して呉れ、萬事は親族會議に依て極めて呉れと遺言して死んでしまつた、偖て庄太郎翁の野邊の送りを濟ませ第一回、第二回の親族會議が開かれ遺產の事や、翁の事業の事なぞも其の遺言通りに行はれたが、爰に一つ困つた事は問題の江東座であつた、額を鳩めて熟議に日を重ねて居るが、何を云ても馴れぬ大事業でも在り資金も要る、さうかと云て株式の募集は思ふ樣に捗取ぬ、如何したものかと協議に協議を重る中に親族の一人が一層のこと根岸さんに引受て貰はうと云ひ出した者が在る成程良い處へ氣が附いた、燈臺下暗しであつた、あの人なら興行の經驗もあるし、世間も廣い、第一敏腕家だから屹つと旨く遣つて、九泉の下に眠る庄太郎翁も經營者に其の人を得たことを喜ぶであらうと、衆議は忽ち決して大きなお荷物は根岸の處へ背負込まれるこ

とになつた、偖て其の交渉を受けると、流石に根岸だけあつて暫く熟考の餘地を與へて呉れと、二の足を踏み乍ら三考熟慮に日を費して居た、が根岸としては其の事業は馴れぬことだから不安があつたが、幼時から庄太郎翁に受けた恩と云ふ事と、前にも記した通り世間で根岸を祭り上げて居るから多少の自負もあり、乃公出でずんばと云ふ己惚もあつたので、愈よ夫れではお引受けを致しませうと根岸自らが腕車を飛ばして先方へ快諾の一言を與へたのは、確か大正元年七月十一日で夏雨が降つて居た日の午後だと思つて居る、さうして其の當時、根岸の資産はと云ふと

△約三萬圓は持て居たのだ▽

が江東座に其の時まで青木庄太郎翁の注ぎ込んで居た金と云ふのが恰度三萬圓ばかりであつたから少しばかり不足したのを一時義父である相撲協會の取締友綱親方から融通して貰ひ、耳を揃へて三萬圓を青木方に渡して、江東座は愈よ根岸が引受ける事になつたのだ、一體芝居道に於て斯う云ふ取引が在る時には、其應に端唄すべからざる千變萬化の懸引が在り、權謀と術數、幾多の魂膽と迂餘曲折を重ね、裏に裏があつて最後に相手方を獣や應無しに引受人の提議を入れさせて取引するのだか、仕事師と云はれ手腕家と恐れられて居る所謂協會の智嚢根岸は、徒らに江戸ッ兒氣ばかり出して無雜作三萬圓の金を出してしまつたのだ、さうして我輩の手腕は斯んなものでござんすと座名も江東劇場と改めて再び工事に取り掛ると共に株式の募集に掛つたが當の御本人は前にも記した三河屋の坊ちやんから若旦那、さうして九代目の治右衞門さんだ、角力道に掛けては滅いが、芝居道に掛けて眞つ暗三寶盲目の手探り同然であるのに、御當人は豐田軒の二階へ設けた事務所の椅子へ脂下つた切りで少しも働かずに、萬事は使用人任せの殿樣氣質だ、が然し根が目から鼻へ抜けるやうな怜悧者だから、是れでは不可ぬと目覺しい一大活動を試み始めると、可哀想に世は諒闇となつて天が下は火の消えたやうに成つてしまつた、株式の募集は此の大打撃の爲めに少しも捗取らぬのみか、中には角力屋が芝居では少し心許無いなぞと二の足を踏む人が出て來て、株は集らぬのに工事はどん〳〵進んで行く、融通して來る現金は羽が生えて飛んでしまう、乘り掛けた船だ劇場さへ出來てしまへばと、獲らぬ狸の皮算用から割り出した

△手形濫發と云ふ窮餘の策▽

を講じて防ぎを付け、辛らくも其の日を繼いで居たのだ、其の裏書人は改めて記すまでも無く義父である協會の取締友綱重太郎親方や、義兄弟である柳橋の藝者屋榮家の主人公たる木村庄之助なぞと云ふ、何れも親族關係の人達ばかりで、智惠者とか策師とか云はれて居た根岸の事であるから、其の當時はまだ世間の信用は充分に在つたのを利用し、自分が少しでも恥かしい思ひをして友人間に融通を賴んだらば、モツと多額の金も借りられたらうし、あんな悲慘な結果を産まずに濟んだのを、其處が世間見ずのお坊ちやんだから他人に金を借りる事が恥かしいと親戚間でばかり融通をして、時日を送つて居た結果は、血の出るやうな、肉を剝がれるやうな高い利息の金まで使つて一時を糊塗して居たが愈よ刀折れ矢が盡きやうとした刹那、溺れんとする者が藁に縋るやうに、自己が保管して居た相撲協會の現金參萬餘圓を融通してしまつたの

である、處か何を云つても自分の財産三萬圓と云ふものは、江東座引受け當時に青木庄太郎翁の遺族へ渡してしまつて、他は募集する株金を當てにして始めた仕事が、其の株が集まら無いのだから、最後にはどうにも斯うにも策の施しやうが無くなつてしまつたのだ、夫れでも勝氣の根岸は切めて劇場の外部だけでも出來上つてしまへば、亦た金の融通が出來るだらうと、相撲茶屋三河屋の株までも抵當にして金を拵へて一生懸命に礎礎の上塗りをして居たが、一方協會の金を無斷で融通してあるのに地方へ巡業して居た役員は歸京して來るし、拂ふ物が遲れるから工事は請負業者の方で職工を減員する、從つて待ちに待つて居た外部の建築が出來上らぬ中に、歸京して來た協會役員に自分の融通して居た約三萬圓の現金を引渡さねばならぬが、到底夫れが出來無いので遂には流石の彼れも匙を投けて

△一切の窮狀を世間へ暴露▽

すると同時に友綱を始め木村庄之助等の許へ難有くも無い執達吏のお見舞を受けさせるやら松坂町の自宅へも同じく其通りで、相撲番附の幕下の頭文字では無いが、一家一門はいづれも同じくの御相伴を喰ふ哀れな境遇に陷つてしまつた、從つて江東劇場の工事は全然中止と云ふ事になつて、才子根岸治右衛門の信用は地を掃つてしまつたのは、一面から云へば實に同情しても遣らなければならないのだ、よし彼れが江東劇場を引受けたにしろ青木庄太郎翁が今少し此の世に生きて居さへすれば、あんな悲慘な失敗をせずに濟んだのであつた、で彼れが江東劇場で失敗の眞相は上記の通りであるが此處に唯一の大問題が一つあるのだ、夫れは前にも記した協會の現金參萬圓の融通事件だ、此の事が表向き斯界に知れ渡ると、日頃友綱一派に反對の連中は好機逸すべからず此の際彼れから相撲番附の版權を取り上げて仕舞へと云ふ硬論者が出て來て、彼れに制裁を加へやうとした、江戸勸進相撲創始以來の版權、祖先三河屋治右衛門より九代目の彼れまで連綿と繼承して來た家業を協會へ取り上げてしまへと云ふのだ、論者は感情のみ走つて彼れが斯界に盡して來た功績に對しては一言も口にしないで、只だ其の時の三萬圓融通の現金が返濟が出來ないなら極端なる制裁を加へろと云ふのであつた、三萬圓位の金は平素なら義父の友綱も出したらうが、其の友綱が既に根岸の手形へ裏書をした爲め四苦八苦して居るのだから、幾ら思つたとて出來やう筈が無い、年寄連の根岸處分案たる丼會議は甲論乙駁容易に決し無かつたが、其の內報を齎らして貴郎の御意見はと、或る年寄が彼れの意嚮を訊しに來ると、彼れは男らしく非は私に在るのだから如何やうの御處分でも甘受すると答へたが、其の時の彼れは愈よ左樣と極まれば、祖先に對する不孝であるからと一通の遺言狀を內懷に入れ、三代目三河屋治右衛門が、時の寺社奉行石川伯耆守から拜領した家寶

△左陸奧守包保の鍛へた短刀▽

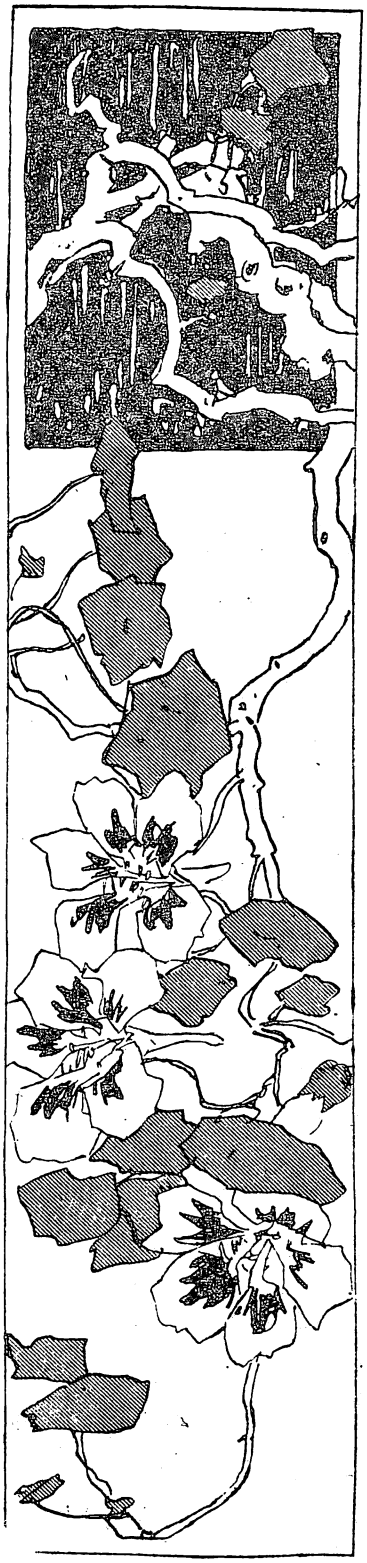
を密に携帶して協會棟上の理事室に年寄會議の終るのを待つて居た、さうして愈よ番附の版權取上げが決議されたら、潔く自刃して自己の罪を購ひ、其の版權の半分でも遺族へ與へて貰はうと覺悟して居たのだ、處が例の年寄會議のことだから容易に決する事が出來ず、最初の日は終に流會となつて次の日が來ると今度は兎に角向ふ五日間を待つから其の間に調達をしろと云ふ最初よりは聊か折れて來たもの、、何んで根岸の手で其の金が出

來やう筈が無い、宛ら木に縁つて魚を求めよと云ふやうな決議をして根岸へ通告すると、流石は根岸の事であるから、其の五日間に於て後事を殘らず片附け、愈よ其の日が來たら前にも書た通り、死して自己が背任の罪を詫びやうと思つて居ると、天は此の才人を捨て無かつたか、此の消息を秘かに知つた

△義俠心に富む好角家二名▽

が不意に現金參萬貳千圓を根岸に惠んで、彼れを角界に生きさしたのである、夫れが爲めに根岸は反つて良い男に成つて、流石は三河屋の親方と、其處は淡泊な力士社會であるから、融通した金が協會の金庫へ納ると目出度くシャン〳〵と手打ちの式が在つて、九代目三河屋治右衞門の死活問題は目出度く終りを告げたのであるが、一體此の二名の好角家は如何なる人であるかと云ふに某會の幹事をして居るエス君外一名で、其の俠骨稜々たる人の本名は判明して居るが、さうしては折角當の本人が匿名で根岸を救つたのに、其の人の名を出すのは、反つて意志に反するだらうから、筆者は殊更に預つて置く、根岸は此のエス君の義俠に依て江東劇場で失敗こそしたれ角界に於ては昔しながらの理事さんで、今度の東西合併相撲なぞに、大に貢獻する事があつたのだ、と同時に協會の幹部側にも此の一月場所打ち上げ後、何んとかして根岸をモウ一度復活させて、今日まで斯界に盡した功績に酬いやうと云ひ出したのが常陸山の出羽の海と先日死だ尾車なぞで出羽の海の如きは部屋の系統から云へば全然根岸とは反對側の人では在るが、流石に角界の大立物だけあつて、彼れが卒先して根岸が今日までの功勞に對して、東京相撲協會として彼れを復活させやうと云ひ出すと他の年寄り連も、始めて夫れに氣が付いたと見え私も贊成、僕も同感と云つたやうに評議は一決したもの、協會には現金と云ふものは無い、あれか是れかと詮策の結果、出羽の海や尾車を始め役員一同の意見が一致して、根岸へ對して協會の地所を協會の名に依て無償で贈與する事に先頃可決確定したのだ、根岸は此の通告に接すると出羽の海其他の役員の知遇に感泣して、必らず近き將來に於て復活すべきを誓つたさうである、で根岸が協會から貰つた地所と云ふのは何處であるかと云ふのに、卽ち江東劇場の敷地が一坪二百圓で全體七百坪ある、それを無償で貰つたのだ、協會としても全く功勞者に對して最も當を得たる處置であると共に、根岸其人にしても勇氣が百倍したであらうと信じるのだ、處が人間には何處に運が向て來るか知れないもので、今度は好角家中で船成金の某が、協會が夫れ丈けの事をしたのなら僕も一臂の力を貸さうと、江東劇場の建設に對して資金の融通を誓つて呉れたのだ、男と男が約束をしたのだから眞逆か間違の在り樣筈も無く、斯くて暫く風雲を望んで脾肉の嘆に暮れて居た、才人根岸治右衞門は再び世に出る春に際會しつ、あるのだ、苦い經驗を嘗めた彼れは、モウ昔しのやうに調子も卸すまいし、己惚れも去つたらうと思はれる、根岸自らが筆者に語つた處に依れば今秋には屹つと江東劇場も開場が出來ませうと悠然と語つた面には希望の色が輝いて居た。

謎の江東劇場は沈默の裡に斯んな機運に向いつゝあるのだ、果してモノになるかならぬか、それは今後の根岸の活動に待つばかりだ。



淺草公園觀せ物總揷り

米山蟻兄

淺草公園六區は活動寫眞館の多くを以て蔚然一廓を作つてゐる、櫛比せる大小幾多の觀物場に於て一晝夜の觀客は約十萬人と算せられる、電車一日の乘客四十萬人の四分の一、東京市人口の廿分の一に當つてをる、狐狸の巢窟たる奥山の引張り小屋以來、大帝都の觀樂鄉たる宿命を今や完全に果したるかの觀が有る、這個別天地を一瞥して桑海の蹤を探ね現在の各種興行物の案內記を畧述する事は、大正年初の東都を彩どる一頁として棄つべからざる地方色（ローカルカラー）があるからである。

それで調査は凡て四月八日現在による事にした。淺草の如く替り目の激しい處では、一寸何を標準にしていゝか分らぬ、勢ひ或る時間を限つてスナプショフトで寫し取るより外仕方がない、之れによつて幸ひに淺草公園の眞相を知る事が出來るならば記者の勞亦報はれたりと云ふべきである。

ルナパーク株式會社

公園六區の觀物場に興行王國を建設せるルナパーク株式會社は明治四十五年四月一日の創立で、資本金七拾五萬圓、一株廿圓全額拂込濟、取締役兼社長河浦謙一、常務取締役遠藤國三郎、取締役指田傳助、飯田三治、古屋愿三、黑澤夏吉、監査役松田茂幸、眞水英夫、相談役指田義雄、杉原榮三郎の諸君、所

有地所延坪一千四百七十七坪、准演劇場みくに座、汽車活動寫眞館、木馬館、帝國館、發音館、スケート場を所有し、みくに座、汽車活動館を直營し其他を賃貸してゐる、最初は社長河浦君の個人經營にして其の全部の敷地に一大遊園地を作り階上に諸種の商店階下に庭園の外演藝座、活動寫眞館等の餘興場を設け、十錢の入場料にて隨意に園内を逍遙し諸演藝を縱覽せしめたるが、活動寫眞館より發火して大半烏有に歸した、其後株式會社に組織を變更し、興行法も一變してみくに座、汽車寫眞活動館、日光館、歌舞伎館、木馬館、帝國館、初音館等に改築された、日光館は曲馬の厩の跡に出來た爲でもあるまいが他館に蹴飛ばされて經營者は收支償はず大正四年一月新橋藝妓屋男連、淺草巴連の義太夫天狗浚ひを名殘として休館してゐたが五年三月廢館となり階下はスケート場として貸附け階上は何にしたものかと評議中で此の四月一日迄には決定せず依然物置になつてゐた其隣に新築した歌舞伎館は何人經營者が替つても當りし事無く大正五年二月十日梅坊主に次ぐに實物飛行機展覽會を最後として全部の建物を取拂ひ其跡は大規模の觀賞庭園に改造された。

みくに座

みくに座の開館は大正二年三月、間口十九間奥行廿三間、定員二千廿六人、初興行は柿岡の大曲馬を一ケ月、其後は新派石田信夫、市川九女八、松本錦糸の新舊劇で有た、九女八は此處へ出勤中に死んだ死因は七十餘の老體で晝夜四回入替への舞臺を勤めたに依るのである、次で奈良丸、小奈良、樂燕等の浪花節、西洋物活動寫眞、名古屋藝妓の手踊、大正四年一月より中野信近、柴田善太郎一派の活動連鎖劇を八月迄、九月より井上正夫一派と入替へ寫眞は中野時代より天活特約となつた。

▲狂言悲劇花時雨、喜劇見はかすがひ、西洋寫眞探偵活劇大蛇▲俳優井上正夫、池田成美、近澤茂、長谷梅太郎、吉田豐作、秋月邦武、藤村秀夫、藤村芳洲、小林久俊、木下八百子、武田清子、島田喜多子▲入場料卅錢、廿錢、十錢、（軍人小人半額）開場午前十時

汽車活動寫眞館

汽車活動寫眞館はルナパークの直營にてみくに座の隣に在る、間口四間奥行八間、開館午前八時頃閉館夜九時前後だ、入口には發車信號の鈴を眞似して客を集め、五人六人集まれば發車信號の笛を鳴らして入場口を締切る、館内は中に通路と左右に三人宛一側の腰掛二十二脚を据ゑ夫れに腰を卸すと左右に汽車並の窓がある、笛の鳴ると共に電機動力に依て腰掛の有る其摸造汽車室全部が進行中と同じ樣に心持悪るくガタ〳〵震動し出して入れ替ゑ迄動き續ける、其間にアルプス高山鐵道の進行と其沿線風景、南滿洲鐵道鐵嶺、吉林、金州、安奉線沿線や東海道沿線の活動寫眞が乘客の前面に寫し出される、一回三錢均一、辯士一人技手二人で、晝夜數回の入替觀覽をさせる、乘客たる見物人が多いと寫眞も數を見せ少ければ一つで一回の終りとなる、他の寫眞館より高いから入場者は少なく一日三圓位ゐの收入である、其上添田總裁になつてから鐵道沿線の撮影を容易に許可せぬので寫眞の新物が無く、ルナ會社も些と此館を持て餘しの氣味だ。

木馬館

木馬館はパテー館の横通りで汽車活動館と脊中合せの位置に在る、經營者は高田喜之助

東北
南西
観音堂
池
十二階
演芸館
水族館
店商
東京館
クヰラヲマ
江戸館
大盛館
浪花館
世界館
大勝館
店商
店商
店商
大三館
富士館
大正館
電気館
帝國館
パノラマ館
活動写真館
観音館
常盤座
電気館
撃剣興行
劇場建設地
御園座
金車亭
大弁天
傳法院
浅草寺
浅草公園
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
店商
常設活動写真館建築地
雷門停留場
仲見世停留場
田原町

間口奥行共六間、開館午前八時前後閉館夜九時頃、入場料二錢均一、場の中央に圓筒形の廻り舞臺が有る、中央の高い處に樂隊、其下の側に自動車、木彫の馬が數臺圓形に配列されて大人も小供も其上に腰を卸すと瓦斯發動機の動力で舞臺が賑かな奏樂中に廻轉する、木馬は廻轉中に恰かも四足を動かして走るが如く前部と後部が刎上がる、大人も小供も嬉しがつて之に乘る、開放された入口と窓口から戸外へ夫れが見えて入場者を嗾るので此前は何時も人の山を築いてゐる。

パテー館

パテー館は間口十四間奥行九間定員六百五十四人、日活の所有にて川瀨廣吉事山田屋の娘義太夫常設館になつてゐる、久しい前は毛利館と云ふ小屋で有た、水もぐりやら海底旅行やらの見せ物を掛てゐる時に、三友館の前身の假小屋から火事が出て附近の見世物小屋は燒かれたが毛利館は幸ひに助かつた、佛國エム、パテー會社の活眞寫眞を出す樣になつてパテー館と改稱した、石井ブラックが其時始めて辯士をしたが其頃の活動は入が無つた其後寄席に出る松井源水、喜劇蝶十郎蝶之助等の興行も收支償はず、日活が買收して活動常設館となし五錢均一で見せた所が當て七錢にしてもまだ客が來た、他館が競爭して皆七錢になつてから又不入になり阪東左門市川左馬之助一座の舊劇連鎖をして大正四年十一月廿五日迄續き十二月一日より娘義太夫に成つた。

▲出演者綾菊、三平、組春、博賀、文雨、紫雲千歳、京二、小京、糸六、富榮、團豐▲入場料五錢、十錢（軍人小人半額）

初音館

初音館は間口八間奥行七間、大正三年二月開館當時はルナパーク會社が活動寫眞をしたが收支償はず、現在の桐谷三治郎が借受け浪花節常設館にした。

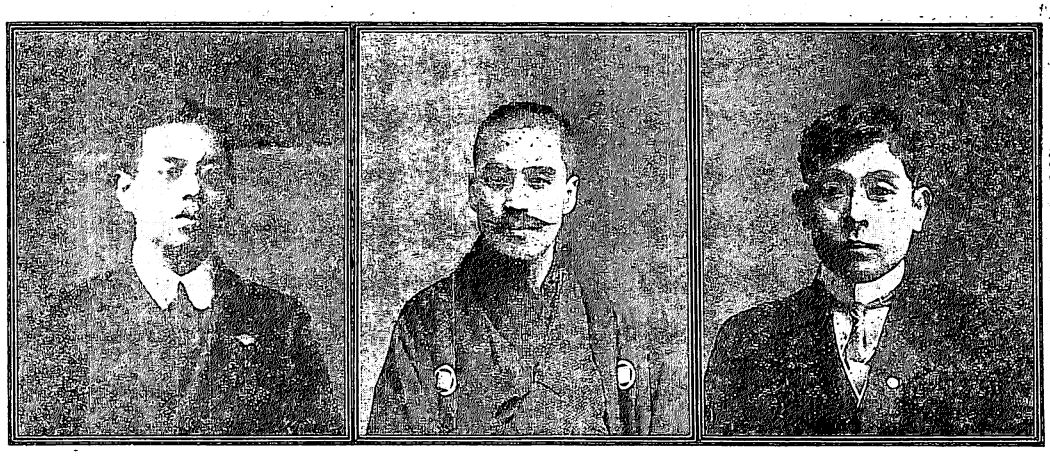
▲桃中軒桃子、京山數島、早川燕平、吉川蓬城吉川善確、小林重正、三國一富士菊、吉川善右衞門、吉川松鶴、京山吉右衞門、登久川巴城、浪花軒〆友外數名▲入場料十五錢、十錢（軍人小人半額）

根岸興行部

根岸興行部は根岸吉之助の經營に係り金龍館、常盤座、東京倶樂部の三館を直營し、常設劇場建設地を所有してゐる、大正五年三月一日より普通席十錢特等席二十錢の入場券を買へば一枚にて以上三館を見て廻れる三館共通なる興行法に一變した、正味の收支は分からぬが同業者多數の觀察では十錢で一日三館見られても此忙しい社會に一日掛つて三館見る者は少ない、一館だけでは高い物につく、以前一館で二萬圓上り高の有たのが三館で二萬圓しか上がるまい、三館共通制で他の興行師を壓倒しやうとした此計畫は外れたで有うと云つてゐる、興行部には飜譯主任獨逸法學士日本大學法學士高田吉松、法律顧問明治法學士大久保源之丞の外に廣告文作者として例の松崎天民君が居る。

金龍館

內國勸業博覽會場に取殘された觀覽車を持て來て見せ物にした時の空地へ根岸興行部の先代濱吉氏が明治四十三年に金龍館を建築し福寶堂が借て活動常設館となし三年後に日活會社に引續き活動の外に吾妻倶樂部、常盤座を打廻つてゐた會我之家五九郎を入て喜劇を打た、大正三年以來根岸興行部の直營となり五九郎一座へ木村駒子、池內萍錄、波



帝國館辯士（染井三郎）　大勝館辯士（花井秀雄）　キネマ倶樂部辯士（石坂雷洋）

多讓を加へ五九郎も乘地になつて新劇の合羽狂言をしたが蛙の子は矢張り蛙に限ると見え段々合羽を片付け鶴家團十郎を補助に引入れ喜劇を餘計見せる樣になつて公園式氣分を取戻す事が出來るやうになり四月興行は最も馬力を掛てゐる。

▲狂言、ぬれ燕、朝顏日記、妹背山、露小袖、黃金餅▲俳優木村駒子、橘郁代、武智かほる、敷島紫、團福郎。其妻の花村蝶子、波多讓。團十郎、五九郎外數名▲入場料十錢、廿錢

常盤座

二十七八年前に出來た劇場常盤座は舊劇も相當の入を取り、河合武雄にも成功させ、水野好美と結んでも又好かつた、中頃活動寫眞となり後に水野の連鎖劇になり更に新舊連鎖劇として大正五年より根岸興行部が直營し

水野好美、柴田善太郎、樋口角兵衞、三保松子、榎本愛子、中山歌子、澤村源十郎、中村幹尾、澤村宗五郎、片岡卯左衞門

の顏揃へなりしが四月八日より十日間藝術座劇として松井須磨子一派が公園に出稼ぎをした、名目は藝術座第一回新劇普及興行と云ふのであるが根岸の巧妙なる手段に依て藝術座側が公園に投降したのだと云ふ評判もある。

▲狂言、復活、嘲笑▲俳優松井須磨子、澤田正二郎、中井哲、田邊若男、勝見庸太郎、田中介二、宮島啓夫、花田幸彥、宮城千之、中田正造小川洛陽、野末健、吉野靜江、澤井よし子、澤みや子、花柳春野、磯野不二子、三好榮子。▲活動寫眞西洋活劇冬物語▲入場料五十錢、廿五錢（軍人小人）廿五錢、十五錢

東京倶樂部

明治四十五年に出來た活動寫眞常設館にて初めは大阪の田代弘八が大阪の播摩屋の活動寫眞を見せた、新派劇の活動辯士に壯士俳優の越後源次郎が出場したのは此時であつた大正二年より山田屋派の娘義太夫となり四年十一月卅一日迄打通し十二月より天活特約の活動寫眞常設館と替り西洋文藝物寫眞專門になつた。

▲寫眞、オセロ、スミス宙返り實況▲辯士島田嶺月、川島瓢六外數名▲入場料十錢、廿錢

帝國館

帝國館は間口廿三間奥行十九間、定員千百十六人、明治四十三年六月吉澤商會の經營で奇術の天勝が蓋を開け、其跡を曾我之家五九郎が暫らく出演し、やまと音影株式會社が



ネネマ倶樂部辯士（山崎金雄）　パテー館（賀本博賀）　パテー館（竹本綾衛）

經營して奈良丸式活動應用浪花節になつたが僅か三月で閉口し、一ケ月二千圓の賃貸料で大正二年十月天活會社の直營となり、西垣祐司君を支配人に据ゑ封切西洋物專門の活動常設館になつた、三月一日發行の『新演藝』に揭載されたる大活劇エキスプロイト（拳骨）は三月四月と引續き映寫され非常の盛況を呈して居る。

▲寫眞、拳骨、黑い箱、ぐるゝ〳〵廻ぐり、スミス飛行實況▲辯士染井三郎、黑澤松聲、林天風、楠井紫光▲入場料十錢、廿錢、卅錢（軍人小人半額）

電氣館

電氣館は西洋物活動寫眞專門にして公園に西洋物を輸入した先進館なる事は自他俱に許す所である、明治三十五年に箕輪館と云ふ仁和加の手踊抔の諸藝をする小屋が有た、其隣へ三十六年に此の電氣館が開業した、始まりは活動寫眞で無く電氣を應用したる觀せ物で有た、水中に銀貨を沈めて客に取りたければ取れと云ふ、客が手を水に入れると近いと思つた銀貨は深い水底にあると云ふ樣な物を見せたりエツキス光線を以て物體を透かして見せたり抔してゐた。館主の新井與四郎か支配人の堀内歌次郎かの左の掌はエツキス光線使用の爲めに皮肉が破れて當時を記念すべき大創瘢が殘つてゐる、電氣館の名稱は此電氣應用の觀せ物をするので附けた者であつた、活動寫眞を觀せる樣になつて吉澤商會の寫眞を使ひ或はマニラの活動を使つてゐる內に箕輪館を買收し電氣館を改築する準備として箕輪館を第二電氣館と改稱し新派時鳥の寫眞を見せたのが日本物の最後で有た其後又大改築して、間口十四間奥行十八間三階迄定員二千二百人の大館となり引續き日活の寫眞のみ觀せて居る、「魔の影」はエツキス光線放射器を盜む者を取戻す發明者との追掛なるが昔エツキス光線で手に負傷しつゝ同館の運命を開いた苦い經歷の館主等は往時を追想したらば定めて無量の感慨に打たれるで有う。

▲寫眞、大活劇M九十七號▲辯士江田不識、雨宮桃村、古川綠水、喜劇物杉浦市郎▲入場料十錢、廿錢、卅錢（軍人小人半額）

富士館

富士館は昔の珍世界の跡である、珍世界時代には海馬や象の水もぐり印度人の曲藝等があつた、其隣に美音館が出來て今深川座に出



パテー館（雪紫本竹）　文樂座（豐竹富之助）　パテー館（竹本七五三春）

てゐる壯士俳優森雲が劍舞を演つてゐた、珍世界を改築して出來たのは富士館にて横田商會の活動を見せた、美音館でも岡本貞次郎、都櫻水等新派の演劇と活動を掛たが双方共景氣が悪るかつた、大正四年八月卅一日資本金二拾萬圓を以て創立せし日本興行株式會社は富士館、美音館を拾五萬圓にて買收し館名を富士館となし取締役會長に細井榮三郎、常務取締役池田董、同米本鐵太郎、取締役横田永之助、同高瀬寅昌、監査役田村敬造君を撰舉し、田村君は四年八月辭任し倉島恒太郎君就任した、間口奥行共二十間定員三千名。

▲寫眞舊劇伊賀越仇討▲辯士玉井旭陽外數名▲
入場料十錢十五錢二十錢（軍人小人半額）

三友館

三友館は活動常設館にて明治三十九年の創立米本鐵太郎、神田マス、大竹福三郎三君の合資會社である、大昔は日小屋が有て傀儡師の見世物の時に床下で蠟燭を點し人形の出し入の燈明にしてゐると其蠟燭が倒れて火事になり附近は燒て毛利館（パテー館）だけ殘つた傀儡師の跡へ開進館と云ふ勸工場が出來たが營業にならない、夫を買込で改築したのは今の三友館であつた、初めはジオラマと活動寫眞を見せて居た寫眞は太陽旅行とか月の世界とか馬鹿大將と云ふ喜劇類似の道化物許りでは有たが怎も入がない、舊派で當らず新派も駄目、處が日活が一ケ月千四百圓で借受け其頃二千尺の長尺物を見せた處其時分に千尺以上は珍らしいので頓々拍子に入を取り爾來活動常設館に成つてゐたが遂に大正五年三月卅一日限り寫眞悲劇二人の母と實演喜劇曾我之家延蝶の俄華族を名殘として哀れ天活に館を乘取られた、天活は四月一日より内部を改革し館の内外大修繕の爲に休場した、其開場の第一回は五味木下一派新派實演連鎖劇であるといふ噂だけは有つた、

千代田館

千代田館は日活特約の松之助舊劇專門活動寫眞館にて明治四十四年合資會社として創立された、此館の出來る前は土田寫眞館が有て隣は諸藝の光明館であつた、光明館は人間と馬との人馬大角力と云ふ珍物を掛たり加藤鬼月の壯士劍舞を掛けた、白晝活動と云て明るくして活動を見せたが其頃は暗くなければ客の喜ばない時代で有たから切角の名案も不



パテー館（豐竹榮）　パテー館（豐竹延玉）　パテー館（竹本小京）

入に終つた、吉澤や横田の喜劇や風景寫眞を見せてゐる内に千代田館は土田寫眞館と光明館を買收して開館した、代表社員は堀内歌次郎、營業主任は梓澤音吉、間口三間奥行十一間。

▲寫眞舊劇有馬の猫、西洋物破壞の士、餘興浪花節浪花亭愛造、辯士、原、奥村、塚本▲入場料十錢、十五錢（軍人小人半額）

オペラ館

オペラ館は、日活直營の活動寫眞館にて間口十二間奥行十四間、新派悲劇を專門としてゐる、以前は西郷隆盛の人形、猛獸使ひの見世物から都踊り抔をした、其時の持主は市谷甘酒屋呉服店の先妻で有た、オペラ館に改築した時の負債償却として十年後には其金主に日本橋區橘町小間物屋小川源兵衞に無償で引渡す事にして吉澤商會、日活と館を賃貸して來たのである。

▲寫眞、新派添はれぬ仲、西洋活劇幽閉塔▲辯士土屋松濤外數名▲餘興松旭齋天勢、天雷の奇術▲入場料十錢、十五錢、二十錢（軍人小人半額）

御園座

御園座は大竹福三郎君の所有なるがオペラ館の背後より常盤座の裏へ出る角に在て甚はだ位置が振はない、元は池に向つてゐる廣實張の掛小屋で池に因んで青龜亭と云ふデロレン祭文が有た、夫を改築して日本座と云ふ娘手踊になり日の出館から福和館となり又御園座となつて活動寫眞を見せたり娘義太夫にしたが今は梅坊主一座バンカラ小林辰三郎等の喜藝、浪花節玉川太郎、富士松宮古太夫、尾登太夫、千歳米坡の手踊、はげ龜の曲藝、竹本隅玉、福龍の五目藝、大人五錢小人軍人三錢で久々振の滿員だ。

大勝館

大勝館は間口十三間奥行十八間、館主は世界館と花やしきの持主なる大瀧勝三郎君なるが故に其姓名より一字宛取て大勝館と附けたズッと舊い頃は第一共盛館と稱し五十嵐と云ふ人が持てゐて見物人が這入ると長い手が帽子を取たり井戸を覗くと生首の浮いてゐる化物屋敷や、ジオラマ、呉服細工の人形等の觀せ物が進んで青木の玉乘になつた、夫を改築して明治四十一年七月十三日大勝館になつたのだ、總監督大瀧德三郎、營業主任德永德三

郎、館主も從業員も創立以來同じ顔の九分通で家族的親密な興行振りと、假聲鳴物入の舊劇寫眞を見せたる元祖なると歷史物、豪傑物の長尺とは此館の特色である、殊に悲劇須磨の仇浪は滿都の人氣を呼び四月一日は晝夜客止めの好況だつた。

▲寫眞、須磨の仇浪、舊劇淺草七不思議、西洋物活劇探犬▲辯士花井秀雄、大久保天來、山崎泰、浦邊露香、作者澤田鉄則、假白部三好三之助、長尾謙八、東二郎、重ノ井秀男、宍倉愛二、岩井花丸、椎名政子▲入場料十錢、十五錢、廿錢（軍人小人半額）

世界館

世界館は間口九間奥行十二間定員千四百人太瀧勝三郎君の直營だ、元第二共盛館と稱し五十嵐某の所有の時は中村一德齋の手品、今淺草にゐる鈴木千里の發明したゼンマイ仕掛の人形が有た、神田劇場の現主青江俊藏君が其後小供芝居を興行し今の中村歌扇等を養成した、旭館と改稱してからも此小供芝居は三錢二錢で每日大入を占てゐたが、新しい試みとして地下室で芝居をして夫を舞臺の鏡に寫し幻藝と名を附けたが勞して効無く根ツから評判に上らなかつた、其時は失敗に終つたが。是が動機となつて目下流行の活動連鎖劇は完成されたのである、明治四十二年大瀧君が買收して前年大勝館の出來た記念として記念大勝館と命名し橫田商會の活動寫寫を興行した、大正二年世界館と改稱し活動に次で喜劇實演曾我之家五九郎一座を掛けると時世に應じた爲めに每興行滿員の盛況となつた、五九郎も玆處に於て謀叛氣を茶氣に加味して座員中より一派を造つて他館へ飛出さうとした、座員中吾々今日の人氣は世界館に負ふ處が多い今更調子に乘て砂を掛けるは不人情だと反對する者あり、結局其秘密は館主に知れて遠方五九郎他館へ宜敷失敬した跡へ五一郎を座長に推し上方から座員を輸入して怎麼もんだいと喜劇が眞劍の睨合、客の顔も極まつて今では五九郎を壓迫せんとしてゐる、營業主任は寺尾定吉。

▲喜劇、實演、狂言、インキ壺、法螺とラッパ春衣▲作者久世浪王俳優五一郎、五八郎、五三蝶松、時二郎、千成、小ふじ、蝶香、六郎、松蔦、花蝶、富士、天樂、一奴、さかゑ、頭取小〆▲入場料七錢、十二錢、軍人小人四錢、七錢

東京館

東京館は間口奥行共十一間、定員九百九十九人營業部主任宮川齊、昔はフレー館と稱して茶痴な劍舞や娘手踊で有つた館名に反對で少しも振はなかつた、大正三年二月四日大正活動株式會社が出來て之を買收し朝日館と改稱しやまと音影株式會社の特約寫眞と奈良丸式浪花節寫眞を興行したが損失相踵ぎ債權者江戸銀行へ差押への競落となつた、同行の關係者にて現在の館主小駒五郎君が銀行より買受て四年一月東京館と改稱し、日活特約として松之助物の舊劇寫眞を見せたが這入らない、同年三月一日より舊劇實演常設館となり新派の都櫻水が舊劇の座頭となつて唸らせてゐるのと客種が他と違ひ九分九厘娘や神さん達なのか特色であらう。

▲實演舊劇狂言、殿樣勘次、河內の鬼女、朝顏日記、安達ヶ原、曾我の生い立ち、法界坊▲俳優、櫻水、有田松太郎、井田寒水、藤井彌之助、市川福太郎、嵐璃昇、港家小鶴、市川鯉若、町田庄太郎、外數名▲頭取松島紋彌、常盤津同太夫、竹本政二郎、鳥羽屋里長▲入場料二十錢、十錢、七錢、軍人小人十錢、八錢、四錢

キネマ倶樂部

キネマ倶樂部は其所有者野村金之助の父與七の建設した館にて始め淸遊館と云た、玉乘

の次に名古屋地方の娘手踊が來て浪花踊で長く興行したが活動寫眞に壓されて不入になつた、株式會社淺草館が創立され活動寫眞を興行し更に大阪より敷島大藏を招き淺草館改め敷島座となり浪花節芝居を開演したが少しも客が來ない、元の淺草館に戻つて興行しやうとなると野村が地所々有者なので差押へ訴訟の末野村が勝て元の清遊館に復名した、依て女優淺尾信次と男優中村芝若連の男女混合劇を打つたが是も駄目で神田東明館裏の洋食店宮本が電氣館の營業主任谷内松之助を後見として野村より借受けキネマ倶樂部と改稱して興行した所電氣館と谷内との間が合はなくなつて來たから谷内は飛出して自ら經營者になつた、辯士は石井春波、西洋物專門の寫眞はベニスの鮮血と社會劇遺恨、入場料十錢、十五錢（軍人小人半額）で谷口其人の奮闘中。

江戸館

江戸館は間口四間奥行十一間、キネマと江川の玉乘の間に在る、以前は下倉寫眞館と町田菓子店とがあつた、町田と云ふのは大昔より公園の興行物の木戸番を支配してゐた俗に新門の役當てと云ふ植竹新五郎君の見世なのである、橋屋、新門と云ふ人夫頭は舊幕時分の淺草奥山に河童や血怪の珍物が引張り小屋を作つてゐる頃からの大親分で有たが今は新門一手になつた、其資力と興行氣とが頭を擡げて下倉寫眞館を買收し菓子店と共に取拂つた跡へ建築したのが江戸館と云ふ浪花節常設館にて大に低級愛浪家を歡ばせてゐる。

▲出演者三升亭一九、春日井松之助、三升屋若遊、早川燕、桂川雲龍、末廣亭菊孃、浪花峯代孃、吉田羽衣孃▲入場料五錢均一

大盛館

大盛館と云ては解らない、江川の玉乘と云へば直ぐ解かる、夫程賣込んだ公園名物の玉乘である、間口十二間奥行十間、定員五百廿八人、土間は大人四錢軍人小人三錢と下足五厘宛、棧敷二階共布團付大人三錢小人軍人二錢宛、團體割引は卅人以上大人二錢小人二錢位ゐになる、朝九時始め夜九時仕舞の見當なるが雨天は夜休む事もある、玉乘の初まりは明治五年、山本某の開業した者で玉乘に曲獨樂輕業も竹竿、關臺位で有た（但關臺が無ければ輕業とは云れない）場所も今の所では無くてキネマ倶樂部の所に在た、今の場所は空地で有たのを公園の蕎麥屋萬盛庵の先主人と云ふ人が其空地へ大きな小屋を作つて萬盛の盛を取て大盛館と命名した、其時には山本某は故人になり江川の元祖で、今の大盛館の所有者營業者たる清水龜吉君が清遊館と云たキネマ倶樂部の館で玉乘をしてゐた、萬盛の先主人も江川ならば出來た館を守り立てる腕が有ると見拔いたから別賦的に一定の借料を拂へば或年數の後に館を無償で讓渡す事にして江川も夫を實行し明治卅四年の末に全部江川の所有になつた、夫迄は清遊館と大盛館と双方で江川が二つの玉乘を興行してゐたが大盛館一つに力を集める事になり、今日迄十五年も玉乘を打續けて來た、營業部は清水、戸田、根岸の三名が擔任してゐる、演藝は玉乘の外例の輕業關臺（櫻の植木鉢）の撞木、逆綱渡り宙返り、足藝等四、五餘通りある、演藝者は江川小金（二十四）みつ子（二十）菊子（十九）千代子（十）良太郎（二十五）はじめ（二十）巳之助（二十三）小仙（十三）清太郎（十二）ビリケン（十）で、小金と清太郎の足藝が一番見ものとなつてゐる。

浪花大盛館

玉乘大盛館の北隣にも一つ浪花大盛館がある、間口三間奥行八間、所有者は玉乘の清水龜吉、玉乘の小屋と共に萬盛庵から讓り受たのだ、最初はペチャ龜と云ふ呼込みの名人が借て珍物ものを掛けてゐた、一しきり人言を解する海驢を見せて海チャンやと云ふと、オーと返事をする、間が抜けてゐる處が面白いと云ふのでイカモノ文士連が總見をしたり、幟を送つたりした事があつた、今の借受營業者は保野部と云ふ人、興行物は浪花節常設館で浪花節中で一番安い。

▲出演者、東家樂丸、東家小入道、東家如燕、東家燕友▲入場料大人三人、軍人小人二錢

十二階

今では別に驚く程の事でもないが國會開設の明治二十三年に隆々として天聳り立ち東京市の半空を占領したる凌雲閣の出現は二十餘年前の市民をして驚駭讃嘆措く處を知らざらしめたものである、東京名所の一として淺草の十二階が今日あるに至つた事は好奇と野心と成金と落伍と發狂と死との背景が一階は一階より幾多の變遷を重ね來つた異彩に據てゞある、東都唯一の歡樂場は公園世相史の舞踊場として彪大十二階の如き者を迄も幕外に逸せしめなかつた、十二階は明治廿一年六月新潟縣長岡の織物商福原庄太郎が東京帝國大學教授伊太利人故バルトンの設計に依り國會開設の記念建築物として十萬圓を掛け建設に着手したるも七階迄出來て其資金は全滅し一時立腐れの悲境に陷つた、淺草の有志今井喜八、江崎禮二、大瀧勝三郎の三君資金を投じて協力し十三萬六千圓を以て十二階完成の目的を達した、地下を掘る廿尺地上よりの高さ百廿二尺、始め一人十錢なりしが見物人少なく八錢に値下げしたが尚々少なく大いに持て餘ましてゐた處へ一人の成金が飛出して來た十二階の下に西京燒と云ふ燒芋屋をしてゐた田舍者岸源三郎は燒芋屋で儲けて一杯呑み屋の飲食店で又儲け人の知らぬ間に拾萬圓近くの金を溜めた、四十三年其金で忽ち十二階を買受ると共に夜中五階迄登らせる事にした之が當りて七階に登らせ又當つて十階迄登らせ儲けた金で梅坊主一座を雇つて階下へお神樂堂に似た家臺を作つて餘興的に見せた、落語家三遊亭金朝は其隣に住つてゐた頃だ、日本手品を掛ける京の六才踊が來る伊勢の大神樂を呼んで大當りに當つて岸は大々的の成金になつた處が向島へ料理店女夫風呂の太陽閣を作つたのが失脚の基で大失敗をなし大正二年十二階株式會社を設けて其大株主で重役で有た者が全部の株を賣却し裸一貫で今は巢鴨に退却して了つた、會社の成立は大正二年五月十五日資本金三十萬圓二十圓金額拂込濟、取締役社長松崎權四郎、事務取締役佐々木一義、取締役岡田末吉、中村傳右衞門、松崎文治、監査役島田友治、石山清之助、相談役米本鐵太郎の諸氏營業部主任高瀨富昌君である會社前に神樂堂を取拂つて現今の餘興場を作り美音館を宿無しにされた都櫻水、港家小龜丸一彌之助等が實演舊劇を演じた、今東京館に役者振てる藤井彌之助は此丸一の彌之助である、其跡へ有田松太郎鶴若等が集まり四年十一月十日よりは村田正雄が低級者へ劇智普及を標榜して納まり掛けたるも却つて低級者に捨られて退却した、五年一月一日より村田に代つて現今の坂田半五郎一座の舊劇實演になつてから漸やく客足を呼返して來た、此餘興場は十二階へ登る料金七錢を拂へば縱覽が出來るので客は地方人が四分以上ある。

▲舊劇實演、狂言、鬼神お松、嫗山姥、桶狹間津田助直、女定九郎▲俳優坂田半五郎、市川紀

久之助、市川かほる、中村梅助、市川桃若、市川富士三郎、市川紀代三郎、高山吉雄、小川吉十郎、市川高助、市川福猿▲二階三等五錢、一等十錢、特等十五錢▲十二階見物料大人七錢、小人軍人四錢、昇降器片路三錢、往復五錢

遊樂館

奥山名物松井源水の獨樂廻しの有た所で一名源水横町と云た場所を買收して出來たのは角力常設館淺草國技館であつた、明治四十三年三月梅、常陸の大相撲で開館した後菊人形やら曾我之家蝶五郎の喜劇やら諸藝を興行してゐたが同館の創立者所有者なりし山中龜太郎が死亡した跡の館を大正二年三月日本活動寫眞株式會社が買收して活動專門となし三年四月遊樂館と改稱した、四年十二月より新派舊派連鎖實演劇と青柳捨三郎坂東左門等が此處を先途と努力してゐる。

▲實演連鎖劇狂言、大高源吾、新派連鎖つや物語、西洋物寫眞大疑問▲俳優青柳捨三郎、坂東左門、中村駒三郎、中村新車、坂東壽鶴、市川升童、坂東橘江、岩井扇之助、坂東右門外數名▲辯士松田麒聲、樫田松綠

文樂座

文樂座は間口奥行各共十二間、日活會社の所有である、以前は遊樂館の一部で有て遊樂館の本館で南極探檢の活動寫眞を見せ玆處でペンギン鳥其他の剝製鳥類を見せ或時は喜劇を興行し其古い頃には曲馬も演つた、大正四年文樂座と改稱して以來引續き山本三之助の操人形に竹本豐之助、豐菊、富之助、豐廣和光、鶴淺、鶴若が出語りをして入場料大人三錢小人軍人三錢、豐之助は元の竹本新吉だ

花やしき

淺草公園の開設は明治十九年であつた、觀覽物に一革命の起つたのも此時である、公園以前の花やしきは植六と云ふ植木屋が此花屋敷の持主で有てお手の物の盆栽や草花木花を見せてゐた、植六のお出入店に深川の信濃善と云のが屋根に鳳凰の乘せてある五階を所有してゐて植六は其管理旁自園見物の人に之を見せて居る内に信濃善は商業に失敗して五階を手放すに至つたのを區内の外谷辨次郎が買受け花屋敷も植六から買取て大瀧勝三郎と共同に山雀の曲藝位ゐを見せてゐたが四十四年に外谷へ一萬餘圓を贈つて大瀧一手の所有になつた、其時に拵へたのが、大瀧に記念の爲めの大瀧である、入場料は大人十錢小人軍人五錢、見る物は安本龜八の生人形、犬猿芝居鳥獸、奇術、大井憲一郎一派の新派劇にて象や駱駝類は先年大阪博覽會の殘物である。

宮戸座

劇場宮戸座は六區の活動町を離れた觀世音堂の背後に在る、間口十三間奥行十五間定員八百人、以前は古い場名吾妻夜より宮戸座にて山川金次郎と云ふ芝居興行の名人が經營してゐたが活動と連鎖劇の流行する風潮には抗し難く大正四年十二月卅一日以後天活會社に一ヶ月八百五十圓で賃貸しにした、天活はオペラ館にゐた成瀨君を座の營業主任として活動寫眞の西洋物へ舊劇連鎖劇を使つて場内の大改革を行つた。

▲實演連鎖劇狂言、喜劇未來の藝者、戻橋、有馬の猫▲舞臺監督大熊喧潮▲俳優松本高麗三郎中村竹三郎、市川壽朝、長浦華洲、坂田萩之丞、市川鬼丸、宮田伴華、中村筑藏、岩間櫻子、松本愛子、靜香八千代、澤村金十郎外數名▲入場料並等十錢、一等（棧敷）二十錢、特等（高土間）五十錢、一等（二階正面）三十錢、二等（二階正面の背後）二十錢（軍人小人小額）

水族館

水族館は明治三十五年頃根津某の建設して

以來事業に消長有り、大正二年組織を變更し水族館株式會社と爲し水難救濟會の村田虎太郎氏を取締役兼社長とし常務取締役大澤慶太郎、取締役石樽辻五郎、同松見文平、監査役中野喜三郎、長濱宇市氏の役員の外監督松井豊太郎、技術者小林常一郎氏が毎日の事務を執り又數名の事務員もゐる、二臺の水揚ポンプと不寢番が有て晝夜水と餌を供給してゐる、入場料は大人五錢、軍人小人三錢、團體三十人以上は割引もする、水族は明治天皇御愛好に依て御命名を得たる湖水魚鰉を始め大小の奇魚珍介數十種ある。

昆蟲館

昆蟲館は水族館の西隣に在る（建坪九十五坪）、岐阜縣の名和昆蟲研究所の所有にして明治二拾九年頃に開館し最初は大人五錢小人三錢位ゐの入場料を取たが怎も入場者が少ない大正五年より無料にした、公園の觀覽場で無料で觀せるのは此所許りである、

金車亭

講談定席金車亭は舊くからある、現主人は戸張鐵太郎と云ふ、位置は區役所前より千代田館の横通りに出る中程にある。

▲晝席出演者、貞山、桃林。貞丈、英昌、貞玉、典山、大島伯鶴、夜席、南窓、麟慶、琴窓、富岳▲入場料五錢

擊劍の觀せ物

金龍館の裏手、根岸常設劇場敷地に三月廿八日より神武館長と名乘る菊池秀善秀德の擊劍鎖鎌、長刀抔飛入勝手の野天觀世物が出來た木戸五錢均一、夜と雨天は休場する。

スケート場

スケート場は興行物では無いがルナパーク興行會社の一部として一筆する、ルナの建築した日光館は大正三年開館以來賃借した者が新派森一派を始め諸藝を興行したが一つも物にならず、四年十二月限り休館し更に廢館にして階下をスケート場に改造したと云ふ歷史を持てゐるだけが他のスケートリングと變つてゐる、滑走車使用料一回五錢、特別十五錢にて五年三月廿三日より開場した。

キリン館

キリン館は怎麼所に活動寫眞館が有るのかと公園の住民にすら不審がられる大勝館の背後の甚はだ淋しい場所にある、存在を認めないと云ふ語は同館の爲めに作られたものかと思はれるやうだ、斯の如き不毛の地でも一攫萬金の夢を攫んでアウル館株式會社を設立したのだから恐ろしい、アウルは日本語に直すと欠賣る卽ち欠伸を賣るのである、名は體をヨリ以上に現はして活動寫眞が休動續きで有田松太郎や巴家寅子でも客は呼べず頗ぶる惱んでゐた所を活動界の鬼才小林喜三郎君が乃公ならばと引受けて吾は之れ活動界の麒麟兒なりとの自信よりキリン館と改稱した、然れども小屋の腐つたのは麒麟の老たるが如く大失敗に了つた、怎う興行物は當らぬ代りに會社の內部は葛藤の大繁昌、廿萬圓のアウル館株式會社長（市會議員）矢野錂吉君も同會社の債權者東洋帆船保險株式會社に一萬三千五拾圓の債務の爲に同館を差押へて競落された根岸興行部は東洋帆船から其債權を讓受けアウル會社に請求し六千圓ならば手打にすると云ふのをアウルは二千圓に負て呉れと談判不調となり五年三月三十日又々根岸興行部に差押へられて終つた、根岸は之を取拂つて長屋を建て、貸さうか杯と云つてゐた。（完）

懸賞當選發表



貞奴を如何に處分すべきか

締切當日までに到着した投書總數は實に三千八百五十三通の多きに達し〆切後到着の分百十九通と規定違反の分や全然人身攻撃に亘つたもの八十五通あつた。今其の概略を申せば貞奴に賛する人は今日の女優の先輩として帝劇女優の監督にするがよいと云ふのもあれば又た彼の踊を益々助成せしめて歌劇や喜劇のやうなものに驀進せしめたいと推薦してゐるものもあり、皮肉なものには奇術師と握手させたいと絶叫したのや女ホテルの主人公たれと勧めたのもあれば、待合か旅館の女將たれと申し込だのもあつた、少し酷ひのになると元の木阿彌で矢張藝妓に返り咲けとあり、さうかと思ふと四十の坂を踰えて九優生活も痛ましいから少しでも人氣ある間に退隱した方がよいと消極的の同情をする者もあり、解案の公募は無用須らく澁谷村の桃さんに問ふべしなどは其の最も手嚴びしいものの一つであつた。が審査係三名が數日を費して精密に審査の結果御約束の通り次きの如く一等一名二等四名選外慰藉五十名を定めました。

一等　賞金拾圓

貞奴一座の改良

大阪市北區上福島　有樂生

貞奴を如何に處分すべきかといふことは現代の劇壇に於てさほど重大視すべき問題とも思はれない。有體に言へば彼女の名聲なり價値なりは既に過去のもので未來に行くべき彼女の藝術といふものは無いと言つてもいゝ。けれどももしこの懸案が彼女の實生活上の進退を云々するものとしたら夫れは敢て第三者の說に待つ必要は無い。故に問題は彼女の女優としての生存問題である。

彼女は恐らく日本に於ける所謂女優としての先覺者であり、日本劇の實演を海外に紹介した卒先者の一人である點に於て先づその効勞を多とせねばならぬ。また彼女の技藝が新派俳優中にあつて一頭地を抜くものである事も肯かれる。しかし彼女の藝術に何等新しく教へらるべきものは無い。また彼女が新しき

何らかの藝風に向ふべく彼女は既に牢として抜く能はざる型を作つて終つた。かく云ふもの、彼女は他の帝劇や藝術座の女優輩に對し決してひけを取らぬ丈けの腕は持つてゐるのであるが惜むらくは彼女の頭腦は眞にこれから「生るべき女優」となる作の理解力を持つてゐない。この事は偶々彼の近代劇「サロメ」の如きを演じた時に明らかに見られる。

故に彼女の生存問題も新派劇の生命と共に保護さるべきものである。年齡から言へば未だ彼女の如きは健康の續く限り今後五六年以上は充分である。故に今の彼女が支配する彼女の一座を更に改めて井上の如き男優を交へ彼女を花形とする得意の出しものゝみを演じて彼の最後を價値あらしめ然るのち引退するのを良策とする。彼女は到底他の劇團に入つて自ら士卒となる事は出來ないしまた他の俳優を自由に驅馳する事も難い。然してその改良した一座を携げて最後の興行を再び海外に於て試みるのも又有終の美をなす一つであらう。貞奴に未來はない。只過去を汚さぬ丈けの美を保たしめたい。

二等　左記四名には賞金五圓宛を進呈

三度び目の海外興行

日本橋濱町二の十四　毛利生

貞奴も最早日本劇壇に花を飾る可き人でないが今の「所謂」女優など、看版を掲げて居る連中は如何に力むで見ても未だ〳〵其足元へも寄附けない、容色や處世術から云へば或は優れた者も有らうが舞臺上の年功と兎に角世界を股にかけた度胸とは慥かに比類少ない唯一のアクトレスである、又年から云つてもまだ葬るべき時代の人で御座らぬ。

だが興行は客本位である以上、如何に世界的名優にしろ其土地と時代の人氣に投合せねば舞臺の人で暮す譯にも行かぬ、此點から考へて見ると貞奴も、所謂女優なるものに對抗して其「レプテーション」を保つ事も出來ない葬るには早く舞臺の上には敬遠されるとならば將來に一寸立場を更へる必要がある。

前後二回歐米を巡つて「ジヤパンダンス」を紹介した「マダム、サダヤコ」の名は今も尚此社會の記憶に殘つて居る日本劇と云へば未だに其名が連想されて居る夫を利用して「マダムサダヤコ」一座を組立て「ボードビル」に出陣して歐米の都市を巡業すれば三年や四年は大當り受合である。

勿論一座は五六人でよい眞から藝術を研究して見ようとか泰西の劇を觀察したいとか云ふ女優で組立てるのださうすれば比較的多額の收入を得つゝ後進の修養にも便なり且本尊貞奴の處置もつくと云ふものだ。

現時衰頽に落入つて居る「新派」の陣頭に立たせて駄死さすは日本演劇に兎に角革新を與へた優を遇するの途でない。

引退興行の後に

東京本郷二の十　石井いし子

貞奴は未だ〳〵舞臺へ立つて居れば五六年は大丈夫從來の人氣を持續して行く事は受合ではあるけれども私の意見としては今が退隱の好時期だと思ひ升幾ら確かりした後楯があるにしろ假令新派が是から先以前の全盛に復活したにしろ十餘年前夫音次郎と洋行歸りに明治座で演じた「オセロ」の鞆音や本郷座で空前の盛況を取つた「ハムレット」のオフエリヤ

當時の全盛は到底再び見る事は出來ないに極つて居升し早い例が女團洲と云はれて一座を統括した評判の女優九女八が新派の盛んな時代に守住月華と云つて新派へ加入して巧者な舞臺を見せたら年と共に人氣が衰へて再び舊派へ戻り公園のみくに座を最期として悲慘な終りを遂けた晩年に見ても亦寄席藝人の群に入つて衰へ切つた容色を僅かに厚化粧で皺を隱して高座へ上つて踊や俗謠にお茶を濁して居る者や源氏節や連鎖劇へ走る者や數へ來れば一人も滿足な者の少いのを見ても女優として一生を舞臺に勤めるの不可能であるのは分明です況して新派の大統領とも云はれた川上音二郎の妻として女優養成所を設けて劇界に功績の多い此優何時迄も爪を長くして今より以上人氣を落させたくないと思ひ升から容色の衰へ盡さぬ今の内に亡夫に緣の深い本鄕座なり明治座なりで新派大合同で花々しく退隱興行を演つて後は關係の深い後援者のある帝劇へ這入つて女優の顧問として氣樂に餘生を送らしたなら劇界の爲亡夫音二郎の爲又貞奴自身の爲め一番安全な策だと考へ升。

貞奴後援會

廣島市大手町八丁目　松山　村雨

有體に云へば將來はいざ知らず過去及び現在の女優こそ碌でなしばかり也、斯る幼稚にして發達の鈍き然も社會より蔑視され擯斥されし居る日本の女優界に於て舊套を脫したる新らしき試を爲んとの初一念を懷抱し多年舞臺の人となりし不斷の努力を傾注し來りし彼れ貞奴の如きは我が劇界に於ける一異材として尊重の價値ありと迄讃美し謳歌せざるも兎に角珍とはするに足る、今此名物女をムザ〳〵葬るは餘りに氣の毒なり、依て此際勘くも左の條件を具備する新案を提唱し藝術愛好家の同情に訴へ彼が有終の美を完ふせしめたし。

一、各地方の有志者を以て「貞奴後援會」を大々的に組織する事。

一、後援會員により資本金三十萬圓の株式會社を設立し十五萬圓を投じ東京に川上座を新築し五萬圓を以て附屬藝術院を經營し十萬圓を維持費に充つる事。

一、貞奴を藝術院の院長に祭り上げ專ら女優の養成を監督せしめ且つ斯道の先輩に依囑して舊劇、洋劇其他（歌劇、喜劇等一切を含む）十八番の脚本をものして貰ひ藝術院の專賣特許となす事。

一、株式組織計畫發表と同時に後援會の總取持にて「一世一代」と銘打ち貞奴をして全國五萬以上の都市を巡回興行なさしめ川上座新築舞臺開をお名殘として全く退隱せしむる事

但其純益金は全部貞奴の權利株に振當つべし

斯くて藝術院の修技生には劇に關する最新知識と眞摯なる藝術（新舊劇、舞踊、音樂等必須の技藝一切）を修得研究せしめ女優の品性を向上さすると共に苟くも今後の女優は藝術院卒業の免狀を所持し川上座の舞臺を踏み貞奴が掌握する所謂川上の十八番ものを演ぜざれば幅利ざるのみか殆ど女優としての存在と價値を認めしめぬ程の權威あらしむる事に努力すべし。是れ劇壇改良の最善策にして又貞奴お婆さんの末路に同情し彼が最終の頁に光彩を放たしむる處分方法の上乘なるもの也

帝劇の女優監督

廠布區霞町六番地　松田紀久雄

所謂女優なるもの、開祖であつて、然も劇

界、特に女優界に多大の貢獻を爲したる者と云へば、誰しも直に貞奴を聯想するに難くないであらう。それ程彼女は劇界に拔けざる根據を有してゐたのである。然し彼女も矢張女優であつた。今や昔日の人氣と比すべくもない。世人はやうやく彼女から離れやうとしてゐる。さり乍ら、之れも自ら招いた罪であれば、最非もない。

例へ新派が凋落し、離散の厄に會ふとも、飜譯劇に於ける彼女の妙技は已に定評がある然るに彼女はたゞ凝然として、彼女獨特の藝を固守し、徹底せしめやうとはせず、近來は「對牛樓」の犬坂毛乃などと途轍もないものを持出して、奇に走る人氣に投ぜんとしてゐる。彼女の舞臺が兎角派手に成りたがり、散漫に流れ易く成つたのも之れが爲である。

斯の如く目先の見えぬ、然も藝術的罪惡なる人氣取政策にのみ沒頭したのが、抑々の破綻の因を爲したのではあるまいか。此の事は確に彼女の藝が行詰つた事を裏書してゐる。身に附けた藝は永久的のものであるが、その人氣は一時的のものなる事を知らねばならぬ藝に年はない筈だが、彼女の藝は年と共に、と云ふよりは、寧ろ年より先に藝が荒んで來た。

茲に至つて貞奴の隱退と云ふ事が、當然提議されねばならぬ。彼女が最近に好評を得たる「サロメ」を演じたる時が、引退すべき最適當なる時期であつた。何となれば此時期を彼女の藝の最極點とし、それ以後は衰頽期とも稱すべき二つの時代が、隔然として別たれたからである。今となつては已に晩過る位で、彼女自身も時機を失つたらしいが、早く好機會を見出し、巧に之れを利用せねばならぬ。

兎に角彼女は女優界の權威である。劇界は此功勞者に對して充分な義務がある。私は引退後の彼女を帝劇へ送つて、女優の舞臺監督としてその餘生を安らかならしめ度い。私は彼女をして、粂八の如く悲慘なる運命を、再び繰返さしむるに忍びない。

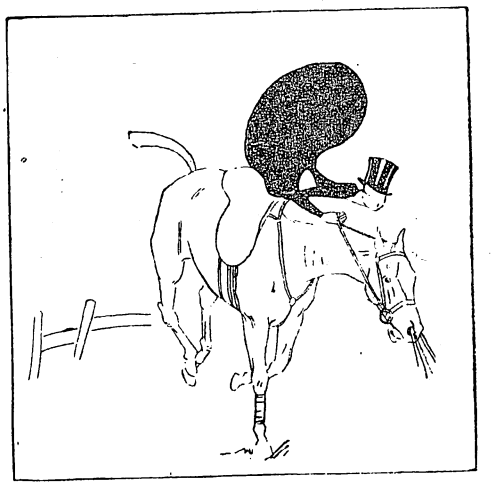
選外

左記五十名に對しては選外慰藉として木版繪ハガキ三枚一組を進呈

片山昇（朝鮮）　綺士（神田）
翠湖生（京都）　青山花淀（愛知）
古津司農武（盛岡）　エス、エス生（日本橋）
竹貫昇峯（芝）　田中白露（三重）
荒川某（大坂）　江口まむし（大阪）
劇通生（出雲）　腕の女（大阪）
村田生（牛込）　佐藤こう子（兵庫）
奴（淺草）　みさき生（神戸）
木村稜々（丹波）　原虞夢子（本郷）
石川修（日本橋）　うそ丸（麻布）
上津原末廣（福岡）　山本菊枝（麹町）
津山和郎（横濱）　肥後博（芝）
金子夕二（秋田）　佐藤四郎（麹町）
紅之助（富山）　雄一（京都）
今井みなみ（神田）　成瀨漁濤庵（愛知）
川端武次郎（渡島）　森川一（本郷）
高橋六郎（本郷）　一外生（神戸）
渡邊武夫（大分）　岡田夢一（桐生）
佐野謙吉（本郷）　榊原梧堂（名古屋）
素忠生（名古屋）　菅井銳子（札幌）
菊の屋主人（本郷）　三好佐吉（土佐）
米子（尾張）　岡田歌子（岸和田）
清水齊（長野）　大西春子（曾根崎）
小笠原正（牛込）　宮澤肇（靜岡）
河西櫻塢（大阪）　哥棧猴（甲府）

空前の大寫眞
カビリア

鈴木苔花



空前の大傑作とは、活動界の常套語になつて、這麼事では人は最早、少しも驚かなくなつて了つたが、本誌前號にも一寸書いておいた、史劇『ガビリア』は正に掛値のない空前の大作で、眞に驚くべき大寫眞と云ふことが出來るのである、「カビリア」はガブリエル、ダンヌンチオの原作に依り、伊太利イタラ會社が全く商買氣を放れ、全額貳百拾五萬法の巨費を投じ、脚本料丈に拾萬法を拂ひ、五年計畫で撮影したと云ふ大作であつてその大規模の撮影は殆ど話だけでは嘘としか思はれぬ程雄大を極めて居る、殊にその撮影の方法から云ふても、前人未發の新生面を開いて居るのは敬服の外はない、譬へば室内から室外に移る場面の如き、これを廻轉撮影にしてあるから、人物の動くに從ひ何時か其背景も變つて行くので、見た目にも頗る自然で極めて快感を與へる、前後篇全拾貳卷一萬二千呎を通じて三百からの場面は、一場面として無駄の個所もなく最善最美に撮影されて居るのは、寫眞劇として蓋し上乘なものであると思ふ、數日前、天活試映所で其前篇の試寫をしたが、今自分が見たまゝ、玆にその梗概を知すとしやう。

西暦前三百年、雨上りの空は、どんより鉛のやうに重く曇つて、冬だと云ふに蒸されるやうな暖さ、十日程前からエトナの山は、時に灰を降したり、時に氣味の惡い山鳴を續けて、何時大噴火が起るか解らぬので、シシリーの市民は、安き心もなかつたが、果して日が暮れると間もなく、天地も崩壞せんづ響と共に、大噴火が起ると同時に、大地震さへ始まつて、シ・リーの市街は遂に全滅した、玆にシ・リーはカタニアにバトーと云ふ豪農が有つたが、此地方の大地主で、カビリアと云ふ可愛い一人娘の生長を樂しみに、何不足なき月日を送つて居た、カビリアは今年五才の春を迎えた美しいいたいけ盛の孃樣だつたが、乳母のエリツサに侍かれ、掌の中の珠と育てられて居た、丁度其晩の事、カビリアはエリツサが添乳の夢暖かく、圓やかな眠りに就いて居ると、俄にシ・リー全滅と云ふ天變地異、譬へ此身は奈何ならうとも、孃さま丈はお救け申さねばと、エリツサは女の一念、怖さ恐しさも打忘れて、夢中になつてカビリアを引抱え、阿鼻叫喚の死の街を、當途もなく遁げまどつたが、不圖氣が付くとシ・リーの海岸へ出て居たのであつた、未だ地鳴も時々して地震は全く收まらぬやうではあるが、玆所は最早安全な浪打際、エリツサは安堵の胸を撫おろしたが、折柄干潮の海岸には、大形の帆前船が一艘繋がれてある、一夜を明かすには、屈強とエリツサはカビリアを抱いて、それへ乘組んだが、中には誰一人船乘らしい

ものはいなかつたのであつた。

間もなくどや〳〵歸つて來た船員は、知らぬ女が女の兒を抱いて、片隅に蹲つて居るので、段々樣子を問審して見ると、シ、リアの豪農バットの娘と云ふ事が解つたので、船員共は金儲が降つて湧いたも同樣だと、心窃かに喜んだのも道理、この船こそフ井キアの海賊船で、シ、リーに大地震があつた混雜紛れに上岸して、澤山仕事をして歸つて來た所なので、今丁度海賊の本國カルタゴは、羅馬と戰の最中なので、それでなくとも羅馬の女小供を誘拐しては、戰の血祭と呼へモロツク聖院で神の生犧に供へて居る折柄、敵國の娘を俘虜として行けば、莫大の恩賞にあづかる事と、鬼を欺く海賊等は、泣喚く乳母とカビリアとを引捕へ、遂にカルダゴへ連れ歸つたのである。

抑も此モロツクの太聖院は、カルダゴの大伽藍で、タニツトの大佛は巨眼怪掌、指の平だけでも百人からの人が登つても、尙活動するだけの餘地があると云ふ位であるから、其全體の大さは殆ど想像がつかぬ怪佛である、而して生犧と稱し年々此怪しい偶像の巨口が吐く火焰の中へ投ぜらるゝ、敵國の小供の數は實に夥しいものであつた、憐む可しカビリアは大地震の爲に家を失ひ又父母をも失つて、今悲うした慘酷な運命の手に弄される時が刻刻と其花の如き身に迫つて來たのである、乳母のエリツサは身も世もなく、嘆いたが、今は虜はれの殊に可弱い女の身、何うする事も出來ないけれど、せめて一日でも二日でも孃樣を生延しておいたならば、其中には又何うして救ふ機會が來ぬものでもなからうと、賴めぬ事を賴とし、カビリアは今病氣故、然云ふ汚れた身體を神樣に捧げるは勿體ない、奈何にそれが本復するまで生犧を延期してくれと誠しやかに申述べたが、それが眞赤な嘘と知れたエリツサは、氣を失ふばかり打たれて、何處ともなく擔出されて了つた、不圖氣が付くとエリツサは貳人の羅馬人に助けられて居た、貳人の男はカルタゴの商人風を裝ふて居るが、羅馬の間牒、フルビオス、アキシラと云ふ若い武士と、從僕マヂステの貳人で、敵の樣子を探ぐるべく、今窃かに此カルタゴに渡つて來たのであつた。

フルビオス主從は乳母のエリツサから一部始終の話しとガビリアがモロツク聖院でタニツト像の生犧に捧げらる事を聞いたので、一刻も捨ておけぬ場合であると、主從貳人は韋駄天の如くモロツク聖院へと走つたのである。

モロツク聖院では、生犧の式を擧行すべく、タンツトの怪像を前に、金襴の敎衣を身に纏ふた僧徒は幾百人となく、綺羅星の如く左右に竝んで、今一連續經も濟んで、可憐なる兒女は何人となく、怪像の巨口に投込まれ、此慘酷な儀式は、刻一刻敎徒の畏敬の中心に入つて、今正に魔の手はカビリアの襟髪を摑んで巨口が吐く火焰の中へ投ぜらんとする一刹那、フルビオス、マヂステの主從は、單身此中に躍込んだが、膂力非凡のマヂステは、寄來る敵を取つては投け、投けては之を蹴つて、遂に此カビリアを危機の中から救出して、雲を霞と逃げたのである、エリツサは女の足の遲おくれて、あはれ敵の爲に捕へられ、憎き女郎奴と無慘にも八裂の刑にあつた。

寄せては返へす敵の手を斬拔け〳〵、フルビオス主從は、とある酒屋へ身を以て遁がれた、酒屋の主人は縞のモンキーと呼ばれた、強慾非道の老爺で、金の前には何もない男、主從貳人は早くも之を見て取つて、金を嚙まして、其天井裏へ隱して貰ふ事になつたので

ある、然し油斷は決して出來ぬ、時々追手らしいものが見えて、老爺の口を開かせやうとする樣子、のみならず噂に依れば敵將**ハンニバル**は萬餘の兵を率ゐて、**アルプス**の嶮を越え、羅馬へ軍を進めたといふ事、今**ハンニバル**の大軍に向はれては、如何に羅馬に名將ありとも、軍備が充分でないから、到底勝戰を期する事が出來ぬ、此先甚麼困難に逢遭しやうとも急を祖國へ告げねばならぬ場合である、足手纏の**カビリア**さへなくば、又何とか方法もあらうが、**カビリア**があるだけに思切つた行動を取る事が出來ぬ、有繋の主從も顏見合はして當惑して居たが、今は最早悠して居る場合でないので、**マヂステ**は**カビリア**を小脇に引抱えて、**フルビオス**の後から出た、酒屋の外に見張をして居た若干の敵兵は、思ふに違はずと喜んで、それつと貳人を包圍したのである、併し飽く迄勇敢なる主從は、敵の包圍を斬崩し〳〵、千仞の絕壁から海に飛込み、折から其所に漂つて居た漁舟に依つて遁がれた。

舟から上がると玆は**カルタゴ**の總督**ハスドルバル**の庭園であつた、總督の愛姬**ソフオニスパ**は戀人なる**マツシニツサ**と月下に甘い戀を語つて居た、**フルビオス**は**カビリア**姬を**マツシニツサ**に預け、後事を托して、其所を去つた、姬の戀人**マツシニツサ**は姬との秘密を知られた上は、默つて居れぬと、兵を率ゐて**フルビオス**主從に向つたが、**マヂステ**の爲に敢なき最後を遂けた、併し衆寡敵せず**マヂステ**は**アスドラバル**の供に捕へられ、遂に奴隸として一生臼春の極刑に處せられた。

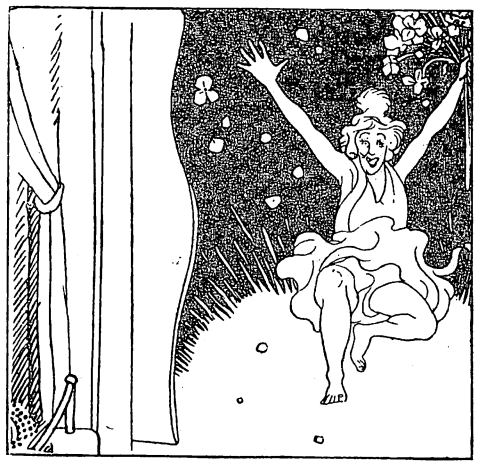
カビリアは**ヱリツサ**と呼ばれ、從女として**ソフオニスパ**の姬に侍く事となり、安樂な生涯を送る事になつたが、自分は抑も誰の娘で又何處で生れたものか知る筈もなく又命の親**フルビオス**主從の顏など覺えて居る譯がなかつた。

カルタゴの地を漸く逃れ歸つた、**フルビオス**は**マルチエロス**副統督に附隨して**シラクス**攻擊軍に參加する事になつた、所が**カルタゴ**に**アキメラダス**といふ大學者があつたが、太陽光線を集めて船をやく鏡を發明して、**マルチエロス**副統督が率ゐる羅馬の艦隊を瞬く中にやいた、**フカリオス**は海に飛込んでのがれたが、一夜の宿を乞ふた家は、段々樣子をきくと、**カビリア**の親父**バトー**の家であつた、**フカリオス**は**カビリア**を生贄から救け而して**ハスドラバル**の愛姬に托した事を物語り自分は生命を賭しても**カビリア**を救出してくると**バトー**を慰めた、これが前篇で後篇は**カビリア**が美しい處女時代に入つた物語で**マヂステ**の大活躍と相俟つて寫眞は正に佳境の中心に入つてくるのである。

活動寫眞海外小話

▣ドリユウ・パアリイモオア劇團と云へば隨分鳴らしたもので、パアリイモオアのエセルとりおネルは早くから**メトロ**會社撮影場に屬したが、今度またドリユウの夫人も**メトロ**に加入したので「さアあの四人組が一つに成つたぞ」と世間では刮目して見て居る。

▣劇の興行で名を賣つたリイブラス商會は今度活動寫眞に手を出すとの噂がある。聞けば第一流の俳優シリル・モオドなどもカメラの前に立たせる契約が出來たと云ふ。モオドは曾て**モロスコ**會社の爲にイブセンの「ペエル・ギント」を演じて、彼の舞臺に於ける赫々たる經歷を知らぬ觀衆を驚嘆させた人である。



世界の大茶目 デブ君

石川生

喜劇物の製造で世界第一の稱あるキーストン會社で特に名高いのはファッティー、アーバツクル先生、卽ち日本では兼て御馴みの世界の大茶目デブ君である。而してこのデブ君の伴合としていつも一所に珍妙の大活劇を演じるのはメヱブル、ノーマンド孃である。なほこの外ジヨーン君とボルドー君と云ふ二人の茶目があつてこの四人はキーストン會社の四天王とされてゐるが今余輩が特にこゝに紹介しようといふのはデブ君とメヱブル孃についてゞある。

デブ君もメヱブル孃もともに五尺に足らぬ小人である。しかもデブ君の短軀肥大にして自ら滑稽の表情を有してゐる顏面はかの破天荒の名優チヤリー、チヤプリン君の夫れとともに實に世界に於て得がたい寶玉と云はねばならぬ。

デブ君は今年とつて廿八歳、カンサス州の或る小市街の生れである。しかも短軀肥大のデブ君の重量たるや非常なもので生れたばかりの時、既に二貫目あつたと云ふ事である。デブ君の舞臺上の人となつたのは千九百四年カリフオルニア州のサン、ジヨン市に於て臨時の雇役者として催眠術の被術者となつて非常な高評を博したのである。これを機會に以後謝肉祭の藝人となつた。それから暫くその町で繪入の流行唄を唱ふ藝人となつてゐたがやがて諸方を遍歷してゐる中有名な喜劇役者たるレオン、エロルに逢つてその聲を賞められ充分俳優となる資格のある事を告げられたこれが彼の眞の舞臺上の人となる出發點であつた。

其後歌を唱ひ乍ら段々西の方の町々を稼いで歩いてゐる中、ロング、ビーチで思はぬ高評を得ミンタ、ダルフリー孃と結婚する樣になつた。

千九百八年から羅府に來て遂にハルトマンの歌劇一座に入り千九百十二年までアリゾナ州やテキサス州を演つて廻つた。この一座の頭梁ハルトマン氏も今彼の屬するキーストン會社の一員となつてゐるのである。彼がキーストン活動寫眞會社に入つたのは其處の名優フレツド、メースが同社を去つた代りに入つたのであるが彼が始めてフィルムの中に入つたのは『勞働黨』と云ふ寫眞であつた。以後彼は絕えず喜劇の名優としてカメラの前に立つ身になつたがこれらの喜劇は大てい彼れ自身の創作にかゝるもので、彼は又彼自身のフィルムの指揮者としても働いてゐるのである。卽ち彼は喜劇の作者として同時に役者たり指揮者たる多能の俳優である。

或る時或る新聞記者が彼に『貴下の喜劇の妙想はどこから得られるのか』と聞いた事があつたが彼は卽座に『私の頭から』と答へた

彼は言ふ。『私は頭に一つの構想がピンとくる至極奇抜な考へがひよつと浮ぶと直ぐさま仲間どもを呼び集めて演技に取りかゝる。しかも私の構想を助けてくれるものがあればどんな考へでも採用する』と。

彼が滑稽の相手としてなくてならぬものは前にも言つたメヱブル孃やジヨーン君、ボルドオ君などであるがその最も重大な乾分として必要なのは一匹の犬である。讀者は彼の出るフィルムに必ず彼に附隨する一匹の犬がある事を知るであらう。彼は必ず彼の喜劇にこの犬を使つてゐるのである。

彼の敵方メヱブル、ノーマンド孃（日本ではマベル孃と呼んでゐる）は眞にデブ君の伴侶であるべく適當な世界的大御轉婆娘である然かし、その御轉婆はフィルムの上に現はれたる御轉婆で、平素は丸で打つて變つた、しとやかな其日其日を送つて居る。彼女の生ひ立ちは可成り貧苦と鬪つた悲しい歷史があるが今でも彼女の母が病身であるためその病氣を見舞ひに一年に二三度はわざ〳〵紐育まで歸ると云ふほど純粹な眞の孝行娘である。

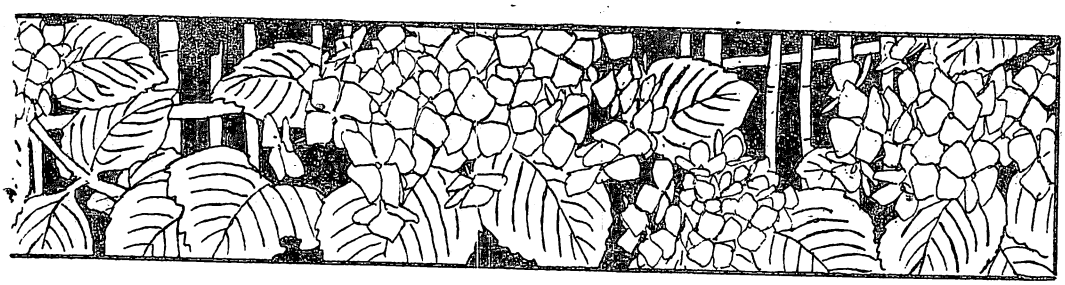
彼女の演る喜劇物はすべて所謂チヤプリン種でその輕妙な體軀の動作はデブ君と共に自在を極めたものである。ことに乘馬と水泳に妙を得てゐることは太平洋岸第一と稱せられてゐる豪の者である。

彼女の得意の藝の一つとしては階段の高い上からころ〳〵と轉げ落ちる技術で。そこを相棒のデブ君がひよつと横合から現はれてメヱブル孃を掬ひ上げる。掬ひ上げるから助けるのかと思ひきや何の事はないそのまゝ欄干の外からホイと下へ逆落しとやる。あとでデブ君得意のゲタ〳〵笑ひに滿面の皺を寄らして驅け降りる。……と云つた風の一幕は讀者のよく見てゐらるゝ所であらうと察しる。デブ君もメヱブル孃も此の世界に「笑」と云ふ幸福な寶を齎らす、なくてはならぬ重要人物の一つである。

因にデブ君は數年前その最愛な婦人同道で日本へもきた事がある。むろん只の觀光客としてで活動をやりにきたのではなかつた。

□西洋音樂器械展覽會□

（淡島）椿岳が淺草生活以來傍若無人な畸行を擅にして憚らなかつたは、恁ういふ人を喰つた氣風から出てゐるので。明治五年頃、殆んど初めてピヤノやヴヮイオリンが橫濱へ入荷した時、椿岳は早速買込んで、神田今川橋の或る貸席で西洋音樂機械展覽會を開いた。今聞くと極めて珍妙な名稱であるが、其頃は頗るハイカラに響いたので、當日は所謂文明開化の好きな人たちがギシと詰掛けた。此の滿場爪もたゝないほどの聽衆を集めて、椿岳は嚴格らしくピヤノの前に腰を掛け、無茶苦茶に鍵盤を敲いてポン〳〵と鳴らした。何しろ少數の文明開化人が橫濱で赤隊（英國兵）の喇叭を聞いたばかりの時代であつたから滿場感に堪えてピシヤ〳〵と拍手大喝采をした文部省が音樂取調所を創設した。頃より十年から以前で、恐らく椿岳は公衆の前でピヤノを彈奏した——と云ふより實は叩いた最始の日本人であつたらう。此ピヤノは、後に吉原の彦太樓尾張屋の主人に買ひ取られた。が、此人は廓中の變通で、一度は白無垢を着て御前と云はせた程の豪奢を極めた萬年青の名品が四百鉢からも持つてゐた物數寄であつたピヤノを買つたのも音樂好きより珍らし物好きであつたからだが、日本の洋樂が椿岳や彦太樓尾張屋の樓主から開拓されたといふは頗る變挺な發達である。（內田魯庵氏著「きのふけふ」より）



辯士の綽名を懸賞

活動寫眞の役者にデブ君だとかデコ坊だとかいろ〳〵の綽名がついて居るやうに活動寫眞の辯士にもいろ〳〵な綽名がついて居ります。中には綽名の方が本名よりも廣く知られて、本名では反つて通じ憎い人もあります。左樣かと思ふと徹頭徹尾眞面目一方で綽名のアの字も御免蒙ると云つたやうな顏付をして居る人もあります。此んな人達に頗る奇拔な綽名をつけて、否應なしに其れを受け入れねばならぬ事にしてやるのも面白う御座いませうし、世間多數の裏書によつて既に持つてる綽名の所有權を確實にしたり、又は今まで難有迷惑に感じて居た綽名を此機會を利用して改正したりするのも、餘程興ある事だらうと思ひます。御贊成の諸君は左の規定に從つてドシ〳〵投書して下さい。

一、投書は葉書に限り、各自の住所氏名を明記する事
二、葉書一枚に辯士一名の名と其綽名とを列記する事
三、葉書は五月二十日までに本社へ着くやうにする事
四、一枚の葉書へは一名以上の辯士の名を書く可らず





本社では五月二十日までに集まりました葉書を一々鄭寧に分類して先づ各辯士の得點數を調べます卽ち辯士の誰々に對して葉書が何枚來て居るかと云ふことを調べるのです。而して其の葉書の數に從ひ高點の辯士を十人だけ選びます。之は數多き辯士の綽名を一々心配して居る譯には行かないからです。次に又一人々々の綽名を調べて最多く投書のあつた綽名を選び其れを其辯士の綽名と決定します。

十人の辯士と其れから讀者多數の同意によつて決定された綽名とは東京、大阪、名古屋、岡山及び福岡の新聞へ廣告して、天下に公表します、外に辯士其人に對しても何か表彰の方法を取る積りです。

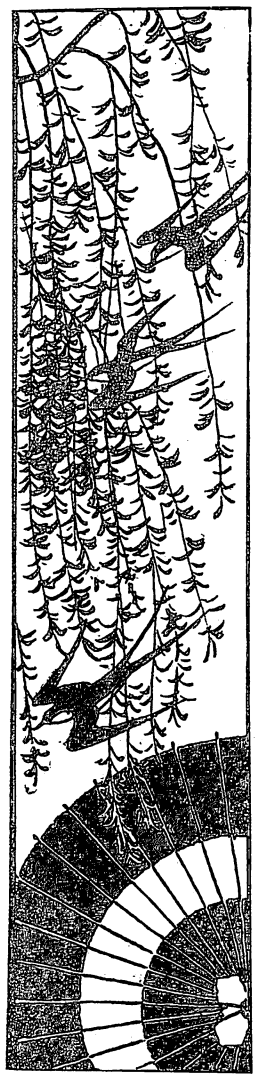
其處で今度は綽名をつけて下さつた方々に對し、左の方法によりて御禮をしやうと思ひます。一切の結果は本誌七月號で發表します。

同じ辯士に對し本誌で決定した通りの綽名をつけた方の中より抽籤で十人だけ選び、一人に一圓づゝ贈呈します、辯士の數が十人ありますから、總計で百人百圓になる譯です。□□□□□□□□□□更に殘りの葉書の中から抽籤で十人づゝ選び、活動寫眞繪葉書を一組(三枚)づゝ呈上します矢張り百人に百組差上げる事になります。



キーストォン、メーブル

森田青波



演藝界も昨今漸く活動萬能の熱に襲はれんとする折柄とて、**チャリー**、**チャプリン**、や**メーブルノーマン**など、云ふ連中の名は勿論其畫面に表はれた巧妙さも既に一般に能く知れ渡つて居る。然し此等世界的人物の風姿や動作も、フイルム上に映出された物は唯僅かに彼等が半面に過ぎぬ。若し其隱れた他の半面をも知り得たならば其フイルムに對する興味も尙一層を加へる事であらう。

さはいへ彼等の裏面は中々たやすく伺ひ知る事が出來ない。殊に吾々の瞳には容易に影らない。其處で格別自慢相に特筆する譯でもないが僕は意外にも或事情からこんな連中と近附く機會を得た。それは丁度昨年の夏であつた。兎に角過去五六年比較的無趣味な旅の空にあつた僕は暇さへあれば常に活動へ飛び込んで其娯樂によつて聊慰安を求めて居たのだ。其中にも**チャリー**や**メーブル**は久しく未見の顏なじみであつたので、愈よ親しく彼等の風貌に接して見ると好奇心は人一倍其起居動作が強く感じられた。殊に年若き愛嬌者**メーブル**、**ノーマンド**孃の印象が今も尙明に殘つて居る。今それを書いて見ようと思ふ。

本場の米國でも現今各都市至る所活動寫眞館前面の廣告に「本日特別キーストォン喜劇」なる看板が掲げられたが最後、他の會社フイルム出映の時よりも遙かに多數のお客が來る此簡單なる廣告が所謂折紙附きと同一視されて居るのだ。之さへ目當に入場すれば興行中は勿論歸る段にも不平の聲を漏さずに濟む。

僅かの年月に斯く迄の信任を得た**キーストカン**喜劇の成功の半面には、小女**メーブル**の半世が潛んで居る事を忘れてはならぬ。此**メーブル**孃はまだ二十の坂を僅かに越した許りの至極無邪氣な愛嬌たつぷりな娘さんで、此社會の人となつてよう〳〵六七年である。

三五の蕾の花時代は紐育の場末に母と唯二人貧しい暮を續けて居たが、天性の美貌と無双の愛嬌は徒らにセールスガールや、ウエートレス位にして置かなかつた。其當時紐育第一流の畫家として知られた**フィリップハット**、**スタンロー**諸氏の畫室に出入して其畫板のモデルに採用されて居た。外劃の正しい容貌と風姿はこれ等畫伯の筆に依て遺憾なく社會に紹介された、彼女の名は忽ちにして一般に知れ渡つた。

丁度其時は活動寫眞が双翼を擴げんとする時代で、利に鋭い興行家は活動界の爲めに破天荒の黃白を投じて此**メーブル**を捕へたのだ彼女の初舞臺は**バイオグラフ**社のスッデオであ

つた、勿論其當時は此社なども至て微々たるものであつたが、其指揮者は著名なるグリフイス氏であつた。

名家の妙筆も孃が緻密の表情だけしか畫板に印する事の出來ないのを遺憾に思つて居た矢先、此活動寫眞は天賜の妙味をフィルムの上に躍らして、空前の大成功を以て全米國は勿論歐洲列國に迄迎へらるゝに至つた、**バイタグラフ**の**ションバムネー**老人など、共々、全世界を抱腹絕倒させ無双の人氣を集中したのも夫れから遠い事ではなかつた。

最初の中は會社の都合で喜劇も悲劇も兩方やらねばならなかつた。**メーブル**には之が比較的困難であつた。彼女は喜劇に假裝するを希望して居た。そは自分の嗜好が其方面にあつたからであらう、斯うなつて來ると會社に雇はれて居るのが窮屈でならぬ、そこで至極氣意の投合した同社中の**マック、セネット**フォード、**スターリング**と三人で新規に**キーストンフィルムカムパニー**を組立た。勿論會社は喜劇專門で悲劇物は絕體に手をつけなかつた。之が今日世界の喜劇フィルムを左右している**キーストォンカメデー**の製造元であるのだ。**メーブル**は所謂「**キーストォンメーブル**」として、其本家本元たる價値を發揮しつゝあるのだ。其技は他の連中のとても及ばぬ妙所があるに相違ない。彼の**チャリーチャプリン**氏の如きも、此社中に投じて始めて名をなしたので、其後他の會社に轉じ新に映畫を作つてゐるが、**キーストオン**時代程には一般から歡迎されて居ない。之を見ても如何に名人となつても指揮者の智と相手演技者との意氣の投合を得なければ、決して絕大の巧妙を表顯する事が出來ぬ事實が明瞭する。**チャプリン**自身も茲に氣が付いたと見えて、現今の契約が結了次第、再び**キーストォン**社に歸つて**メーブル**と共に手腕を振つて見たいと謂つて居た。此一言から考へても、如何に小女**メーブル**の喜劇に對する手腕が重寶がられて居るかゞ明だ。

フィルム上に表はれた**メーブル**を想像して見ると、至極蓮葉な單白な情合の女だらうと十人中八人迄思ふやうだ、が其實際は殆んど正反對である。僕が初めて**メーブル**を知つたのは昨年の夏、此**キーストォン**のステオであつた、友人から紹介されて驚いたのは、兼てフィルムの上から想像して居た**メーブル**と人間が全く相違して居つた事だ。それからフィルム以外の**メーブル**を見るに及んで益々此の感が深くなつた。

孃は最も遊技に長じて居た。乘馬、游泳、自働車、飛行など一として堪能でないものはない。

僕も能く一所に自働車を飛ばせて見たり泳ぎに出掛けたりした事があつたが、其個人的性質から評したならば、實に溫厚な愛情に强い、小氣味よい其上に至て無邪氣な女で、此社會には珍らしく虛榮心に乏しい。今日巨萬の貯蓄も出來、每週五六千圓位の收入を得て居るから、如何程立派な服裝も出來ようし又年若い娘のバニチーとして、之が唯一の希望でなければならないのであるのに、孃は平常至て單純な學生式を以て滿足して居た。

そして人に對しては實に珍らしい程親切である、五百人以上も働いている**キーストオン**會社の事とて、怪我人が每日絕た事がない其都度ィの一番に赤十字の役を勤めてゐるのは、常に此**メーブル**である。だから誰一人孃に愛敬を拂はない者はない、又一人の老母に對しても至極孝行である。

現時歐來の劇壇に喜劇の巨傑として其名聲を轟した**レーモンド、ヒッチコック**が、**キース**

懸賞當選發表



□□アルコール先生改名の議□□

アルコール先生の改名の議につきて集つた投書總數は四千六百五十六の多數を占めました。種々御意見もありましたが編輯局一同の協議に基き

チヤァリー先生

と改名したら宜いだらうと云ふことに決しました。これは本國たる亞米利加に於てもこう呼んで居るのでチヤアリーと云ふ名は他の人にも澤山ありますが單にチヤアリーと呼べば即ちチヤプリンの事を指す位に有名であります、しかもチヤアリーは日本語チヤリ（道化）に通じ大びに意を得た名前と思ひます。

處が四千餘通の投書の中チヤアリーと改名すべしと申越された方は僅に七名しかありませんでした。殘り七名の中先着順で二名を一等とし、五名は二等へ廻はしました。而して更らにチヤプリン先生又はチヤプリンちやんと選名して來た力の中から先着順で五名選定して二等にしました、之れはチヤアリー先生でなければチヤプリン先生と云ふのが最も適當だと思つたからです。然かし選外慰藉五十名は最も公平を計る爲め全體の葉書から抽籤で選び出しました。

トオン社の爲めに態々紐育から招かれて、此**メーブル**孃と共に「旅人」なる喜劇を撮影する事となつた時、同優は在羅府知名の連中を呼んで一夜宴を催した事があつた、勿論萬事が頗る喜劇的に仕組まれた。僕と列席してプレースカードの描畫を賴まれた。而して連中の名は悉く渾名を記入する樣にと註文された。其處で**メーブル**の分には「キーストオンメーブル」と書き上げた普通なれば左程不快を覺える性質の事でないが、孃は來集名士に對して餘り高慢的に吹聽されたを不平に思つたと見えて爾後**キーストオンメーブル**の稱だけは用ひぬ樣にと斷つた事があつた。孃が如何に虛榮心に乏しいかは此一事でも明白だ。實力もない癖に「帝劇」を笠に衣たがる所謂女優などに斯んな逸話をして聞かせたいものだ。

去年の暮も此**メーブル**の人氣旺盛を當込んで、一攫千金を得んと、某有力なるボードビル組合から莫大なる給料を以て、三十週間出演の相談を持込んだ。所が**メーブル**は一瞬の猶豫も與へず、之を拒絕し自分等の創立した**キーストオン**會社と生死を共にすると云ふて居たのである。

壹等　賞金五圓

チヤアリー先生
東京小石川區林町　梅鉢朝子

茶理博士
丹波國篠山町之内立町　木村稜々

貳等　賞金貳圓

チヤアリー
大阪南區樂天地　桂一郎

有智先生
（消印東京中央局）　なみ

茶利先生
東京青山南町三　前野俊子

チヤアリさん、
京橋銀座三の十八　石野はる

チヤリーさん
千葉縣山武郡正氣村　小倉武彦

チヤリちやん
東京荏原郡上大崎八四　上田櫻子

チヤプリン先生
名古屋市飴屋町三六九　柴山清一

チヤプリンちやん
京都姉小路麩屋町東　彩雲堂雄一

チヤプリン
大阪府堺市市之町　野本春江

チヤプリン氏
淺草區千束町二　白竹音七

選外慰藉

左記五十名に對しては木版繪端書一組（三枚）づゝを進呈す

植木源太郎（松本市）　松本喜一（牛込）
宮澤梧郎（長野）　田中房造（千葉）
岡田夢一（群馬）　龜井堅兒（函館）
林繁一（名古屋）　竹風生（青島）
天笠生（千駄ヶ谷）　帶屋京太郎（秋田）
金子隆三（秋田）　木谷友作（會津）
淺野米三郎（大阪）　石川修（日本橋）
都築半之助（淺草）　久保田翅町（麻布）
濱地吉太郎（神田）　長松（麻布）
上津原末廣（福岡）　岡本つる（京都）
近藤長次郎（横濱）　服部源藏（奈良）
KT生（青島）　元田浩（千葉）
山田清一（神田）　川邊清一（深川）
天野和一（秋田）　琴田由松（神戸）
高柳鐘次（日本橋）　山木泉（北海道）
澤見富次郎（小石川）　大野退助（淺草）
龍鳳（小石川）　前野富吉（大崎）
永野落風（京橋）　大澤正常（和歌山）
普川松野（牛込）　浦邊正巳（長崎）
松崎信夫（横濱）　宮崎幸造（秋田）
後藤昌子（品川）　牧野孝吉（靜岡）
佐竹八郎（大森）　小林つね子（本郷）
上野暉（澁谷）　半次（千住）
岡崎久（芝）　河崎竹風（神田）
柳田敬久（四谷）　住田彌生（青山）
　　八田

海外活動小話

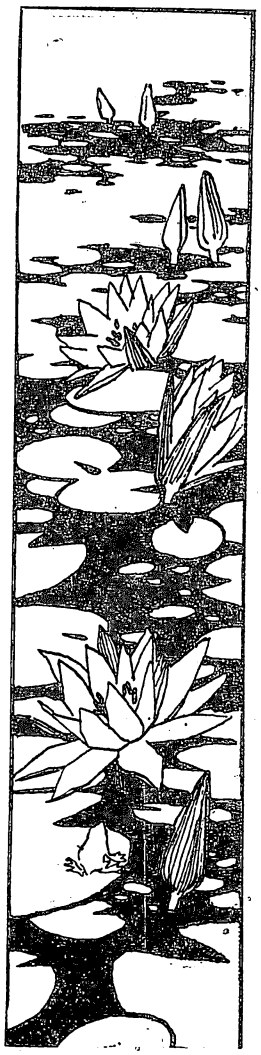
米國の活動寫眞に出る俳優の中で誰の笑顏が優れて居るかと云ふ番附を拵へた熱心家がある。活動狂は比較研究して見るも一興であらう。

男優は（一）チヤアリイ・チヤプリン、（二）ドナルド・フエアバンクス、（三）トム・ムトア、（四）ウォレース・レイド、（五）ヘンリイ・ウォルソオル

女優は（一）メリイ・ピックフォード、（二）マアゲリット・クラアク、（三）マアゲリット・コルトット（四）ヴアイオレット・ミーズロー、（五）ラス・ロオランド

通俗作家として名高いジヤック・ロンドンは近頃ヴアイタグラフ會社の爲めに特に一篇の小說を書いた。同社では既に其れを脚本チヤアルス・ゴッダアドの手で脚色して貰つたので、近々フイルムにする筈である。全編血の滴たるやうな身の毛もよだつばかりのロマンスとアドヴェンチユアに充ちて居ると云ふ。

知名の女優レロレンス・ロオレンスは長い休暇を取つて田園の自宅に悠々歸臥して居たが、此頃はニユウ・ジエルシイのレオニアなるユニヴアーサル會社の撮影場で、汗水たらして働いて居る。



活動寫眞撮影場見物

世界第一の歌劇役者ファラア嬢を雇ひ來つてカアメンを演ぜしめ斯界に新記錄を作りたる米國ラスキイ會社

これは米國の有力な或る演藝雜誌の記者が同國内の大きな活動寫眞會社撮影場を歷訪した記事の一つである。我が讀者には可なり興味があり、其道の人には參考にもなるであらう

米國**ロス・アンヂェルス**市から郊外電車に乘つて三十分ばかり行くと**ホオリイウッド**と云ふ所がある。近年までは實に閑靜で保守的な落ち付いた感じのする土地であつたが、今やラスキイ・フィーチュア・プレイ會社が全く其土地を所有するに至つて悉く面目を變へて了つた。

郊外電車を捨てた私は、どの樣な面目一新の姿を見せられる事かと思ひながら、きよろきよろ昔の偲ばるゝ美しい並木の道を進んで行つた——それらの木々も年々赤い實を結んで、敬虔にして醇朴な**ホオリイウッド**の人々の頭の上にボツリ〳〵と落した事であらう。

やがて、ラスキイ撮影場の外壁を成して居る高い圍ひの前に出た私は、用意して來た紹介狀を提出すると直に門内に通された。

快く會つて呉れた**ラスキイ**氏は、愉快な愛想の好いキビ〳〵した人物で、私に質問の連發を許し、一々親切に答へて呉れた。

ラスキイ氏は先づ活動寫眞の背景監督として米國第一流の**井ルフレッド・バックランド**氏を有し、舞臺監督として敏腕比類稀なる**セシル・ド・ミル**氏を有するを誇りとする事を述べ、彼の會社から世に提供するフイルムは決して他の同業者にヒケを取らぬと信ずるが何うかと尋ねたから、私は然りと答へた。

背景監督**井ルフレッド・バックランド**氏の名聲は私も夙に之を聞いてゐたし、加之彼の監督の下に演ぜられた近來の傑作と評判のある「カアメン」を一兩日前の晩に見て感心してゐたので、

『私の友人で幾晩も幾晩も「カアメン」を見に行つた男があります。殊に、あの終りの方で、女主人公に扮する**ヂェラルディン・ファーラア**嬢が焚火の赤い閃光によつて運命を語る所が堪らなく好いと言つてました。宛然**レムブラン**の古い名畫を見るやうだと言つてゐました。』と言ふと、

『さうです……**バックランド**さんも、あれには隨分苦心しました。あの光と陰影の工合が實に何とも云へませんな。立派な畫です。』

活動辯士の元祖
上田布袋軒

影斜童子



我國へ活動寫眞のフイルムが輸入された明治二十九年の二月から、四十一年の春まで壇上の人であつた上田布袋軒は、活辯と云ふ文明の風が産んだ新職業の先祖であると共に、門下には例の大山とか江田とか其他の第一流辯士を養成した斯界の古老である、今は大阪市西區新町南通一丁目に息子が小間物屋を營んで居るので布袋軒は其れに養はれ乍ら樂しい餘生を送つて居る、大阪に生れて純江戸ツ兒のタイプを持た布袋軒は今年六十八歳の高齢であるが、結城紬の袷を重ね古渡り唐棧に黒八の襟が掛つた絆纏を着て、齒切り良い江戸辯で語り出した。

大阪船場の大商家の坊んち

旋毛曲りで他人に頭を下げずに通して來た此の老翁、大道の一品料理か、ミルクホールの樣な藝名を持て居る此の翁は實名を上田恒次郎と云つて嘉永二年と云ふ、世の中に腥い風が吹き出した眞ツ最中に、大阪南船場の大商家に坊んちとして呱々の聲を上げたのだ。

是れでも俺しは大きな商人の息子に生れたのですが、子供の時から他人に負けるのが大嫌で、殊に御維新の當時には何と云ふ理由も無く長州の武士が亂暴するのが癪に障つて仕樣無いので、何か事が在つたら長州の武士に一泡吹かせて遣らうと思つて居る裡に、ある時今の渡邊橋ですあの橋の上で幕府の士と長州の士が口論をして、將に帶刀の鯉口を切らうとする始末なのです、恰度其處を通り掛つ

た私は長州の武士が馬鹿に癪に障つて居る處へ此の始末ですから、突然り其の武士の横面を張つて怯む處を堂島川へ投け込んだ事があります。

其後實家の方は自分の代になつたのでソロソロ極道をはじめて大部使ひ果しました其の間には種々と面白い事が在りましたよ、或る年先代の奥田辨次郎が始めは西洋の草花を輸入して見世物に出した事があります、大阪でも大層の評判で客を呼び、夫れから紀州の和歌山で興行をすると、百種ばかりの中に唯つた一つ名前に札が落ちたのがあつたので其花へイギリスと云ふ名を附けて陳列すると見物に來た紀州藩の御家老が、苟くも日本の見世物に夷國の名を附すとは怪しからんと大變な御立腹でしたから、其の監督に參つて居た私は、さう仰しやいますが當和歌山城は、虎伏山竹垣の城と申して、虎は日本の動物では無いのに殿樣のお城は外國の獸の名が附て居るでは在りませんかとお答をしたので、流石の御家老も言句に詰つてしまひましたが、夫れ以來私は諸種の興行物に附て歩いて居る中に生來の呑氣者ですから面白半分に曲馬の口上なぞをしたり、時には表方を頼まれたり、勘定方の手傳ひをして面白可笑しく世の中を渡つて居たのです、さうして居る中に一寸〳〵友達と素人義太夫の仲間なぞへも入つて、近所合壁の新香の味を腐らせて居たのです、處が私の語り口に何處か見處でも在つたものですか、實家の全盛當時に出入をして居ました先代の綱太夫が私に向つて云ふには、どうです上田の若坊ン一層の事太夫に成つてはと云ふ勸めたのです、夫れから宜しくお頼み申しますと綱太夫の弟子になりましたが、其の時に始めて布袋軒と云ふ名前を貰つたのです、夫れから二十年間も太夫として勤めて居まして、其の間には好きな道と一種の道樂が手傳て西洋の大曲馬のやうな者が來れば、興行主に頼まれては口上に出て遣つて居ました、其の後明治二十九年の二月の事でした佛蘭西里昂の

レミユル會社からフイルム

や撮影技師を連れ映寫器械なぞを持て歸朝した人が在つたのです、夫れは其後大きな貿易商になつた染料屋さん稻畑勝太郎さんでした、稻畑さんは其時彼地で活動寫眞を御覽になつて、是れは日本へ持て歸れば必らず金儲けが出來ると思つたので、フイルムを五六本買つて、高給な技師まで連れて歸朝されたのです、寫眞は今から見れば實に幼稚な物で喜劇の壁毀し、インクラトン、瀛船の進水式、其他でいづれも七十尺から八十尺を最長尺とした捲き取りのフイルムでした、さうして其の活動寫眞を南の演舞場で一般の人々に觀せる事になりまして私の處へ說明を云て呉れと申し込んで來ました、處がお耻かしいが歐文と云ふもの只の一字も判りませんから一寸躊躇しましたスルト妥に面白い事には日本へは其以前に活動寫眞か輸入されて、然かも藏の中に入れッ放しにしてあつたのです、夫れは其の當時は雜貨商で今では加奈陀サン保險會社の支配人をして居らつしやる荒木和一さんが、御自分の商賣上で米國へ渡つて居られて、愈よ歸朝と云ふ前に内地の親しいお友達から米國には活動寫眞と云ふ玩弄があるさうだから夫れを買つて來て呉れと頼まれたのですと、荒木さんは玩弄を頼まれたのを本物の活動寫眞と間違へてエヂソン會社から本物のフイルムや器械を買つて、歸朝して見ると何にしろ座敷で子供衆の慰みにしやうと思つたのが飛んだ間違であつたので、太ツ腹の荒

木さんは御自分で引取て藏の中へ放り込んで置たのです、處が南で愈々活動寫眞を觀世物にすると云ふので市中は大變な騒ぎとなりましたが

其以前に日本へ初めて輸入

したが寫眞を持て居る荒木さんは此方でも興行しやうと云ふ事になりました、而して場所が無いので私の處へ新町の演舞場を借りて呉れと頼みに入らつしやいましたから、事務所の方へ交渉して上げると演舞場は毎月一囘の慈善會の外には他へ貸さぬ事に成つて居て、どうしても貸して呉れません、夫れから其の會の幹事をして居らつしやいました朝日新聞社の加藤さんにお頼みをしました加藤さんの仰しやるには慈善の名目さへ在り、上り高の幾分なりを寄附するなら一ツ骨を折つて上げやうと御親切のお言葉で、私しも旨く行けば興行主側からも頼まれ甲斐もありますから、いろ〳〵と無い知恵を絞りました結果其の時に周防洋で沈沒をした三光丸には大阪の人も多く乗つて居まして新聞では毎日悲慘の記事を書て居ましたから、同船水雛者遺族義捐と云ふ事にして加藤さんから新町の事務所へ交渉をして頂くと、二ツ返辭で貸して呉れる事になりました、で其の時の寫眞は御存知の通りエヂソンは有名の大會社ですからフィルムも稻葉さんの持て來た巻き取りでは無く五巻ともタスキで、然かも寫眞は印度人の踊り、李鴻章が馬車に乘る處、滑稽物では西瓜喰の競爭、其れから桑港の波止場と後年西樂（西村樂天の事）の出世フィルムとなつた佛國南岸の某燈臺なぞ、尺はいづれも南と同じやうでしたが、此の五巻で木戸を五錢で開場すると、見物の來る事を云つたら御談しにならない、新町通りは演舞場へと御見物で芋を洗ふやうな始末でしたが南の演舞場も其の通り滿員續き、双方とも莫大の錢儲けをしたのである、夫れから暫くして東京へもフィルムが來ましたが、活動寫眞は大阪が始めてゞ、從て日本に初めて活辯が生れ

私がまア日本で最初の活辯

に立ちましたのです、幸にも以前いろ〳〵の口上をして居ましたから、非常の好結果でありまして以來引續き辯士として中座を始め角座へも出ましたが、例の駒田好洋や東京では數度皇族方の御前説明の光榮を擔ひました中川慶次君なぞを二枚として大きな舞臺に立ちましたが、其の後は當時樂天地で支配人をして居ます長岡孝之（淺草の電氣館で賣り出した大山）を二枚目として日英活動で九州の各地を隅から隅まで打ち廻りました、此の興行には私も大山も隨分金儲けをしました其れから今申し上げた通り私が新町へ出るやうになつたので、南の演舞場で辯士を勸めましたのは唯今では

松竹合名會社の手代と成た

高橋仙吉君だつたから面白いでは在りませんか、今では高橋さんも松竹の手代で押しも押されもせぬ幕内の敏腕家ですが、其の頃は大松島屋片岡仁左衛門さんの弟子で、片岡才槌と云て舞臺の人だつたのです、ですから彼の人も日本最初の辯士と云つても可いものですが、あの人の方は其の時切りでありましたが私は將來必らず日本で大流行をするものだと思ひまして、辯士として世の中を送らうと其の時に決心したのでした、然しまだ其の頃には市内に常設館が在るでも無し、年中活動寫眞の興行が在るのでも在りませんから前にも申し上げた通り、曲馬とか西洋奇術其他

の口上なぞを勤めて居り、其後外國からクレヤ曲馬の大一座が來朝したので其の世話をして居りました。

其時分私は何んでも人より違つた眞似がしたいので、確か中座へ出勤中と思ひます始めて燕尾服を着て壇上に立つたのでした、すると駒田好洋が直ぐ眞似て同じく燕尾服を着始めました、何にしろ其の頃になつては江田不識も辯士になりますし、大山も壇上に立つやうになつて居ましたが、活辯が燕尾服を着始めたのは私が皮切りだつたのです、夫れから話は少し前に戻りますが喧嘩から田村成義氏と握手をした事があります、夫れは田村さんが英照皇太后陛下が、お隱れに成つた年の正月だと思つて居ますがあの人の手で、溫古展覽會と云つて木彫で大名行列や其他の見世物を大阪へ持て來ました、何んでも人形ばかり千百幾つと云つて實に素晴らしい物でした、夫れを千日前の井筒の席で興行したのですが、頭取は尾上梅助さんで正月の元日から蓋を明けまして口上は私の外に千日前で重立つた者を三名連れて行つたのです、さうして元日の晩打ち出しになると、頭取の尾上梅助さんが是れは今日の給料だと云つて五厘銅貨を百枚卷と廿五錢棒を四本を渡すのです、どうも妙な眞似をすると思ひましたが、是れは私の一人ですかと聽くと四人のだと云ふのです、元日と云ふのに四人で一圓とは餘りの明き盲目と無體癪に障りましたから東京の口上は蚯蚓の樣に土を喰て生きてるか知らねえが俺れ達は米の飯を喰つて居るんだ、斯んな錢は要らねえが出勤はお斷りだ、然し此のまま休んではお前の方も困るだらうから口を利た人の顏を立て、三ケ日は無給金で働て遣る、其の代り四日から人を探しねえと云ひ切つたので樂屋は大騷ぎになりました、さう斯うして居る中に、仲裁する人があつて身上も直りまして、梅助さんとも手打ちをして笑つて勤める事になりましたが此の時、其のいきさつを聽た田村さんが私を宿屋へ呼んで實に面白い男だ、俺しは興行師として世の中へ立つのだから、此の後長く交際をして呉れと云ふので手を握つたのですが、其の後田村さんが本郷座へ西洋手品を掛けた事があつて、何か幕合の繼となるものは無いかと云て來ましたが、佛蘭人の娘ダンスを連れて行きまして私も本郷座の舞臺で口上を述べた事がありました。

活動辯士として最後の舞臺

其後大阪へ歸つて各所へ出勤して居りましたが其當時例の横綱若島權四郎關と私とは非常に意氣が合つて居た爲め、彼の人が病氣で土俵を退て若島活動寫眞部を組織した時に、どうぞ私に說明を受持て呉れと云ふのです、私も最初は餘り望みませんでしたが、何にしろ外ならぬ關取の賴みですからウンと承知をしまして門下生三名と私とで辯士は四名で九州へ渡りまして九州一圓の興行を終つて中國路へ出て參り、下の關を振り出しに段々と興行を續けて藝州の廣島へ參り、廣島市疊屋町の壽座へ乘り込み初日以來滿員の盛況でしたが不圖したことから此の壽座の說明が活辯として最後の舞臺となつたのです、何んで俄に此の舞臺から廢業を思ひ立つたかと云ふと、五日目の閉場前で、寫眞はお馴染の不如歸でした、將に演壇に起たうとする刹那、息子の嫁が病氣危篤の電報を受取りますと、息子が嘸ぞ心配をして居るだらうと思ふ親子の情に曳かされまして說明中思はず一寸トッチたのです、夫れで私は辯士として壇上に起つた以上は自分の死場所であるのに、可愛い倅の嫁

喫煙室

═治外法權═飛入勝手═

風俗惨亂に渡る可らず
人身攻撃を爲す可らず
投書は凡て葉書に限る
二篇二百字以内の事

▲私は新演藝の初號からの愛讀者で喫煙室が二號から開かれると直ちにお仲間入した一人です、第三號の同室を顏を出される諸君も必ず私と同じやうに初めからこの雜誌とこの喫煙室に親しみを持つてゐる人だらうと思ひます處で記者先生と喫煙室の同人とに御相談がありますといふのは或る機會に喫煙室の會を開いては下さいませんかさうして紙上でお知會になつた諸君と紙上の喫煙室でないほんとうの一室に會して徐に好きな芝居の談をしたいと思ひますが如何でせう（淺草田原町時次郎）

△至極結構な企てだと思ひます贊成者を得ましたら早速開く事にいたしませう（係り）

▲現今の歌舞伎劇中最も藝術味の多い……歌舞伎劇の華とも謂ふべき所作事に對し、大阪の役者は何故あゝ冷淡なのだらう。右團治、長三郎を選手として納まつて居るけれど夫は段、幸、宗十、菊三津は無論の事、其次位に位する宗之助、猿之助等に比しても尚遙に遜色がある。畢竟コンベンションに囚はれて居る罪だ。此弊を矯正するには先づ長三郎、扇雀等を東京へ數ケ年踊の修行にやるのが手近な便法だが、鷹治郎には其勇氣があるまい（H T生）

▲次號にはぜひ男寅の日常生活を出して下さい、又樂屋のお樣子や俳優の家庭の有樣などをのせ下さい、樂屋風呂は永久に掲載して下さい、男寅の顏は美しう御座いますれ、私は貴君を見ると胸がうとします、皆樣男寅を贔負して下さい清樣御身御大切に（浩男）

▲第二號の新演藝ほんとうに面白う御座いますわねえ、米吉樣の澤山の寫眞どうもありがたう御座います、私は大の米吉好きですの、記者樣この後もどうぞ米樣の寫眞を澤山出して下さいまし（日本橋　米吉狂）

が危篤とは云へ一言でもトツチたのは上田布袋軒として、亦た仲間から日本最初の辯士として尊敬されて居るのに對しても大に恥ずべき事だ、潔く斯界を退かうと覺悟をしまして、其晩を辯士生活の終りとして歸阪したのです、さうして其の嫁の死水は息子と共に取て遣りましたが、其の後弟子達が諸方の館主も一世一代の引退興行をしろなぞと御親切に云つて下さいますが、夫れもお斷り申して時に興行物の紹介なぞを賴まれますと間接に自分の出來るだけの事は致して居ります、夫れで東京へ參りますと築地の金水へ田村さんをお尋ねしたりして向ふ同樣の御交際を致し居りますが今の辯士の中には學士の肩書のある立派の人も出來ましたし、フイルムも日本で出來るやうになつたのは思へば恐しい進歩をしたものです。

翁の懷舊談は夫れから夫れへと却々に盡きなかつた。

◎長篇講談　第五篇及び第六篇

第五篇は圓喬の『牡丹燈籠』と富岳の『佐賀の夜櫻』第六篇は燕玉の『天一坊』と『村井長庵』を收む。（定價各三十錢、日本橋區　博文館）

▲二號「愛讀者より君に申す、君の仁左衛門に對する評はあまり酷であると思ひます、私は君が充分仁左衛門を知らない人と思ます、雁には雁の長所が有り仁左には仁左の長所が有るので要するに君は雁を好く一人で公平な人から見れば仁左衛門は天下の名優として決て恥ない俳優であります、人氣は雁が仁左より勝つかも知れませんが人氣の多少は俳優の技藝には何等の價値もありません私は公平なる貴社の裁判を願ます（湖南の劇狂生）

▲僕は片市が大好きです片市は何となく好きでたまりません。何だか其原因さへも不明です、あの兵士出の風采が私をチヤームするのかも知れません、僕は彼のこせこせしない所が好きです、けれど歌舞伎あたりで碌な役がつかないのは氣の毒でもあり又殘念でもあります。どうか片市の未來に生あらせたいと思ひます、彼は新らしいものには向ない質です、歌舞伎劇に充分努力してもらいたいものです（本郷　菊の屋主人）

▲市村羽左衛門は數知れぬ役者の中で一番いゝと思ひます其藝風といひ其江戸前の氣象といひ何といつて好いか分らない程好です、新に生れた此新演藝に依つて私計りでなく澤山の羽左ヒイキの方方の滿足を得られる樣に寫眞又は記事に於て、澤山の御揭載を願ひます、左樣すれば橘會が何時も若い娘に依つて滿員であると同じ樣に新演藝も若い娘さん方に依つて永久に榮えて行く事だらうと思ひます（濱町　橘好生）

▲新演藝初刊號より此の雜誌續く限りの愛讀者たるを期す、既刊號の口繪に男女俳優の素顏あるは嬉し、表紙の俳優似顏また無駄ならずして趣向面白し、希くは之を永久に續けられん事を（名古屋足立穗洋）

▲新福助の道成寺は、親父と六代目の面影をいゝ工合に傳へて、天晴な改名振を示した、纏の手習の件も眞に鮮かだつたが唄の貧弱さはどうしたものだ、蛇體になつてから親父生寫しの足つきを見せたが此奴は困り物、御要心々々、名優連の所化は難有からぬ御馳走で片市の傍若無人さ等胸が惡く、花道の花四天も智惠のない事限りなし、羽左は思ひの外形が立派で嬉しかつた、總じて福助の初々しい眞面目な努力が如何にも快かつた（青山　日藏生）

▲拜啓貴社發行「新演藝」四月號披見致し思ふ所聊か申述候體裁は誠に好ましく本文の紙質印刷の極上なるには何より嬉しく存候殊に壘詞入りの寫眞版は大に氣に入申候尙續々願上候されど「中村時藏」の一日の生活などの寫眞版は貴重な紙面に無用なるかと思はれ申候それより舞臺寫眞を多く出されたる方結構に御座候左團次去りての當地の劇壇は誠に淋しく、江戸兒の吾々には東都の名優の遠征を始終待ち居候何卒貴社の御盡力を煩し度候（京都在住　江戸つ兒）

▲四月の二長町はお花見時だけにづい分大入でしたヲネ六代目さんの清七・清次の早替りは、丸でスミスの宙返りを見て居るやうでしたヲ、だつて一々ハラ〳〵思せるんですものネ男寅さんのおもだか姫は隨分神妙にして居ましたヲ歌六の平作はよくやりましたけれども花道から舞臺へかゝつて水鼻だらしたんですもの、之れには困りましたヲネ（淺草　さつき）

▲羽左衛門が清心を木挽町で演てゐる、これは久しく私が望んでゐた所だ。透通る樣な艶ぽい清元の聲音が漂はす江戸末期の情趣は羽左衛門によつてのみ調和せられ六代目の如く幻滅の破綻は來さない、肥えて圓い顏をした六代目には默阿彌劇の主調たる意氣とかイナセとかは見出されない、江戸の生世話物に於ては羽左衛門が僅に江戸役者の面影を匂はして吳れる。たゞ其女房役者たる海幸と離れてゐるのが氣の毒だ（下谷　大西俊夫）

▲自分は今迄活動などは少しも面白いと感じた事もなかつたが紙上に拳骨を紹介されてあるので初めて注意（？）して見ましたそして初めて面白いと

感じました然かし何卒忘れても日本物なぞ御紹介下らぬ樣願ひます日本の劇を活動で迄見る程自分はまだ頭が下落しては居りません（芝　依田生）

▲今回の懸賞の俳優の寫眞等も或一種の役にフンしたのを誰れの何役にフンしたと云ふ樣にしたら面白いと思ひますそれに今回の權な寫眞だと誰れにもわかつて終つて少しも面白味が無いけれども僕も早速答へました故五圓の賞金を忘れない樣に願ひます（芝　依田生）

▲先程電話で申上ました通り私はたつたと申ますそしてお友達がすつきといつて當社の喫煙室につまらない文ですがお送り致しましたとうぞ喫煙室の皆々樣來月の本におのせ下さいまし御願致しますそれから會の時は是非御仲間入を願ます私は（十九才）お友達は（十八才）まだ文はれつから出來ませんから出したうちでお惡い處は御ゑんりよなくおなほし下さい（淺草たつた）

▲私は新演藝愛讀者になりました御願します四月の市村座は日々滿員續きで上景氣でしたれー中幕の嫗山姥は吉衛門のお歌で笑はせますネ米吉改め時藏の八重桐は改名だけあつてよく熱心におどりましたがいつも上調子で舞臺がちつとも落ちませんでした西の運動場のおしるこやを一寸のぞいたら某大家の娘さんとおしるこをたべながら面白そうにふざけて居たのを見とめましたあの具合ではとても三代目時藏はつぎかれるでせうれー（淺草たつた）

▲默阿彌物は慥に面白い、私共あの舞臺の情調七五調の名臺詞は形容し難き快感を與へる、乍併其は江戸末期の極度に爛熟しきつた舊文明の色彩を背景とした其時代特殊の產物で私達には其は唯美しい過去の憧憬に過ぎぬ、切迫詰つた理智に趨た現代の人々と役者とには沒交渉だ。飜譯劇其は演藝術……舞臺裝置、演出方法其の他……に幾分か効果をもたらしたが根本より異れる國民性を有せる泰西劇の模倣は何等の深き感銘をも與へぬ、尠く共此等の生活を基礎とし、藝術として興味ある新味ある脚本と演出法とによりたる演劇が創造されねばならぬ、是は相當の素養ある青年俳優に對して切實に要求する處である（下谷　KO生）

▲私は芝居の漫畫に趣味を以てる天狗畫家だ、四月號から新演藝を見たら口繪が枚數の割合に役者の數が巧に數多く出て居のは何より嬉しいね、第一表紙が氣に入つたネ……次に相成べくなら木版の口繪が一枚ほしいなー（千駄ヶ谷　岩井一夢生）

▲頃は陽春東京に新らしい雜誌新演藝の產聲をあげたのを遠く洛陽より祝意を申上ます、未だ乳の香うせぬ小兒にひとしき我々なれど梨園のこと

木名版取極春彩仙色畫

月刊 新演藝繪葉書
（五枚壹組　金參拾錢）

《第一輯》
吉右衛門＝石川五右衛門
兒太郎＝千歲
雁治郎＝椀屋久兵衛
容峯＝按摩佐ノ市
幸四郎＝名和長年

《第二輯》
菊五郎＝左官長兵衛
福三郎＝北條高時
左團次＝熊谷直實
延若＝横藏後ニ勘助
右團治＝兒雷也

《第三輯》
歌右衛門＝八重垣姫
羽左衛門＝お孃吉三
猿之助＝安達元右衛門
菊次郎＝浦里
宗十郎＝黑手組助六

《第四輯》
仁左衛門＝柿右衛門
延若＝八郎兵衛
歌右衛門＝女暫
梅幸＝十六夜
時藏＝八重桐

—（第四輯まで全部出來）—

申込所
芝公園九號地
玄文社
振替東京一四七七一番
大阪東區平野町
柳屋書店

といつたら三度いたゞく御飯よりも好きですから自然、斯樣した雜誌は何よりも一番先に歡迎します、殊にこの紙價騰貴の折柄、あの樣な上等の紙を使はれた事は實に嬉しくて〳〵たまりません、私共好劇家の爲めに損を承知て奮發して下さつた事と思つて有難く御禮を申します（京都　瀧本さくら）

▲私は齋藤氏にダンカンの退壇を聞いて悲しかつた、私はつねからダンカンの舞踏とロダンの彫刻とを比べてそれが自然を基調としてゐる點に興味を感じてゐた、ダンカンは爪先で立つやうな不自然な形式はとらないで裸足で踊るのが常であつた眞の踊りは姿勢の一瞬間を彫刻に映じても尙ほ續いて次に起る運動が豫想せられるまで自然に即した純化を要する、私は日本の踊を見るとき、着物の下に動いてゐる不格好な骨格が眼を閉ぢさせる八丈ヶ島の女は風にゆらぐ木の葉について踊を研究するそうだ（大阪　堀明）

▲僕は所用有で橫濱へ行つた處朝日座に女優淺尾信治一座と看板が出て居つた同優の藝風には僕等常に注意を拂つて居るので一寸入つて見た重の井を演んじて居た元來が立役で有るが重の井も好かつた恐らく目下の日本の新舊女優中信治以上の技藝を有して居る者はなからうと思ふ、何方か貴誌に信治の劇評を書いて貰らひたいものだ（江戸川愛讀生）

▲兼六園で名高い金澤には劇場が四ヶ所其他常設館が四ヶ所ございます、三月には北國劇場へ橫濱座を打上げた高麗屋と紀の國屋が乘込んで五日間滿員の興行を續け出し物は橫濱のと同じでした其から十日程遲れて尾山座へ天下一品とか申す義士劇片岡松之助が蓋を開けこれも可也人氣を占めました（久の家）

▲五代目菊五郎が鹽原多助を歌舞伎座で演じた時實父鹽原角右衛門を勤めて非常な好評を博した時から私は八百藏が好きに成り其れ以來は今日迄も此優の舞臺は大概見て居り升、此優の名調子は今更ら申す迄も有ませんが第一舞臺に忠實で何んな端役も捨てゝ演る事がない其れが私の好きな處です（尤も本人が捨てゝ居ても舞臺に其れが現はれない事もあるでせうが）或る一部の人は吉右衛門の加藤が八百藏以上だとか大層祭り上げて居るけれ共私はとてもそうは思へません此優と吉右衛門と比較して優劣を云々する迄には未だ〳〵間が有ると思ひ升（本鄕　花びし）

▲新演藝の廣告を見る時には同種の雜誌の少い當今好いものが出來たと嬉しく存じましたと同時に廣告に餘りに新しい氣分の有るのに氣を惡く致し

嘉悅孝子著　怒るな働らけ　價八拾錢　送料八錢
福謙恒子著　奥樣とお女中　價六拾錢　送料六錢
高島平三郎著　教育に應用する兒童研究　價貳圓十錢　送料拾貳錢
高島平三郎著　婦人の生涯　價壹圓四十錢　送料八錢
高島平三郎著　兒童を謳る文學　價壹圓　送料八錢
高島平三郎著　家庭及家庭教育　價九拾五錢　送料八錢
高島平三郎著　精神修養逸話の泉　價壹圓　送料八錢
高島平三郎著　女の心　價四拾八錢　送料四錢
發行所　東京市麴町區平河町五丁目　振替東京二〇九一四番　洛陽堂

ました然し手にして見ると左程でも御座いませんがまだ演藝畫報には及びません之も日の淺い事故同情致します二面大はなぜ御出しにならぬのですか亦全體にもう少し芝居氣を出して下さい、之の喫煙室も素人樂屋とでも改名せられては如何です

（銀座　竹水）

▲關西に於ける私の好きな役者と嫌いな役者を對照致しますと魁車＝我童、福助＝右團治、延若＝鴈次郎、多見之助＝巖笑、延童＝橘香、芦鴈＝扇雀、廣三郎＝愛之助、荒五郎＝三五郎、梅玉＝故齋入、以上はいづれも前者が好きで後者が嫌いなので御座います皆それ〴〵理由は有つて居ります其他に好きな重なる役者は芝雀、徳三郎、卯三郎、幡市、飛鶴、中福、瀧十郎、佳笑、璃德、荒太郎、秀郎、紫香等で御座います（浪花　正木桂月）

▲新演藝の愛讀者となるには少し註文有り第一表紙は芝居道に於ける行事又は其圖案を募集すべし二大面の寫眞はなくとも似顔繪及び鳥居式の錦繪を加ふ可し、藝者以外の藝人の寫眞も最も必要也記事は俳優の履歷或は其滑稽談の如きもの、次に讀者文藝多種又懸賞は今少し面黑きものを募集せられたし、終りに讀者投書は二百字にては不便なり以上の要求は次號より是非實行願ひ度し（四つ輪生）

▲新演藝第二號の二色版の仁左の柿右衛門は寫眞の撮り方が佳く羽左の清心梅幸の十六夜は次頁の伊井の眞木原、河合の糸子と新舊を代表したる好一對の夫婦役者を示し吉右衛門の清正は十八番ものなれど何處か若々しき處ありて眞に清正らしくなし御殿の場では坂彦の行長の顔が立派先代萩刄傷では羽左の仁木が存外よく菊四郎の外記も力の這入つて居る處上々左團次の夜刄王と半九郎は双方とも上出來曾我廼家十郎の唐木の看判の清三郎は壓卷にて、何度見ても感心されて仕舞ひました

（津　文藝館主人）

▲（梅幸の十六夜を見て）アノ美しい女犯の若僧清心と同じ戀に溺れた十六夜は、モウ冷淡に無頓着な運命の手に弄ばれた散切り頭となつてしまつたそして御用の掛け聲と十手の閃きに終る强請場といふ捨鉢の悲壯美を演ずるのであつた、ア、梅幸の十六夜は、さうした捨鉢を敢てする時でも戀した男を常に忘れない、ある優し味のある心持を有してゐる、それが梅幸を世話物の女房役者として全からしめた彼の眞の藝術であつた（日本橋　三彦）

▲私は本紙を開けて見た其時に何となく物足りないと感じました其は他雜誌にくらべて色刷りの口畫がなく僅にコロタイプで渇を慰してゐるからだ

ハリキン石鹼

品質本位實用的石鹼として日々愛用者激增す

御進物用として一打入半打入の二種あり

包裝なしの實用石鹼

●有名呉服店

化粧品店にて販賣す



ハリキン石鹼

ポンペーア香水

三菱印氷枕

東京日本橋區藥研堀町

發賣元　播金商店

電浪一八三〇・四三六一

と思ひます何うぞ記者樣此度は三重三氏か誰かの芝居に關した畫でも亦似顔畫でも載せられん事を御願致します合せて記事中の芝居スケツチも今少し奮はれん事を（山三）

▲市村座の二番目で私が如何にもと思つた場は仲町川岸棧橋の殺し場で亂心せる菊五郎の清七が戰き怖るゝ國太郎の藝者咲次を篤と見下して振上げた刄も其儘に一寸と手を緩めてアゴにて彼方へ行けと許すあたりです國太郎の咲次は前幕尾花屋の場にて咲次は何かと清七を慰めいたはりました此時の清七は既に逆上して居ましたが愈々血を見て意識鮮明となるや咲次の親切が今更の如く思出されたのでせう此場に於けるあの纖巧な國太郎の咲次も眞に好い役柄でした（淺草△△）

▲記者樣第二號の喫煙室に大變なわからずやが居たのに驚き入ました雁治郎が東京に來て人氣のあるのは皆雁治郎が人氣を日本中に集めてゐるからではありません一體江戸つ子は奇を好んでゐるからです、またちよい〳〵くるからです、江戸つ子の中であんな臭い藝を心から向へてるものは極少いんですからね御氣の毒樣獨斷は大禁物です仁左衛門が天下の名優に何の不思議がありませう（西線人）

▲嫌ひなのは雁治郎の「太十」の重次郎です。どうも見ただけでは腦がくさりさうです。それから羽左衛門が何だつて仁木などを演るのでせう。團藏の孫ぐらゐの彈正でせうがあれは羽左衛門らしい仁木で愛嬌があつて政岡と不義をしさうです。延若が大阪で「安宅」の辨慶をしたさうですが東京で出さないだけに私共は幸福です。見たいと思ふのは左團次の蛇の目壽司の清次と市村座連中の「八犬傳」です（横濱　豐子）

▲市村座の四月狂言が發表された時、勘彌は「伊賀越」の大内記と「嫗山姥」の源七と「美代吉殺し」の老役の夜番をするなど想像したらば役割はがらりと外れて宇佐美五右衛門と葛飾丈左衛門と二役きり。三月の帝劇でも役が惡かつたが却つて今度の役の方が老役と敵役だけに興味があとる思つて見物したのは自分の馬鹿で丈左衛門の如きは先年歌舞伎座で大阪の卯三郎が演つたほどな物で此の座では先づ新十郎あたりの役どこで大詰で菊五郎の清次に殺されるのを見るに忍びず菊次郎の美代吉が斬られるのを見て歸つたが勘彌はあんな役を好んで引き受けたのであらうか知らと歸りの電車のなかで吐息をした（勝之助）

▲私は御社新刊の新演藝發行を祝するものですが

年中無休

本紙定價　壹部金貳錢
一ヶ月　金三十八錢
一ヶ月分　金五拾三錢
半ヶ年分　金三圓〇五錢
一ヶ年分　金五圓八十五錢

廣告料
（五號活字一行一回）五十錢（六號活字一行一回）五十錢
（四號活字一行一回）六十五錢（三號及二號同）壹圓
特別廣告及雜報廣告は五割增

地方新聞中の覇王

北海タイムス

北海タイムス……は發行紙數と廣告行數の多きこと他の追隨を許さず
北海タイムス……は偉大なる北海道の購買力を吸引し且つ紹介するの機關なり
生活の度高……き地方は大なる購買力を有す
北海道は地方……中生活程度の高き處なり故に購買力頗る偉大なり
偉大なる北海……道の購買力に訴へんとする商店は有力なる新聞廣告の機關に賴らざるべからず

發行所　北海タイムス合資會社
北海道札幌區大通
電話　編輯用一六四番、廣告用六六〇番　營業部六八七番、配達用三二七番

東京支局　京橋區宗十郎町電話新橋三五八番
地方支局所在地　大阪、小樽、旭川、室蘭、岩見澤、帶廣、留萌、釧路、根室、倶知安、岩内、網走、函館、夕張、

愛讀を永久にするつもりです、讀者諸君と共に永久に繪葉書を交換致し度のですが如何ですか、御希望なれば御送附下さい御返附致します（神戸市山本通一丁目三十二ノ二島村湖月）

▲今やキネマ狂は上中下流を通じて芝居狂よりも其數が遙か多くなつた而して何れもキネマに關する觀る可き雜誌の出現を熱望して居る、芝居の畫報は演藝畫報で十分だ『新演藝』は何樣かキネマ畫報を主として貰らいたい寫眞を大きく撮り且つ豐富に掲げて貰らいたい左樣すれば卅八錢は愚か五十錢が六十錢になつても我輩は必らず永久購讀する（南海坑呑雷）

▲拳骨は貴誌の豫報した通り大評判になりました逸早く之れを誌上に紹介し且つ一度之れを見たらヂゴマやフアントマは幼稚極まるものである事が分ると斷言した貴誌の明に敬服します（中川愛活）

▲名金や拳骨はみんな知つてるから別に說明がなくてもいゝやうなものゝ、寫眞には矢張り說明がなくては可けません、僕は新演藝四月號の寫眞を見て少し不足を感じました（ABC）

▲アルコール先生改名の議は結構の事なれどあれは我が楠井君に對し禮を失して居るものと思ふ、チヤプリンの寫眞が初めて日本へ來た時逸早く其技倆を認めて之れにアルコール先生と命名したのは帝國館の楠井君である、然るにも拘らず楠井君に一言の斷りなしに恣に之れを改めやうと云ふのは僭越の沙汰である、敢て貴社の再考を煩はす（楠井黨の旗頭）

▲帝國館もいゝ電氣館もいゝ然かし同じ活動を見るなら諸君新橋の金春館へ行き給へ、あそこへは何時でも新橋の藝者が＝御茶挽きにあらず第一流の名妓なり＝が來て居る、暗くなると畫面を見て明るくなると藝者を見る、時によると其藝者が自分の直ぐ隣りへ座る……たまらなく嬉しいネ（古賀之助）

▲嗚呼憐れむ可き東京の活動通よ汝等は帝都で候の御膝下で候のと平素大きな事ばかり云つて居れど活動寫眞ばかりは常に橫濱の御古を有難く拜見しつゝあるに非ずや嗚呼憐む可き東京の活動通よ汽車でコツ〳〵橫濱まで來て小さくなつて我がヂオンを見て而して歸つて與太を飛ばす勿れ、本當に來たてのホカ〳〵の未だピン〳〵して居る活動が見たくば須らく東京を去つて我が橫濱の住民たれ（關內橫濱ツ兒）

高峰博士發見胃腸新藥
タカヂアスターゼ
說明書あり進呈す
東京株式會社三共
類似品あり御注意

▲プロテアには實に感心して仕舞つたが然かし彼女はもうトウが立つたキチーもいゝが少しハネだ拳骨のエレーンは場面に現はれた處を見ると實にしとやかな女らしい女だか新演藝一號の口繪で見ると御見當りの方があつたら知らせて下さい（新橋その奴）

▲米國ユニヴアサル會社の役者が大擧して日本へ撮影に來ると云ふ事だつたら船の着く期日に自分は態々横濱まで出かけたものだ、久しく焦れて居た名優の顏を見る事が出來ると思つたからである處が役者らしいものは一人も來ぬ、其後目を皿のやうにして新聞を見て居るが一向それらしい報導もしない、自分は新聞社を相手取つて横濱までの汽車賃請求訴訟を提起しやうと思つて居る、馬鹿馬鹿しい事だ、腹が立つ〳〵堪らない（磯川生）

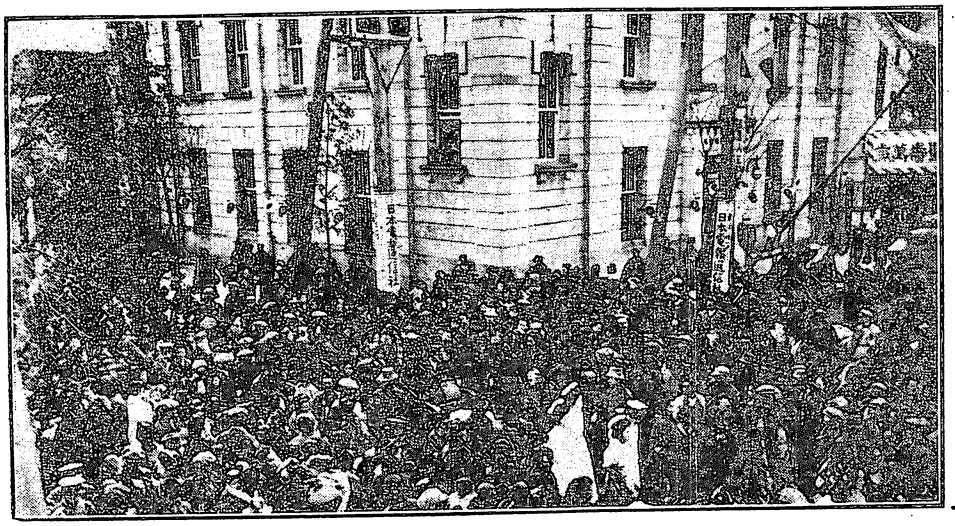
▲御社にては懸賞々品として活動繪葉書を御分與の由拜讀しキネマ狂人として默居する能はず相當の代金と共に何卒御引替願ひ度く奉懇願候、又右繪葉書は社會悲劇等も御座候や併せて次號當欄にて御答へ被下度候（芝　松下彌之介）

△活動寫眞繪葉書には悲劇もあります、喜劇もあります、舞臺面もあります、役者の素顏もあります、主として外國物を集める考で目下頻りに製版中です、出來上つたら無論市中で賣らせる考です（係）

▲鈴木菩花さんの事は前から聞いて居ましたが森田清波と云ふ名は初めて聞きます、餘程の活動寫眞通のやうですが今何處に居て何をして居ますか一寸知らせて下さい、前號の同氏の書いた記事の中にあります寫眞は同氏の寫眞ですが、若し左樣でしたら洋行歸りのやうに思はれますが如何ですか（大阪　キネマ山人）

▲前號活動寫眞役者の署名は何樣して貴社の手に入つたのですか、あれは實際珍品です、當地の外人間でも問題になつて居ます、貴社の所有に屬して居るのですか、それとも外に持主があるのですか、恐れ入りますが一寸誌上で御返事を願ひます（神戸　木村生）

△あれは本誌の誌友森田清波氏が米國に居た當時、活動役者と親しく往來して居たので歸朝に際して贈られたのだそうです、無論森田氏の所有物です（係）



この混雜は何處の何をする家屋の前でしようか

長谷部仲彦氏創製

規那鐵葡萄酒

日本赤十字社病院御用



東京帝國大學醫科大學教授
醫學博士高橋順太郎氏證明

「健胃强壯補血料として有効なる規那及鐵を含有する事墺國セラバルロ氏葡萄酒に優り甘味自然にして婦人小兒の口にも適す」と是故赤十字社病院長橋本綱常博士の本品を推賞せられし言葉なり

登錄商標

長谷部式規那鐵葡萄酒本舗

東京芝公園

伊東胡蝶園酒造部

芝七四七、二四九九

定價			
部數定價	郵稅	合計	
一部	廿八錢	三錢	四十一錢
六部	二圓十錢	十八錢	二圓廿八錢
十二部	四圓十錢	廿六錢	四圓卅六錢

▲有代金は總て前金御拂込の事
▲郵券代用御送金は一割增の事
▲外國行郵稅は一部十四錢の事

每月壹回壹日發行——新演藝——第壹卷第參號

大正五年四月廿五日印刷納本
大正五年五月一日發　行

編輯兼發行人　東京市芝區芝公園九號地　野村久太郎
印刷人　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社
發行所　東京市芝區芝公園九號地　玄文社
電話芝二五九三、二四九九
振替口座東京一四一七七

廣告

廣告は東京京橋區蒲山町日本電報通信社へ一任致置候料金其他は同社へ御問合せ下され度候

ミツワ石鹸

凡そ石鹸は、工業用、洗滌用、洗濯用、浴漕用、化粧用等各用途に從つて其種類を異にすと雖も、而かも皆等しく、遊離の亞爾加里なく、遊離の脂肪なく、些の混合物なき化學上の純石鹸たらざるべからざるは、素より當然のことなりとす。貴重なる皮膚毛髮の洗滌に用ふべき化粧用石鹸は、啻に化學上の純石鹸たるの故のみを以て、其適否を論ずべらず。

◎ミツワ石鹸（みつわせつけん）は

化學上の純石鹸たるのみならず、なほ左の性狀を具備す。

一、原料を精選し、脂肪に、香料に苟も刺戟を感ずべき虞あるものを用ひず。

一、温雅の芳香を有す。

一、細き泡沫を生じ、適度の溶解性を備へて、能く水にも溶解し。

而かも浴室に用ひて、半途に溶け崩るゝが如き憂ひなし。

故に、一般の家庭に於て、浴室、化粧用として、衛生に叶ひ、經濟に合する、理想的實用品なり。

種類		
大形	家庭用	定價金貳拾錢
中形	携帶用	定價金拾參錢
小形	旅行用	定價金拾錢
極小形	旅館用	定價金五錢



（現品實圖寫）

技師 工學士 藤野太治郎
工學士 越智主一郎

肝油ドロップス ◎ ミツワ家庭藥

東京市日本橋區橘町四丁目
振替東京七一〇番
丸見屋商店
電話特長浪花 四四四 四四五 八九〇番

年中無休刊

石川縣日新聞

最新式の活字と輪轉機にて刷出す本紙は（裏日本）に於ける代表的一大權威なり

記事も意見も中立不偏にして敏速且つ綿密なれば日々味ひて飽きる事なし

發行所

本社　石川縣金澤市南町電長八七・六三〇

支局東京市京橋區南鍋町電新長一四三四

▲新案特許　一八六七九▼



碁石形芳香　浦路眉墨

筆も水も不要、碁石を撮みて撫でると匂やかなる眉色を生ず、其他優れたる數多の特色を有す

碁石形浦路眉墨　金拾五錢

クリーム式押出頰紅　金參拾錢

東京市芝區日蔭町一丁目一番地（電、新三四〇五）

製造本舖　かゝしや　山川浦路

ニセモノあり御注意を乞ふ

販賣店は●東京三越、白木、松屋、松坂屋、各區白牡丹、其他●大阪、しきぶ（心齋橋筋）杉本（浪速橋筋）●中國、有川（岡山中ノ町）●東北、つるや（仙臺市東一番町）●臺灣、小島（臺北文武街）大連三越、京城三越

よく賣れる老舗の製品は

（廣告）明治元年ヨリ引續キ洋傘ヲ營業ス仙女香鞭杖ハ文政元年ニ開業ス

洋傘　鞭杖

流行新形各種

仙女香

坂本商店

東京市京橋區南傳馬町三丁目

電話京橋一四四六

斬新て廉價で御座います

天活直營 模範連鎖劇は

淺草公園 宮戸座（淺尾九左衞門、市川鬼丸、市川竹三郎、松本高麗三郎、市川壽朝、合同大一座）

向柳原 中央劇場（深澤恒造一派の奮闘劇と市川介十郎、中村芝琴一座の舊劇）

赤坂溜池 演伎座（澤村傳次郎、市川彦十郎、市川桝之亟、中村桔代三郎合同大一座）

天活直營 活動寫眞は

淺草公園 帝國館（西洋寫眞專門）

同 三友館（西洋寫眞の封切と新派大合同連鎖劇）

其他神田錦町 錦輝館、京橋 豐玉館、牛込 羽衣館、麻布 電氣館、深川 櫻木館、本所 日進館等市内各所の直營館

天活總務 小林喜三郎